

文庫第二輯などにあり、註釋の善本はなし。狭衣物語下  
紐・四卷(國註一五にも續羣第十八輯にもあり)河村秀  
根、狭衣物語入紐、一卷・小山田與清、狭衣物語類語集  
などがある(國華三八號二六一二七光秀筆狭衣物語繪・  
五六號一四六一一四七光則筆狭衣物語繪・六八號三七  
六一三七七傳光秀筆狭衣物語畫卷殘闕)

**さざなみ 巖谷小波(樂天居漣山人)** 明

治三、六、六、一

名は季雄、その家はもと近江の出なので古歌「さざな  
みや志賀の都は」に因んで「小波」と號した。父は元  
老院議官として又書家として有名な一六居士で、氏は  
獨逸協會學校及び杉浦稱好塾に學び、若い時は小説に  
筆を染め、硯友社の一員として「妹香具」などを作つ  
た。後少年少女文學に努力し、明治斯界に於ける第一  
人者となつた。氏は又獨逸語が達者なり俳句が上手な  
り、書も瀟洒な健筆である(小説文庫小波叢書・我が  
五十年)

**さざなみさんじん 漣山人**

さざなみ「巖谷小波」を見よ。

**さざめこと** 二卷

心敬僧都が寛正二年(一一二二)紀州田井庄八王子社參

籠の中に地方人の懇望によつて執筆した旨を奥書にし  
てある。連歌風體の變遷、作歌についての心得などを  
説いたもので文章は隨筆體である(群三〇四、一〇三  
四一〇七四)

**さざん 菅茶山** 二四〇〇—二四八七、寛保元

文政一〇、八十八歳

近世の儒家にして、漢詩人、名は晋卿、備後神邊の人。  
京に上つて宋學を修め歸つて郷に子弟を教へ、備後福  
山藩の儒官に聘せられ、學校「廉塾」と云ふのを建て多  
くの後進を養成した。その著に詩論入門・黄葉夕陽村  
舍詩・月後編・同遺論などがあり、隨筆「筆のすさび」は  
和漢混淆文の一佳作で今百説一に入る。

**さだいへ 藤原定家**

ていか「藤原定家」を見よ。

**さだかた 藤原定方** 一五四三—一五九二、元

慶七—承平二、五十歳

醍醐天皇の御代に仕へて官は右大臣、世に三條右大臣  
といふ。歌は古今後撰(九)以下の諸勅撰集に出てゐる。

**さだなが 藤原定長**

「寂蓮」に同じ、その項を見よ。

**さだのぶ 松平定信(樂翁公)** 二四一八—

二四八九、寶曆八一文政一二、七十二歳

徳川八代將軍、吉宗の孫、田安宗武の第七子出で、白  
河城主松平定邦の養子となり、天明三年封を襲ぎ、同  
七年將軍家齊に拔擢せられて老中となり、身を以て儉  
素質實の範とし、種々政治上の改良につとめ、天明八年  
には皇居經始のことを司り、工成つて節刀を賜はり、寛  
政五年、天皇御實父典仁親王に尊號を奉らんとする思召  
によつて、幕府に附議の時には辯論大に努めたが、こ  
れより有職故實の研究にも心を傾けた。後、仕を退いて  
樂翁と號し、悠々風月を樂しむ暇々には尙も國防の施  
設などに意を盡した。

歌集の三草集、隨筆の花月雙紙・關の秋風・故實の集古  
十種・輿車圖考何れもそれ／＼の方面に貴重せられた  
編著である。

こゝろあてに見しゆふがほの花ちりてたづねぞ  
迷ふたそがれのやど

は、その秀味で、これによつて「たそがれの少將」とさへ  
あだなせられた(明治二六、江間政發編樂翁公遺書三冊  
(四十二種)八尾書店發行)

**さだぬし 滋野貞主** 一四四五—一五一二、延

暦四—仁壽二、六十八歳

王朝初期の漢學者にして漢詩人、地位は東宮學士、

參議、その詩は凌雲・經國・文華秀麗等の諸集に出て居  
る。經國集二十卷は彼が淳和帝の勅を奉じて撰んだ詩  
文總集で、王朝の漢詩を見るには必讀の書だ。尙淳和  
帝の勅により秘府略千卷(續類八八三、缺本あり)を撰  
んだ。

**さだぶみ 平貞文(定文)** ?—一五八三、

?—延長元、

茂世王の孫、好風の子、宇多・醍醐の朝に仕へ地位は從  
五位下左衛門佐に至り、多少ひくかつたが丁度業平と  
同じやうに名門の出で風采が立派で、好色のうき名を  
流して歌に巧であつた。中古三十六歌仙の一人に數へ  
られ、古今(九)後撰(七)拾遺(五)以下の諸勅撰集や、  
後六々撰にとられてゐる(彼の艶話は色々のものに引  
かれて居る、時の人平仲と字したことや、硯の水を眼  
から落して戀人の前に涙と見かけたことなどは有名な  
話柄である)

**さだよ 今川貞世**

れうしゆん「今川了俊」を見よ。

**さだより 藤原定頼** 一五六一—一七〇五、長

徳二—寛徳二、五十歳

四條大納言公任の子、一條・三條後一條・後朱雀の四朝に仕へ、藏人頭・參議右大將・權中納言・兵部卿などに任ぜられ、父に背て和歌をよくし、後拾遺(十餘首)などに入つてゐる外に權中納言定頼集(群二三七、九二一四―二二三 續國七〇三―七一六)がある。

**さちを** 伊藤左千夫 (春國・四壁居・四壁道人) 元治元―大正二、七、三〇 五十歳

下總の人、早くより東京に出て苦學を續けたが、日本新聞を通じて子規と相知り、歌と歌論とで世に知られ後には小説をも作つた「馬酔木」や「アララギ」はその監輯にかゝるもの、アララギ一派の歌風は彼に淵源するものである。

世にあらむ生きのたづきのひまなもとめ雨の青葉にひと日こもれり

天地の四方の寄り合ひを垣にせる九十九里の濱に玉拾ひ居り

今のわれに偽ることを許さずばわが靈の緒はすぐにも絶ゆべし

(伊藤左千夫全集七册春陽堂)

**さぬきのすけ 讚岐典侍?**

堀河院に仕へた女官で、歌文に秀でて居つたが傳記不

詳である。歌は新勅撰集に一首採られ、文には讚岐典侍日記の著がある(池田龜鑑氏宮廷女流日記文學二七五―三〇二)

**さぬきのすけにつき 讚岐典侍日記** (堀河院日記) 二卷又は一卷

著者は讚岐典侍、内容は堀河・鳥羽の兩朝奉仕の日記で嘉承二年(一七六七)五六月の頃から堀河帝御不例、同七月遂に御登遐、諒闇のしめやかさ、翌年鳥羽帝の御即位から大嘗會に至るまでのあらましを平明な文體で綴つてゐる。卷末には少し脱文があらうと群書一覽はいふ(卷三、七八丁)

文中堀河院のいたづきの有様殊にしんみりと味はれ、醫師にたよらず藥石に絶らすひたぶるに僧徒の祈のみによられたことは流石に當時の世態だと思はれ、鳥羽天皇が御幼少にして大統を紹がせられた有様など正史には見出されぬ情趣を寫してゐる。原本註釋ともにまだ良書がない。群三二二、一一、六二八―六六八は二種の原本對校の旨典書にあるが尙不充分である。

**さねえ 三條西實枝** 二一七一―二二三九、天正七、六十九歳

室町時代、後奈良の朝より徳川時代に至る七十餘年間寥々たる歌壇に於て明星の光を放つもの彼と彼の父公條あるのみと謂はれてゐる。實枝は始めの名で、後に實澄と改名した。正親町の朝に仕へて内大臣に任ぜられた(世に三光院と稱せられた)家集を三光院實澄公集といひ、日記を三光院内府記と云ふ。

山とのみ見しはものは富士のねの雪をひたせる田子の浦波

世の中よ道の外なる道しあれば人の心の關はゆるさじ

**さねかけ 武者小路實蔭** 二二三一―二三九

八、實文元―元文三、九、七十八歳

三條西實條の二男、出でて武者小路公種(實子)となつた。才學に優れ、徳川期を通じて堂上家の歌人中最も傑出した第一人者であつた。古今傳授を後西院より、勅點を靈元院よりうけたが、靈元院の仰せにも「古來歌人の優れたるもの人麿・貫之・定家・道遙院及び、朕の弟子實蔭」とある(翁草にこの記事がある)實院公言談一卷は彼の歌學説(外に後水尾院・中院通茂・鳥丸光榮の説もある)をその門弟似雲が聽書したもので簡にして要を得た稗草である。家集を芳雲和歌集といひ、量質

共にすぐれてゐる。その歌風は典雅優麗の裡に一部潑刺たる生新の氣味動き、二條派が時代に適應して行く姿を表した典型的なものと觀られる。

野邊に出でて老いにし駒も若草の春にや歸る道  
を忘れむ  
飛ぶ鳥は歸りつきぬる山の端に残る夕べの雲ぞ  
しづけき

さ夜ふかき光も辱も身にぞしむ有あけの月の庭  
のまつ風

鳴く蛙聲は縁に埋れて霞む野澤の水の浮草  
いかでかと思は胸にさわげども心知らせむ言の  
葉ぞなき

月しろく明るる藁屋の鶏の音に木の間見えゆく  
關の下道

か、げつつむかふ光もさ夜ふけて影しづかなる  
窓の燈火

**さねかた 藤原實方** ?―一六五八、?―

長徳四、一二、

拾遺集頃の優れた歌人である。父は侍從定時、祖父は左大臣師尹と云ふ。天祿三年正月廿四日、左近將監・同四年正月七日、從五位下・天延三年正月廿六日、侍從・天元

元年二月二日、右兵衛權佐・同五年正月七日、從五位上・同正月卅日、備後介兼任・永觀元年十一月廿日、正五位下・同二月一日左近少將・寛和元年正月廿八日播磨權介兼任・同二年七月廿二日、從四位下・同三年七月十六日、右馬頭・正曆二年九月廿一日、右近中將・同四年正月七日、從四位上・同五年九月八日、左近中將・長徳元年正月十三日、陸奥守兼任。最後の陸奥守は寧ろ左遷であつた。彼が自得の味

櫻がり雨はふりきぬ同じくは濡るさも花の影に宿らむ

を齊信がひどく褒めはやすのを行成が「歌はよろしいが鳥濤の振舞だ」と評したのを痛く立腹して行成の冠を庭に抛つたのを一條天皇が物のすきまから御覽になつて「歌枕見て参れ」と陸奥守に任せられたと云ふ（参考源平太平記七ノ一七には少く之と異なる記載がある）人物は短氣驕慢であつたが歌は詩才豊かに横溢して同じ頃の堂上では一頭地を抜いて居た。拾遺（七）・後拾遺（一四）・新古今（一二）等に入り、家集に實方朝臣集（群二五一、九、六六二一六七〇）續國六三二一六三九）がある。

船ながら今宵ばかりは旅寝せむしきつ波に夢

は覺むとも  
何せむに命をかけて誓ひけむ死なばやと思ふ折もありけり  
契りありてまたはこの世に生るとも面がはりして忘れもやせむ  
かくさだにえやは伊吹のさしも草さしもしらじ  
なもゆる思ひな

**さねさだ 後徳大寺左大臣藤原實定 一七**

九九一―一八五一 保延五―建久二、五十三歳

大炊御門右大臣公能の男で後白河・二條・六條・高倉・安德・後鳥羽の六朝に歴仕し、歌を以て聞えた人。その味は千載（一〇餘）・新古今（一〇餘）・後勅撰（八）等に入つてゐる。

時鳥鳴きつる方を眺むれば唯だ有明の月ぞ残れる

なこの海の霞の間より眺むれば入口を洗ふ沖つ

白浪

平家物語卷五「月見の事」には新都福原からわざ／＼舊都の月にあこがれて近衛がはらの大宮（御妹）を訪つた記事がある。その夜その場で作つた今様も有名なものだ。

ふるさ都を来て見れば 浅芽が原とぞ荒れにける  
月の光はくまなくて 秋風のみぞ身にはしむ  
彼亦西行と風雅の交りをし、邸内態々「歌の室」といふのを設けて特に彼と歌物語する料にあてたといふ。

**さねずみ 三條實澄**

三條實枝の後の名されえ「三條實枝」を見よ。

**さねたか 三條西實隆 二一―一五―二一九七**

康正元―天文六、八十三歳

室町時代、後土御門及び柏原の朝に仕へた和學者且つ歌人で、官は内大臣世に遣遙院殿と云ふ。和歌連歌に巧みで、宗祇・宗祇などが出入した。周防山口の大内家も彼を聘して故實を教はつた。その著には高野参詣日記（群三三）實隆公記あり、當時の歌壇の消息を知るによろしい。又「五月雨日記」と云ふがある。これは初め香合の作法をのべ、文明十一年足利義政邸で催した六番香合の次第、及び包紙の模様彩色等を圖説し、又同十年に執行した六種薫物合の次第をも記し香家の珍籍とするものだ。源氏物語明星抄も源氏舊註の一つとして今に讀まれてゐる（外に小さいものでは詠月和歌序・道堅法師自歌台跋・細河右京大夫自歌台跋・中原遠忠自歌台跋・慰參議基綱卿夫妻餘哀和歌序・答資直卿

和歌序などもある）家集は雪玉集十八巻で始め聽雪集と云つたのを後の人が改めたものだ。今彼の風骨を知ると共に、當時歌壇の好尚をも察せられるやうな歌をぬくと、

**早春湖**

さ、波やうち出てみれば朝日影春ににほへる浦

風ぞふく

**關霞**

ゆくへなき春の心の關守や清みが波の霞なるらん

**五月雨**

ほすひまも袖にはしらしかくて世にふるをうき

みの五月雨の夏

**七夕**

衣ほすあふせやあまの川社くる初秋のけふを七

日に

**神祇**

かけていのる心ぞすゞし秋の色を神やかしまの

浪のしらゆふ

**野**

かれにけり春より後のこしかたを思へば々の、

夢のかよひ路

残花

ありてうき世をしる花の中に又こゝろながきも  
あはれならずや

音羽川

きげげさ水ながるゝ音羽川よはにや吹きし春  
の初風

鳥羽

はるくゝと都の南秋の田のいろに匂ふや鳥羽の  
山風

後世細川幽齋などはこの集を初心の模範として推賞し  
てゐる。實際は又古今傳授を宗祇より受けた。又書道  
にも至り深く始め尊鎮流により後三條殿流と云ふ一派  
を立てた。

**さねたけ 武者小路實岳** 二三八一—二四二

〇、享保六—寶曆一〇、四十歳

實際の孫で亦和歌を以て聞えた。位は従三位、和歌は  
新續題林和歌集に出て居る。

**さねつね 一條實經** 一八八三—一九四四、貞

應二—弘安七、六十二歳

鎌倉時代の歌人、歌は續古今(一〇餘)・續拾遺(二〇

餘)に入る。四條・後嵯峨・後深草・龜山・後宇多の五朝  
に歴仕し左大臣關白となる。

**さねとも 源實朝** 一八五二—一八七九、建久

三、八、九—承久元、正、二七、二十八歳

鎌倉三代將軍としてよりも萬葉風の歌人として、金槐  
和歌集著者として有名な實朝の歌についての閏歴を年  
譜式であげると、

前期、新古今集風の咏歌時代

正治元、八歳、父賴朝に訣る。

建仁三、十二歳、征夷大將軍となる。

元久元、十三歳、八月十五夜由比が浦に船を泛べ月下  
に管絃の催し、十一月將軍合戦の繪二十卷京より  
届く。かねて命じてあつたものだ。

同二、十四歳、四月始めて十二首を味む。四月九日新

古今集の撰成つてまだ公表されない草稿を手に入  
れた。  
建永元 十五歳、二月大雪、名越え雪見、歸途、北條  
氏の別墅で歌會。

承元三、十八歳、七月三十首を京の定家が許に送つて  
點を乞うた。八月に返事が来た。尙「近代秀歌」が

添へられてあつた。

承元四、十九歳、五月大江廣元邸で歌會、廣元は三代  
集を贈り物にした。

建暦元、二十歳、十月鴨長明を引見物語種々。

後期、萬葉風の咏歌時代

建保元、廿二歳、十一月定家から家傳の萬葉集一部を  
贈つて来た。彼は非常に悦んだ。

同二、廿三歳、二月杜戸の浦へ遊行、夜は月光を浴  
びながら由比ヶ濱まで歸つた。

同三、廿四歳、七月内々の勅詔によつて京都から仙  
洞の歌合が一卷届いた。

同五、廿六歳、四月宋人陳和卿に命じた大船が出来  
上つて由比ヶ濱で進水式のやうなことをした(こ  
れは彼が佛教を信じ、異國の風物にあこがれて宋  
の醫王山へ參拜の爲めであつたが折角造つた件の  
船は海上には泛べられないで徒に砂濱の上で朽ち  
てしまつた)

承久元、廿八歳、正月公曉の爲めに刺された。

實朝は性質温雅にして武事を好まず、加ふるに母と母  
方の外戚の壓迫に遇うて内心常に回避的となり、將軍  
職などは餘り好ましいものには思つて居なかつた。晝  
に避け歌に逃げ物見遊山に翳晦した彼の心境は異國情

調に憧憬して醫王山參りを志し、古典趣味に浸つて萬  
葉の歌人と默契した空間上、時間上の現實回避と密接  
してゐる。

彼が味は新勅撰以下の諸種に採られてゐるが、最もよ  
く特色を發揮してゐるのは、後期の約五ヶ年間に於け  
る萬葉風の味である。その朝廷尊崇の告白は大作家持  
の如く、

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心我  
あらめやも

ひむがしの國にわがなれば朝日さすはこやの山  
のかげとなりなき

大君の勅をかしくみ父母に心はわくとも人にい  
はめやも

そゝろに憶良が同情の叫びを想ひ出されるものには  
いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の  
母をたづぬる

物いはぬ四方のけだものすらだにも哀なるかな  
や親の子を思ふ

古今集以來かたにはまつたやうな觀照から解放された  
ものとしては、  
みなと風いたくな吹きそしなが鳥井なの湖舟と

むるまで

我宿の梅花さけり春雨はいたくなふりそちらま  
くもなし

表現の自由なことは、

大海の磯もとどろに寄る波のわれてくだけでさ  
けて散るかも

ときによりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨  
やめたまへ

塔をくみ堂をつくるもひとげなき懺悔にまさる  
功德やはある

想調共に雄大なものには、

ものゝふの矢なみつくろふこての上に霞たばし  
る那須の篠原

けれども彼が時に感傷的な嗟嘆を發すること次の味の  
如きを見るはやがて廿八歳と云ふまだしき齡で、横死  
を遂げる前兆であつたらう歟。

ほのゝくと虚空にみてる阿鼻地獄行方もなしと  
いふもはかなし

現とも夢とも知らぬ世にしあればありとてあり  
と頼むべき身か

さりともと思ふものから日を経てはしだい

に弱る悲しさ

金槐集は群二三二、九、一〇二―一二五、續國八六五―  
八八五の外單行本でも二三出でゐる（最近には小林  
好日氏の「金槐集評釋」も出た）

**さねなり 清水谷實業** 二三〇八―二三六九

慶安元―寶永六、六十二歳

三條實條の孫、出でて清水谷公榮の嗣子となり、正二  
位權大納言に進む。堂上歌人の中すぐれた一人で、其  
味は新續題林和歌集に出でゐるし、國文の著に「高雄  
紀行」もある。

**さねより 小野宮實頼** 一五五九―一六三〇

延長八―安和三、五、一八、七十二歳

攝政忠平の男、家小野にあり、所謂小野宮家の祖、天慶  
七年四月九日以来大臣たること二十七年、攝政たるこ  
と廿年「大かた何事にも有職に、御心うるはしくおは  
しますことは世の人の本にぞひかれさせ給ふ」と大鏡  
にある。その男敏敏天折して悲しめりとも知らず、東  
國地方から馬を贈つて來たので、

まだしらぬ人もありけりあづまちに我も往てぞ  
すむべかりける

と咏んだ。この外彼の味は後撰（九）・拾遺・新古今・新

勅撰・續後撰・續古今・玉葉・新千載・新拾遺・新續古今等

に採られ又別に清慎公家集一卷（寫本）もあると云ふ。

日記を水心記（又は水心抄）と云ひ、清慎公九條殿行事  
不同抄一卷・小野宮教命一卷の著もある。彼後正一  
位を贈られ清慎公と諡せられた。

**さねひめ 佐保姫**

奥野野子の第八歌集。

變らじとすれど心のうごく時みそぎしにゆく手

枕のうへ

朝顔の蔓きて髪に花咲かば寐てありなまし秋く  
るゝまで

等五百餘首を集め、巻頭に「故山川登美子の君に献げま  
つる」とあり。和田英作・和田三造兩氏の装幀・挿畫（四

六判二五八頁 明治四十二年五月十六日 二松堂書店）

**さみのまむせい 沙彌滿誓**？―一三八一、

？―養老五

俗名を笠朝臣麻呂と云ひ萬葉歌人である。

慶雲元、正月 從五位下（正六位下より）

同 三、七月 美濃守。

和銅二、九月 政績顯著の廉を以て、美濃の國の田一  
十町、穀二百斛、衣一襲を賞賜せられた。

同 四、四月 正五位上。

同 七、閏二月 從四位下、尙ほ吉蘇路を通じた功に

よつて封七十戸田六町を賜はつた。

靈龜元、六月 尾張守を兼任。

養老元、十一月 從四位上。

同 六、七月 始めて按察使を置かれ、尾張・參河・信  
濃の三國を管せしめられた。

同 四、十月 右ノ大辨。

同 五、五月 出家を申し出でて勅許あり。

同 七、二月 勅を受けて筑紫に觀世音寺を造營した  
歌は萬葉集三、四、五に出でゐる。

世の中を何に譬へむ朝開き漕ぎいにし船のあま  
なきがごと

まそかゞみ見あかぬ君におくれてやあした夕べ  
にさびつゝをらむ

ぬげ玉の黒かみかはりしらけてもいたき戀には

あふ時ありけり

**さやさやあから 亮々遺稿**

たかぶみ「木下幸文」を見よ。

**さよのねざめ 小夜のねざめ** 一卷

一條兼良が妙禪院從一位富子（足利義政室）の爲めに

歌道・世態・人事の上について重に上流婦人として心得べきことどもを平易に説いたもの(群四七六、一七、一七一―一八四)

さらしなにつき 更級日記 一卷

之については嘗て備忘の爲めに手記したものがあつたら、今その舊稿のまゝを淨書して以下に掲げる。

更級日記讀後感

歡樂極まつて哀情多く、轉變しげくして觀照切迫す。王朝末期斯種の着想の全宮廷に向けられたるを大鏡、榮華物語とし一個人にそゝがれたるを更級日記とす。更級日記の本質、この日記は菅原孝標女一個人の往時懽悦の記録なり。夢多き彼女の内生活、外生活を併せての記録なり。障碍多からざりし當時の旅行記なり。王朝文化の爛熟して稍空虚を示し來れる際に於ける自然思慕の詠歎なり。はた又彼女の詠草を説明せる歌境の記録なり。若くは九十一日紀行と、信濃路行きと十一夢物語と八十八首歌話との總合なりとも謂ひ得べしむも所詮その根柢に潜流する情調はうきよをはかなみ往時を懐かしむ人間性の哀感の發露ならざるなし。彼女の實名は詳かならず、世に「菅原孝標女」と稱す。而かも當の父「菅原孝標」よりも遙かに屢々口にせらる

る稱呼なり。その傳記について觀れば遺傳的には文學に恵まれ環境的には文學に咒はれし……(咒はるとまでに甚しからずとするも少くとも文學に幸せられざりしなり)人なるを知る。

遺傳的には文學に恵まる、延喜の宮廷に文學と政治と兩方面に亘りて一世を牽動せし菅原相道眞を祖とし、朗詠集に佳吟の多くをとりめし文時を傍祖として、父の孝標も繼母も姉も乳母も文才豊かに、その應酬は寛弘宮廷の才媛をして後へに瞠若たらしむるに足るものあり。加ふるにその母は蜻蛉日記の著者右大將道綱の母の妹(藤原倫喜女)即ち彼女は父系にも母系にも文學に縁由厚き家庭に生まれしなり。

環境的には文學の幸薄し、然れども彼女の文才を伸ばすべく當時の宮廷は餘りに殺風景なりき「瓦に松はありつや」とさそくに應答する宰相の君や「くらげの骨」と云ひて「それは隆圓の秀句に申し受けん」ともてはやされし清女の頃には四納言・三筆蹟・五才媛をぬきにしても滿廷の公卿悉く風流の貴公子・後宮の侍女比々皆柳絮の才姫、凡そ閨秀作家として寛弘の宮廷ほど出で樂えする宮廷はなかりしなり。しかるに彼女の奉仕せし後冷泉の朝廷は如何、法性寺の大伽藍その宏壯を誇

れども、邊陲の北奥已に干戈の憂々たるありて中央政府の枕又昔日の高きを食ふべからず。思ふに王朝の當期に於けるは猶ほ江戸文化の化政度(文化文政)に於けるが如きか。洒落をよるこび、みやびをめぐめる輩は齊信の朗詠を官衙に就いて誦習せし宣明ほどの公卿さへあらず。彼女が折角の文才もあたら施すに由なくして、本記中唯一回の贈答歌あるのみ(外に太秦詣の中途の贈答と隣家の「萩の葉」に通へる若人との贈答あれどもそれは宮廷にての出來事にあらず)その贈答も極めて冷々たるものにして又枕や源氏に見るが如き「はやりか」なる情熱を見ず。それ文才の華は――まして婦人の文藻は受動的にして之を推稱し、之を嗟賞する温室なくては開くに非ず、彼女の生まる、こと今?二十年を早からしめ彼女をして一條の朝に仕へしめば、恐らくは我が女流文學史上、紫・清兩女をして名を擅にせしめざりしならんを、惜しむべし、好女徒らに不遇のとどそに朽ちて幻滅の哀愁を僅かに一信濃守の夫によるの餘儀なきに至らしめしなり。

更級日記諸本、更級日記の原本は從來定家本・扶桑拾葉集本・蘭溪本・群書類従本・國文大觀・日本文學全書二・校國文叢書一・二有朋堂文庫・新釋日本文學叢書五・玉朝

文學叢書・校註國文學大系などあり、寧ろ現代に入りて研究盛となれりと雖も、上述諸書の多くは原文の校訂と僅少の語釋にとゞまりて唯一つ蘭溪が該書の解題に一見地を立て、

更級日記に名づくる所以、何故に更級日記と名づけしか、そは

- 一、夫俊通の歿後甥の來れる時よみし歌  
月も出で開にくれたる姥捨に何とて今宵尋れ來  
つらん
- 二、よみしが故か、又は
- 三、この記中月の記事多きにより月の名所たる更科に  
思ひよそへたるか、そもく又

と云ひしもの、今に用ひらるゝあるのみ(尙思ふに「さらしな」は音調美ありて彼女の趣味にもかかなひしにはあらざりか、尙今一つ想像を逞くするに、この記最初は夫に伴はれて信濃下りせし時「世の中とにかくに心のみ盡すに宮仕へにて云々」と筆を起し、寢居の現在まで續けて更に上總より上京以後の分を書き續けしものにして、更科は發端の内容より思ひつきし題名ならざりか)

更級日記諸本、更級日記の原本は從來定家本・扶桑拾葉集本・蘭溪本・群書類従本・國文大觀・日本文學全書二・校國文叢書一・二有朋堂文庫・新釋日本文學叢書五・玉朝

更級日記に關する今一段深き研究は、藤岡博士國文學全史中の記事にして、之に一步を進めたるは玉井幸助氏更級日記錯簡考・同更級日記新註なり。又本文の校訂は、佐々木信綱・玉井幸助兩氏の更級日記御物本の公刊によりて略々遺憾なく、この上は更に作者の作意を推して訂正さへすればよろしからん。

- 一、文學趣味の豊かなりしこと
  - 二、優しかりしこと
  - 三、自意識の強かりしこと
  - 四、未知の世界永遠の世界にあこかれしこと
  - 五、傳説に興味を有ちしこと
  - 六、自然美に憧憬せしこと
  - 七、夢を信ぜしこと
  - 八、晩年佛道に安住せしこと
  - 九、境遇と運命とに従順なりしこと
- など謂ふは、大概その一部分には適合せる評なりと雖もそのしかく評する所以のものは、一に該日記を通じての斷案なるに想到すれば、かゝる項目的、靜的の觀察は當を得たるものと謂ふべからず。今少し動的發展的に觀る必要あり。

更級日記は一文學少女が物語に心酔して、一時は身物語中の女主人公(浮舟)に迄擬したるものが、實社會に當面して次第に事の志と違ふに氣づき、美食家の精進落と云ふ格にてやがて源氏の君ならぬ俊通に嫁し、理想はいつか平凡化して一國司に甘じ子まで爲しては世間通常の母となり、更に寡居寂寞の境に入り、中年を過ぎてはそゞろに我がこしかたを顧る氣分となり、即ち筆を執りて這般の體を爲し、もの宛も吾人が久々怠りし日誌ならぬ月誌を記載すると類似せる用意の下に成りしものなり。隨て上述九項の性格は時に一伸一縮して謂はゞ彼女の或時期の生活を特色づくる標語としてふさはしきものならんも、之を性格といふには未だしき節もあらん。思ふに彼女の終生を通じて色彩濃やかに發揮せる特色は主として文學趣味にありしこと明瞭なり。邊陲の國府に等身の藥師佛を据ゑて「物語得しめ給へ」と祈るより「まのてう」「竹芝寺」「富士山神」の傳説に耳傾くる道中の挿話、上京匆匆父母にれだるころは物見遊山の享樂にはあらで「讀むべきさうし」にありしこと、地方出のむげの宅を訪うて多年あこがれし源氏の全部と袋人のさうし色々を賞ひて「女御后も物かは」と殆ど王者の如き心地して凡

帳の下に貪り讀みしこと、姉との物語、常陸赴任中の贈答、祐子内親王に奉仕後、右大辨源資通との贈答より、夫の信濃行、ついで死別、死別後の甥のおとづれに至るまで彼女の生活は常に文學趣味を基調にせる應答對話を以て充たされたるやの觀あり(彼女が十三歳以前の生ひ立ちに記録の依るべきものなしと雖も、かの上京の途次の咏歌によりて想ふに、寒村の僻陋に在りても父なり繼母なりの教養は矢張文學方面に周匝なりしことを察せられ、その乳母もまた相當に嗜みありし人と推せらる)

彼女がその周囲の父、繼母、姉、乳母、知人と贈答せる様を見れば、この一族が如何に文學的調子の高きに生きしかを察することを得む。清女の頃なりせば一句をひれり、一首を咏するだに直ぐ勿體振りたる自讃他讃を附加せしを、彼女等の一集團にありては事もなげに尋常茶飯事として贈答せり。即ち該日記には清女の「したわらびこそ戀しかりけれ」以上の秀味は可なりにも多し。

彼女の教養趣味、彼女が天照神と紀州の國造とを混淆せるが如きは、たゞ當時縉紳の教養が文學藝術の空想方面に偏して、地理歴史の實科方面に粗なりしを

示すもの歟。  
はた彼女が自然美の憧憬の如きも今日より見ればさまで深き觀照とは謂ふべからず、富士が嶺を仰ぎてそれの崇高壯美は云はれど「色濃き衣に白き袖著たらむやうに見えて」と云ひ、鹿のけ近く來通ふを見ては「近うてはなつかしからぬものぞ聲」と云ひ、月の夜頃を旅寢して夜風つめたく

竹の葉のそよぐ夜ごとに寝ざめして何ともなき  
にものぞ悲しき

と咏めるなど流石にをかしき一節なきにしもあらねど後來西行が「花の下にて春死なむ」と云ひ「松はひまりにならむとすらむ」と咏みて全生命を自然の懷裡に打ち込みて彼我融合の妙境に徹したるに比べては、尙多くの距離を見るもの也。

彼女が物語の女主人公何故に紫上、藤壺を庶幾せずして、浮舟・夕顔をとりしか。それは作者の身分に反みし點もあれど、結局は彼女の趣味のやゝよき意味に於けるつむじ曲りなりし故ならん。

玉井氏は彼女の夢物語を叙して後「彼女は自分の魂をしっかりとつかんでそれを幻想の世界に置いたのである」と云はれたれど、夢そのもの、心理より推して彼

女の生活は意識と無意識とに大なる溝渠ありて、顯在潜在兩自我のともすれば分裂せんとし、いつも「生の危機」を感歴せしにはあらざるか。

濱松中納言物語

世に濱松中納言物語を以て彼女の作とし、今日と雖も多分は然らんとし、程度に衆説一致せり。そは

一、源氏張りなる筆致と着想

二、濱松中納言と源氏・薫・匂宮・吉野宮と浮舟など主要人物の一致

三、夢想 説くことの多きこと

などこの説を有力ならしむる數個の理由あればなり。故を以て今後この物語の研究精緻の域に進み、他の有力なる反證なき限りはこの二書を以て孝標女作とするを妥當とせん（而してその作の前後につきては日記前物語後と想はる）

更級日記を註解せるもの數種あれども、前記玉井氏の考と新註とを最も可とす。

さりざらび 去嫌

連歌俳諧に於て用語・付合の制條をいふ「去」は一定の句野だけ隔てなければ前句と同「物や類似の句を連ねてはならないこと」「嫌は「去」程嚴密ではなく「時

と場合と宗匠の意見とによつて異同があるが、矢張同様のことを忌むものをいふ。これは一卷の見渡に於て耳觸り目障りな平板單調を避けて、程よき變化を保てる趣意から來たものである。

「去」の例「俳諧で戀は二句より五句まで續けてもよろしい。一句切にするこゝにはない。三句乃至五句を隔てなければ別種の戀を連ねてはならない」

さるかにかつせん 猿蟹合戦

資料、雜廬字計木上・二三・白河燕談二ノ三・燕石雜志・四ノ四・四ノ一六嬉遊漫筆上ノ二五・類從皇都午睡・初編下ノ五五九・廣文庫第九册一八一・一二・木村小舟作歌、田村虎藏作曲、猿蟹合戦 東京堂(家庭唱歌)續帝三二萬物滑稽合戦記中六樹園の猿蟹物語・春町の猿蟹遠昔噺。

さるまるだいふ 猿丸大夫?

傳未詳。諸説區々。今確からしい推測をならべると、王朝初期有数の歌人で、郷里は攝津國菟原郡深草郷、老後近江の羽束師山に幽栖し同處で終つたものらしい(然るに、今、阪神沿線芦屋の里に富豪猿丸吉右衛門氏が在つて猿丸大夫の子孫ださ云ふ。その話によるさ猿丸大夫は中央政壇に失脚してこの地にさすらひ、村の少女

ざれうた 戯歌

萬葉集中の滑稽歌をいふ。これは後の古今集の俳諧歌の前驅とも謂ふべきものだ。

例「法師等が鬚の剃杭馬繫ぎ、痛くな引きそ法師等泣かむ」(古類一、文學部一、五八一、拙著綜合國文學概説滑稽文學の部)

さんか 山河

金子薫園の第六歌集で「覺めたる歌」(四十三年三月)以後の作を集め氏の明治期に於て到達した歌境を示したのである。今その一斑をあげる

晩夏の京都に入れば蒸すときあつさの中の青き山河(この一首から書名づけたものか)

かへり來て二日三日はまつはれる旅のこゝろのなつかしきかな

病みあがり町に出づれば秋風の白く砂あげわが瘠せを吹く

芭蕉ふく初秋かぜに童謡のこゝかしこより起る夕ぐれ

蒼茫とくれゆく水の音もなく海より來る風の涼しき

白ゆかた宿の娘のしなやかな手につがれたるサ

と結婚して餘生をこゝに埋めたものと云ふので、同家の墓地には猿丸大夫の碑もあり近くはその祠をも別に建てられた筈だ)家集に「猿丸大夫集」一卷四十九首を集めたものがある(群二四八、五八七―五八九歌仙歌集第二、續國にもある)が併しこれにはいろいろの分子が混じてゐて(例へば古今集中の讀人しらすの歌など)後人の擬作中에서도信憑しがたいものである。今假にこの集から二三首を拾つて見ると

しらすげのま野の萩原ゆくさくさ君こそをしめ

まのの萩原

ひぐらしのなきつるなべに日はくれぬと思ふは

山のかげにぞありける

妹が門過ぎゆきがてに草結ぶ風吹きとくなあは

む日までに

さるみの 猿篋 二卷

元祿四年(二三五一)去來、凡兆等の切望によつて芭蕉が近江石山幻住庵で撰んだ俳諧集で、翁を始め其角・丈草・曾良等の句が連れてある。幽寂を基調とする芭蕉の風雅は、こゝにその成長の極致を示したものと見て七部集中殊にもてはやされて居る(尙「七部集」を見よ)



イダのの色

わかしてふ倚りどころなき生命のくづされゆく  
がごとき暮春くれはる

乾きたる空氣しめらし晩秋のゆふべの土に枇杷  
の花ちる

引越の車の上にはみ出せる洋書の微の白きさび  
しさ

料理屋に喰ひちらす兒をそばに見て兒といふも  
の、つくづく厭はし

赤さんばの如くつながらり垣に沿ひ唱歌をうたひ  
ゆける兒等かな

(菊判半載一六七頁、明治四十四年十二月廿日新潮社)

さんかがみ 三鏡

國文で書いた歴史の中「鏡」を書名にするもの三つをい  
ふ。大鏡・増鏡・水鏡。

さんかしふ 山家集 二卷

西行法師の家集、彼生前自ら撰して知人なる禪僧周嗣  
に與へたところ、その後法勝寺失火の時全部焼失した  
のを周嗣は一首一句を違へず暗書して保存して居つた  
といふ。明治三十九年藤岡博士異本山家集を發行流布  
本に洩れた多くの味を追捕せられた。近頃西行の願み

らる、につれてこの集若くはこの集を主にした西行法  
師集が澤山出る傾きがある。

さんぎよくしふ 三玉集

室町時代左の三歌集を云ひ當時の佳集としててけや  
された。(三玉集類題) 後柏原天皇、柏玉集・西三條實  
隆、雪玉集・冷泉政爲、碧玉集。

さんぎん 三吟(三唸)

作家三人の連歌や俳諧をいふ。

さんけい 菊池三溪 二四七九―二五五一 文

政二―明治二四、一〇、一七、七十三歳

名は純、字は子顯、紀州和歌山藩の儒者、後、江戸に  
召されて昭徳公家茂の侍講となる。漢詩と戯文まで名  
高い。令息三九郎氏(號晚香)亦漢學の耆宿として令名  
があつた。

さんさうしふ 三草集

松平定信の三歌集「蓬生」「菴」「淺茅」を集めたもの  
(但し定信の歌集としては別に特に自ら選んで木版活  
字で印行した題簽のないものがあつて、この方が寧ろ  
秀歌に富んで居るといふ(佐々木信綱氏近世和歌史一  
六九)

さんしちぜんてんなんかのゆめ 三七全

傳南柯夢 六卷

馬琴が文化四年(二四六七)作の讀本で淨瑠璃の「三勝  
半七」を小説化したもの。椿説弓張月・南總里見八犬  
傳と共に彼の三大佳書と謂はれて居る。

さんじふろくにんせん 三十六人撰 (三  
十六歌仙) 一卷

藤原公任が古今の歌仙三十六人の家集中から自家の歌  
見に適うた秀味を選集したもので、古來穩當なる選と  
して廣く行はれ三十六歌仙といふ歌人の目も六歌仙に  
ついて廣く行はれた。公任嘗て具平親王と人丸・貫之の  
歌の優劣を論じ、秀歌十首を書き合せたところが八首  
は人麿の勝、二首は貫之の勝となつて親王の意見が立  
つたのを遺憾とし、別に三十六人の秀歌を選び、之を  
左右に番はせたものだといふ。

柿本人丸・紀貫之・凡河内躬恒・伊勢各十首・大伴家持・  
山邊赤人・在原業平・遍照僧正・素性法師・紀友則・猿丸  
大夫・小野小町・兼輔・朝忠・敦忠・高光少將・源公忠・壬  
生忠峯・齋宮女御・大中臣頼基・藤原敏行・源重之・源宗  
子・源信明・藤原清正・源順・藤原興風・清原元輔・坂上是  
則・藤原元眞・小大君・藤原仲文・大中臣能宣・壬生忠見・  
各三首・平兼盛・中務各十首・計百五十首。

今、群類一五九、七、四五―四五五にある(國華一〇  
四號四四―四五若佐又兵衛筆三十六歌仙圖 一七七號  
卷頭一尾形光琳筆三十六歌仙圖三三三號 二三五―二  
三七、三十六歌仙繪卷)

さんじふろくにんかせんかしふかいなん  
しふ 三十六人歌仙歌集解難集 三卷

細川幽齋天正十七年(二二四九)の著、三十六人歌仙の  
家集は定家以來和歌の模範とされてゐるに拘らず、大  
部であり難解でありして讀む人の少いのを遺憾とし、  
各家集中の難解の語句を集めて註釋を施したものの啓蒙  
時代の先覺としてはふさはしい述作である。

さんせい 小倉三省 二二六四―二三一四、慶

長九―承應三、五十一歳

土佐の人、藩公に仕へ、野中兼山と共に藩政を輔けた。  
その學は程朱を旨とした。

さんせんのさえ 三船の才

藤原公任の多才をほめた詞で、一年藤原道長が大井の  
川道邊に作文・管絃・和歌の三船を浮べた時、公任はお  
くれて岸へまで馳せつけると道長が「大納言はどの船  
にのるか」と云つた(どの船にも乗る資格があると認  
めたから)「では和歌の船に」と云つて

なぐら山あらしの風の寒ければもみぢの錦きぬ  
入ぞなき

と詠んだ(大鏡)(後に源經信も三船の名を得た)

**さんだいしふ 三代集**

勅撰和歌集の始めの三つを云ひ、後世歌人の典範となつた。古今・拾遺・後撰の三集のこと。

(明治に入つて椀屋から「和歌三代集」と題して、發行並製五十五錢、薄葉摺六十五錢とある)

**さんだいきやくしよく 三代格式**

弘仁(嵯峨)・貞觀(清和)・延喜(醍醐)の三朝に撰まれた格と式をいふ。

弘仁格十卷・類聚三代格、散佚して缺卷が多い)

弘仁式四十卷(若くは三十卷)現存十二卷 類聚三代格群書一覽

貞觀格十二卷・類聚三代格

貞觀式十四卷・同上

延喜格七二卷・九、十一、十三缺本 類聚三代格

延喜式五十卷・國史大系十三 類聚三代格、群書一覽

**國史學業**

(尙國刊一期續々群六には石原正明の律逸八、堀保己一の格逸五 黒川春村の格逸・和田英松氏の式逸二を八

れてある)

**さんだいつろく 三代實錄 五十卷**

清和陽成光孝三朝の歴史を漢文に綴つたもので、中古文學殊に古今集歌人の閱歴などをしらべる時の根本史實となつてゐる。撰者は藤原時平・菅原道真等で撰成つたのは醍醐天皇延喜元年(一五六二)今、國大四に收まる。

**さんだら 算道**

大寶令に基いて設けられた大學寮の學科の名稱で、専ら算數を研究する。博士一人・助教二人が教官。王朝以來三善・小槻の二氏が世々算博士として教官に任ぜられた。

**さんだら 三陀羅法師(千秋庵三陀羅)?**

—二四七四、?—文化一—

本名を赤松正恒と云ひ、左官職清野氏の養子となり、本職の餘暇頭光を師とし狂歌師として有名となつた。

**さんちやう 三鳥**

こきんでんじゆ「古今傳授」を見よ。

**さんていしゆんば 三亭春馬 ?—二五〇**

六、?—弘化三、

徳川時代の戯作家にして狂歌師、俗稱を大文字屋市長

術といひ、狂名を加保茶浦成といひ、別號に九返合一

八・二世八文字屋自笑などいふ。初め新吉原の妓樓大文字屋の養子となつたが、故ありて離縁せられ、淺草山谷町で質屋を營んだが性來文筆を好み、淺草庵春村について狂歌を學び、十返舎一九にもついで學ぶ所があつた。著作八種の中最も好評を博したのは多氣競九卷・仙女香七變化粧六卷である。

**さんてうらうだいじん 三條右大臣**

さだかた「藤原定方」を見よ。

**さんになづま 三人妻**

尾崎紅葉廿五年十二月作の小説。

一代分限者葛城餘五郎が本妻お麻の外にお才・紅梅・お艶の三美女を妾にする徑路と情理とを面白く作つたもので、源氏物語を現代化して物質的文明の雰圍氣に包んだやうなものである。

加州金澤在談義所村の水吞百姓の次男に生まれ、十七歳にして國を飛び出し、二年は乞食の眞似、それから湯屋の木拾ひになり、やがて蕎麥屋の擔夫になつて働いてゐる中、大原富五郎と云ふ鑛山王に掘り出され、持つて生まれた才幹は忽二三十人の上席に坐り、二十八歳獨立して金儲の呼吸自在に、鑛山・土地・御用達行く

として可ならざるなく贏ち得る處無慮七千萬圓。

これの持てる資産を盡く一錢銅貨に換へて聯ぬる時は恐るべし。日本國を五卷半捲きて其餘れる分を積重ねて見れば富士山の高さの六層倍と要らざることを統計家の傳へ待る(三五五)

糟糠の妻麻子は元蜘蛛のお重と云つて湯島天神の境内で其頃名代の矢場女だつたとか。

當時柳橋に柳屋の才藏と云ふは妾萬人に優れて心慧しく、諸藝に堪能にして應待の上手此上なし。當年廿四歳打見では二十歳位、之に菊住と云ふ某會社員の深間があつていつかな大盡にも離かぬとか、葛城は之を聞いて參謀山瀬と相談し彼の醜妓雛助を手先に、苦肉の計を以て豫て吉住に横戀慕せる升屋の小がに軍資を供給して菊住を横取させ、透き腹に鰻飯と云ふ格で才藏を引取り、彼女の好みにまかせて向島の片ほざり、爲永

春水の中本にでもありさうな家造りして住まはせた。(三七〇—三七一に葛城の京女、江戸女の比較評論あり此作大體お才を江戸、紅梅を大阪、お艶を京の女の代表として描いたものらしく思はれる。)

然るに茲に又葛城が事業友達に雪村素六と云ふがあり彼はもと信州の山奥で誕生日だけくされ鱈を祝ふ外は

看けなしの三百六十四日を送つてゐたのが型の如く江戸に飛出し上野の戦争には官軍の兵糧方に備はれて、賃金以外に金装の太刀などを拾ひ、戦争が濟んだ頃には早や都下一人前の紳商、それより諸官衙に取り入りて御用達を勤め「兎角世の中は光つたものと白いもの」と達観して金と色とを充分うまく利用して、隅田川の沿岸眺望よき所に一町四方の別墅を構へ、當局要路の人を招いて置酒高會之が何より有力な運動法であつた。

一日葛城此郎に招かれ、十二人の美女に擁せられて十人してついで酒を十二口に呑んで、一口毎に交代で肴を給仕させたが、此夜からお目に止まつたのは「角」さ云ふ廿二三の豊頬朱唇、それで四天王の一人なる赤澤藤馬(劍橋大學出の法學士世才六分に學識四分の人)に内命して萬事を折衝させた。

それより二日経て葛城方より右の禮として貽り來したるは、水神浪に半身を現はして兩手に怪魚を撃ぐる大理石の像なり。惣高七尺餘、今も向島の庭なる泉水の中に立てるを人戯れに呼びて身替祕藏といふとぞ(四五)

お角の料にとてあてがはれたのは彼女にとつては馴染多い深川の里で、舊江澤と云ふ金貨の家、そこにお鈴と云ふ二つ年上の娘があつて、子供心にも美ま

しく一代の中にせめて一べんあんな家に住んで見たいと思つた其處である。

麻子は之を識れども悋氣せず、お才は妬かず、紅梅は怨まず、女三人寄りて姦しからぬも間の隔たればなるべし(四五八)

餘五郎の父餘兵衛今年八十五歳の矍鑠たるもの「亡母の十三年忌をするから歸れ」と云つておこした。法事を兼ねての故郷への錦、土産豊かにお供も連れて近隣を驚かし竹馬の友の作介は、國を出る時「虎の子とせし二朱と五百に手造の草鞋二足を饌別に與れし情を忘れず(四六三)」に別して手厚くした。法事も濟んで作介との打解けた昔話となり、以前戀した菱屋のお峰は柏屋と云ふのに嫁いで見る影もなくなれる事、其季の妹のお艶が今年二十三で姉以上の美人なることを聞き、縣會議員にしてお艶の恩人なる馬場文平から口をきかせて江口屋に引見して一曲(お艶は琴の師匠)を弾かせ、都會に出ればもつとよい就職口があるからとて親切こかしに連れ歸り、お供の轟の宅の二階に當座を落ちつけそこへ葛城チヨコへ出入。酒食の間に段々近づいて或冬の夜源氏と紫の上のの枕の様な光景が演ぜられた。併お艶は此時まだ壁に向ひて其獨を守り(四

九三) 分別に迷ひ抜いた果に、

馬場の下へ文して相談すれば、夫婦二通の返事、葛城の世話になれと俱々に勧めぬ(四九九)

尙念の爲に易を見て貰ふと火澤賤の上九の變と云ふので「結婚すれば末吉」と云ふ。斯てお艶も亦葛城の戀の一支店となつた(以上前編)

葛城は三人の美妾を得て何かな遊興に一趣向を立てようと思ひ、お麻の意見に基いて近頃手に入れた音羽の別荘で園遊會を催した。

當日の來客は總勢百三十餘名、此中四十名は餘五郎が格別の懇意にて、外は總て我が商賈の重役と聞えぬ。音羽の別荘は五日の間に藪の中なる小草も跡なく花の木下は箒目清く土香りて、所々に茅葺、貝殻屋根、葎養張、黒木造、姿をかへたる十軒の茶店建ちて護國寺の鐘、啼鳥閑に今日は暮れぬ(五〇二)

木蔭より白鳥片手に衝と走出でたる女房あり、手織編と見せたる京御召の小袖に紋縮緬の赤前垂、淺黄縮緬の平縵を片褌して、横櫛露はに置手拭したるは茶見世の娘が酒買ひにゆくさ見せて水際の立ちたる美人(五〇五)はお才

二十二三と聞きしに十八九の中に立交ひて、あながち

年長に見えざる凄さ、威ありて猛からず、愛嬌ありて嬌かず、温乎としたる風俗自から御守殿の美しい處を備へて之が地かとも思はるゝ品の好きにあのお酌にて戴かれるさは今年一年中の冥加(五〇六)と人の山を築くは紅梅

築山の陰に人の氣少く水石の形勢をかしき處あり。四方植込に隠れたる庭の奥に茶寮古びて新らしき枝折戸を見付け此處ぞさ入れば竹の奥に恭聲ありて花も酒も浮世は煩き顔して五七人の客を友に、心閑に茶筌を拵りて颯々の釜の松風に耳を澄ます(五〇七)

はお艶此を機會に麻子は三人に對面した。其第一印象として各女を評した。詞は恐らく作者の考を表白したものであらう。

紅梅は温乎として内慧しく、閨中に手ありて情も相應に深かるべし。お才は俠にして張強く男に我儘なる處弄ぶに面白かるべし、お艶は無垢なる生娘、唯優しくして實あるを取柄とす。銘々の役割といへばお才は酒の酌、紅梅は床の口説、お艶は茶漬の給仕……お才は確かならざる所あり物足らず。お艶は底に幽艶したる處ありながら素氣なし、紅梅こそ聞きて然もあるべし昔ならばお家騒動の曲者(五一〇)

さそれからは三女の麻子に對し葛城に對する交際振と情交振を書き、紅梅最辣腕を振うて始めに男を引きつけ後にお艶と葛城とを離間せうとして葛城終焉の後にあらはれて卻けられ、お才は菊住(專三)との構曳を續けて新聞に「歸咲隅田櫻」と題してすつば抜かれ、染井の寮に謹慎仰せつけられ、お艶は一時紅梅の姦策に苦しめられたが世子餘之助を儲けて益々信用を得た。一世の榮華を盡した葛城も病の敵には如何ともする能はず。腫瘍病とか云ふ奇病に溘焉として世を去つた。紅梅は千圓の手切金を貰つて離縁になつたが、十日経たぬ内に前の素六と馬車に相乗、お才は菊住と世帯持つて柳橋に待合を始め、お艶は餘之助成人の後は財産五分の一を貰ふ一札、お負に本家に引き取られて麻子の妹分として大切に待かれた。

(紅葉全集第一卷三五五―六一九)

**さんば** 式亭三馬 二四三五―二四八二、安永四―文政五、正、六、四十八歳

近世滑稽本の作者として一九と並び稱せられる人、實名は菊池泰輔、字久徳、通稱太助、別號本町庵・四季山人・洒落齋・遊戯堂・哆囉哩樓・江戸の淺草田原町三丁目に生れ、幼にして書肆瓶月堂の丁稚となり、店頭

戯曲殆ど全部を讀破した。十八歳黄表紙「天道浮世出星録」を處女作として、芝全交夢寓言を書き傑作「狹太平記」を出すに至つて中に消防夫の鬪争を描いところがあるまで意外の筆禍を買つた。

又寛政十年に洒落本辰巳婦言を著し、翌年その續編として、船頭深話を書いた。これは洒落本の續物の始まりと謂はれてゐる。

又雷太郎強悪物語二編十冊を書いた。これは合巻物のはじめである。

けれども何と云つても彼の代表作は文化六年に出した滑稽本「浮世風呂」とその續編「浮世床」とである。故らに奇を求め人の笑を求めないでめて諧謔百出妙想千涌一たび之を繕くときは誰人も思はず噴き出す、而かも野郎猥褻に陥らない。之を一九の膝栗毛と比べると彼は好人物の自嘲、これは皮肉屋の譏笑、二者相並んで滑稽小説に一生面を展開した。

彼筆を遺ること始めは極めて巧遅、半夜尙句を案じて好句を思ひ得れば、蒲團を蹴つて刻れ起き机側の紙片に書きとめておいたと云ふが、次第に健想健筆となり僅々三晝夜足らずで八九巻を起稿する位の割合に達したと云ふ。

彼は又世才に富み、經濟に精しく、著作の傍ら古本や仙方延壽丹や、化粧品江戸の水などを賣つて晩年富有の人となつた。唯その人、性急短慮、年々交友を減じて終身親しかつたのは烏亭焉馬と歌川豊國の二人だけであつたと云ふ(それすら時に衝突して豊國の如き一時絶交して居たのを書肆文龜堂の調停で仲直りしたものだ)彼の著は無慮百四十種内外、帝國文庫一三に三馬傑作集と云ふがあつて重なるものは收められて居る。

**さんぷう** 杉山杉風 二〇三七―二三九二、正保四―享保一七、八十六歳

俳諧に遊ぶこと六十年と謂はれ、芭蕉が江戸に下るなり間なく入門して謹直な弟子なり、親切な物質的保護者となつた。蓋し彼が家は魚問屋をして屋號を鯉屋と云ひ、家富みて何不自由なき暮らしてあつた。で、その深川の別墅を師翁に贈り(所謂芭蕉庵)その庵が焼ける都度、多額の金員物品を寄贈した。師翁の計を聞くや店の魚鳥を賣り捨て門を閉ぢ、籠をおろして中陰を嚴重につとめた程の謹直な人で、評して蕉門の子貢と呼ばれた。師翁の歿後支考が詭辯を弄して蕉風の正系我在りと叫んだ時には彼は心から憤慨して「彼奴若し江戸にでも來ようものなら兩足を切つてくれよう」と

叫んだと云ふ。惜しむらくはその人耳聾し、爲めに聰敏の資質に缺け、其角をして「流行におくる、こと三年」と評せしめたことで、作句は人格よりは劣り様に評せられてゐる。その著は「杉風句集」「冬かづら」と云ふ。

ふり上る嶽の光や春の野ら  
川添の畠をありく月夜かな  
時雨つ、雲にわたれる入日哉  
年の暮破れ袴の幾くだり

**さんぶん** 散文

韻や音律の拘束ある韻文に對して普通の文をいふ。

**さんぼく** 三木

こきんでんじゆ「古今傳授」を見よ。

**さんまい** 宮崎三昧 安政六、八、一―大正八、三二二、六十一歳

江戸の人、名は璋藏、芳野金陵に漢學を學び、明治に入つて東京高等師範學校に學び、十二年頃より三十五年頃まで記者生活をして東京日日・やまと・大毎・大朝・東朝等の文學欄に筆を執つた。二十三年頃の演劇改良運動にも奔走し、その脚本「三味泉三郎」は九代目團十郎によつて淺草鳥越の中村座に上演され、實に文學者の作品の上場の嚆矢である。小説をも作り、二十一年

都の花に寄せた「嵯峨の尼物語」以下四十五年六月文藝俱樂部に寄せた「悪源太」まで約四十篇を作った。

**さんむ** 高橋残夢 二四二五—二五一、明和

二—嘉永四、八十七歳

備中の人、俗名正澄、家號夢園、香川景樹の門に入り、最も歌學に長じ又和歌をもよくし、晩年大阪に卜居してその徒に教へ老後薙髮してなつた。その著に國字定源・國語本義・言靈神名・言靈名義・言靈東歌考・靈の宿・記紀縫結抄・縫結大概・三代枕辭例・記紀名物考等があり

又家集を「殘の夢」といひ今續歌學全書一〇に入る。  
**さんやう** 頼山陽 二四四〇—二四九二、安永

九—天保三、五十三歳

近世末期に於ける漢詩・漢文・史筆の方面に異彩を放つた人。名は襄、字は子成、通稱は久太郎、安藝の儒官頼春水の男、幼より學を好み、江戸に出て、尾藤二洲の教を受け、又叔父杏坪の感化をも受け、京に移つて三木の山紫水明處(彼の命名)に諸生を教授した。その著日本外史二十二卷は二十五歳の時稿を起し訂正數次二十四年後の文政十年に白河樂翁公に奉つたもので源平兩家以下織豊二氏を経て、徳川氏に入り十二代家慶で擲筆してゐる。引用書目二百六十餘部。大日本

史・本朝通鑑・藩翰譜・讀史餘論・神皇正統記等博引廣證加ふるに叙事雄勁にして史論言々熱を含み、以て尊王の氣風を煽つたものだ。

日本政記十六卷神武天皇より後陽成天皇に至るまでを叙し、記事の精確、史論の妥當は外史よりも數歩の長がある。外史は氣概を以て優れ、政記は條理を以て優れ彼に青春の情熱もれば、これに老人の端正ありて面白

い對照を爲してゐる。山陽詩鈔は彼の作詩を集め殊に詠史六十六首が光つてゐる。山陽遺稿八卷(詩三卷、文五卷) 山陽文鈔通議は彼の歿後に公刊された(近藤元粹氏評點山陽遺稿六册(嵩山堂) 木崎好尚氏家庭の頼山陽・徳富猪一郎氏頼山陽・徳富猪一郎、木崎愛吉、

光吉元次郎三氏共編頼山陽書翰集・國華三六五號一四五、一四七頼山陽筆詩畫卷二圖)

**さんゆぶぐれのうた** 三夕暮の歌

新古今集歌人三人の咏んだ秋の夕の歌で、三首とも秀味で皆五句を「秋の夕暮」としたものだ。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮 藤原 定家

心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕暮 西 行

淋しさはその色としもなかりけりまきたつ山の秋の夕暮 寂 蓮

(これを掛軸三幅對にして床の間に飾ることは凡そ後陽成天皇の御代頃からの歌人の好尚となり之が排列作法(向つて定家中、寂蓮左、西行右)などを細かく論じた書物さへある)

**さんわ** 唐來三和 文化年間歿

加藤氏、俗稱和泉屋、源藏又伊豆亭と號す。元は武士の出で、書肆葛屋重三郎の義弟となり、本所松井町に入婿したが、その家の妓樓たるに似ず彼は實着で人柄であると謂はれた。草双紙・洒落本約二十種を作り、その文章は左程巧妙ではなかつたが趣向(今云ふ装幀)の時好に投ずることに於ては第一と謂はれ、天明九年梓行の黄表紙、天下一面鏡の梅鉢の如きは眞に洛陽の紙價を高からしめたと云ふ。

彼の傑作は通神孔釋三教色と云ふ洒落本である。その他左の諸作品がある。

善惡邪正大勘定・和唐珍解・忠臣一心の藏・莫切根金の成木・優長源氏物語咄三卷・家内手本用心藏二卷・去程に扱は其後三卷・人は唯一心の命三卷・曾我物語嘘實錄三卷・再會親子鶴獨樂・書集芥の川二卷・冠言葉七日

シの部

三卷・通寺町お江戸の鼻筋・大道具舖幕無三卷・大千世界晴外。

し詩

廣義では一切の文學を詩といふ。明治以前にあつては單に「漢詩」を指し、明治に入つて漢詩や新體詩を指して云つたが、通常、詩學では韻律ある文學を詩といひ之に抒情詩・抒情詩・劇詩・叙景詩・教訓詩等の別を立てる。我邦では從來韻をふんだ韻文は少い。唯音數律によつて三十一文字を短歌とし十七文字を俳句とするの類があるだけである(明治四十年前後自由詩や口語詩が唱へられてからは、その音數律すら嚴守されなくなつた。かうなると詩の定義は變らなければならぬ。即ち「詩とは高調に達した情操を特殊の手法によつて文字的に表現した文學作品」とでも謂へばよろしからう。幾ら表現形式が自由だからとて、出たらめに長短句を並べるのではなく、主觀律・內在律とも謂ふべき意識のリズムに恰好な形をとつて表はされた詞形でなくてはならぬ。又散文と詩との中間に「散文詩」といふ

ものもある。その項参照)

しあはせ 詩合

漢詩同士の番はせてその優劣を争ふ會「歌合」の形式を漢詩でいつたもの。

例「天徳三年八月十六日關詩行事略記・應和三年善秀才宅詩合・侍臣詩合(永承六年)・殿上詩合(天喜四年)(群一三四、六、九二九―九五二)

しあん 石橋思案(雨香、自劣亭) 明治三、六―

横濱の人名は助三郎、東大文科を中途でよして紅葉等と硯友社を結び、乙女心・寧馨兒等多くの作を発表したが、氏の作は何に出ても「文藝俱樂部的」な處があると思ふ。大正期に入つてからは創作に筆を絶ち「本町志」のやうな考證的な述作をした。又俗謡の作にだけ佳作も少くない。

しうあん 中井莞庵 二三五三―二四一八、元

祿六一寶曆八、六、一七、六十六歳  
元、播磨龍野の藩士、名は誠之、字は叔貴、通稱四郎(又忠藏)父に従ひて大阪に移り、三宅石庵について朱子學を修め、遂にその蘊奥を極め、師の歿後代つて懷徳院教授となり、醇儒の譽れ高かつた。その臨終

自ら證して胎範といふ。その著不問語は和漢混淆文の一佳作と稱せられて居る。その他喪祭私記・莞庵雜記・胎庵先生遺集等の著がある。

しうきう 周九(萬里・梅庵・江左・漆桶道人)?

室町中期京の五山の相國寺の僧、詩文を能くしたが、應仁元年兵燹を避けて江濃尾地方に放浪し、ついで還俗して美濃の鶉沼に棲み、文明十七年の秋武州に遊び、太田道灌の優遇を受け、又舊栖鶉沼に歸り、當代の諸名士と相往來し、詩文の世界に悠々餘生を送つた。七十歳の時自ら寫照に題して、  
庵主々々 全無輔車 春風昨夜 現出梅花

と、遺稿を梅花無盡藏六册(續群三三八、一二の下、七八九―一〇一四)といふ(上村觀光氏、五山文學小史一三六―一三九)

しうきよ 中島秋舉 二四三七―二四八六、安

永六一文政九、三、二九、五十歳  
三州新谷土井侯の臣、通稱大之進、曙庵・呂齋等の號がある。岡崎に住み、井上士朗を師として俳諧をよくした。

しうきよう 周興? 三十五歳

てゐる。

菊池大麓、修辭及び華文・高田半峯三上參次、美辭學・武島又次郎、修辭學・島村瀧太郎、新美辭學・五十嵐力新文章法講話・加藤咄堂、應用修辭學・佐々政一、修辭法講話。

しうしき 秋色 二三二八―二三八四、寛文八―

享保一〇、五十七歳  
江戸商家の娘、十三歳の春、上野の花見に  
井戸端の櫻あふなし酒の酔  
から有名になつて、其角について俳句を學び、後照降町大目某に嫁いだと云ふ(秋色櫻のことや、彼女が孝行の逸話は後世戯曲、講談に取材せられて名高い)

戀せずば猫の心の恐しや  
雉の尾のやさしうさはる董かな  
佛めきて心おかる、はちす哉  
もの、ふの紅葉にこりず女とは

しうせい 徳田秋聲 明治四、一二―

金澤の人、名は末雄、四高を中途退學して小説作家となつた。紅葉門下中、最も紅葉門下らしからぬ人で、その出世作は三十年讀賣紙上に出した「雲のゆくへ」である。氏の本當の才は寧ろ明治の末期から大正昭和

名は彦龍、字は周興別に半陶と號す。山城深草の土器師の子だといふ。早く相國寺法住院に入り受戒出家、資性英達にして殊に文章と聯句とに長じた。その著に西游稿・半陶稿がある(上村觀光氏、五山文學小史、一三九―一四一)

しうく 秀句

「一語兩義」を見よ。

しうこつ 戸川秋骨 明治三、一二―

肥後の人、東大英文選科出身。透谷や藤村と相提携して明治文學の新運動に寄與し、後、評論と翻譯とに努力し、目下は慶應大學に教鞭を執り折々著譯隨筆を出して居る。その執筆にかゝるものに左記數種がある。  
英文學精講・そのまゝの記・エマーソン論文集・ユーゴ  
一哀史・ダントン、エイルキン・メレヅコフスキー、フオ  
アランナー・ボツカチヲ、デカメロン・文鳥。

しうじがく 修辭學

英のレトリックに當る。東洋に在りても支那に詩文の批評をしたもので、この部に入るべきものが多いが系統立つたものは乏しい。文章を正しく作る法を教へる文法語法に對し、文章を正しく且つ美しく作る法を講究するのがこの修辭學である。我邦では左の諸書が出

の現代にかけて發揮せられ、老いて益々盛なるの觀がある。その作品の現實的傾向は我が自然主義文學勃興の氣運とうまく偶合して、果然氏を第一流の作家に引き上げ爾來斯境の老大家として今も第一流に推されて居る。長篇の新世帯・足跡・微・爛・奔流・あらくれ・もとの枝に・等(その他短篇の佳什が澤山ある)何れも凡人の凡人生活を描寫し、手法も極めて地味に、いぶし銀のやうな濫いところがある(氏近頃の筆は幾らか甘くなつたとの評もあるが、思ふに氏の手法の本質的なものは飽くまでもいぶし銀式な點にあらう)

しうせいぐわい 秋聲會

明治卅五年紅葉後、角田竹冷・戸川殘花の二人が紫吟社の會員を集めて組織した俳團で、その俳風は新舊兩派の調和を圖るといふのが特徴であつた。俳諧秋の聲しを機關誌とし星野麥人・牧野望東等はその主なる俳星であつた。

しうぜんじものがたり 修禪寺物語 一幕

三場

岡本綺堂、四十四年五月作、明治座初演の史劇脚本。「伊豆の面作師、夜叉王に「かつら」「かへで」の二女あり、姉は美しけれども思ひ上つて「たとひ一日一瞬

でも上つ方の愛を受けてこそ女と生れての果報だ……妾は並の若人などには嫁がない」といふ。妹は姉ほどの美人ではないが地味で温和で孝行者で、婿春彦を迎へて陸じく暮らして居る。その内修禪寺籠居の頼家公の御下命で、將軍の面を作れと仰せある。是れ生涯の面目と丹精こめて作るが、不思議なことにはどの面も「死相があらはれて、夜叉王自らの氣に入らぬ。それ故だん」運延、しまひに頼家公自らの居催促に恐入つて事情をいふと、試みに出來た面を見せよとある。そこで姉かつらが御前に致すと「これは立派な出來だ。これでよい」持つて歸るぞ。序にこの娘も美しい、これも余が愛するぞよ」との上意に「かつら」はいそぐ御供にたつ「今こそ世界一の女の仕合者」と思ひきや、北條方の廻し者の爲めに頼家公は横死、かつらは身替りに立つつもりでかの面を被り男装して奮戦し、やうやく一方の血路を開いて我家の前まで駆けつけてばつたり殞れる。父や妹がかけて介抱すると一旦は正氣づいたが餘程の重傷である。折柄匠家の注進、頼家公は已に御最期といふ。夜叉王「さては我が技の拙きにはあらず公の御運の先の先まで神に徹する我が腕なみ」と自信の心もちになる。それもしげら

しうなん 山縣周南 二三四七—二四一二、貞

享四—寶曆二、六十六歳

長州萩藩の鴻儒、名は孝儒、字は次公、通稱少助。十九歳の時父について江戸に行き、物徂徠の門に入り安藤東野と共に古文辭學を究め、拮据三年學業大に進んだ。正徳元年韓使赤間關に來聘、侯命により周南之と應酬し俊敏韓客を驚かした。萩の明倫館は天下に鳴つた名藩學だが周南の寄與による所多大であつたといふ。當時雨森芳洲は彼を稱して「海西第一」といつた。その著には爲學初問・作文初問・養子説・周南詩文集などがあつた。

爲學初問上の始めにいふ、

一、我國の神道は、即ちもろ、この神道なり。昔は天照大神の御靈大殿に在まして、神宮皇居無差別といへり。祭祀の禮は輔臣の掌る所にて、朝政は皆神徳を以て行はれし、唐虞三代の禮は尙書三禮に載せたり。大政は皆宗廟にて行はる。宗廟の制作、大様の後の世の朝堂にひとし。祭祀の禮を治め、神靈の命を受けて行はれければ異朝本朝神聖の道は同一揆なり。……王道神道差別なく、治世安氣の道にてぞあるべき。

く「かつら」はニツコリと笑みをたへて「わたしも天晴れお局様ぢや、死んでも思ひおくことない、些とも早う上様のおとを慕うて冥途の御供……」と已に息引きとらうとするところを「ヤレ待てわかき女の斷末魔の面、後の手本に寫しておかうわ」とて筆紙とりよせ寫しとる。

作者云ふ。

「伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知らず由來もしれず、木彫の假面にて年を経たるまゝ、面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懷してこの稿成る」と「かつら」の女性觀に新し味あり、夜叉王の藝術家氣質一克なるもよし、春彦かへでの常識的處世觀もよし、その他の人物も皆相當に生きて居り時代の背景もよく纏絡させてある。昨大正十五年に巴里の大劇場(オリオン座)で佛譯して上演しようとの交渉もあつて、今や世界的となりつゝある傑作である(現代戯曲全集第二卷三四九—三七八)

しうかだいたい 秀歌大體

藤原定家が勅撰集中の秀歌を抜き出して後堀河天皇に奉つたもの。

**じうん 似雲** 二三二八―二四一三、寛文八―寶

曆三、八十六歳

播磨の人、京に出て武者小路家に寄宿し、實陰に歌を教はつたが又西行にも私淑し、好んで名山靈地をめぐり、時人に「今西行」と呼ばれた。家集を年並草といひ、花や月の秀詠に富んで居る。

山里は秋の夕のさびしさにその人となく人ぞ戀しき

人とはゞ秋の習にいひなさむながめじとすれど  
夕暮の空

又この家集を類撰した似雲和歌集類題といふのもある  
尙又「寄歌述懐百首」には後來蘆庵一派のたゞことう  
たに交渉する點もある。

咲きにはふ詞の花もあだなれや心を種のまこと  
ならずば

尙歌學説を述べたものに「磯の浪」といふのもある。

**しえい 藤井紫影** 明治元、七、一四―

淡路の人、名は乙男、二十七年帝大國文科卒業後四高  
八高等に教鞭を執り、家庭不幸の裡にあつて、始終明  
るく純な心で學究生活を續け、今日では京大文學部教  
授文學博士、江戸文學の權威者として尊敬せられて居

る。集林子評釋・俗諺論・諺語大辭典・秋成遺文・江戸文  
學研究等何れも世に稱せられ、又句作に長じ筑波會を  
代表する俳人の一人である。

その名吟は  
水かへて藻を浮べけり金魚鉢  
白魚の子をうむ頃や臘月

芍藥や伏籠にかけし青き衣  
等である。

**じえん 慈延** 二四〇八―二四六五、寛延元―文  
化二、五十八歳

字は大愚、家號は吐屑庵、天台宗の僧で、洛東岡崎に  
幽棲し、堂上派の歌人冷泉爲村について歌を學び、澄  
月・蘆庵・蓋蹊と共に平安和歌の四天王と呼ばれた。そ  
の著に隣女暗言と云ふがあつて和歌についての雑話や  
批評を載せて居る。

**しかあはせ 詩歌合**  
漢詩と和歌とを取組ませてその優劣を判定する催しで  
歌合から思ひつかれたもの。その形式も略歌合と同じ  
である。鎌倉初期後鳥羽院から始まる。

**じかあはせ 自歌合**  
自分の歌同士を番はせてその優劣を判定することをい

ひ、和歌好事の餘に歌合の形式をまねての思ひつきで  
この場合「判」は大抵他の然るべき人に乞ふ。

例「西行の宮川歌合(定家判)御裳濯川歌合(俊成判)  
**しかう 嗜好**  
文藝作品を見て感興を催すこと。このみ。英のテニス  
トに當る。

**しかう 各務支考** 二三二五―二三九一、寛文  
五―享保一六、二、七、六十七歳

蕉門十哲の一人で獅子庵・東花坊・西花坊・蓮二坊など  
と號し、北美濃の産で、初めは小野村黄雲山大智寺の  
禪僧で鎮藏主と稱してゐたが、機鋒鋭尖同輩に容れら  
れず、十九歳にして還俗し、伊勢の岩田涼菟について  
俳を學び、その勧めによりて元祿三年芭蕉が近江に入  
つて湖東の景に親しんで居た頃、乞うてその門に入り  
師翁の歿後美濃派を標榜し「蕉風の宗家」と傲稱し、  
種々の述作によつて自家宣傳につまめたので斯壇の擯  
斥を買ひ、杉風は「彼奴の脚を斬つてくれよう」と云  
ひ召波は「俳魔」と惡稱した。

その著十餘種、人之を重んぜず、畢竟彼は論客であつて  
俳人ではない。彼の集から名吟を得るこそ素より望む  
べからずだが、さりさて彼の論から正しい俳諧道を構

成するこゝもむつかしい」と様に難ぜられたが、今日  
から見れば、俳諧史資料として一顧の價値なしとせず  
で、就中

「葛の松原」は俳諧手引草として手頃な本で、雪中庵  
蓼太の如きも始終座右に置いて居た。元祿五年五月  
支考廿八歳の著。

笈日記 芭蕉が最後の行脚の記と、その病氣前後の日  
記と、支考自身の行脚中の句とを集めたもの、元祿八  
年八月刊行。

俳諧十論 正徳四年の刊行、彼が最も得意の作、本朝  
文鑑當時の俳文を集めたもの。

その他  
續五論・西華集・東華集・白陀羅尼・三疋猿・南無俳諧・夏  
衣・阿難話・發願文・三千化・蓮の羽風・桃の首途・三日月  
日記・十論爲辨抄・續五論・和漢文藻・百花譜等。

これ迄かゝるとて春の雪  
春雨や枕くづる、詠本  
摺小木で蠅を追けりとろ、汁  
牛叱る聲に鳴たつ夕かな  
寒ければ寝られず寝れば猶寒し  
叱られて次の間に立つ寒さ哉



初霜や若折れちがふ濱堤

しがく 詩學

詩歌の本質・作法・種類等を論述する學問（詩學と銘打つたものはアリストテレスの詩學などの譯書や漢詩の作法を説いたものしかないが、五十嵐力氏國歌の胎生及び發達や兒山信一氏の日本詩歌の體系などは、この種の知識を得るによい）

しがく 私學

官學に對する詞ではあるが、通常は平安朝初期大學國學の官立以外に設けられた。弘文・勸學・學館・淳和・獎學・綜藝種智の諸院をいふ。各項を見よ。

しかげぶんこ 仕懸文庫 一卷

寛政三年（二四五）山東京傳三十一歳作の青本で遊里のこまを取材したが時恰も松平越中守が風紀振肅の際とて、その筋の忌諱に觸れ、手鎖五十日の刑に處せられ、これより京傳はこの種の作意を絶つた（帝文一五）

しがらみさうし しがらみ草紙

明治廿二年、十月廿五日創刊の文藝評論雜誌。黒地に白で「文學評論しがらみ草紙」と抜いた質素な表紙がついて（菊判四五十頁。森鷗外・三木竹二・矢崎嵯峨のや、小金井きみ子・井上通泰・侗然居士・落合直文等の

稿を載せて當時に於ける斯壇の一權威であつた。今その第一號の目次をあげる。

- 柵草紙の本領を論ず……………S S S
- 演劇改良論者の偏見に驚く……………森林太郎
- 軍醫シルレルの事を記す……………侗然居士
- 小澤蘆庵の傳……………井上通泰
- 並木五瓶……………森篤次郎
- 悲 哀……………落合直文
- 戯曲 折薔薇……………レツシング作
- あやしき少女……………小金井きみ子
- 小説 洪水……………ブレットハルト作
- 東洋の羅馬……………器堂居士
- ギョーテ一戯曲の梗概……………山 東 生
- 梅玉の書簡及び逸事……………三木竹二
- 沙翁ノ文字ヲ評ス……………暮 秋 生
- 國民の友「菩提樹畔の逍遙」細評……獨醉庵主人
- 壽座の新劇を評す……………三木竹二
- 和歌五首……………

（附録）

古曲遺聲 紀行袖くらべ 菅沼斐雄著

好色二代男 井原西鶴著

五大力戀緘 並木五瓶作

（東京下谷區上野花園町十一番地新聲社）

しき 正岡子規

二五二七—二五六二、慶應三—明治三五、九、一九、廿六歳

新俳句を提唱して明治の文藝としての一地歩を確立し、萬葉振を奨励して後のアララギ派を起し、寫生文を唱へて新文體を鼓吹し、全人格的に文藝生活に生きた一名家として子規はこの後も度々顧らるべき人であらう。

名は常規、伊豫松山御徒町に生れ、父半太は藩の馬廻り加番を勤めた。十八歳の時近くの三津濱の其戎翁について俳句を學び、又幼より祖父にして儒者なる大原觀山に教へられ、中學時代には村松校長によつて演說練習會が屢々開かれたので、新古の想は早くから彼の頭で融合しかけてゐたことが察せられる。やがて上京して大學豫備門に入り、ついで大學に入りしたが、その頃已に肺を病み、氣永に學業に親しむことの不可能なるを自覺し、一面前々からの俳句の趣味が頭を擡げて終に斯壇の革新を以て限られたる短生涯の唯一天職と思ひ込み、咯血の後「子規」と名のつた。その俳號に

も悲壯な決心が見える。斯て大學は二年で中途に退き、叔父のついで日本新聞の陸羯南に接近し、その新聞の一欄に俳話を掲げ、俳句を募集したところ意外に共鳴者が多くて、暫らくの中に一大勢力となり、在來の月並派や秋聲會などは全く後へに墮落たるの觀があつた。所謂「日本派」なる俳團は斯して新興俳句の旗幟となつたのである。二十七年には「小日本」を發刊して主筆となり、二十八年には日清戦役に従軍して之が爲めに病勢を進め、二十九年には脊髄病を併發して愈々密ならぬ病態となつたが、それにも屈せず益々奮勵し、三十年の頃門人柳原極堂が雜誌「ホトトギス」を松山から東京に移してからは、同誌の中心となつて執筆した。俳壇已に彼に風靡した頃、餘力を歌壇にそ、ぎ大に萬葉風を首唱して織巧の匠氣を排斥し、萬葉集並に萬葉風の歌人の味を味讀せよと叫んだ。「九たび歌人に與ふるの書」はその意見を披瀝したものである。寫生文のことは「ホトトギス」誌上で唱へ自身亦多くの佳篇を作つた。

その句は始め芭蕉に私淑し、ついで蕪村に渴仰し、之に新趣味を加へて自家獨特の句風を示し、連句を卻けて専ら俳句を勤めた。歌でも文でも凡て彼はその理論

づけをするだけのものは實地の作品でも示し得て居る。お負けに繪も書く字も上手（上手といつても雅味のある素朴な筆致）であつた。その後輩には河東碧梧・高濱虚子・松瀬青々・坂本四方太・伊藤左千夫・長塚節を始め澤山名家が出た。猥祭書屋俳話・子規隨筆・續子規隨筆・芭蕉雜談・蕪村句集輪講・新俳句・俳諧奇調集・病床六尺・墨汁一滴など、その著は可なりに多く、何れも多數の人々に愛讀せられた（子規言行録・子規全集）

**しきしないしんわう 式子内親王** ？—

八六一、？—建仁元、正、二五

「しきこないしんわう、しよくしないしんわう」とも、萱齋院・大炊御門院、（御父帝のかたみわけにこ、を得られしより）皆同じ方である。後白河天皇第三の皇女で、御母は高倉三位成子（藤原季成の女）平治元年十月に賀茂齋院となられ、同三年に准三后、嘉應元年正月御病によつて退下、建久八年橋兼仲や僧觀心のことと連座して京住み御停止の沙汰あらんとして中止、間なく御落飾。

この親王は性聰敏にして繪畫に巧に、殊に和歌に秀でさせられて居たので人々は新古今の五撰家以上だとま

ではめはやした。家集は式子内親王歌集一卷（續國七八—七九四）で新古今（四〇餘）・新勅撰（二〇餘）・玉葉（一〇餘）等にも入り、家集に入らないで勅撰集に入つてゐるものは、千載八・新古今一六・新勅撰四・續後選一〇・續拾遺二・新後撰二・玉葉三・續千載二・續後拾遺二・新千載一・新拾遺二・新後拾遺二・新續古今二等である。

聲はして雲路にむせぶほと、ぎす涙やそぐよ

ひのむら雨

秋の色は籬にうとくなりゆげご手枕なる、閑の

月影

忘れめや葵を草に引き結び假寐の野邊の露のあ

けぼの

逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞ霞む關の杉むら

玉の緒またえなばたえねながらへば忍ぶること

のよわりもぞする

君まつと閑へもいらぬ楳の戸にいたくなふけそ

山の端の月

**しきていこさんば 式亭小三馬** 二四七二

—二五一三、文化九—嘉永六、四十二歳

本名菊地虎之助、式亭三馬の子、文政十二年十八歳の

時「三國妖狐殺生石」を著し、天保五年から「小三馬」名で著作したが父に似て文才あり。一代の述作二十八種「雙面桂の川水・浮世又平名畫の譽四卷・浪花男井筒雁金六卷」等は吾人の耳朶に馴れたものである。

**しきのみこ 志貴皇子（施基、芝基、志紀 御春日宮天皇 田原天皇）** 一三三九—一三

七六、天武七—靈龜二、

天智天皇第七の御子、お母は道ノ君ノ伊羅都賣、官歴は

天武、朱鳥元年八月 封二百戸を加へられ

持統三年六月 善言を撰む司に拜し

文武 大寶三年九月（此より前四品）近江鐵穴を賜ふ

文武 慶雲元年正月 封一百戸を加へられ

元明 和銅元年正月 三品

同 七月 封二百戸を加へられ

元正・靈龜元年正月 二品

御歌は萬葉の一、三、四、八、新古今・新勅撰・續古今等

に出て居る。

**しきぶ 高島式部** 二四四五—二五四一、天明

五—明治一四、九十七歳

桂園門下中、女流歌人として有名な一人で、樂曲も上手、彫刻も上手、繪も短冊書などを見るとなか／＼美事

である。家集を夢の舎集（續歌學全書一一、明治名家家集卷上）と云ひ、別に論語の章句等を詠じた「形見の蕨」といふのがある。

乘る胸の手續に木々の露散りて蟬の音冷し志賀

の山越

小原女の年のいちしばいちはやく折りて添へけ

り梅の初花

**しきものがたり 四季物語**

鴨長明の作、年中行事を一月から十二月まで順々に記したもので、大原幽栖後の筆と思しく追懐の情味が溢れてゐる。文も流麗「叙事の間に挿める議論などおのづから山林の氣ありて峭拔の所おほし、日本文學全書解題」と云はれて居る。この書を四卷本として傳へたものは偽書で、元祿元年十二月上旬三好伯陽軒長慶の眞字跋を附した一部十二卷本が正しいといはれてゐる（日文四）

**しきやうし 四行詩**

明治三十年だい幸田露伴の指導にかゝる「みをつくし」一派の試みた新詩形で「さわらび」「初潮」などの詩集にその作が出て居る。

例 テニス

村川茅庵

秋の空いや高し 静けさ縫ふて音の行きかふ  
木の間の風に汗をふかせつ 色黒の健兒テニス  
すなり

じきゆう 中川自休?

桂園門下中、有名なる歌人、始め有栖川家に仕へたが後歌を以て一家を立て洛北、平野に居て望南亭と號し多くの弟子を教へた。於本奴散(寫本一卷)は天保四年六月廿一日の著にかゝり、反派對を駁したものである(此より前、その師香川景樹がその家集「桂園一枝」を公にした處が村田春海の門人秋山光彪がその内九十餘首を抜いて酷評したものを「桂園一枝評」として上梓した。そこで自休がこの「おほぬさ」を書いて逐條辯駁したものである)歌人として、桂園の高弟として及びこの派の確立者として特記すべき人である。その  
行く年の暮も急がぬ 芦田鶴の千代の歩みぞ豊け  
かりける

しぎんしゃ 紫吟社

明治廿九年頃から四五年間眼さましく榮えた俳團で、尾崎紅葉と巖谷小波とが中心になつて、木曜會といふをつくりその會員が悉く社員として盛んに作句した。

を書いた。

又俗には「詞花」の「詞」は「死」に通じて、その爲め崇徳院邊土崩御の哀しみを見たのだとも謂つた。次の諸詠が大體この集の歌振である。

堀河院の御時、百首の歌奉りけるに春

たつこゝろをよめる 大藏卿匡房

氷りぬし志賀のからさきうちとけてさなみよ  
する春風ぞ吹く

さくらの花のちるを見てよめる 源俊賴朝臣

身にかへてをしむにさまる花ならばけふやわが

よのがぎりならまし

老人惜春さいふこさをよめる 橘 俊綱

老いてこそ春のをしさはまさりけりいま幾たび

もあはじと思へば

贈左大臣の家の歌合し侍りけるによめ

る 修理大夫顯季

たれまきしわがなでしこの花ざかりいく朝露の  
おきて見つらむ

新院のおほせごさにて百首の歌奉りけ

るによめる 左京大夫顯輔

あまの川よこぎる雲やたなばたのそらだきもの

その人々には硯友社同人の柳川春葉・徳田秋聲・小栗風葉・泉鏡花・中川白峰・村山鳥運や、俳句だけの紅葉の門人の星野麥人・牧野望東・鈴木苔花・小峰大羽等の入人や後に加はつた西村渚山・生田葵山・松居松葉・岡鬼吟・武田櫻桃・小林蹴月・廣津柳浪・中村花瘦など實に多士儔々であつて、その吟は讀賣新聞や文華に載せられたが、どつちかさいふとチレツタントやアマチュアへの傾向が強かつた。

しくわわかしふ 詞花和歌集 十卷

左京大夫顯輔が崇徳院の院宣を受けて近衛天皇の天養元年六月二日に撰進したもの、歌數四百九十一首(一本に四百九首)これも金葉集の意圖を以て何かな三代集の風格以外一斬新な趣を立てようと苦心した爲めに、八代集中その點が出色であるが、又それだけ貫之や躬恒を崇拜してゐる人々の中には非難者も多く、長門前司爲經の後葉集、藤原教長の拾遺古今など皆この集を攻撃の爲めに撰んだものだといふが今傳はらな。八條太政大臣實行の如き我子公行の詠を採らなかつたのを啣んで、別に撰集を出さうとして、その子公教に諫められて中止したさいふ。あまり非難の聲が高いので顯輔の子清輔は父の辯護の爲めに牧笛集といふの

のけぶりなるらむ

今、國一三一―一四〇、日歌に入る。

しげあき 富士谷成章 二二九八―二四三九、

元文三―安永八、四十二歳

近世二大語學者の一人として、國文家として、舊派歌人として有名なのみならず漢文・漢詩に巧みであつた。

彼は皆川洪國の弟で富士谷姓を冒したものだ。字、仲達、通稱、専右衛門、號は層城(もさ養父の號)後、居所の名を取つて北邊といふ。

彼は早くから天才的な閃きがあつた。三歳にして書をよくし、七歳にして詩をつくり、九歳にして折節來聘の韓人を驚かせた。長ずるに及びて漢學を修め、深く經史を涉獵し更に國書研究の必要を悟り國史、國文以下諸法令儀書の書、名人家乘遺集に至るまで遍く之を攻究した。又和歌を有栖川宮熾仁親王に學び吟吟終生その數、幾十萬首と謂はれてゐる。

彼の國語學上の功績は、まだ洋文典の輸入されない當時、始めて日本語の全體を系統的に研究したこと、脚結抄・挿頭抄はその努力の結晶になつたものだ。彼の品詞分類を今の文典用語と對照すると、

一、挿頭(文の頭におく語)

- 副詞
- 感歎詞
- 接續詞
- 代名詞の一部

二、装よそはひ

- 動詞
- 形容詞

三、脚結あひひ(他の詞の下につく)

- 助動詞
- 助詞

四、名

- 名詞

挿頭抄は三卷で明和七年の著、脚結抄は五卷本で安永二年に脱稿して同七年に門人が版行した。この二書は木居宣長の研究と共に貴むべき文法書である。國文の著には北邊隨筆(百説一)があつて近世雜文中出色の好文字に富んでゐる。

和歌學の著としてはまとまつたものはないが、北邊家集の中に「六運の歌」を示してゐるのは歌態史考察の一好資料である。彼は語學でも歌學でも六期に區劃してゐる、それは

- 一、上つ世 開闢——光仁 ……年
- 二、中昔 桓武——花山 二〇五
- 三、中頃 一條——後白河 一七二

- 四、近昔 二條——四條 八四
- 五、なとつ世 後嵯峨——後花園 二二二
- 六、今の世 後土御門——

で之に各種歌態を例味してゐる、その一例として雜歌の所をあげると、

うつせみし常にあらめや春花のにこえさかりて  
散らく思へば(一、かみつ世)

限なき世をこめもたる竹なればうべこそ色もか  
はらざりけれ(二、中むかし)

神のますみむろの櫛とりもちて君をぞいのるさ  
きはかきはに(三、中ごろ)

かひなしや又あふまでは消え消えずえもしら玉  
の袖の涙は(四、近むかし)

おのづから人やとふとも山里に心のすまぬほど  
ぞ待たれし(五、おとつ世)

夕まぐれおもき眞柴もやすめあへずそば傳ひし  
ていそぐ山人(六、今の世)

彼の和歌は舊派の雅醇なものだが、語學や歌學の發表に比べると見劣りがする。

見たせば松の木の間むら紅葉山こそ秋のにしきなりけれ

さむきかな置きそふ霜の花ならぬ一花もなき野邊の冬くさ

其他の述作としては左記がある。

國字源原考・おすひ抄・國字牌格・三音通義・北邊七體七百首・和歌梯・一夜百首詩歌・山の燈・層城詩章。

しけい 詩形

詩歌の形式をいふ。即或る規定に従ひて排列せられた詞の姿態のこと。我邦では詩形を決定するものは五七調・七五調・句數等である。中には更に七音を三四調と四三調とに分けたものもある(詩形論で音排列を細かに論じたものには、五十嵐力氏の國歌の胎生とその發達、岩野泡鳴氏の新體詩作法などがある)

しけいがく 詩形學

詩の形態學即ち詩律・詩步・詩句・押韻・詩節・律語(韻文)などを明らかにする學問である。英の「メトリック」の譯。

しげき 史劇

歴史上の人物事象をとり之に作者の文化史的解釋を下して藝術化した劇をいふ。我邦では従前「時代物」といふがあり、明治の初期「活歴」といふがありしたが、坪内逍遙が史劇論と共に「桐一葉」「杳手鳥孤城落月」「牧の

方」等から眞の史劇が見られるやうになつた(但し上述諸作品を大正・昭和の所謂新史劇に比べるとまた大分の隔りがある)

しげきじふにきよく 史劇十二曲

山崎紫紅、四十二年六月十五日の著。最近二ヶ年の努力を集めたもので、この頃の史劇脚本の一代表と看做されるし、作者自身にとつても作劇に一番興味の多かつた頃の述作である。收められたのは左の十二曲でその内三と八とをのけて十曲は史劇ばかり實演されたものはそれ〴〵寫眞版が挿んである。

- 一、歌舞伎物語・二、その夜の石田・三、前途?四、信玄最期・五、亂れ笹・六、籠・七、明智光秀・八、松一木・九、戀の洞・一〇、三七信孝・一一、當流鉢木一二、破戒曾我。
- 一、歌舞伎物語

歌舞伎を戀人とも生命とも思ひ込んで斯道に勵んだ阿國が、廿五年の年越前守秀康に召されてその技をお褒めに與つてから、人知れぬ戀路の闇に病してうつらうつら山三早くもそれと感づき「戀に上下のへだてもなし、機會あらば某よしなに御身の願ひかなへませう」と慰める。兼れて江戸方で煙たがつてゐた秀康は、清水の

花見で土屋の廻しもの手で茶に毒を入れて吞まされ、それと知つて阿國を呼び伏見の城内で歌舞伎を催す。病を推して阿國はイソ／＼夢内、舞技半ばにして殿落命といふ。阿國ハツとしながら業平のつゞきをしまひまで舞ひをさめた。松平伊豆は之をめで「道こそちがへそちが職に忠實なる心我々武士もあやかりたいぞよ」と褒める。

二、その夜の石田、

關ヶ原大合戦前夜の石田三成を描く。

左近「所詮軍は雙六の丁と出るか、

備中「半と出るか、

三成「賽の目が業をするまで、左近、備中大博奕の

うむはははは

など緯々たる態度で、最後に

三成「悉く手配は済んだ。舍人は失せても馬は歸りぬ。筑前が心變りも勝利の後の料理には便りよき事

もあり。天下は廻る水車、かの徳川を迫るか迫かぬ

か、明日の合戦の待遠しさよ……」

三、前途

「實」と「たか子」とが前途を語つて名残をしい戀を捨て、訣れるといふ一幕物。

四、信玄最期

野田城頭夜毎に冴ゆる笛の音に寄せ手の大将信玄は、敵ながらも心憎しと、毎夜のやうに星隠れの丘に上つてそれに聴き惚れて居る。と、或夜銃聲一發、遂にこの英雄を燈したといふ。信玄の最期譚を採つて彼の一代を縮約し、且つその藝術鑑賞の雅懷を披瀝した處が面白い。

五、亂れ笹

二場、時は正平の頃、新田の息女梅代姫唯一人とある村里に落ちかゝり、民家の竹童といふ子供一人留守居の稻村に隠れて居る中、足利の追手猫實八郎捕手四人後を追ひ來て之を見つけ、戸板を輿に代用して姫を乗せて東興寺へ引上げた。竹童の母小笹外より歸り、姫の小刀を見て自分の舊主とわかり夜に紛れて東興寺に忍びうま／＼姫を救ひ出す。

六、巖ふなよそひ（この脚本は、ことさらに舊式の趣き多し」と斷りあり）

二場、元寇襲來して一旦は卻けしもいつ又再び攻め寄せられるかも知れぬといふので太宰少貳後室綱手は數多の船を造らせ、平素は商船として四方に商ひさせ、事ある時は軍艦にしようとして今日も一艘「浮木丸」といふ

のを造らせた。名づけの親は息女「浮木姫」今日進水式といふに生憎の病氣それ故式は延期といふ。實は姫には許婚に伊豫の國の武士河野四郎通有といふがあるに、その結婚の延び／＼になつてゐるのを氣に病んでの病氣であつたが、その日通有は叔父伯耆守通時同道で訪れて來て、種々いきさつの上結婚を承諾し直ちに進水式をして館へ引上げようとする間際海人の「みるめ」が急ぎの註進「宗像の海に蒙古の軍勢山のやうに浮んで時々間をつくつて居ります」といふ。之を聞いて一同こをどりして悦びて「兼れて望むところ、若し十年の中向ふから攻めて來ずばこちらから攻めに行かうと神にまで誓うた甲斐があらはれた」とて竹の丸・大矢丸・つなで丸・三井丸・浮木丸と何れも／＼勇ましく巖する。

七、明智光秀

朝 龜山城内の庭

晝 城中龍の間

夜 桂川の畔

時は天正十年六月二日

朝は光秀の息女玉井姫、蘭丸を慕うて成らぬ戀を悲しみ、侍女久代様々に慰める處、晝は庄兵衛茂朝主君光

秀に謀叛を勧め、とど本能寺夜討と決定、それを立聞くと玉井姫はスハ戀人の一大事とかげ出す。夜は光秀桂川べりに居て諸軍の報をきく、玉井姫狂亂の體にてこに行きあひ蘭丸は四方田但馬の手に討死ときいて悲歎やる方なく取り亂すを光秀無慙にも刺殺し「これも憎き信長故——」と尙も八方を睨み、やがて本能寺落城信長討死の報到る。

八、松一木 三場 一、並木 二、茅屋 三、並木

享保の頃の季は五月。岸大盡のなれのはて紙子姿の痛ましく馴染の住の江太夫が記念の松をこの節大夫が禿のひろめに、せめて小袖の一枚も祝うてやりたいと云ふを聞き、夜店を出して「價十兩」といふ。山吹大盡事情を聴きおともの平八に十兩で買ひとらせ且つ自分がはからうて住の江太夫を呼びよせ、粹なさばきに岸と住の江をそばせる。

九、戀の洞うつろ

二場 上、城内の庭 下、山中の洞

時は室町時代の末、二俣尾城主三田太郎綱彦、侍女澤井の美を愛し女も亦殿に戀着する。奥方七代御前嫉妬の炎を燃やし、折しも領内旱魃つゞきなるにより景雲阿闍梨召されて雨乞の祈禱をする。その祈禱には美人

の處女が一人要るといふので七代はこれ幸と澤井を薦める。澤井は丁度阿闍梨の姪に當つて居るので阿闍梨も我が姪に手柄させたく殿に懇請する。殿はモジ／＼躊躇の體奥方すかさず「澤井がまこと清い處女ならばきつと雨が降りませう」といふ。その疑ひを晴らさうばかりに澤井は叔父に連れられ山中の洞に籠るが、もとより處女ならぬ身の何で雨がふらう。やがてその事が發覺して阿闍梨は怒氣心頭に徹し即座に澤井を殺した。澤井は「法力でなくともわたしが戀の雨を降らせませう」とやがて絶命、果然大雷雨、青電、洪水轟々と響く所にて幕靜かに下る。

一〇、三七信孝

三場 序幕 岐阜城天守

二幕目 長良川巴淵

大詰 内海大御堂

時は天正十一年四月、柴田勝家とせしめ合せた計略齟齬して岐阜の城主信孝は臣下彦右衛門の介錯で生害を遂げる。之に彦右衛門の妹美人静緒の貞烈、母松枝の忠節をからませ本書中第一の力作と思はれる。

一一、當流鉢木

正嘉の春、北條殿邸大門内で「いざ鎌倉」の着物をつ

けて居ると上野からは眞先に佐野源左衛門がやつて来て最明寺時頼の恩賞に與るといふ、謡曲鉢木の後半の劇化。

一二、破戒曾我 曾我十郎、父の仇を討つには一人では心細く、剛勇箱王を還俗させて共々本望を達せんとて、明日は得度といふ前夜、箱根の寺へ誘ひに行き、母の戒を破つて兄弟うまく寺を逃げて出るところ（拙著合國文學概説四八三―四八九）（四六判五四〇頁、博文館）

### しげこ 進藤茂子？

進藤正幹の養女で、長じて幕臣土岐頼意の妻となつた。和歌を賀茂眞淵に習つた處、眞淵は「筑波山は山しげ山」の古歌の意から、彼女を「筑波子」と名づけた。縣門三才女の一人と謂はれて家集は筑波子歌集と云ひ縣門遺稿中に收められ又續歌二にも收められてある。

春たちて匂へる花の顔みればわれさへともにはほふまれけり

訪はれなば恥しかるべき宿なれど花し匂へば人ぞまたる、

わがせ子がとき洗ひ衣も縫はな、に萩の葉そよぎ秋風のふく

### しげさと 熊代繁里？

紀伊の人近世古典派歌人。その撰に清活集あり、當代知名の歌人の咏を集めたもの。

駒わたす佐保の川霧風さえて足がきにくたく薄

氷かな

### しげたね 鈴木重胤 二四七一―二五二二、文

化八―文久三、八、一五、五十二歳

淡路國津名郡仁井村の人で、家は代々里正、彼れ名は重胤、幼名雄三郎、通稱を勝左衛門といひ、家號を嚴樞本と云ひ、博聞強記にして且つ廉正寡欲、夙に京攝の間に往來して苟くも一日の長一字の得あるものは必ず就いて尋ね、就中本居宣長翁の學風に浸り、そを承け繼いで終に一家を成し又平田篤胤の風を慕ひ遙々秋田まで下つた頃には已にその歿後のこと、て非常に之か遺憾とし墓前に詣でて歿後の弟子の誓ひを立てた。その歸途出羽の莊内、越後の新津で熱心なる學徒の請を納れて講學久しきに亘つた。時に幕末事日々に繁く、流言頗に至つて彼は幕吏と通じてゐると云ふものありて、爲めに尊王一派の誤解を買ひ遂に刺客の爲めに斃れた。

その著十餘種、何れも國學研究上貴重せられて居る。

日本書紀傳は篤胤の子鐵胤が之を見て「これは亡父の説を剽竊して居る」とまで疑はしめた程篤胤の説と暗合の箇處の多いもので、明治六年教部省照井長柄に命じて之を致さしめ、飯田武郷が日本書紀通釋を書く時多くこの書を引用するやうになつて追々その價值が世に認められて來た。祝詞講義も彼の力作で、眞淵の考、宣長の後釋始め餘他の學説を集大成して最後に自家獨特の斷案を下したもので、行論は稍繁瑣に失すると思はれるまでに精細なものである（今國文註釋全書に收められてある）その他の著には開闢圖・古始大元圖・經緯歌・古始大元考・詞のちかみち・今古和歌初學・世繼草摘分・詞の塵芥・樞の廣葉などがある。

彼の郷里淡路の仁井には郷黨相語らうて社を建て、毎年祭祀を行ひ、出羽莊内の弟子も毎年九月十日靈祭を行ひ道足別嚴樞根大人と追尊した（國文學註釋全書本祝詞講義上卷卷頭鈴木重胤先生小傳門人秋野庸彦）

### しげのぶ 鶴峯戊申 二四四八―二五一九、天

明八―安政六、八、四、七十二歳

豊後國臼杵の人、通稱彦一郎、字世靈、又季尼といひ卓舎と號し、指西とも稱した。學和漢梵洋を兼ね音韻・悉曇・蘭學に精通した。弱冠天下を歴遊し、天保九年

文學を以て水戸烈公に仕へ、本郷駒込水戸の邸内で亡くなつた。  
彼の名を不朽にするは語學上の貢獻で、その著語學新書は我國で洋文法を參酌して立案したものの嚆矢である。その他神代文字考・助字用格・歌詞清濁考を始め五十有餘の著があつて皆有名である。

**しげはる** 在原滋春(在次君、在二君)?

業平の第二子で、母は右大臣藤原良相公の女、染殿内侍、大和物語に在次君とある人、歌は古今、新勅撰に出てゐる。

かひの國に、あひしりて侍りける人とぶらはむとて  
まかりける道なかにて、にはかに病をして、いまく  
となりければ、よみて京にもてまかりて、母に見  
せよといひて、人につけ侍りける歌、  
かりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今は涙のか  
どでなりけり

**しげゆき** 源重之? 一六六〇、? 長保二、

源兼信の男で、地位は從五位下、左馬助、相模守、歌は左の諸集に出てゐる。

拾遺(一〇餘)・後拾遺(一〇餘)・新古今(一〇餘)・後拾遺・詞花・新勅撰・續後撰・續古今・玉葉・續後拾遺・新千

載・新拾遺・新後拾遺・新續古今。

家集を源重之集とし群二五一、九、六七五―六八六歌仙歌集一三(續國一五四四―一五五二)に收めらる。又世に所謂百首和歌なるものはこの重之が東宮具平親王(冷泉天皇)に奉つたのが始まりでその時の味は家集の巻末に出てゐるが春夏秋冬各二〇首・戀雜各一〇首で後世百首の體多くは之に倣つた。

かまど山

春はもえ秋はこがる、かまど山霞も霧もけぶり  
とやたつ

戀十のうち

風をいたみ岩打波のをのれのみくだけて物を思ふころかな

いはぬ

やそ鳥の松の葉枝をかぞへつ、今ゆくすゑのほどはしるらん

**しげゆきしふ** 重之集

しげゆき「源重之」を見よ。

**しげより** 松江重頼?

近世初期松永貞徳門下に出た古風の俳家で、又、里村懷惠庵について連歌をも學んだ。維舟と號し法橋に任

ぜられ、門人に多くの名俳を出して俳系は非常に賑やかである。池西言水・上島鬼貫などは門人中でも傑出して居る。寛永十年に著した犬子集五卷は貞門の俳句を知るには必讀の良書と謂はれてゐる。

元日やあけて心も青二才

咲やらで雨や面目なしの花

置露はるひもせずしてゐるは哉

**しけん** 森田思軒 萬延元―明治二九、一一、

一四、三十七歳

備中の人、名は文藏、啓蒙社、興讓館に漢學を修め、慶應義塾に英書を學び、この教養を以て文を驅使すること簡練刻畫、その志すところは文藝史、文明史方面にあつて「頼山陽及其時代」の一篇に抱負の片鱗が察せられるが、未だその所期に到達するに到らずして物故した。即ち實際の閱歴は報知・國會・萬朝報等の日刊新聞記者で、文學史的業績としてはユーゴー・ボエ・シユウルエルヌ等のロマンチック派若くは科學小説の翻譯や重譯にある。廿一年頃から廿九年終焉の年にかけて探偵ユウベル・クラウド・死刑前の六時間・破茶碗・用達會社・千人會・間一髪等の紹介をしたことは我が翻譯文學史上特筆に値する。但しその文は今日から見

と借居養牙稍晦澁の嫌がないでもない(思軒全集全五册)

**しこう** 山崎紫紅 明治八、三、三一

横濱の人、名は小三、學歷は別にないが劇文學に熱心で、明治の史劇作家として有名で史劇十二曲・七つ桔梗・史劇十種などの作があるが、大正期に入つては實業界の人となり、あまり創作はなかつた。現代戯曲全集收むるところその舊作ばかりである。

**しさうしや** 詩草社

明治四十年に生れた詩社で自然主義の影響を受けて、主觀の色彩の濃い詩風であつた。河井醉茗・横瀬夜雨・川路柳虹を主なる同人として機關誌「詩人」を發行した。

**しさん** 後藤芝山 二三八一―二四四二、享保

六一天明二、六十二歳

讃岐の人、名は世鈞、字は守中、芝山又は竹風と號し、通稱を彌兵衛と云ふ。性穎悟、江戸に上り昌平學に學び、學成りて高松藩の儒官となり、州學講道館を興し兼ねて侍讀をも勤め、元理學が専門だが少しもその學派に囚はれず、博洽にして且つ有職に通じて居た。その著には音訓五經・元明史略・和漢年鑑・職原抄考證・有

職小録・芝山文集などがある。

じさんか 自讃歌

後鳥羽天皇の勅により當時の和歌の達人俊成・家隆・秀能・西行・式子内親王等が自讃の味、自らよしと思ふ歌、各十首宛を奉つて集めた歌集をいふ（歌學全書七）

しじふはちくせ 四十八癖 四卷

式亭三馬が京傳の「四十八手」から想ひついた滑稽本。（帝文一三）

ししもん 獅子門

みのは「美濃派」を見よ。

しぞこ 若松賤子

十三歳

元治元—明治二九、二、三

會津若松の人、本名は島田嘉志子、家は若松藩士で父を勝次郎といふ。若松賤子はその郷里に因んだ雅號である。後に女學雜誌社長兼私立明治女學校長巖本善治に嫁し、家事を執る傍ら筆を執つて著譯にいそしんだ。米のパーネット夫人の作を譯して「小公子」（廿三年八月—廿五年一月文藝俱樂部に連載）と題したものは彼女を最も有名ならしめたもので今も重版して居る。蓋し彼女は英文國文共に深い素養があつて、あの時代としては得難い翻譯文學方面の才媛であつた。そ

の他、お向ふの離れ、すみれ、忘れがたみ、イナツクアーデン物語、ローレンス・セイラクルーの話、波のまにまに、おもひで等の譯作がある。

しせいし 市井詩

市井の巷の卑俗な事象を寫實的に歌つた詩。例、森鷗外が「腰辨當」なる匿名で三十九年五月頃から藝苑・趣味・明星等の誌上に掲げたもの（あの中「旗ふり」といふのは佳篇であつた）

じせう 八文字舍自笑

寛文六—延享二、一一、一一、八十歳

通稱安藤八左衛門、京師の書肆で始め役者評判記録のものを刊行して居たが、後江島其積と結托し西鶴本に倣つて浮世草子を發行し、大に歡迎され八文字舍本と云つて世間に喧傳された。ところが一方其積は名利共に自笑に歸するのを憾みとし中途分離した。自笑の方では更に多田南嶺を儲つて續々刊行したが、老舗の力と繪師版木師の精選とで信用は依然として八文字舍本に集まつたので後に其積もその非を悟り再和陸し提携をつけた。自笑は元來機を見る明があり、書肆經營の才がありその上多少文筆の趣味をも解し自ら「風流御伽會我」五巻以下二十種内外の草紙をも作つた。

しせつ 詩節

詩句の一段落を節と云ひ、節が集まつて一篇の詩を構成する。例へば慈鎮が四季の今様は七五四句が一節で、この種の節が四つ集まつて「四季」一篇となつてゐる。長歌の如きは全篇で一節を成すもので、別に中途句切るところがない（詩節の嚴格なのは漢詩や洋詩で、この語は英のスタンザに當る）

しせんかしふ 私撰歌集

勅撰歌集に對して個人として撰ぶか若くは天皇上皇以外の高貴な人の命によつて撰んだ撰集をいふ。例「藤原公任の三十六人集・鎌倉初期の新三十六人集・萬載和歌集・同期の風葉和歌集等。

しぜんしゆぎ 自然主義

明治四十年前後我國創作文學の主流となつたもので、佛のバルザック・ゾラ・モウパッサン等によつて始められた文藝上の一主義で、ゾラの「巴里」・モパッサンの「女の一生」などの譯と共に我が邦にも盛行し、小杉天外の「はやり唄」序に「あるがまゝの描寫」を唱へ、國木田獨歩の「牛肉と馬齡著」外十數篇の價値が今更のやうに價値づけられ、田山花袋の平面描寫（蒲團）・徳田秋聲の凡人描寫「敵」・島崎藤村の人間性描寫

「破戒」・正宗白鳥の内面描寫「何處へ」等はその代表として喧傳せられ、餘他の作家何れも多少この派を以て色づけられぬはなきまでに盛行したが、新人道主義・新主觀主義・新理想主義の思想が擡頭するに連れて、この派の批判せらるゝ時期となり歐洲戦争の頃は殆ど行き詰りとなり、大正中末期より今日にかけてはその名残がチラと顯れチラと消えしてゐるが、最早以前の盛況を見ることは出来さうもない。要するにこの派の特徴は、

- 一、科學を根柢とし眞實を強調し、
  - 二、遺傳と境遇が産み出す人間性の暗面を描き殊に病的な個性獸性を描き、
  - 三、背景の個性とも謂ふべき地方色を發揮せよといひ、
  - 四、其表現は無技巧を悦び、平面的斷片的の描寫を好んでする、
- などの數點であるが、あるがまゝの描寫といつても作者の主觀の濫過なき描寫は考へられぬし、如實の描寫が文藝の使命なるが如く、當爲の描寫も文藝の主要なる一使命であるから、この派の主張は自家撞着を含んでゐるものとして次第に非難せられたのである。け



れどもその表現の手法などは今もその主張通りの技巧か若くはその主張の延長とも云ふべき技巧で書きこなされて居る作品が多数で、いはばこの派は形式的方面に於て劃期的の偉功を奏したのである(島村瀧太郎、近代文藝之研究・相馬御風、黎明期の文學・片上伸、生の要求と文學・早稻田文學昭和二年六月號「自然主義前後」等)

しぜんしゆぎてきへうしやうし 自然主義的表象詩

明治四十年三月二十四日帝國文學會春季大會に岩野泡鳴が発表した作詩の新主張で、詩壇に對して自然主義的思潮が影響しかけた始めの現象として世の注目をひいた。その綱目は

- 一、宗教的形式の脱却
- 二、懷疑と煩悶
- 三、神經と自然
- 四、燃燒流化
- 五、心熱
- 六、新語法と新用語
- 七、思想と技巧との純化
- 八、新リズム

で、尙この意味を他で發表したものに詩は刹那の機分を把握すべきは象徴派の云へるが如しと雖も、其刹那に活躍するものひとり情緒のみにならず、知識も意志も感情も互に混淆融合して渾然たる一全意識として活躍するなり。情緒のみの高潮

なるは少年青年のこころなり、低度のローマンチズムなり。全心意の活躍は成年壯年の自然主義的表象主義なり刹那々々に於ける全意識の燃燒は活ける全人格なり、意味ある全行為なり、真正なる詩の材なりといふ、四十一年作の「闇の盃盤」はこの主義によつて作つた彼の詩集である。

しそう 芝叟

とくさう「近松徳三」を見よ。

しだい 次第

諸曲の術語。人物の對話・獨白・又は地の諸等に於て意向・動作・事件の次第を前置きするやうに表現した語句又はその句に節づけした語をいふ。

例、高砂「今ははじめの旅衣。く。日も行末ぞ久しき

朝長「花の跡といふ松風や。く。雪にも恨みならん

音曲玉淵集に「次第の諷ひ方。ワキ能は祝言なれば吟も剛く位も進むものなり始終たるみなき様に諷ふべし初めにある次第はサラリと諷ひ中にある次第は靜かに諷ふべし」

しだいきしよ 四大奇書

徳川時代に出た小説中、最も有名な次の四書をいふ

- 曲亭 馬琴 南總里見八犬傳
- 十返舎一九 東海道中膝栗毛
- 式亭 三馬 浮世風呂
- 柳亭 種彦 修紫田舎源氏

じだいもの 時代物

淨瑠璃や脚本で歴史上の事象や人物を脚色したものをいふ。例、鎌倉三代記・ひらがな盛衰記

(史實の中王朝以前のもを王代物と云ふのに對しては武家時代のものだけを時代物とも云ふ。大體今日所謂「史劇」に相當するが語感の上から云つては聊か違ふやうに思ふ。譬へば坪内逍遙氏の桐一葉ならば躊躇なく「史劇だ」と云ひ得るが、河竹默阿彌の作品だまどうも「時代物」と云ひたいやうな氣がする)

しだら 四道

大寶令以來、大學で授けられた科目・記傳・明經・明法・算の四道をいふ。

したがふ 源順

一五七二—一六四三、延喜二—永觀元、七十二歳(一説一五七一—一六四三、延喜二—永觀元、七十三歳)

嵯峨源氏。嵯峨帝の御子大納言定の孫左馬允舉の男、

天曆七年四十三歳文章生に補せられたのを始めに東宮藏人・下總權守・和泉守を経て五位に叙せられ、梨壺の五人の一人に數へられた。學和漢を兼ね、才多方面にして漢文・漢詩・國文・和歌皆當代第一と謂はれたが、少しく逸美に失する嫌もある。その詩文は扶桑集・本朝文粹等に採られ、その歌は拾遺・後拾遺以下の諸集何れにも散見するし、又村上の朝には大中臣能宣等と共に勅を受けて後撰集を撰んだ。彼の家集を源順集一卷(群二四九、九、六二—一六三七、歌仙家集一〇、續國五一—一五二一)とし別に源順馬毛名歌合一巻がある。文では庚申夜奉和歌序(家集、扶桑拾葉集三の卷)がある。短いけれども貫之の古今集序と相並ぶべき價値がある。尙別に和名類聚抄(十卷本と廿卷本とある)の著がある。之は醍醐天皇第四の皇女勤子内親王の御修學用に献つたもので漢語を解くに漢字の音を假りて註したもので、廣く行はれて、一、元和三年・二、慶安元年・三、寛文七年・四、寛文十一年・五、貞享五年・六、元禄元年・七、享和元年(大須本)・八、明治二年の數回に重版を見た。

彼が作品について観ると漢詩文第一、國文第二、和歌は寧ろ第三の出来と謂ひたい。

漢詩文の方は彼の一人一首の著者をして「本朝の楊雄許慎を以て稱すと雖も過論さなす。尋常の墨客を以て之を看るこゝ莫れ」と謂はしめただけあつて「河原院賦」「荻原伊尹」「夜行舍人鳥養有三歌」など眞に逸品と謂ふべきだ。

和歌は語句の諧調に囚はれて含蓄少く感情上すべりして寧ろ散文に近いものや、徒に技巧の繊細を事として自から慰めてあるさ云つた風の趣のものが多し。

水のうへに照る月なみを敷ふれば今宵ぞ秋の最中なりける（彼の第一の秀吟と云はれてゐる）  
蓮だに生ひざらませば水の上に露おきけりといかで知らまし

老いぬれば同じことこそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ

里遠み雲路かきわけ水ぐきの跡かと思ゆる雁は來にけり

一昨年も去年も今年も一昨日も昨日も今日もわがこふる君

その他「あめつちの歌四十八首」「雙六盤の歌」「世の中を何にたとへむ」の十首や「端午に菖蒲を贈る歌」のこゝろざし菜きみぎはのあやめぐさちとせのさ

つきいつかかるべき

（進上 深 右葉之菖蒲草 千年五月五日可刈）

一世に重きをなした彼はその前後作者不明の作品の出る都度、その作者を以て擬せられたが、まだ確證がない。竹取・落窪・うづほの三物語も著者を彼と認めたとの如きがそれだ。

しちごてう 七五調

我國の律語に於て屢々用ひらるゝ音律で、上に七音、下に五音の續いた詞形をいふ。上代にあつては五七調多く、後世になるほど七五調が多くなつて來たのは邦人の耳に最も和偕な音調だから音感覺の自然淘汰の結果であらう。

しちこんぜつく 七言絶句

七言四句によりて構成せられた漢詩をいふ。

例 涼州詞（平起）

王 翰

葡萄美酒夜光杯

欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑

古來征戰幾人回

清平調（仄起）

李 白

雲想衣裳花想容

春風拂檻露華濃

若非群玉山頭見

會向瑤臺月下逢

しちこんりつし 七言律詩

七言八句によりて構成せらるゝ漢詩をいふ。その押韻平仄は五言律詩に同じ（その項を見よ）

例 秋興（仄起）

杜 甫

玉露凋傷楓樹林

巫山巫峽氣蕭森

江間波浪兼天涌

塞上風雲接地陰

叢菊兩開他日淚

孤舟一繫故園心

寒衣處處催刀尺

白帝城高急暮砧

しちじふいちばんうたはあせ 七十一番

職人歌合 三卷

「月」と「戀」を題にして七十一組の職人氣質を面白くかしく詠んだ歌を組み合はせ一々判を加へ挿繪を挿んだもの、歌は徳川期狂歌の先蹤とも見るべく、畫は當時の風俗を知るに好い資料である。著者は未詳だが年代は室町時代のもので推測される。屋代弘賢が淨寫して奥書した詞の中に「繪は土佐光信、書は東坊城和長」さある（群五〇三、一八、六五―二〇七、經濟社發行 職人歌合 七十一番歌合）

しちじふにはうせい 七十二峯生

そはう「徳富蘇峯」を見よ。

しちちんまんばう 七珍萬寶 二四二三―

二四九二、寶曆一三―天保三、七、二六、七十七歳

俗稱福島屋仁左衛門、芝増上寺門前に翁屋といふ餅屋店を張つてゐたが、戲筆を好み二世竹杖爲輕・二世森羅亭萬象（萬象は彼の戲作の師匠）など云ひ、又別に南湖子・錦雪庵・三雅等の號がある。その作多くは福壽開運の悦びを主想にさり、一時時好に投じたが後去つて狂歌に熱心し北川眞顔に弟子入した。その作海中箱入娘三・身爲着寶洪福二・萬歳諷諸神柱立二・陰徳兩方吉事計一など廿餘種ある。

しちぶしふ 七部集

芭蕉がその門人と共に興行した俳諧の中特に初心の模範となるべきもの七種を集めたもので、その目は次の通り。冬の日・春の日・噴野・瓢子・猿蓑・炭俵・續猿蓑。之に倣つて諸家の俳書に七部集の目を立てることが一種の流行のやうになつた。例「其角七部集・蕪村・樗良・月居・枇杷園士朗・道彦・一茶各七部集等」(月境社何丸、七部集大鏡・曲齋、七部婆心録・勝峯普風氏、七部集定本岩本 梓石氏俳諧七部集新釋・今古堂版俳諧七部集・光同氏俳諧七部集註解(炭俵の部)松成堂・三森氏標註七部集鶴屋・寒川鼠骨氏四季分類 芭蕉七部集俳句全集 大學館)

じちゆう 谷時中 二二五八―二三〇九、慶長

三一慶安二、五十二歳

名は素有・字は時中、大學と稱した土佐藩の儒、もとは農家で、後僧となり南村梅軒が程朱の學を唱へるのに共鳴して就いて學び門戸を張る。從學の徒多く土佐の風教之より大にあがる。その門からは野中兼山・山崎闇齋のやうな碩學を出した。素有文集・素有語録の著がある。

じちん 慈鎮和尚 ?―一八八五、?―

嘉禎元、九、二四、七十一歳

鎌倉初期の歌人として有名な一人で、關白藤原忠通の男で、出家して大僧正となり始め道快と云ひ後慈圓と改め、慈鎮は死後の謚號である。後に天台座主たること前後四回で開山以來の新記録だと謂はれたが和歌を以て後鳥羽院の寵遇を得た(良經の薨去を悼んでの院と慈鎮との贈答歌は名高い、歌は新古今集に九十餘首、新勅撰集に二十七首採られ、その他の撰集にも散見する。又彼が家集を拾玉集(七卷)と云つて當期「六家集」の一に入り、續國六六一―一八四にもあつて質量共に優れた集である「後鳥羽院御口傳」には彼の歌態を評して大僧正、たけさまは西行がふりなり。すぐれたる歌、

いづれの上手にも劣らず、むねとめづらしきさまを、このまれき。まことに、そのふりおほく、人の口に、ある歌多かりと仰せられた。

又當時の政治道徳論とも謂ふべき愚管抄、古今の歌語の辭書とも謂ふべき「色葉和難抄」などの著者にも擬せられてゐる(但しこれは確説とまではゆかぬ)彼又今様で「四季」を歌つたものがあつて後世永く愛誦せられた。

春の彌生のあけぼのに よもの山邊を見渡せば  
花ざかりかも白雲の か、らぬ峯こそなかりけれ

花桶も匂ふなり 軒のあやめもかゝるなり  
夕暮さまのさみだれに 山ほと、ぎす名のるなり

秋の始めになりぬれば ことしも半ばは過ぎにけり  
我世ふけゆく月かげの 傾く見るこそあはれなれ

冬のよさむの朝ぼらけ 契りし山路は雪深し  
心のおとはつかれども 思ひやるこそあはれなれ

(尙「拾玉集」を見よ)

しづがだけのしちほんやり賤嶽の七本槍

資料、殘太平記一〇ノ一五・史籍 渡邊勘兵衛記三・武林名譽録一ノ二・集覽 武邊叢書二一〇・翁草三ノ一四九・和漢名敷四五・和漢三才圖會七一ノ二ノ二二・武邊咄聞書二ノ二八・史一三ノ一二四賤嶽合戦配・同一二五志津ヶ嶽合戦小須賀九兵工話  
廣文庫第九册四〇二―四〇四  
野村書店 太閤記賤ヶ嶽七本槍  
伯知氏 柴田 羽柴 賤ヶ嶽合戦 今古堂

じつきんせう 十訓抄 三卷

可レ施恩惠事、可レ離驕慢事など十種の徳目を章に立て、各章の始めに抽象的總論をあげ、次に具體的に今古の例話をあげてある。今昔物語の系統を引き古今著聞に影響した教訓文學とも、雜纂とも謂ふべきもの。著者は

- 一、橘成季 著聞集と文體の似てゐる所から
  - 二、藤原爲長 紀正徹の清巖隨話・安齋隨筆二の卷・菊池武保・前賢故實・狩谷本の奥書
  - 三、六波羅二蒔左衛門入道 妙覺寺本書・屋代弘賢・藤岡繼平博士
- の諸説あり。要するに未詳。卷數は二册本三册本、五、

十、十二册の各册本があるが三卷本であつたことは序文にてらしても確かである。年代は序文によつて建長四年(一九一二)の作であることがわかる。諸本中

- (一)寫本には
  - 一、妙覺寺本
  - 二、大學國語調査所所藏の古寫本
  - 三、故芳賀矢一博士所藏望雲子十訓抄
  - 四、和學講談所の片假名本
  - 五、前田家古寫本
  - 六、榊原家藏本
  - 七、村田了阿の一枝堂抄録第十中の十訓抄々録一册
  - 八、屋代本(弘賢の校考せるもの)
  - 九、狩谷本(望之が家藏の書を以て校合したもの)
- (二)版本には
  - 一、古事類苑編纂部所藏の古版本
  - 二、元祿版
  - 三、享保六年辛丑攝陽書堂磯野野藏版本
  - 四、明治廿六年十二月金澤の高橋富兄氏が前田家の藏本によつて校訂した十訓抄校本二卷
  - 五、明治廿七年六月鈴木弘恭氏の校正十訓抄上下二卷

- 六、井澤長秀校訂本
- 七、日文第廿二編
- 八、國大、一五、六四—八四三

等がある（石橋尚寶氏十訓抄詳解附録の藏岡繼平氏十訓抄考）

**しづこ** 油谷倭文子 二三九三—二四一二、享保一八一寶曆二、二十歳

縣門三才女の一人で、江戸の京橋弓町の豪商伊勢屋平右門のいつき娘で、眞淵もその才を愛して我子の如くいとほしんで居たし、行儀見習の爲めに尾張侯の夫人に仕へさせられたが不幸にして夭折した。眞淵が「父のみの父にあらず云々」の名篇の長歌はその時の嗟である。家集を「文布」と云ひ、中には

伊香保の道ゆきぶり……（紀行）  
ゆきかひ……（消息）  
散りのこり……（歌集）  
草の露……（歌文）

が容れてある。

佐保姫の霞の衣春をへて裁ち縫ふわざも宵えまさらなむ  
雪ふかき谷のふるすの露はまだ春としも知らず

やあるらむ

袖の上に覺えずおつる涙にもすゞるに月は宿りぬるかな

**しつたん** 悉曇  
梵語のことをも梵字のことをもいふ。

**じつびやくみん** 十百韻  
とつびやくみん「十百韻」を見よ。

**しつようこじ** 漆桶居士  
すゐく「瑞九」を見よ。

**じつろくもの** 實録物

徳川初期に於ける傍流の小説とも謂ふべく、歴史上の事實を興味本位的に記録したもの、いはゞ王朝鎌倉期の雑史の近世的なものである。

實録物はその頭を太平記盛衰記に接し、その尾を讀本に接してゐる（讀本は實録物と八文字合本との拆衷といつても可い）大久保武藤鑑などが早い作で、軍記や御家騒動や怪談異聞等を取材してゐる。繪本大開記は殊に廣くよまれたが幕府が禁令を出してからは發賣を止めた。これのみならず關ヶ原合戦以後の事件を取扱つた實録物は板行を止められたので唯寫本を貸本として一般の需に應じて居つた。

古點、後の仙覺の新點に對して次點といふ（萬葉集を見よ）

**しなののみや** 信濃の宮  
むれながしんわう「宗良親王」を見よ。

**しばしそら** 司馬芝史  
とくざう「近松徳三」を見よ。

**しはんけ** 師範家  
歌道を世襲しその代々の斯道の師範として仰がれ、朝廷の和歌のことに與つた家といふ。平安朝の末に藤原俊成が一代の師匠として仰がれ、朝廷からは播磨細川庄近江小野庄を所領として賜はつた。俊成の子定家孫爲家、何れも歌才父祖を辱めず、爲家の三子から三家に分れその中の冷泉爲相の後が爲尹の子爲之持爲に至つて上下に分れた。又この家系の外に駿鞠の家であつ

爲通—爲定—爲遠—爲衡  
爲藤—爲明  
爲冬—爲重  
二條家（御子左家）爲氏—爲世  
京極家爲教—爲兼  
爲成  
冷泉家爲相—爲秀



**して** 師手（仕手）

謡曲、狂言の主人公を云ふ。一番の中、始終一人一體なる。シテ（千手三井寺小袖曹我など）申入して裝束を替へ二體と現する。シテ（高砂田村紅葉狩など）前後別人をシテとするもの（鶴飼・藤戸・船辨慶など）とあつて後二者の場合は「前シテ、後シテ」と云つて區別する。能でシテを勤めるものは第一位の役者で大抵五座の家元が之に扮した。その演技上の心得については「花傳書」にくはしく出てゐる。

**じていき** 耳底記 三卷

烏丸光廣が、慶長三年八月から同七年七月にかけて細川幽齋について歌道について質疑した記録をいふ。

**してうだいなごん** 四條大納言

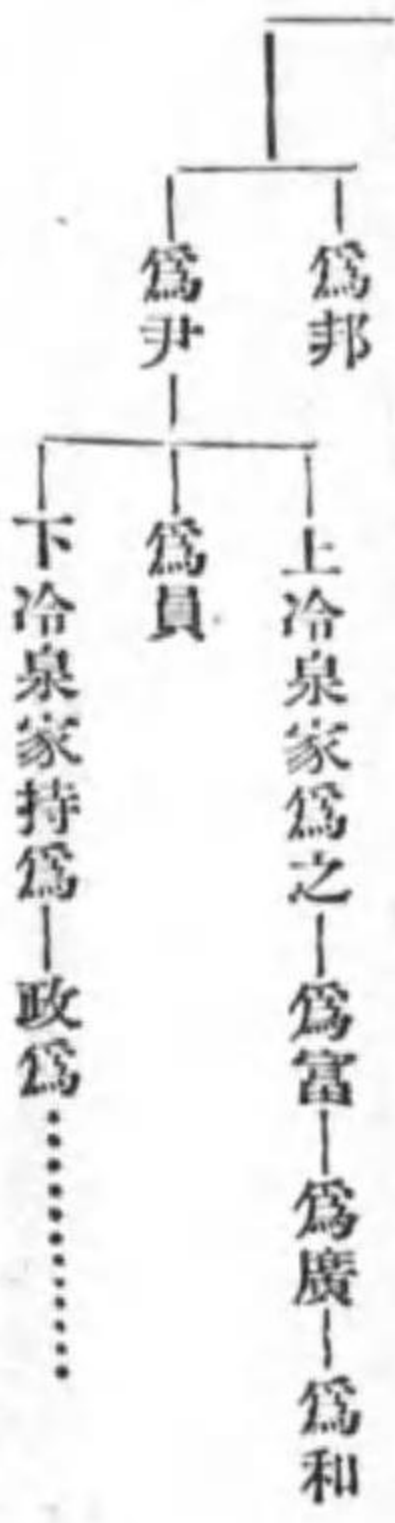
きんたう「藤原公任」を見よ。

**してつれ** 師手つれ

又單に「ツレ」ともいふこともある能に於て主人公「シテ」を助ける助主人公をいふ。例「八島」の漁翁の僕「住吉詣」の侍女二人。

**じてん** 次點

王朝期藤原通長・大江佐國・藤原孝言・大江匡房・源俊賴藤原基俊等が萬葉集の點を入れたものを以前の源順の



た飛鳥井家も和歌を以て仕へるやうになつた(飛鳥井家を見よ)

**しふぎよくしふ 拾玉集 七卷**

六家集の一、鎌倉初期慈鎮の家集で「拾玉集」の題名は、この草稿の出来た時、貞和二年五月廿三日、尊圓親王の奥書に

藻蘆草尙書添へて和歌の浦に残れる玉も拾ひつくしつ

とある。それから来たものであらう。同奥書の始めに「和尙御味類聚事」とあつて始めは定まれる題名のなかつたものらしい。「たけさまは西行がふりなり云々」と後鳥院御口傳に評せられたのは慈鎮が歌ふりに對する御批評で、又この集に對する御批評と觀ることも出来る。

尙左の諸昧がこの集の代表的なものと謂はれてゐる。  
門前垂柳

わがかどをたづねても見よ春のくるしるしの杉は青柳の糸  
時しもあれこゝろをすますたそがれになのりて  
すぐるほととぎす哉

尺 数

さても／＼のこるひじりのうれしきはわしの御山にいづる月影

衆寶蓮華

わしの山あまたはちすのひらけしをおどるきながら知人ぞなき (續國六六一一八四)

(別に異本拾玉集寫本二卷、歌の数は少いが本集にない今様歌などが入つて居ると云ふ(神谷保朗氏帝國歌學史二〇四))

又續國歌大觀に採つたものの奥書には文祿第曆林林鐘初二丹山隱士玄旨の名で竹内門跡御本七冊を借覽し不審の點が少くなかつたので更に青門御本を借覽して對校したもので最も證本とすべきものだ(とある)

(尙「慈鎮」の項参照)

**しふぎわしよ 集義和書 十六卷 五册**

熊澤蕃山の著、全篇問答體の國文を以て儒學を論じ、著者が經世の抱負を窺ふべきもの、同門の友西川季格は

之の批評を書いて「集義和書顯非」二卷として公にした。

**しふぐわいかせん 集外歌仙 一卷**

後水尾院が寛文五年(二三二五)の御自撰で從來の三十歌仙以外近代の歌仙三十六人の味を御集めになつたもので、狩野連長勅を拜して畫像を畫き、咏歌は御宸筆を下されたといふ。歌仙は常縁・國豊・淨通尼・宗長・宗碩・永閑・正徹・正廣・兼載・道灌・長慶・宗養・政宗・兼與・玄陳・昌俊・尙證・長嘯・宗祇・心敬・基佐・宵柏・親當・冬康・紹巴・宗牧・幽齋・心前・元就・氏康・晴信・氏政・氏直・昌叱・政一。

**じふさんだいしふ 十三代集**

勅撰和歌集廿一種の中八代集以後新勅撰より新續古今までの十三集をいふ。「廿一代集」を見よ。

**じふさんや 十三夜 三回**

樋口一葉、二十八年九月作の小説で、「貧乏士族齋藤主計の娘お關、原田といふ高等官に嫁ぎ一男をあげ仕合者よと兩親に悦べれたが、夫は氣むづかしてやで二口目には「教育がない」として大小言、出て行けがしの不機嫌にお關は十三夜の宵かけてこつそり實家に歸り斯くと打ち明けて離縁してほしいといふの

を、父は因果を言ひ含め「そんなことをしてはこの子が片親育ちになる。心配なことがあれば打あけて共に泣き大いに泣かうではないか、今別れたとて母子の情まできれいに水に流せるわけのものではない」といひきかすと、彼女もなる程人情はさうしたものわたし一人が辛抱すれば三方四方圓滿になさまるところと思案をし直し「では快く思ひ止まりませう」とてそこ／＼に暇をつけての歸るさ、辻車夫の勧めに乗つて歸り、賃を拂うて別れる間際どこやら覺えのある顔と思ひ出だせば、お、それよ高坂録之助とて筒井筒振分髪の前十二の年から十七まで互に思ひ思はれたその初戀の録之助「お關さまか」「録さまか」「これはお久し振りで」「イヤどうも面目次第もござりませぬ」と二人は暫し昔にかへつてしみ／＼と道すがらの昔話、辻の別れ處で女は若干の紙幣を紙に捻つて男にとらせ、禮を述べて別れをつける。

「其人は東へ此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力なきさうの塗下駄の音、村田の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し」

と、いふので、女性の哀愁、苦勞人の父の情味ある教訓、曾愛の男女が今昔の感懐、皆自然になだらかに描か

れて居る。從來の家庭小説と落想は相似て而かも深刻味と自然味とは遙かに優つて居る。最後の止めなども實に手に入つた云ひまはしである（一般には彼女の作品中濁江たけくらべに比して稍落ちるといはれてゐるが、余は決して、かの二作に劣るやうなことはないと思ふ）（一葉全集下巻四〇一―四二五）（名家傑作集八 春陽堂）

**じふしちかてうけんぼう** 十七箇條憲法

推古天皇の十二年（一二六四）聖德太子の御作りになつたもので、内容は儒教を主にし神佛各教をも融合した一種の訓諭である。我邦最古の漢文・法文として國文學史や國史の上で重要視されて居る。

**じふしゑん** 塚原澁柿園（蓼州） 嘉永元―

三、一―  
名は靖、舊幕士塚原市之進の男、福地櫻痴の指導を受け、歴史小説で名を爲した。北條早雲・山中源左衛門・大石良雄・淀殿・木村長門守その他澤山作つた。外に澁柿叢書にといふ全篇もある。

**しづつ** 大窪詩佛 二四二七―二四九七、明和

四―天保八、二、一一、七十一歳  
名は行、字は天民柳太郎と稱す。號は詩佛の外に瘦梅詩

聖堂などと云ふ。常陸の人、江戸に出て漢詩を以て一家を爲した。性洒落にして奇行に富み書畫にも堪能であつた。山本北山に儒を學び、頼山陽・谷文晁とも親交あり、詩名海内に喧傳し諸國詩行脚で至るところ歡待された。その著に詩聖堂詩集・詩聖堂詩話などがある。

東叡山觀花

夢中昨夜調<sub>三</sub>虛皇 玉殿瓊樓月似<sub>レ</sub>霜

今日來登吉祥閣 花明三十六僧房

**しふゐぐさう** 拾遺愚草 三卷

藤原定家の家集、拾遺は侍従の唐名で、この集も建曆中定家の侍従時代に名づけたものか、六家集の一に數へられ、六家集の名で公刊流布してゐるが、尙續國二二八―三〇三にもある一例をあげると

霞

だづれきて秋見し山のおもかげにあはれたちそ

ふ春がすみかな

夏の歌

庭たづみかきほもたえぬ五月雨はまきの戸口に

かはづなく也

殘 菊

おきそめていくよつもれるにほひともいさしら

菊の花の下露

文治五年十二月後京極攝政大納言の時

雪十首歌

禁庭雪

さしのぼるみはしのさくら雪ふりて春秋みつる

雲の上の月

（尙「定家」を見よ）

**しふゐぐさうゐんぐわい** 拾遺愚草員外

二卷

藤原定家の家集の追補のやうなもので「雑歌上、下」二卷に別れてゐる（續國三〇三―三二九）

**しふゐわかしふ** 拾遺和歌集 廿卷

古今・後撰と併せて三代集といふ。前二集に遺ちたるを拾ふといふ意の命題で、一千三百五十一首を集められたが、全然二集の模倣といふ程でもなく多少の新味も加はつて居る。即ち歌態の目に神樂歌（古今の大歌所歌に相當するもので神祇祭祀に關する歌を集む）雜春・雜秋・雜賀等の部類を新に加へてあるし、各味の修辭についても一首の中で對句を構へ秀句を多くし、頓呼法を用ひ、頭韻の味を多くし、漢語をとり容れた歌をも採つたやうなことや戀歌の迂餘に富んだ味を多

く採つたことなどがそれだ。

別に拾遺抄なるものがあつてこの中五百八十六首（又は四首）を十卷にしてある。そこでこの集抄の撰者も撰の年代について、色々の説があつて集の撰者は花山法皇とし（後拾遺集序、定家、増鏡）或は藤原公任とし、或は法皇が公任か何れかなりとし（拾芥抄）或は萬葉の古語を時の語にかなへてかへたり。古歌のよみ人を違へてゐる點から察してこれは法皇にも公任にもあらぬ劣り様の人のすさびであらうといひ（賀茂眞淵、新學頭書拾遺和歌集説）或は單獨の撰には誰だつて誤はあるものだから眞淵のやうな推斷は無理ださ否定し（歴代和歌勅撰考）た。塙保己一の群類本の拾遺抄奥書に今試以<sub>二</sub>集中所載作者之官位<sub>一</sub>推<sub>二</sub>其時<sub>一</sub>、此書之撰即在<sub>二</sub>長徳二年後<sub>一</sub>、數經<sub>二</sub>刊修<sub>一</sub>、且稍有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>增加<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>長保三年<sub>一</sub>乃改爲<sub>二</sub>拾遺集廿卷<sub>一</sub>也云々

と云つたこの語に基いて抄は長徳三年に出来、それを増加して長保三年に集が出来た。そしてその何れかに花山院も公任も交渉があつたと見るのが穩當であらう（國五四―八一）

**しへきだらじん** 四壁道人

さちを「伊藤左千夫」を見よ。

しへききよ 四壁居

さちか「伊藤左千夫」を見よ。

しほ 詩歩

詩句を構成する単位をいふ。英のフットに相當する。

しまちどりつきのしらなみ 島衛月白浪

河竹黙阿彌が十年十一月新富座に書下した脚本。

「悪漢明石の鳥藏は故郷 明石」へ歸つてから、頓に善心に立ちかへつたが相棒の松島千太は歸郷の途次白河まで行つてから望月輝に遺恨が出来て、江戸へ取つて返り久々に鳥藏に再會し「彼奴をせしめた上で金を引つたくらうではないか」と相談を持ちかけると鳥藏は諄諄とその不正を諭し、その熱誠に動かされて仙太もとうとう改心するといふ筋で、作者は「これを打切にして白浪物は作らない」と聲明したが、意外の好評を博したし事實この脚本は彼の作風をよく代表して居ると謂はれる（黙阿彌全集第十二卷四〇四―四一六三四、東京堂版 明治文學名著全集四）

しみのすみかものがたり 紙魚住家物語

寫本二卷、石川雅望の作、年來の見聞中印象深かつたものを五十四項あつめ雅文に綴つたもので、半ば隨筆の性質を帯びた雑話集・強盜袴垂醫師盛之が家に入る事

くり給へかし」さぞいひける。すなほなる修行者にぞありける。

しめい 四迷

ふたばてい「長谷川二葉亭」を見よ。

しめすけ 奈河七五三助？

浪華の人、奈河龜助の門に入つて狂言作者となる。但し純粹創作としては、唯「會稽多賀譽」一種だけだ。

しもれいせいけ 下冷泉家

しはんけ「師範家」を見よ。

じやう 新島襄

天保一四、四、一四―二三、一、二三、四十七歳

京都に同志社を創立し、高潔なる人格と使徒ボウロのやうな熱心さを以て基督教を説いた。その宗教史上教育史上の功績は實に偉大なるものがあるが、文學に於ても聖書の研究に關聯して、西歐文藝の趣味を普及した一點は没却すべからざる功である。

しやうあん 南淵請安？

上代の學者、推古天皇の十六年（一二六八）に選ばれて留學生となり、高向玄理等と共に隋に留學、歸來一世の學者として尊ばれ、中大兄皇子も中臣鎌足もその教を受けた。後に天智天皇の勅によつて近江朝廷の律令

菅原孝標の隣なるげすの女の事、通俊卿の家の女童の事など、享和二年（二四六二）大村詔の序がある。文體は同じ著者の「都のてふり」同様達意の中古文とも謂ふべきもの、左に一例をあげておく。

すなほなる修行者

修業者國々をめぐりありきて津の國なる山路にかゝりけるに酒うる軒のはしらに人をくゝりて置きたり、ぬす人をさらへてころさんとするにや、出家の身のつれなく見すぐすべうもあらず、たすけて見ばやまおもひて酒うる家に入りて仔細をとへばあるじ「あのやつは旅人にて侍り、今ほごわが家の酒をかひのみて味そこれて飽けありといひ侍り、我家いかですけあるものをうらんさるあらぬことをいひて人にもふれしらすべきものと思ひてさらへくゝり置きて侍り」といふ。修業者「うりものをわるしといへるにはらだたせたまへること道理あり、されど太じき罪にもあらざれば今は老法師にまげてゆるし給はなん。さてそのさけいかなる味かして侍りし、われこゝろみん」といへば、あるじまがりに汲みて出すを修行者とりてひとくち飲みけるが、目もまゆもひとつにしどめて、まがりをうちすてみづからうしろさまに手をまはして「いざわれをもく

を撰んだが今傳はらない。

しやうい 田代松意？

近世初期の俳人、江戸の人、早く西山宗因の談林の俳風を悦び、遂に延暦三年宗因の東下を乞ひ、以てこの派の普及に努めた。

花遊し能因があらば四方の山

鼻息の嵐も白し今朝の冬

しやういち 外山正一（山）

明治三三、三、八、五十三歳

静岡藩士外山忠兵衛（拙翁）の男、始め武道に熱心したが、時勢に鑑みて洋學を修め、二回まで歐米に視察留學を命ぜられ、種々の官歴の後大學總長となり三十二年四月伊藤内閣成立と共に文部大臣に任ぜられた。その明治文化史上の功績は哲學・社會學・進化主義の普及にありその明治文學史上の業績は井上・矢田部・上田の諸大家と共に新體詩を創めたこと、ローマ字採用論を唱へて「漢字破」を著したこと、親ら「抜刀隊」「旅順口の英雄可兒大尉」などを作つたこと「忘れかたみ」などを作つて朗讀文の發達を刺戟したこと等である（山存稿大木二冊 丸善發行）

じやうらん 薩摩淨雲？

實名小平太、淨瑠璃中興の名流で、又江戸淨瑠璃の開祖である。正保・慶安の頃、江戸で多くの弟子を養成した。江戸淨瑠璃は、その門下の四天王丹後太夫・丹波太夫・長門太夫・源太夫や、その子薩摩太夫によつて流布し煉成せられた。その樂風は今傳はらないが恐らく戦國の餘沫を受けて剛強武骨で、爲めに武人本位の江戸趣味に適つたものであらうと謂はれてゐる。

**しやうえら** 松居松葉 (駿河町人、松翁)

明治三、二一

仙臺の人、名は眞玄、國民英學會を出た外大した學歴もないのに劇文學の研究に熱心して造詣頗る深く、二回迄西歐劇壇を視察し、翻譯劇・戯案劇・創作劇は非常に多く、文藝協會その他の劇運動にも参加してゐる。翻譯にはホフマンスタールのエレクトラ、戯案にはトルストイのアンナカレニナ、創作には燈籠大臣・光悅の母・鯉船等殊に名高い。令息百太郎君も亦脚本作家として頭角をあらははかけて居る(氏は又速筆で有名で一時萬朝報の記者をしてゐた頃一段を書くに二十分で作つてのけたさいふ)

**しやうおう** 松翁

しやうえら「松居松葉」を見よ。

**しやうおう** 松翁?

南朝後村上天皇の御代の頃の人で、南朝に仕へ吉房侍従と稱せられたが傳記は不明である。その著に吉野拾遺上下二卷(群四八六、一七、五二四―五五七)があるこの書の巻頭に後醍醐天皇のことを「先帝」と云つてゐるので後村上の朝に仕へた人だらうと云はれてゐる。

(その他この人のことは、彼の著の本文にすがれば幾分は推測される先帝崩御の後松柏の節操に因んで「松翁」と號して薙髮したことは確かだが、その俗名の吉房とは命鶴丸のことだ。否な命松丹だ、イヤ吉房ではない忠房だなど衆説區々である)

**しやうかあん** 松下庵

あきか「中村秋香」を見よ。

**しやうかうくわん** 彰考館

徳川光圀が修史事業の爲め明暦三年江戸駒込の別邸を事務所に宛て、ゐたのを更に寛文十二年(二三三二)の春小石川の藩邸に移して「彰考館」と名づけ、大日本史を始め多くの有益なる史書を輯めた。その主任を總裁といひ代々の總裁は次の通りである。佐々宗淳・安積覺・大串元善・栗山愷・酒泉弘・三宅絳明・大井貞廣・打越直正・増子淑時・立原萬・高橋廣備・藤田一正・青山延

光・會澤安・杉山忠亮・豊田亮・栗田寛

**しやうがくみん** 奨學院

在原行平の建てた王氏の學問所で、創立は淳和院と同時、代々嵯峨源氏が別當になつてゐたが、崇徳天皇の保延六年村上源氏の中院雅定がなつてからは「淳和奨學院別當」を兼ね足利・徳川の世に至るまでこの空しい肩書を名譽の稱號とした(古類、文學部二、一三二〇―一三二二)

**しやうきん** 矢田部尙令 嘉永四―明治三二

八、四十九歳

伊豆の國韮山の人、東京帝大教授理學博士でその述作は日本植物圖解・植物學初歩等であつたが、外山、山その他の諸家と共に、新體詩の創作普及に努めた「鎌倉の大佛に詣で、感あり」の一篇はその頃人口に膾炙した。

**しやうぐらき** 上宮記

聖徳太子の著、敗佚して今傳らず、其一部だけ釋日本紀に残つて居る。

**しやうぐらたいし** 上宮太子

しやうとくたいし「聖徳太子」を見よ。

**しやうぐらほふわうていせつ** 上宮法王

帝説

聖徳太子の御傳で漢文を以て記されてゐる(群六四)

**しやうさい** 三宅尙齋 二三二二―二四一〇

寛文二―元文六、八十歳

播磨明石の人、名は重固、字は實操、通稱雲八郎(後丹治と改む)。若い時京都で醫を學び、ついで山崎闇齋の門に入り、佐藤直方・淺見綱齋と共に山崎門の三傑と稱せられた。後江戸に出て阿部家に仕へ忠勤十年先主薨じて、後主放縱彼れ屢々直諫して怒りに觸れ忍城に幽閉せられたが、その幽居中狼彙録三卷を血書して赦され、爾來東江の間を往來し終に江戸で亡くなつた。衆生哀悼慈母に訣るゝが如き様であつたといふ。祭祀來格説・白雀録・爲賢説・慎術説・默識録・六經四書筆記・洪範全書・月續尙齋文章等の著がある。

**しやうさう** 内藤丈草 二三二三―二三六四

寛文三―寶永元、二二、四十二歳

元、尾張犬山の藩士であつたが、性情淡寂欲にして而かも義理堅く、二十五歳の秋指を切つて誓ひを立て、武門を捨て家督を義弟(繼母の實子)に譲り熊野山先聖寺の玉尙和尙に參禪し、後蕉門に入つて十哲の一人と推稱せられた。師翁歿後その墓所なる義仲寺のほこ



りに庵を占めて生涯を募守して句作した。その句亦平淡にして清雅、禪俳兩味に相通するものあり。その句吟の態度も感ありて吟じ、人ありて相語るさやうに事物に聊か停怖せず即興即句のものが多かつた。

鶯や茶の木畑の朝月夜

我事と泥鰌のにげる根芹かな

取りつかぬ力で浮ぶ蛙かな

時鳥啼くや湖水のさゝ濁り

水底の岩に落つゝ木の葉かな

居風呂の下や案山子の身の終

しやうざう 並木正三 二三九〇—二四三三

享保一五—安永二、二、一七、四十四歳

通稱和泉屋正三、幼より劇を好み、長じて並木宗輔について淨瑠璃を作ることを學び、遂に戯曲作家として名聲をあげた。その特色は古作の脚色を現代に燒直すことこの巧みな點にあつて、云はば一種の續案劇である。宿無團七時雨の傘・霧太郎天狗醜・傾城の羽衣・桑名屋清藏入舟話・日本第一和布刈神事・三十石船の始等皆好評を博した。

彼は又舞臺藝術の才をも有し、大臣柱の廢止、廻り道具・せり出し・三段返しなど皆その意匠に成り後世永

く實演の上に踏襲された。

しやうざう 林屋正藏 二四四一—二五〇二

天明元—天保一五、六十二歳

江戸の落語家として、殊に怪談の名人として聞えて居たが、才氣の勝つた人で作字を巧にし狂歌を詠み、義太夫を能くし、又戯作をもよくし、その草双紙、先開三升の世界・帶屋お蝶三世談・敵討鶉權兵衛・怪談春告鳥など何れも江湖の喝采を博した。彼は中頃二世鹿野武左衛門と稱し、天保六年正月薨逝して林泉と號した。彼は臨終に遺言して死後葬式の最中仕掛花火の活劇を見せ怪談家らしい戯れをして死んだといふ。

じやうざん 湯淺常山 二三六八—二四四一

寶永五—天明元、七十四歳

名は元禎、字は文祥、通稱を新兵衛と云ひ備前岡山の藩士。江戸に出て服部南廓に學び、宏證博引孜々として倦まず、親に事ふること至孝身を持つること嚴正、數藩政の要務に執掌して濟世救民の功少なからず。後貶黜に遇ひ閑居に閉ぢて、讀書專念傍ら兵法を修めた。彼は又文をよくし、その著幼學指掌・文會雜記・常山樓文集・常山紀談皆世に行はれてゐる。

しやうざん 鈴木正三 二二三九—二三一五

天正七—明暦元、六、二五、七十七歳

近世、小説史の第一頁に書かれる人で、假名草紙作者である。併し斯う呼ぶのは、彼の本意でないかも知れぬ。と云ふのは彼はもと武家の出で而かも熱心な佛教の求道者で、謂はゞその社會的觀照と佛教的體驗とを文學的に具現しようといふ動機の述作と云ふがふさはしい。

彼れ、姓は穗積、通稱は九太夫、嘗て三河國石平山に錫を留めたゆかりを以て石平道人と號してゐた。その先祖は紀州熊野の人であつたが、故あつて三河に轉住し松平氏の麾下について正三に至るまで累代武門の面目を傷つけず、殊に正三は毅然たる一介の武辨で關ヶ原や大阪兩度の陣では軍功拔群であつたから、そのまゝ幕府に奉仕すれば結構な身分で暮らせるものを、彼は早くから人世の無情を觀じ、出家遁世の志念を堅くした。で普通では許可を得ることがむづかしいことを見越して、先づ薙髮して僧形となり「九太夫此節亂心して斯の始末」と申し立てるさ執政が驚いてその旨を將軍に申し上げた處、臺徳公秀忠は深く之を惜み「察する所道心ではなからう、こりや隠居ぢや」と云つて家祿は取上げなかつた。

正三これより諸國遍歴の途に上り、粗衣粗食難行苦行約三十年、人漸くその道心の堅固なるに歸依し、諸國の武士、大名遙々來つて教を乞ひ、轉迷開悟の説を得るもの非常な數に上つた。その座右日々誦讀するものは唯金剛經一卷と過去帳一折のみだが、求道數十年の試煉は眞に眼光の紙背に徹するものがあつて、人あり道をとへば應答流るゝがごとく、實に思索と體驗との深域に達せるかの趣があつた。晩年江戸に出てて淺草・神田と住家を變へ、神田鈴木町の弟（兵尉左衛門）の宅へ移つた時、その側に方二間の小室があるのを見て能き死所を得たりとしてこの一所に定住し、遂にこの室に逝いた。淺草天徳院境内の北岳「石平和尙」と刻まれた一基の碑それがこの正三の墓標である。彼が佛教觀は武士道と融會した積極的實行的開悟であつて、大乘小乗の經論律を讀み盡し極め盡さうと云つた風の修業はあまり悦ばない。その常套語に云ふ。「洒落佛法拔殺坐禪は何の用があらん。眼を居る齒を嚼み殺し果し眼になりて群がる敵の鎗先に突立たる覺悟を以て修業せよ」と。然るに彼の作品の基調をなすものは、彼の談義とは著しく異なつてゐて、消極的厭世的なもので諸作品を

通ずる落想は要するに  
 「六賊煩惱を斷ちて三界を出離せよ。現世は穢土有相は不淨と看做し、貪瞋痴の三毒を除き一日一刻も早く往生成佛を遂げようと心掛けよ。」  
 と云ふにある。思ふに彼がそのかみ攻城野戦の巷に立つた時、その身に實行するところは前言の思想と相通じたもので、而かも一旦戦營に歸つてのさよふけがたの静寂裡に、底深く淋しんだのはこの後の心持であつたもので、この前後の二面觀は何れも眞實であり何れも正三と云ふ一個の人物によつて統一されてゐたものであらう。

彼が著作中七部の書といふのは

- 承應四年 盲安杖
  - 明暦二年 菴草分 二冊
  - 寛文元年 因果物語 三冊
  - 同 二年 破吉利支丹
  - 同 四年 二人比丘尼 二冊
  - ? 念佛双紙 二冊
  - ? 萬民徳用
- で、この中小説らしいものは二人比丘尼と因果物語とである。二人比丘尼は下野國の住人須田彌兵衛廿五歳

妻が十七歳といふ若い身空で、夫が戦死の跡を弔ひとある庵に宿をみると、庵の主なる若尼にも一篇の哀史があつて、盡きせぬ身の上語りに互に打解け淹留しばらくの内に尼は病死し、里人の助けに野邊送りをするませ、浮世は夢とあきらめてその身もさる奥山の奥深く道心堅固の老尼ありと聞いて訪れて行つて戒を受け清い生涯を終へて美しい大往生を遂げた云ふ。これは正三が其の母を悲しんで作つたものと謂ふが、大體の構想は「一休骸骨」と「水鏡二人比丘尼」を結合したものである。

- 「因果物語」は妄執の容易に解脱すべからざることの通俗説法で、一々時處を示して小話を集めてある（但しこの體は本當にあつたことだと觀る人と、これは作意から觀て小説を事實らしく思はせる手法に過ぎぬといふ人とあるが作者が筆を執る動機から推せば前説の視方が正しい）
- その他の諸作は次の通り
- 承應四年前 三寶論
  - 萬治三年 驢鞍橋 六冊
  - 寛文九年 草庵雜誌 三冊
  - ? でうす問答

自己安心

しやうさん 三宅嘯山?

天明寛政頃の俳人で、その著作俳諧古選は古人の名句を選集したもので、今も行はれてゐる（漢文の序をつけて俳諧をば隨し、歌に對する歌學のやうに、俳諧に對する俳諧學といつた風の立論である）その句には次のやうなのがあるが要するに俳論家で俳諧師（又は俳句師）ではなかつた。

- 繖の笑つて曰く吾老矣
- 月近し夜寒に馴れぬ舟の中
- 夜も半眞上の月や冬木立
- 口切や羽柴明智の膝頭
- ぬるい火に足を並べて次句かな

じやうさんきだん 常山紀談 十五卷

湯淺常山（元祿）元文四年（二二九九）の作、上杉・織田・徳川その他同時代の武家に關する逸話をあげ、傳説や事實の異同など四百七十項を記し、和漢混淆文を以て平明に叙述したもの。抄本は今中等學校教科書などに用ひられてゐる（尙「常山」を見よ）（續國民文庫五）

しやうさんみものがたり 正三位物語

いはしみづものがたり「石清水物語」を見よ。

しやうしつ 里村昌叱

天文八―慶長八、六十五歳  
 京都の人、室町末期の連歌師で豊臣秀吉に愛せられた。

しやうじやう 茅野蕭々 明治一六、三一

信州上諏訪町の人東大獨文科を卒業し三高教授慶大教授などに就いたが、詩的天分の豊かな人で、新詩社鐵幹の門下に於ける一明星で、今も明星や詩聖に每號寄稿し秀味も少くない。學者としての氏は獨逸戯曲集など翻譯物に執筆し、尙評論家としては思想・小説・女性・婦人公論等に稿を寄せて、自我と原始への復歸・デ・エメルの二人・シュニツツレルについて・ゲヨエテのパンドラとヘレナ・最近獨逸文學に於ける戀愛と結婚・永遠の愛の流れ等を發表した。

しやうじんぎよるものがたり 精進魚類物語

「魚鳥平家」を見よ。

しやうたく 里村昌琢 二二三六―二二九六

延寶四―寛永一三、六十一歳  
 昌叱の子で徳川初期連歌を以て聞えた。

しやうちきしやうだいふ 正直正太夫

りよくう「齋藤縁雨」を見よ。

### しやうちやらし 象徴詩

詩人の想観と同一の若くは類似した想観を惹起せしむる爲めに、或る官能描寫の技巧を借りて表現せられた詩をいふ(「象徴」といふに色々の語義があるが詩にいふ象徴とは抽象的な心象を描くに具體的物事を借りることと様に解して大差はなからう。例へばメーターリクが採つた手法のやうに「死」といふものについての作者の想観を相手の讀者に起させようといふので「大木が仆れた」といふやうなもの)

象徴の用は之が助を籍りて詩人の想観に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて必しも同一概念を與へんと勉むるにあらず。されば靜に象徴詩を味ふものは自己の感興に感じて詩人も未だ説き及ばざる言語道斷の妙法を觀賞し得べし。故に一篇の詩に對する解釋は人各或は見を異にすべく、要は只類似心狀を喚起するに在り……例へば本書一五九頁「鷺の歌」を誦するに當て、讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く凡俗の大衆は眼低して法利賽の徒と共に虚偽の生を營みて醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財やはた樂慾を漁らむとすなり、唯纏綿たる詩想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天

に飛び影は落ちて骨蓬の白く清らにも漂ふ。水の面に映りぬ之を捉へむとしてえせず此の世のものならざればなりと……(上田敏海潮音序一―一三)

早く帝國文學や文學界によりて佛の象徴詩が紹介せられ(廿九年にはル・コント・ド・リル、ポール・ヴェルレーヌ、シヤル・ル・ボードレール等の詩が譯せられ、三十一年頃には高踏派とか象徴派とか自由詩派とかの名稱まで用ひられるやうになつた)たが眞に我國詩壇の主派となつたのは三十八年に上田敏の海潮音(佛の象徴詩の譯)が出、同年蒲原有明の春鳥集が出てからのことである(爾後薄田泣菫の白羊宮のやうに他の派の詩も多分にこの詩風を取り容れるやうになつた)

### しやうちやうげき 象徴劇

或る象徴的手法によつて情調氣分を舞臺面に表現する劇でその中の幽玄なものを神秘劇などもいふ。

例 メーターリクの闖入者・群盲・室内・モンナウン・ナ・青い鳥。秋田雨雀の「幻影と夜曲」中の樵三の死・紀念會の前夜・第一の曉・森林と犠牲・市のマホメット等。

### しやうちやうしゆぎ 象徴主義

「象徴詩」を見よ。

### しやうてつ

稲葉正徹 二〇四一―二一一九

弘和元―長祿二、七十九歳

王朝の曾丹、近古の正徹、近世の景樹は何れもその時に於ける新派創唱の歌人で、清新澗冽の趣掬すべきものがある。中にも正徹は全力的に歌道に精進した人で、家集の咏歌一萬餘首廿歳以後の咏草だけでも二十餘帖二萬六七千首に達し、後世に残した歌の數から謂つては第一と稱せられてゐる。

正徹は東福寺佛照派の下僧となりて書記をつとめ、栗棘菴に居たので世に徹書記と云ふ。

當時の僧侶は一帶に漢詩文の修學に熱心してゐたのに彼れ一人圖書と和歌とに腐心し、今川了俊や權大納言藤原爲尹に師事して詠歌を習ひ、遂に當時斯壇の二大中心たる二條派にもあらず、冷泉派にもあらず第三派的歌態を吟出した度々の火災に咏草を焼きあらぬ濡れ衣に衆人の誤解を受け(當時新續古今集が撰まれたが彼の歌は一首も採られなかつた)たにも拘らず、孜孜として斯道に勵み、遂に寶徳年十一月右京大夫家から「今後歌道の師匠たるべきよし申され再三辭退の後、已むなく領狀同月十二日一座の興業を催すに至つた。その著には、家集の草根集十五卷、紀行になぐさめ草

隨筆に清巖茶話、歌話に徹書記物語(群二九七、一〇八四二―八五八)序には寄花述懐和歌序があり、歌書には尙、法のむしろ・正徹十首(續群三八〇、一四ノ下五一九―五六〇)正徹百首(續群三九〇、一四ノ下、九〇四―九一二)草根集拔書などがある。

中にも草根集は應永二十五年秋七月十八日、正徹三十八歳の著作で、始め松月庵詠草と謂つたのを後に一條兼良が序文を作る時改題したもので、彼が歌人として辿つた道程を辿るには必讀の書である。

彼は又古典の造詣もあつて萬葉集一部の講義を大教院から聞いたことがあつたが、惜しいかなその聽書は、今熊野時代に焼いてしまつた。けれども彼は萬葉について自信あるらしく「仙覺の新註と阿彌陀佛の詞林採葉集とこの聽書の三部とへあれば萬葉は裕に讀破される」と言ひ切つて居つた。彼が尾張の國へ下つた時には黒田某院で源氏物語の註釋書のことを語り、一席の講義をも聽かせ「これは和歌連歌の上に必讀の書だ」と迄言ひ添へた。寶徳元年八月十五日からは將軍家の召によつて源氏物語を進講し康正元年八月廿八日まで四年越に一わたりを終了し、その時の當座百首に浦千鳥今ぞしほひのかたばかりつたへし道のひ

かりをぞ見る  
と讀んだ。彼は文章も拙くはなかつた。草根集中、前掲尾州下りの箇處などは文としては出色のもので、少くとも東關紀行や海道記や藤川の記、都のつとなどと同列におかるべき作品だ。彼は又勅筆流の筆蹟が見事であつた。この流は

後圓融—後小松—稱光—後花園—後土御門……  
正徹—冷泉持爲—足利義視—六角堂  
と傳はつてゐる。

山のはに月をまねきて庵ふりぬいづるをまつと  
入るを、しむと

なか／＼になきたまならば故郷にかへらむものを  
今日のゆふぐれ

草の蔭昔の下にもうづもれぬ名を想ひしは昔なりけり

春といへごととそともなきあしたかなよにもつかへずよをもわたらず

さひとはね船路いくかぞわたの原人のすむ島人のなき磯

よせかれぬ山かとみえし浪もみなふれのしたこす沖つしは風

風よりもあきふな子の言のはにしらぬなみ路をまかせてぞゆく  
この花をちらしますなときふ今日磐なが姫にみき奉る

曉鶴河  
かゝり火をうのゐる岩にたきすて、あくる夜川にかへるふなびと

夏 月  
しづがやぞあくるもしらぬ夏剝のあさのながらの白き月よに

歳暮  
いくつれて春ぞと人にとひし頃まちどほなりし年ぞこひしき

眺望  
藤白のみさかのぼれば吹上のまさこにけふるわかのうら松

江雨驚飛  
むらさめのふる江をよそにさぶさぎのあさまで白きおもだかの花

じやうとうもんあん 上東門院 一六五八—一七三四、長徳四—承保元、七十七歳(別説八十

りの厚い方で父道長にまつては當の敵方とも謂ふべき道隆の一族や中宮の御遺子なども衷心なさげをかけた保護をし、あまりに自己中心的な父を悲しんで度々切諫もせられた。  
萬壽三年(一六八六)正月十九日、三十九歳にして御出家、法名清淨覺(この日時を基本にすると享年は八十七歳となる)上東門院と申した。誦經、物語佛供養と云つた風のことを行ひすまし、又詠歌に御心を遣られた。その御歌は  
後拾遺・金葉・千載・新古今・續後撰・續古今・玉葉・續後拾遺・新千載・新拾遺・新續古今等の諸集に散見し、又別に御主催の「上東門院菊合」(群二二六、八、一二一三—一二一四)十番がある。

五歳、八十六歳、八十七歳)

名は彰子、藤原道長の長女で御母は倫子(左大臣雅信の女)十二歳にして一條天皇女御として御入内(その時天皇は二十歳、中宮定子は二十四歳)後、中宮とならせられ後一條、後朱雀の兩帝をお産みになつた。所謂藤原氏の外戚政策を徹底的に實行し得たのは道長だがその根據はこの中後の御幸による。加ふるに中宮(彰子)皇后(定子)相並んで紫清兩女以下多くの才媛が輩出したのであるから當期國文學史の樞軸となつて局面を展開せられた功から謂つても特筆すべきである。皇后も才色双絶であつたが、この中宮も立派な人格者で洵に一族の繁榮の發祥としてさもあるべきこと、思はれる。その容姿は榮花物語の作者が、

「姫君の御有様さらなる事なれど御髪たけに五六寸ばかり餘らせ玉へり。御かたち聞えさせん方なくをかしげにおはします。又いさ幼かるべき程に、聊かいはけたる所なく……めでたくおはします」

と謂つてゐるのは世人が「赫やく藤壺」を申したことや、一條帝が度々御わたりになつて戯れごとなど言つて陸まじき御仲らひであつたことに徴しても強ち媚びた筆とは思はれない。その氣立も非常に優しく思ひや

しやうとくたいし 聖徳太子 一二三三—一二八二、四十九歳

用明天皇の皇子で、世に上宮太子又は麻戸皇子と申す性聰明にして深く佛教を信じ、大臣蘇我馬子と共に之が弘布を計られた。推古天皇の時、立ちて皇太子として攝政せられた。冠位の制を定められ十七箇條憲法を撰ばせられた。要するにこの太子は我邦佛教史に於てはその輸入者宣傳者として、又一般國史上に於ては日

本新文化（神道に儒佛を混融させた）の建設者として偉大なる方である（大日本佛教全書中聖徳太子傳叢書同書刊行會發行）

しやうのせつ 紫陽之説

朱子の學説をいふ。朱子はその居室を「紫陽書堂」と號した。蓋しその故郷徽州の紫陽山下の邑から來たものである。

しやうふう 正風

元祿の俳聖芭蕉が樹てた俳風で、唯一誠を元とし不易流行と「さびしかり」を之から派生せしめ、自然美に浸陶して風雅の眞髓に味到し、茶味と禪味と俳味との三昧一如とも謂ふべき境地を尙ぶといつた風である。そして連句の上では「句の附」と稱して兩句の餘韻、情趣を以て無縫天衣を仕立てるやうな附けを主張し、從來低級な通俗文學であつた。俳文學をすつと高い地位に引上げた。その弟子は十哲を始め非常に澤山ある。（佐々政一博士の説に「正風」はあの謙遜な芭蕉の命名ではなからう。始めは「蕉風」としたものを弟子のさがしらで「正風」と變へたものと想ふ）

しやうぶつ 性佛（綾小路資時）？

平曲の創始者、彼が家は、代々鄙曲を司り、彼亦朝に

仕へて正四位下に叙し右馬の頭に任ぜられ、馬術蹴鞠に堪能に殊に歌唄は父祖の血脈を傳へて最も秀でてゐたが二十五歳眼を病んで盲となり日吉山王に祈り、慈圓座主の教化を受けてゐたのを慈圓は殊に之を氣の毒がつて平家物語の詞句に六道講式の節つけして琵琶に弾くことを工夫せしめた處、時の人大層之をもてはやした。これが後世所謂平家琵琶の起源である（石上宣繼の卯花園漫録などに出てゐる）（那珂通高氏はその著洋洋社談に琵琶を合せたのは性佛ではなくてその弟子の如くであらうと云ひ、高野辰之博士もさう見るのが正しからうと同意して居られる）

しやうへいから 昌平覺

元祿三年（二三五〇）五代將軍綱吉の時、從來幕府が庇護を與へて居つた林家の學問所を上野忍ヶ岡より湯島に移して官學とし、孔子出生の郷名に因んで昌平覺と名づけ、設備を整へて學生は勿論時には士庶民に公開して一般社會教化にも裨益する所あり、十一代家齊の時大に學制を改めて純然たる官學とし朱子學のみを採ることにし學則を完備せしめた。今日では女子高等師範の敷地内に取りこめられ教育博物館となつてゐるが猶往時の盛を偲ぶに足るものがある（古類文學部二、

一一二七—一一八一昌平坂學問所・教育大辭書「昌平覺」の項）

じやうべん 淨辨？

法印豪成の子按察使法印光成、その子法印淨辨、その子慶運で淨辨と慶雲父子は當時の和歌の四天王（頓阿・兼好）と謂はれた人で、室町時代編流歌人の雄なるものである。歌を藤原爲世に學び、その家説を爲藤より授けられた。その味は續後拾遺に二首、新千載に四首、新拾遺に四首、新後撰に四首、續古今に六首等諸書に散見してゐる。

しやうほん 正本

きやくほん「脚本」に同じ。その項を見よ。

しやうむてんわう 聖武天皇 一三六一—一四一六、大寶元—天平勝寶八、五、二 五十六歳

諱は首、天璽國押開豐櫻彦尊、勝寶感神聖武皇帝と稱した。天武天皇第一の皇子で御母は藤原宮子（不比等の女）藤原安宿姫（不比等の女）を立て、皇后とせられた。此は臣下から立后せられた始めである。この時の「立后の詔」は宣命中の佳什とされて居る。天皇は非常に佛教を崇信せられ、諸國に國分僧尼寺奈良に總國分寺を設けられ、御親ら經本を手寫して諸國の寺々に御

寄附になつた。東大寺大佛の美術史上の位置や本地垂迹説の思想史上の影響の甚大であることはいふまでもない。

天皇は又御歌に長ぜさせられ、御製は萬葉集の卷八や新古今・新勅撰・續後撰・續古今・新千載・新拾遺・新後拾遺等に出て居る。東大寺造立金銅牌文（群四三五）もその御製である。

しやうらく 三好松洛 二三五六—？、元祿九

寶曆頃を活動期とした戯曲作者。浪華の人始め醫を業とし、後竹田出雲の門に入つて淨瑠璃創作の指導を受けた。一代の作五十種内外、但多くは竹田出雲・並木千柳・文耕堂・半二・冠子・小出雲・潤介等と合作である。御所櫻堀河夜討・平假名盛衰記・義經千本櫻・妹脊山婦女庭訓等は殊に名高い。

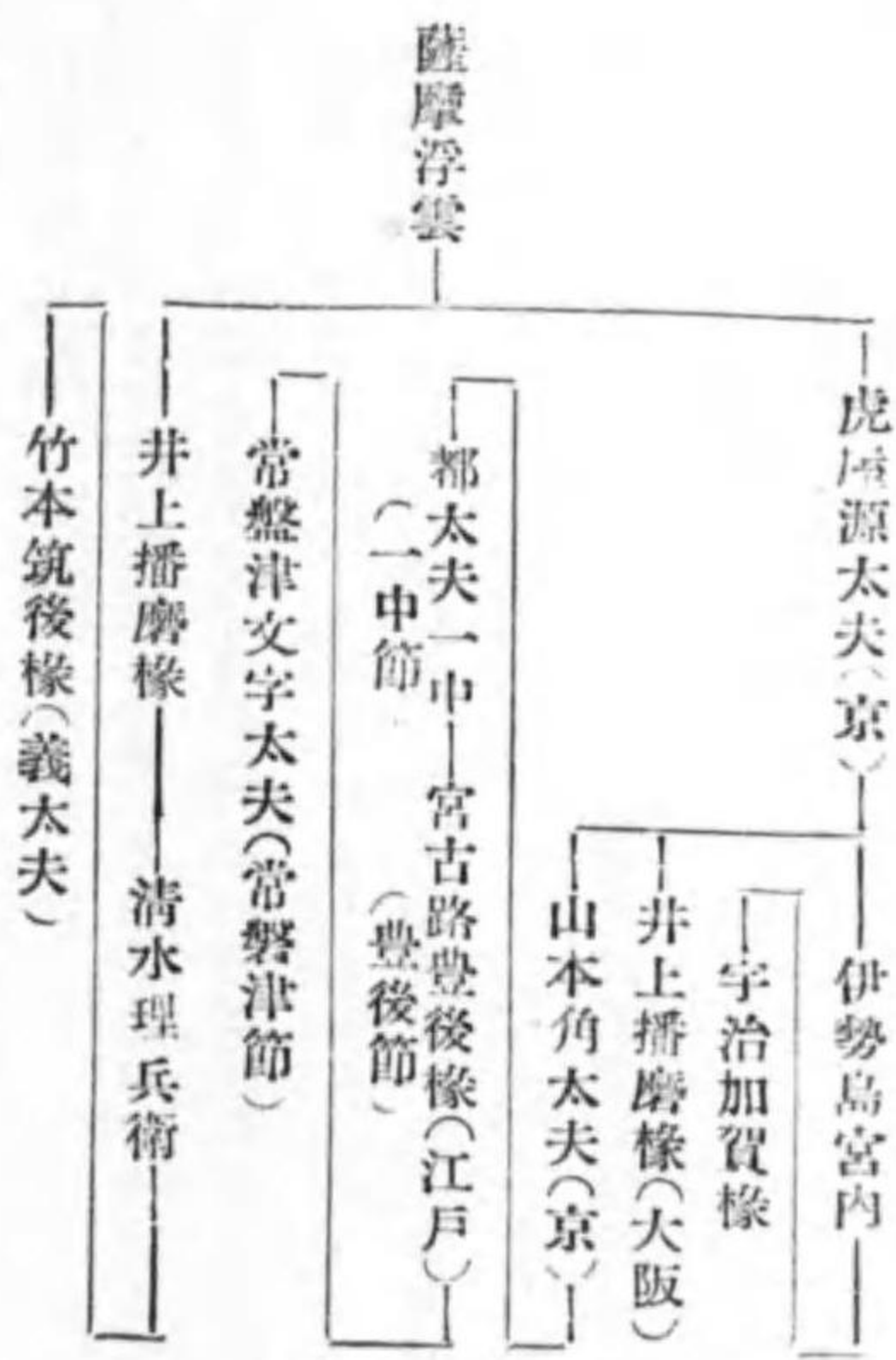
しやうりやうしふ 性靈集 十卷

弘法大師の詩文を僧眞濟が選集したもので、その中最後の三卷は承暦三年（一七三九）に「性靈集補闕抄」と題して追加したものである。

じやうるり

（一音曲としての淨瑠璃は、始め室町時代に扇をとりに

拍子として語つたものだといふ。後「浄瑠璃十二段草子」が流布するに及び始めて「浄瑠璃」なる名稱が確定した。慶長の頃から伴奏樂器として三絃を用ひるやうになつてから、音曲として一地歩を占めるやうになつた。その始祖は寛永中江戸に下つた薩摩浮雲で以下別系のやうな發展をしたが、殊に竹本義太夫が劃期的に中興して、爾來戲曲として民衆鑑賞の主要な地位を占めるやうになつた。今日單に「浄瑠璃」と云へば即ち「義太夫」と合點するほどの一派の節が盛んに行はれた。



尙常盤津節から分派して清元延壽齋の立てた一派を清

元節と云ひ、浮雲の門弟杉山丹後椽の流を汲んだ十河見河東によつて河東節が始められた。その他たとへば「奥浄瑠璃」の如く地方々々によつて色々の曲節分派があつた。尙又河東節一中節以下の浄瑠璃はその節まはしと文詞の短篇なるとによりて之を「歌浄瑠璃」と云つて他の語り浄瑠璃とも謂ふべき一般のそれと區別をする。

(二)文學としての浄瑠璃は、室町時代から徳川時代近松の出現までは謡曲まがひの短篇や荒唐無稽の脚色で、あまり大した價值がなかつた(之を古浄瑠璃といふ)が近松が出て操り劇の臺本として幾多の苦心改良を施し多くの作品を提供し(彼以後のを新浄瑠璃といふ)てから文詞は凡て戯曲的性質を帯ぶるに至り、竹田出雲・紀海音・並木宗輔・文耕堂・三好松洛・近松半二・福内鬼外・近松徳三・等幾多の名家が出て、文化文政頃までに多くの傑作が出た。齋藤月岑聲曲類纂・寺内星川浄瑠璃史・水谷不倒繪入浄瑠璃史)

**じゃうるりじふにだんさうし 浄瑠璃十二段草子(浄瑠璃物語)**

我邦に現在する浄瑠璃の中では一ばん古いもので、作者と年代とは不明であるが、従來は室町時代の末小野

通女の作といふことになつてゐる。

鞍馬の山寺に人と成つた牛若が金賣吉次と同道して奥州下りをする中途、三河矢矧の庄の長者が館に一泊、浄瑠璃光如來の申し兒たるこの家の寵姫浄瑠璃御前と契りをこめ、名残惜しい訣れをして東海道中様々の難儀、不思議の救ひ數々の目に遇つてと、無事に秀衡が館に到着する迄を十二段に綴つたもので、文體は艶麗對話も可なりが多いが後の戯曲に比べるとつと冗漫で、脚色も稚拙荒唐なところがあるが、何しろ我國最初の戯曲として注意すべき作品である。今續帝四編に入る。

(この本の作者の年代について、本居宣長の考證は殊に参考に資すべきものがあるから左に掲げておく)

**賤者考**

浄ろりといふ事信長公(秀吉公とも秀次公とも云ふ)の侍女、小野通女が矢矧の里の浄瑠璃のことを作れる長生十二段を権輿としてかく稱すと世上に傳へ來れるとも近來出でたる遺魂志料に浄ろりを信長公の侍女お通の作とする事非ならむ。天文九年守武千句に「いとごだに座頭まがひの杖突の、附、浄ろりかたれ燈のもと次、こよひはや時は牛若ふけはて、」とあり、信長公は

天文元年の生れにて此の年纔に九歳なり、又宗長日記

享祿四年の條に小座頭あるに浄ろりをうたはせ云々とある。駿河國宇都山にてかけるに此の所はやく田舎までも此の物ありしなり、此の年は信長公出世の前年なり(太閤としても天文五年の出生なれば同じことなり)

**じゃうるりものがたり 浄瑠璃物語**

「浄瑠璃十二段草子」を見よ。

**じゃうわぶんがく 情話文學**

明治の末に出た享樂主義の中の近代思想を引いてそのあとへ近松情調を置換したやうな持味のある文學をいふ。

長田幹彦の浮・零落・扇昇の話・旅役者・祇園木屋町・新京極・雛勇・糺の森・久保田萬太郎の淺草並に同氏や後藤末雄氏の描いた下町情調、吉井勇・秋江諸氏の祇園情調の作品などが之に屬する。

**しやくあ 釋阿**

しゆんぜい「藤原俊成」を見よ。

**じやくぜん 寂然**

よりなり「藤原頼業」を見よ。

**しやくてん(せきてん) 釋奠**

孔子及びその十哲を祭る祭式で、我邦では文武天皇の

大寶元年(一三六一)に始めて之を行ひ、爾後大學國學でも之を擧げ、室町時代學問暗黒の世も足利學校では正規に之を行ひ、徳川時代昌平學に至てはその設備も次第も一層整つて毎年二月と八月とに盛大に舉行した(古類文學部二、一三一五—一四五四)

**しやくにほんき** 釋日本紀 五帙 廿八卷

鎌倉時代の神道家卜部懷賢が日本書記中の言辭と史實とを詳解したもので、今日から見れば註釋としての價値は薄いが、中に古傳説・古記録の今日他書には傳はらないものを含んで文献的の價値がある。書中「大問」は圓時寺入道實經の問「攝關」とあるは一條攝政家經の問である。

**しやくりやうぜん** 釋良暹

「良暹」を見よ。

**しやくれん** 寂蓮?—一八六二、?—建仁二、

七、二〇

俗名を藤原定長と云ひ、僧俊海(俊成の弟)の子であるが、俊成が養子として引き取り、朝廷に仕へて中務少輔にまで進んだ。處が俊成には實子の定家が生れたので、出家して寂蓮と改めたものだ。養父の俊成、從弟の定家などの指導や交際で和歌の名人となり、新古今

集の撰も仰せつかつて少し手をつけた時病死した。その味新古今(三〇餘)・續後撰(九)・新後撰(一〇)等に採られ家集に寂蓮法師集(群二六九、一〇、七八—八八)がある。

さびしさはその色としもなかりけり横たつ山の  
秋の夕暮 秋の三夕暮の一として、もてはや  
されたもの)

むらさめの露もまだひぬまきのはに霧たちのぼる  
秋の夕暮  
くれて行く春のみなとは知られども霞におつる  
宇治の柴舟

和歌の浦を松の葉ごしにながむれば梢によする  
あまの釣舟  
嵯峨の釋迦をおがみ奉りて

わしの山二たび影のうつりきてさかの、露に有  
明の月

**しやくわいげき** 社會劇

現代社會の事象を取材し、之を藝術化したる劇をいふ。以前の「世物語」に相當するのだが、今日普通社會劇といふのはヘンリック、イブセン以來の世物語とも謂ふべく婦人解放・慣習打破・宗教改革など色々な内容を含

む處から、この劇の或物は思想劇又は問題劇といふ。

イブセンの人形の家・人民の敵・ブーデルマンのハイマアトなどは我邦にも上場せられた社會劇である。我にありては中村春雨氏の「牧師の家」から次第にこの種の作が出て、山本有三氏の「津村教授」「嬰兒殺し」菊池寛氏の「父歸る」「屋上の狂人」など名作も尠くない。

**しやくわいしゆきさう** 社會主義思想

現代の社會科學研究會やプロレタリア文學の先蹤を明治に求めるもの必らず繰返す社會主義的思想は「的」と接尾語つける程のもので實行・運動の方面には之といふ業績も反響もなかつた。今はその事象を年譜的にあげるに止めておく。

一、中江兆民の述作諸篇 自由民権思想を含むもの)

二、硯友社 カーペンター文明の弊及び救治

三、自由新聞社説 普通選舉論・土地國有論

四、二十三年 社會問題研究會 米人ガルス・片山

潜・三宅雪嶺

五、日清戦後 勞働爭議續出・勞働組合期成會設立・

雜誌勞働世界發刊

六、三十一年 社會主義研究會設立 安部磯雄・幸徳

秋水・河上清・杉村楚人冠・片山潜等後には會員四

十餘名にもなつて社會主義協會と改名した。

七、社會民主黨の組織(これは直ぐ政府から解散を命

ぜられた)

雜誌「社會主義」發刊

幸徳秋水・堺利彦等「平民新聞」を起す

八、三十五年 矢野龍溪「新社會」を著す

**しやくわいせうせつ** 社會小説

社會の真相を描寫したり、社會制度の缺陷を諷刺したり、とにかく作者の社會觀と、現社會に對する批評と(理想として庶幾する社會と)について定見ある)を小説化したものをいふ。三十一年三月内田不知庵(魯庵)の

「暮の廿八日」頃から起きた名稱で同氏の浮き秋・片鶉・霜くづれ・慾と慾・青理想・小栗風葉の政驚・後藤宙外の腐肉團・秋聲のなまけもの・徳富蘆花の黒潮・木下尚江の火の柱・中村春雨の無花果(家庭小説の代表作だが一面社會問題や信仰問題をも含んでゐる) 矢野龍溪の新社會などがその例である。

**しやくじつしゆぎ** 寫實主義

文藝上描寫についての一主義で、理想主義に對して現實主義とも謂ふべく、文藝作品の表現する人物事象は客觀的實在性を有するものたるべしとするもの。之を

以て文藝の本質觀にまで推し及ぼしたのが自然主義と  
觀ればよろしからう。

しやせきしふ 沙石集 十卷

無住法師弘安二年(一九三九)から同六年にかけての述  
作で、佛徒自省の資料たらしめんが爲め「砂の中の金、  
石の中の玉を集める」底の用意を以て教訓雜話を蒐録  
し普通文に書き下したものである。

しやちく 大野洒竹 明治三—大正二、一二、  
四十四歳

肥後の人、名は豊太、東大醫學部を出て大野病院を建  
て、院長をしてゐたが本職よりも道樂の俳句の方に熱  
注し、費を惜しまず古俳書を蒐集し藏書數萬卷、歿後  
東大國文學研究室へ寄贈したが惜しいことには大正十  
二年の大震災に烏有に歸した。彼は又作句に長じ赤門  
派即ち筑波會の一名星であつた。俳諧文庫二十四冊は  
その編輯校訂にかゝる。

國を去つて一笈重き霞かな

松ひよろり春雨糸の如く降る

永き日を洒落ばかり言ふ男哉

しやみめいくら 沙彌明空

めいくら「明空」を見よ。

しやれ 洒落

「一語兩義」を見よ。

しやれぼん 洒落本

黄表紙の流れを受けて安永・天明の頃勃興した小説の  
一種で、文化文政の頃途に分れて一方では人情本とな  
り一方では滑稽本となつた。黄表紙の内容を遊廓のみ  
に固定させたやうなもの、それが洒落本と思へば略々  
近い。本の體裁は半紙二つ切を更に二つに折つて綴ぢ、  
土色の唐本表紙をつけ、口繪に略畫を添へ大抵一冊讀  
み切である。

洒落本の始めは異素六帖だ(宮崎三味氏)とも異素六帖  
と聖遊廓だ(中井浩水氏)とも多田翁の遊子方言だ(平  
秩東作の華野者談)とも謂ふが最後の説が普通のやう  
になつてゐる。思ふに嚴密な意味での始めではない  
かも知れぬが、後の多くの洒落本が大抵この遊子方言  
を學んだ跡が見えてゐる點から推して洒落本勃興の轉  
期となつたことだけは少くとも否定することが出來な  
い。今洒落本の重なるものを年代順にあげると(○印は  
國刊四期五期に刊行)  
○異素六帖 二冊 寶曆七年正月  
○遊聖廓(改題「雪月花」)一冊 寶曆七年六月

水ものなし 半紙本 湯岳散人朝侯作 寶曆八年  
月物無語 三冊 岡先生作 明和六年(上野圖書館本)

○廓中奇譚 白岡先生作 明和六年(上野圖書館本  
に船窓笑語と題してこれと同じ内容の書があると  
いふ)

いふ)

○遊子笠枉解 茶釜散人作 明和七年

○遊子方言 田舎老人多田翁作 通常明和年間作と  
いふ。蓋し明和より遅くとも早い氣遣はない

○辰巳の園 夢中山人寢言先生作 明和七年

○南閨雜話 同 安永二年

○當世風俗通 金錦先生作 安永二年

○當世女風俗通 同 安永四年

○寸南破良意 南條堂一片作 安永四年

○契情買虎の巻 田螺金魚作 安永七年

○美地の鰻殻 蓬萊山人歸橋 安永八年

○眞女意題 萬象亭作 安永九年

○山下珍作 志水裡町齋馬平人 天明二年

○傾城智恵鑑 前と同一作者か? 天明三年

○通神三教色 唐來三和作 天明三年

○孔釋三教色 同 天明三年

○和唐珍解 同 天明五年

○客衆肝膽鏡 山東京傳 天明六年

○通言總籙 同 天明七年

傾城買四十八手 同 寛政二年

仕懸文庫 同 寛政三年

○青樓畫の裏 同 同

○娼妓細籠 同 同

振鷺亭 同 同

鹽屋艶二 同 同

傾城買二筋道 梅暮星谷峨作 寛政十年

辰巳婦言 式亭三馬作 寛政十年

船頭深話 前書の第二編) 文化二年

船頭部屋(同第三編)

○猫射羅子(猫洒落誌)正徳馬鹿輔(即ち瀧澤馬琴)

洒落本は之を一個の文學として見ては、内容が單純で  
構想が稚拙で、動機が不眞面目で、大部分の形式が一  
種情界の男女——通人や半可通人の低級な會話で、そ  
の盛行の有様から推しても單に「遊蕩息子墮落案内」以  
上の何物でもないといふ氣がする。けれども近世の小  
説が時代と共に轉々したその一過程を示す沿革的價値  
——別けても安永・天明の江戸情調を文學方面に代表  
する價値と、その大膽な寫實の筆致と、當時の風俗を  
描いて細微の極に達したことの三點に於ては確かに特  
筆すべきである。



抑々我が元和・偃武の交は戰國亂離の慘禍尙名残をとりめ、各人の趣味嗜好自ら開放粗大、金碧燦爛たる強烈の刺戟を好んだものが、元祿期に至つて次第に纖麗巧緻を好み、精細艶柔を悦び寛濶にして男伊達をよしとするやうになつた。それが明和となり安永となり天明となつて江戸文化の爛熟するにつれ細いもの、柔かいもの、濫いもの、くすんだものを好むやうになつて、色も赤や青は避けて茶を好み、その鼠色も深川鼠に限る。イヤ茶色も品々あつて芝瓶茶・梅幸茶・路考茶・岩井茶などと云ふ。音曲も大ざつばな金平節ではいけないとなつて宮古路節常盤津が歡迎され、浮世繪も鳥居清長以後の畫家の書いた婦人に見られるやうな弱柳弱々殆ど普通日本女子の體格とは思はれない畫風が流行し一般風俗としては所謂文金風がはやつた。番の根を高くし、小袖羽織を對にし羽織の丈を長く胸紐をも長くし、細身の大小を落しざしにし懐手してソロリ〜と歩く……といつた風俗、これが文金風である。これ等の風尙趣味が文字を通じて表現せられたものが即ち洒落本なのである(國刊一期新群七大久保菴雪洒落本目錄一、國刊四期徳川文藝類聚第五冊には四十種四十一卷、同五期江戸時代文藝資料第一冊には四十種四十卷

の洒落本が入れてある)

じゆうししや 自由詩社

明治四十年頃詩壇の新人の結社で、その詩風は象徴詩と自然主義との示唆を受けて、自由な個性的形式によつて利那の官能にひたる生の悲歌讚歌とも謂ふべきものであつた。

人見東明・加藤介春・福田夕咲・山村暮鳥等がその同人であつた。

しゆうぎはん 衆議判

歌合に判者をきめず、出席者の多数決に依つて優劣を判決すること(古類文學部二、三三一—三八)

しゆうげんのう 祝言能

能の中祝賀を主想にしたもので實演には始めの方にまはされるのが普通である王朝の催馬樂より神事能が出来、その神事能から祝言能が出来た。そして之には大略左の種別がある。

- 一、自然界の草木に託したもの 高砂 老松
- 二、名所故事に因んで祝ふもの 住吉 養老
- 三、神佛山伏等に寄せて祝ふもの 金札 弓八幡

しゆがく 朱學(朱子學)

宋の大儒朱熹(字は元晦、號は晦庵)の學説をいふ。その

哲學的方面は理の一元を以て本源とし、之に氣を配して宇宙の森羅萬象は生ずと云ふ(理は本體氣は現象といふ風に看做される)。理は法則なり形式なり普遍なり永久的なり。而るに宇宙に精粗清濁輕重高低の差別を生ずる所以は何ぞや「氣」之が因を爲せばなり。故に同じく一理より生きると雖も水の清輕なるに遇つて天を爲し、氣の粗重なるに配して地を爲す。氣の清粹なるものは人類濁漠なるものは禽獸となると説き、更に之を人性論に及ぼし「人は五行の秀を稟けて五常の美德天然に備はると雖も時に堯舜の性あり桀紂の奸あり是亦氣質の差異に基づく…本氣を享くこと重き者は惻隱の心常に勝ちて羞惡と是非の心とは閉塞を被り金氣を享くるの重き者は羞惡の心常に勝ちて惻隱辭讓の心之が爲めに閉塞せらる火氣水氣を享くる者亦此くの如し若し五徳圓滿なる聖人に至りては此等の氣質皆具備し相調和し中正なるを得たる者なり…理の人性に配したものを本然の性又は未發の性と云ひ、氣の人性に配したものを氣質の性又は已發の性と云ふ」と様に説く、之に依て朱子の人性説を推すに略左表の如くなる。

先天的	後天的
本然の性	氣質の性

未發 已發

普遍的 個別的

永久的 一時的

道心 人心

純一無雜 不純挾雜(善きは堯舜惡しきは桀紂)

朱子は更に之を前提として修養教化の論に及び有名な大學の明明徳の註に

「明德は人の天に得たるところ虚靈不昧衆理を具へて萬事に應ずるものなり。但だ氣稟の拘はるところ人欲の蔽ふところとなれば時ありて昏し然れどもその本體の明は未だ嘗て息まざるものなり。故に學者その發する所によりて之を明かにし以て其初に復るべきなり」とあつてその復初の工夫としては主に客觀的な格物致知即ち窮理によれといつたが、又禪佛教や孟子の夜氣を包攝しの主觀的方法をも奨めた。

(要するに朱子の學説は周廉溪の大極説と程子の理氣説や張横渠の立説と尙且つ古聖賢や佛教までを取り容れた巧妙なる集大成でその立論の規畫の大きいこと、その説理の整然たること洵に東洋哲學の偉觀であるが「理」の一元論に立脚しながら、時に「理なければ氣なく氣なければ理なし」と様に理氣を對立的に擧げて

寧ろ二元論を唱へるやうな口吻のあることや、理を純一無雜と云ふはよろしいが、氣質の性に善惡の種々相があるだけで説いて之が救済法として本然の性に復れといふと氣質の性の中の善良なるもの立ち場がはつきりしないやうに思はれる（これは嘗て朱子學の一般を覗いた時に抱いた疑問だが今日と雖も同様に思ふ）朱子の學説は後人の編に係る朱子語類・朱子語錄・朱子文集など浩瀚な叢書のものがあるが、自著の名目で云へば四書集註・大極圖解・易本義・通書解・詩集傳・小學・訓門人・童蒙須知・小學などで外に呂東萊との撰にかゝる近思錄がある。

我邦では藤原惺窩始めて朱子學を唱へ、山崎闇齋以下のこの派學者によりて益々張擴せられた。殊に寛政異學の禁以來はこの學を以て純然たる官學とせられた（古類文學部二、七五八―七八三程朱學・日本倫理彙編七、八・教育大辭書「朱子」の項・秋月種繼氏朱子研究）

**しゆくわんかかくわんし** 主觀客觀詩  
抒情詩と抒情詩との混融したものの即ち劇詩のこと。  
**しゆくわんし** 主觀詩  
抒情詩と同じその項を見よ。  
**しゆしがく** 朱子學

しゆしがく「朱子學」を見よ。

**しゆじやうは** 主情派  
明治二十年だい北村透谷を中心とする「文學界」一派をいふ。

**しゆんすゐ** 朱舜水 二二六〇―二三四二、慶長五―天和二、四、八十三歳

支那浙江の人、名は之瑜、字は魯嶼、明亡んで清となるや高踏不邁節を曲げず、萬治二年我國に亡命し水戸義公に聘せられて賓師となる。嚴毅剛直・風望稜畏學古今を連れ才萬事を兼ね、啓蒙の功特筆すべきものがあつた。その著に舜水文集・朱子談綺等がある。楠公溪川の碑文もその撰に成る。

**しゆじんくわう** 主人公  
小説戯曲に於て中心となる人物を云ふ。諸曲狂言の「シテ」に當る。例「源氏物語の主人公は源氏の君で、竹取物語の主人公はかぐや姫である」(英語では主人公の男女の性を區別し男主人公をヒーロー、女主人公をヒロインといふ)

**じゆだう** 儒道  
支那周末魯の孔子によつて首唱せられた倫理説で、十哲や孫の子思や子思の門人孟子によつて通し、遂に

支那朝鮮日本の上下數千年に互つて思想風教を支配するに至つた。その理想は一種の尙古主義とも謂ふべく夏・殷・周三代の治に憧憬し、堯舜禹湯文武周公を讚美し、五倫五常を首徳としその教義の典據とするものは次の諸書で之を十三經と云ふ。

(易經・書經・詩經・禮記・春秋・孝經・周禮・儀禮・公羊傳・穀梁傳・爾雅・論語・孟子)

春秋戰國より秦漢を経て宋代に入り新に佛教思想を取り容れ、一個の道徳哲學を立説するやうになつた陸象山・朱晦庵はその最たるものである。明代又王陽明が知行合一説を唱へ、その説も相當に廣まつた。

我邦へは應神天皇の時已に論語の將來あり爾后代々書の輸入はあつたが、奈良朝時代は唯讀解するといふだけの程度なり。王朝に入つては漢學そのものは盛であつたが主として詩文に力點をおいた。鎌倉期から室町期にかけては單に斯の趣味を繋ぎ得たといふだけで、大した進境はなかつた(中につき清原頼業の所説が朱子と暗合したといふが如きは例外である)近世徳川期に入つて始めて内面的深到的な儒道研究が始まり、藤原惺窩から林羅山に傳はつた朱子學はこの期を通じて門葉頗る廣く終に純然たる官學となるに至つたが、朱

子學派以外中江藤樹の陽明學派・伊藤仁齋の復古學派・荻生徂來の古文辭學派・片山兼山・井上金峨の折衷學派・吉田篁墩の考證學派など皆精緻な研究の結果から割出した主張であつた。

儒道の如きは東洋哲學上主要な問題で之を簡単に論じ去るは稍輕卒の嫌がないでもないが、國文學の立場から眺めては

一、形式上諸經の語句の我國文の文脈に浸潤した徑路

二、内容上儒教思想が作品着想の内部に有機的に浸透した次第

について明らかにする必要がある(この中徳川時代に儒學思想が根柢になつた次第については各家の文學史に已に定論となつたものも尠くない)

**じゆつさい** 林述齋 二四二八―二五〇一 明和五―天保二、七十四歳

美濃岩村の城主大給兼頼の子幕府の命により時の大學頭林簡順の嗣となり約四十餘年間唯一至誠を旨として官學と官撰とに奉仕した。文藝の如きは之を餘技として卑しめたがその著には述齋詩文稿もある。

**しゆつせかけきよ** 出世景清

近松が貞享三年(二三四六)に義太夫が竹本座旗揚げを祝つて書き下したもので。出世は立身出世と出家遁世との秀句のつもりであらう。悪七兵衛景清平家の爲めに頼朝に一矢酬いん爲め番匠に身をやつして奈良大佛供養の群衆にまぎれ込んで居るところを畠山重忠に見あらはされ、危いところを漸く逃れ得たが、馴染重れた五條坂の遊君河古屋が兄十藏の手だてにか、り女心の淺はかから嫉妬の爲めに、夫の行衛を告訴してその爲め已に危いところを日頃信仰の清水寺に駆け込んだが妻小野の姫(熱田大宮司の娘)が捕はれて拷問にかけられて居るのを見兼ねて、自ら縛につく、阿古屋は自分の前非を悔い景清囚はれの牢前で二子を屠り自分も生害して詫びる。景清はいよ／＼首の座に直つて打ち首にされたと思つたのはそれは清水の千手観音が御身替りに立たれたのであつた。頼朝はこの奇特に感じて景清を赦す。景清はその恩に感じて、自分の心根を恥ぢ「二度と頼朝を見て不都合の心を起さぬ様」として兩眼を抉り琵琶を抱いて日向島へ下る」といふ筋で諸曲の「景清」や「大佛供養」から想を得、後の景清物(牢破りの景清・大佛供養の景清・茶の湯の景清・解脱の景清・めぐみの景清(岩戸の景清)琵琶の景清

清・鏡引の景清・二人景清(身替景清)・非人景清・いきほひ景清・所作の景清等)の扮本になつた。  
**しゅつろ 出盧**  
 幸田露伴長詩の序の巻として公表したもので  
 第一部 世の悦ぶに足らぬこと  
 第二部 詩の愛す可きこと  
 第三部 空想に遊ぶもまた竟に實在の果すところとなること  
 第四部 詩と世と共に悦び愛すべく實在と空想と相即き相容るべきこと  
 五歌ふ。その詩意の長いこと、その語彙の博いこと、その着想の人生觀照の思想詩的なること、諸點によつて當時の詩壇の注目を惹いたが、序詩の本篇切りで續篇も出なかつたし、又之に共鳴した詩人も尠なくいはば詩壇の彗星のやうな詩集であつた。  
 左に第四部第十九章の五を掲げる。これはこの篇の落想でもあり「出盧」の書名をも意味つけて居る。  
 小さき廬——。 いほり 何せん——。  
 いほりを出で、 眼をあけて見て  
 太平の世は 笑みて歌ひて  
 戦ひの日は 戦ひの日は

すがた留めて 歌を残さん——。  
 實在も歌。 空想も歌——。  
 小さき廬——。 廬 何せん——。  
 詩神は廬に いますばかりか、  
 天地いづくに 歌の御神の  
 おはさぬところ そもやあるべき——。  
 天地はすべて 歌の御神の、  
 其の御殿と 今ぞ知りぬる——。  
 いほりを出で、 立つて望めば、  
 天地歴々 寸眸に在り。  
 (四六判三三二頁、明治三十八年一月一日春陽堂、尙これには左の註釋もある。  
 神谷鶴伴出盧抄註、四六判一三八頁、明治三十八年十月九日、春陽堂)  
**しゅらもの 修羅物**  
 能の中、闘諍戦亂を主想にしたもので普通二番目に賞演せられるもの、例「兼平」「八鳥」、その中「八鳥」のやうに勝ちいくさを取扱ふものを「勝修羅物」といふこともある(尙「諸曲」を見よ)  
**じゅん 川田順** 明治一五—  
 備中の儒者川田瓊江の子、東大法科を出て住友銀行員

さなり現に御影に在住、早く「心の花」同人さなり石樽千亦氏等と共にその重鎮となつた。かげろふ・伎藝天・山海經の諸歌集何れも多數の愛讀する處さなつた。  
 「かげろふ」より  
 人一人いのちにかへておもふ事君は見ららし花  
 草のごと  
 波の音もふけしづまりて天地は聲なき闇になり  
 にけるかな  
 ゆげぞ枯野ゆげぞ枯野の冬の國昨日の我に逢ふ  
 よしもなし  
 「山海經」より  
 この次の港に着かば降りぬべみ港き部屋にし眠  
 らでぞ居る  
 この池に睡蓮咲けりまはり道の少しのことを人  
 は來ぬかも  
**じゅんあん 木下順庵** 二二八一—二二五八  
 元和七—元祿一一、一二、二三、七十八歳  
 徳川初期の儒家。名は貞幹、字は直夫、通稱は平之允  
 號は順庵(又、錦里・敏慎齋・善薇洞京都で生れて、松永  
 昌三に就いて朱子學を學び、經學詩文に達し、業成り  
 て京都東山に塾を開き幾多の子弟を教へて拮据二十年

新井白石・室鳩巢・神原篁洲・雨森芳洲・祇園南海・松浦霞沼・南部景衡・服部寛齋・向井三省・三宅觀瀾(之を木門の十哲といふ)等多くの名家を養成した。後五代將軍綱吉に召されて幕府の儒官となり、又命ぜられて國史の編纂にも當つた。その學風は朱子學から出て後、復古學の一派を立て、儒學の眞髓を究むには、唯後世の註疏にのみ信頼せず、溯つて經書原始の精神に反みよと唱へた。又文章は始め韓退之に私淑し後王陽明を愛した。その著錦里文集十九卷と別に班荆集といふのがある。

**じゅんいちろう 谷崎潤一郎** 明治一九、七一  
東京の人、貧苦の間に勉學して四十二年八月同人諸氏と雜誌「新思潮」を發刊し、刺青・象・誕生・麒麟などを發表して稍有名となり、大正に入つて耽美派・享樂派・惡魔派などの名稱を冠せられて一方の雄鎮となつた。その作品は人によつて毀譽まち／＼である。思ふに氏の特徴は飽くなき官能の享樂や異常な性欲の發現を取材し、文章又讀者を魅惑するの點にあらう。少年・惡魔(短篇集)・鬼の面・お艶殺し等何れも多大の反響があつた。後、戯曲にも筆を染め、戀を知る頃・お國と五平・無明と愛染・永遠の偶像等佳什が少くない。

**しゅんら 春雨**  
きちざう「中村吉藏」を見よ。

**しゅんえうしふ 春葉集** 二卷

荷田春滿の家集。但し歌は上巻だけに四季・戀・雜と分けて掲げ、下巻は古今集の假名序國學校創啓の上書(漢文)が載つて居る。

寛政七年(二四五)荷田信卿の跋をのせて同十年板行(外に上田秋成・橋經亮・荷田信美等の序がついて居る)

**しゅんこく 春國**  
さちを「伊藤左千夫」を見よ。

**しゅんしよくらめぐよみ 春色梅曆** 五卷

うめぐよみ「梅曆」を見よ。

**しゅんすゐ 爲永春水** 二四四九―二五〇二  
寛政元―天保一三、七、二三、五十四歳

實名は佐々木貞高、俗稱は越前屋長次郎、江戸の人、始め書肆を營んでゐたが、性來稗史野乘を好み、和漢の演義小説を讀みふけり、加ふるに名譽心強く、何がな名をなさんとあせり、講談師たらんとして一度の高座に懲り式亭三馬の門に入つたが、先輩が多くて頭が上らず、振鷺亭を襲名したが、先代よりは劣るを謂はれ楚滿人の跡目な……随分運動までして貰つたが、徒に

世の嘲笑を受けるばかり、馬琴を燒直したりして「三國一夜物語・常世物語・化裝玉滿の鐘」等を出したが一向認められない。狂訓亭・二世振鷺亭・二世楚滿人などいふ別號はかうした惡戰苦闘の記念である。

こゝに文政十一年二世楚滿人の號を返して愈々彼獨得の作を出さうと自覺した「爲永春水」とは彼が自覺期の呼び名である。さりとて淺學偏見の彼れ、在來の模擬ばかりでは餘他の名家と堂々辯み並べることが出来ない。そこで工夫したのが「人情本」であるこれは洒落本を一層通俗化し、低級化したもので随分際どい戀愛描寫をして男女の情を表し狭斜の巷の遊治郎(例へば丹次郎)の痴態狂態を露骨に寫したものが、爛熟した江戸情調はむしろかうした刺戟性の文を要求してゐたと見えて意外に好評を得、一時はすばらしい賣行であつたので春水忽ち慢心し「人情本作者の元祖、金龍山人狂訓亭爲永春水」と傲稱してゐたが、後その筋の替りに遇ひ、手鎖の刑に處せられ爾來鬱々無理酒を呑みやがて同年病歿した。

彼一代の作約卅種内外で、その中「春色梅曆(帝國文庫一〇)」が傑作と謂はれてゐる。と云つても人情本はその趣向脚色に變化がないので、どれを見ても似たりの

構想で、唯男女の對話振が段々進歩して所謂締めき通めくやうになつてゐる位の點が目立つだけだ。

**しゅんすゐ 二世爲永春水** 二四八三―二五〇二

四六、文政六―明治一九、六十四歳

實名染崎延房、元對馬嚴原の藩士、早く春水の弟子となり、春水歿後二世を襲ぐ。赤穂義士のことを綴つた「いろは文庫」は實は延房が代作して師の名で出したものだと云ふ。明治に入つてから、平假名繪入新聞の記者となり「續き物」即ち新聞小説に筆をとり

六年、北雪美談時代加賀實・雜談雨夜之質庫

七年、薄佛幻日記・新編九尾傳・厚化粧萬年島田

八年、東京開化膝栗毛

等を作つた。

**しゅんすゐ 頼春水** 二四〇六―二四七六、延

享三―文化一三、七十一歳

安藝竹原の人、名を惟寛といひ、京都に出て研鑽大に努め、大阪に於て西山拙齋・中井竹山と共に宋學を唱へ、藩侯に召されて儒官となり、後又幕府の儒官に轉じた。その子は即ち頼山陽である。竹原文集・春水遺稿等の著がある。

**しゅんだい 太宰春臺** 二三四〇―二四〇七

延寶八―延享四、六十八歳

信州飯田の人、名は純、字は徳夫、號は春臺（又紫芝園）。初め程朱の學を修め、後物徂徠の門に入り全く舊學をすて、徂徠の學説（古文辭學派、又は復古學派と云ふ）に従ふ。博聞宏識、加ふるにその性剛毅直言、學を以て世に阿らず、爲めに教法稍嚴酷に失すると云はれてゐたけれども、師徂徠の歿後門弟は益々増した。彼また和漢混淆文に巧で「春臺獨語」「經濟錄」「聖學問答」などの著がある

しゅんちやうしふ 春鳥集

蒲原有明三十八年十月公表の第三詩集（一、「草わかば」三十五年一月、二、「獨絃哀歌」三十六年五月）で、新興象徴詩の代表的なものとして有名である。

「花のをぶえ」と題して

瑞香・あまりりす・わがおもひ・公孫樹・みなさいり・朝なり・家根のくさ・魂の夜・誰かは心伏せざる・戀愛・たそがれどき・五月鵲・花がめ・夢のむすめ・それゆゑに「渴望」と題して

これに満てむ・渴愛・ほだし・末法讚・君にささぐ・秋・樂しきや・さあれ・抄門不淨・技藝のうたげ・海の幸・天平の面影・

「日のおちば」と題して

ひとしづく・静かにさめしたましひの・夢の花・誘惑・人は人として・遺曲・夏まつり

「傳奇的構想」と題して  
姫が曲・さび斧・人魚の海  
等四章三十七篇を収めてある。

瑞香を歌うては

燭の火にほふ聖殿に  
いつく女天をさながらの  
春にこよひはをみなごの  
よき名をさざげまつらむよ。

公孫樹は作者の最も愛好する樹として

厳しくしづもりて、  
たたせるその幹に、  
われも思ひ出づ  
埋れし先の代の象のねぶりな。

朽ちもせぬあらざよ

そはまたおおくつきか――  
いのちの不思議さを  
みづからあやしみて、さては黙すか。

「朝なり」は江戸橋から荒布橋かけてその邊一帯の情調を歌つたもので

朝なり、やがて濁川  
ゆるくにほへど夜の胞え  
たゆらに運ぶおぼめきに、  
なほも市場の並み藏の  
壁にまつはる川の鵲。

から始まり、「誰かは心伏せざる」は壱岐殿坂から下つて正面に機械の響と蒸氣と黒煙と火光とでいきりたつて見える砲兵工廠の趣を歌つたもの

「五月鵲」には  
水を忘れし水草の  
花かも君は――げにしげし  
戀をはなれし戀の花。

「夢の花」(女のうたへる)はこの集中の佳什、最後の二節に

「君がこよひの物のれの、  
なにゆゑかくばせまりぬ」と  
問ふ人ありて肩おさへ、  
問ふ人ありて、手をとるも、

「こよひわが弾く物のれは

朽ちゆく琴のほひにて  
あやしき花のおもかげを  
見き。」と、さながらいかで答へむ。

とあり「夏まつり」の「その二」には輕快な祭氣分に戀を絡ませて

君がすがたをたとふれば、  
艶だちにはふ花あやめ  
むかしおぼゆる大江戸の  
水の香ながく君に添ふ。

ともに氏子の君と我、  
ゆかりもふかき氏神や、

神のまつりの日に遇ひて、  
ふたり手をとるこのえにし……

などいふ(有明詩集三四一―三九一)  
しゅんだいどくと 春臺獨語

どくと「獨語」を見よ。  
しゅんせい 藤原俊成 一七七四―一八六四

永久二―元久元、二、九十一歳  
鎌倉初期の歌人で、所謂和歌師範家の始めを作つた人  
御堂關白の後なる正二位権大納言長家の子忠家その忠  
家の孫に當る。初め顯輔の弟子となり、遂にその養子  
となつて顯廣と名のつてゐたが、廿五歳の頃から藤原  
基俊に師事し古今の秘説をも受けた。朝廷に仕へては  
正二位皇太后宮大夫にまで昇進したが、安元二年九月  
六十二歳の時辭して出家薙髮し釋阿と稱した。後鳥羽  
院殊にその歌の徳をめでて、殊寵を賜ひ、九十の時に  
は特に御賀を賜ひ、更に和歌所の所屬の邑たる播磨三  
木郡細川莊と近江坂田郡小野莊を子孫永代の所領とし  
て御下賜になつた。

此より先安徳天皇の御時勅を受けて撰集中、源平の亂  
によつて一時中止（忠度が淀の河尻を引返して彼に咏  
草を托したのはこの時のことである）になつてゐたの  
を、後鳥羽天皇の御代に整理して撰び了へたもの之を  
千載和歌集と云つて、勅撰集中出色のものとしてあ  
る（後世二條家では此千載に新勅撰續後撰を併せて之  
を二條家の三代集と稱し此派の模範的歌集としてゐる  
古來風體抄五卷（續群四五八―一六ノ下、六七八―七  
三八）は式子内親王の御賀問に應じて、古來の歌態を

述べだもの、一體俊成は性質温良にして趣味高く、撰  
をするにも唯美的見地から作者の誰彼を論ぜず本當に  
歌として優れたものを採ることに努めたと云ふ。そし  
て彼れ自身が歌を咏むときには所謂「桐火桶體」と云  
つて桐の丸火鉢のまはりな幾度もく撫でくして推  
敲に推敲を重ねたものだ。

（心敬の「私語」にこのことを次のやうに書いてゐる。  
亡父卿（俊成）の詠じ給ひし様こそ、まことに秀逸もい  
で來ぬべけれ。深更に、とのあぶら細く、あるかなき  
かに向ひ、直衣のすゝけたるうちかけ、古き烏帽子、  
耳まで、引き入れたまひ、喘息により、桐火桶を抱き  
詠吟の聲、しのびやかにして、夜たけ、人靜まるにつ  
けて、うちかたぶき、よゝと泣きたまへるとなん。ま  
ことに思ひ入れたまへる姿、つたへき、侍るだに、艶  
情に堪えず、感涙をおさへがたう侍り。

又彼の家集に「長秋詠藻二卷」がある。題名は彼の官が  
皇太后宮大夫だが皇后の御殿の唐名は長秋宮だからで  
ある。今、續國一―二七に收められてゐる。尙千載（三  
〇餘）・新古今（七〇餘）・續後撰（二〇餘）その他の諸集  
にも澤山採られてゐる。  
おもかげに花のすがたをさきだて、いくへこえ

と云つたので、彼は直に聲に應じて

星まもる狗の吠ゆるに驚きて

と答へて衆を驚かしたと云ふ。その味は新古今集及び  
以後の歌集に散見してゐる。

風かよふれざめの袖の花の香にかほる枕の春の  
よの夢

怨みずや浮世を人のいとひつゝ、さそふ風あらば  
と思ひけるをば

折ふしもうつればかへつ世の中に人の心の花ぞ  
めの袖

ことわりか秋にはあえぬ涙かな月のかつらもか  
はる光りに

霜がれてそことも見えぬ草の原誰にとはまし秋  
の名残を

今はさは浮世のさがの野邊をこそ露消えはてし  
跡と忍ばぬ

しゅんでいしふ 春泥集

與謝野晶子の第九歌集。

海底に目を開く魚とあさましく身をば譬へて夜  
の寝れ難し

しら梅の一重の花のちるころの青空を飛ぶ船も

きのみれのしら雲

ゆふさればのべの秋風身にしみてうづらなくな  
りふかくさのさと

すぎぬるか夜半のれざめのほとゝぎす聲はまく  
らにあるこゝちして

まばらなるまきのいたやにおとはしてもらぬ時  
雨や木の葉なるらむ

月さゆる氷のうへにあられふるこゝろくだくる  
玉川のさと

あはれなる野しまが崎のいほりかな露お袖に  
波もかゝれり

わするなよ世々にちぎりなすがはらやふしのみ  
さとのありあけのそら

すみわびて身をかくすべき山里にあまりくまな  
き夜半の月哉

よの中よ道こそなけれ思ひ入る山のおくにもし  
かぞなくなる

しゅんせいぢよ 俊成女？

俊成の一人娘で才色双絶、幼時天臺座主最勝光院尊胤  
法親王の邸内の梅樹の下で、少年輩が  
花を見すて、歸る猿丸

てまぬれ

等約六百首を載せてある。巻頭には上田敏博士の一篇の論文とも謂ふべき克銘の序があつて、装幀畫は藤島武二氏、挿畫は中澤弘光氏(四六判二〇六頁、明治四十四年一月廿三日、金尾文淵堂)

**しゅんとら** 森春濤 二四七九—二五四九、文政二、四、二—明治二二、二一、七十一歳

尾張國一之宮村の人、家は代々醫師で、彼は幼時岐阜の親戚の眼科醫に預けられたが眼科のことには身を入れず明け暮れ戯曲院本に親しんだので父が之を聽いて取り上げてしまった。彼は之が爲めに大に憂悶し、果ては顔色がやつれる程であつたから父も惘然に思つて丁度その頃古本屋から掘出した「幼學詩韻」を一部與へた。この一部こそは明治の漢詩壇に投げた一炬火であつた。彼は早速熟讀してやがて十五歳から詩を作り、初め尾張の大儒鷲津益齋の門に入り同門大沼枕山(十八歳春濤よりは一年の長)と互に切磋琢磨した。それより東京に出たり故郷に帷を垂れたり又諸方を歴遊したりして、到る處弟子がつき貴顯が優遇した。故槐南翁はその令息で花南・香句・石枝・即山は彼が門弟の四天王と稱せられた。その詩材には明治の時事に觸れたも

のも少くなかつた(新曆論・東京才人絶句など)

**じゅんとくてんわう** 順徳天皇 一八五七

—一九〇二、建久八、九—仁治三、九、一二、四十四歳 後鳥羽天皇第三の皇子、御諱は守成(モリヒラ)、世に佐渡院と申し奉る。御母は藤原範孝の女修明門院、承久の役に御父上皇を助けてその御企てに與つて居られたので北條氏は畏れ多くも佐渡へ御遷し申した。

天皇は又和歌に御堪能でいらせられた。増鏡の著者は云ふ。

御心ばへは、新院よりも、少しかどめいて、あざやかにぞおはしましける。御ざえもやまともろこしかれていとやむごとなくものし給ふ。朝夕の御いとなみは、和歌の道にてぞ侍りける。

と。御著「八雲御抄」七卷(註和歌叢書七、五三一—六〇四)は歌學の書としては一番よく整つて居るが、これは建保六年から承久までの間にお書きになつたもので、佐渡の配所へ御越しになる時九條道家へ記念として御贈りになつたものだが、後世歌道の業として一般に之に頼つてゐる。又今一つの御著

禁秘抄三卷(又禁秘御抄、禁中抄なども云ふ。群四六七、一六、一〇三〇—一〇八一)は有職故實の書とし

て有名だ(全部漢文で書かれてある)

又御製集を順徳院御集(一名紫禁和歌草)と云ひ續類四二四、一五、六二八—六八八に收めてある。

思ひ出よ木葉の下の忘水うつりし色に絶ははつとも

も、しきやふるきのきげのしのぶにもなほあま

りある昔なりけり

寢覺する有明がたの月影を心ならでもながめつる哉

も、千鳥よるべやしらぬもの、ふの八十うち川の明くれの空

春日山こそのやよひの花の香にそめしこゝろは神ぞしるらむ

(大日本史料第四編の十五)

**じゅんなてんわう** 淳和天皇(西院帝)

一四四六—一五〇〇、延暦五—承和七、五十五歳

桓武天皇の皇子で第五十三代に當らせられた。御在位は總に十二年に過ぎないが、大に漢文學を御獎勵になつて、勅して經國集・秘府略・令義解等を撰ばしめられた。又漢詩に長ぜさせられ御製は凌雲集・文華秀麗集・經國皇等に出て居る。

**じゅんなぬん** 淳和院

陽成天皇の元慶五年淳和天皇の皇子恒貞親王が父帝の離宮西ノ院に設けて王氏の攻學所とし公卿を以て別當とせられたが後には村上源氏の久我家が世襲で別當となつた(古類文學部二、一三九—一三二〇)

**しゅんびせう** 俊秘抄 二卷

むみやうせう「無名抄」を見よ。

**しゅうめうしふ** 衆妙集?

細川幽齋の家集で、今續々群書類從中に入る「幽齋」の項参照。

**しゅんえほふし** 俊恵法師?

源俊成の子、父に習て和歌を能くした。その咏千載(二〇餘・新古今(一〇餘)・新勅撰(六)以下代々の勅撰集に採られ、家集に俊恵法師集(林葉和歌集とも云

ひ寫本で六卷、奥に治承二年(一八三八)八月廿二日の日附があるといふが今は群二六八、一〇、四一—七三二にある)があり、その著に歌苑鈔、歌撰合等がある。

**しようきうわかしき** 承久和歌式

「近代秀歌」を見よ。

**じよか(ぞか)** 序歌

序詞で調へられた歌をいふ(歌序と序歌とは上下の相

違だが全く性質がちがふ)  
 例「むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人  
 に別れぬるかな  
 朝露のおくての山田かりそめにうき世のなかな  
 おもひぬるかな

**じよかう 瀬川如阜 (三世) 二四六七一**

五四一 文化四—明治一四、六、七十五歳  
 徳川末期から明治初期にかけての脚本作家で、五世鶴  
 屋南北を師として狂言堂と號したその出世作は嘉永四  
 年八月中村座で小團次に書下した。「東山櫻莊士」と  
 いふので十月まで百四日間打ちつづけたといふ。「切ら  
 れ與三」「黒田騒動」なども小團治中心の作で名高い。  
 その他、寶成金菊月・花野嵯峨猫魔稿・お伽譚博多新織  
 等の作がある。

**しよきくわん 書記官**

川上眉山出世作の小説で淺薄ながら明治の世相を描い  
 てゐる。廿八年二月の雑誌「太陽」に寄せたもの。木  
 島鑛山拂下げに付いて、三好善平さいふ紳商は某省書  
 記官奥村辰彌と嘗て小松の温泉で近づきになつたので  
 二萬五千圓の賄賂を贈つて、うまく我手に買収したが  
 奥村は三善の令嬢光代を見初めてそれを妻にぞ所望す

る。光代には哲學科を出た東條綱雄さいふ許婚がある  
 上に、彼女としては奥村のやうな輕薄才子は嫌でもあ  
 った、それを利慾に目を眩ました父が無理矢理奥村へ  
 嫁がせた(太陽小説第一編四九—八九)

**しよくげんせう 職原鈔 二卷**

北畠親房興國二年(二〇〇一)二月下旬の作、二官八省  
 以下諸官職の沿革補任の次第(職掌も少しは附帶的に  
 記してある)等を漢文で記したものである。この書もと  
 題簽なく卷首に唯「百官」の二字があつたのを後人が  
 「官位鈔」「明職」「職原鈔」等の名を附したものだ(藤井  
 貞幹の好古日録)さいひ、唐宋の「職源」とあるは諸官  
 の職掌までもあげてあるのに、この書にはさうした記  
 事がないのだから「職原抄」の名はふさはしくない。  
 恐らくは後人のさがしらであらう(壺井義知の官職浮  
 説或問)ともいふ。とにかく簡結な官職志であるから  
 後世永く行はれた。本文は慶長十三年(二二六八)出  
 納大藏大輔中原職忠の刊行を始めとし、評、註、抄の  
 書には左の諸本がある

- 一、多田義俊 職原鈔辨講 二〇
- 二、白井宗因 職原鈔句解 一二
- 三、清原宗尤 職原私鈔 二

配して景致さなれるものは又叙景の対象となる

**じよけいし 叙景詩**

専ら叙景によつて創作せられた詩・歌・句をいふ。

例 春江花月夜 張若虛

春江潮水連天平 海上明月共潮生云々

谷川にとくる氷のひまごにうちいづる波や春  
 の初花

名月や疊の上に松の影

**しよくさんじん 蜀山人**

なんほ「太田南畝」を見よ。

**しよくにほんぎ 續日本紀 四十卷**

日本書紀に續いで我が邦の正史で文武天皇元年(一三  
 五七)より桓武天皇延暦十年(一四五二)に至る九十五  
 年間の史實を漢文に綴つたものである。桓武天皇の勅  
 を奉じて菅野眞道・秋篠安人・中科巨都雄等が撰んだも  
 ので、藤原朝の後半と寧樂朝全部の歴史を見るについ  
 ての根本資料であり、國文學の方では宣命を見るにも、  
 萬葉その他奈良朝文學の背景を調べるにも必讀の書で  
 ある。

これより前、早く曹案三十卷の記録があつて、文武天  
 皇の元年から孝謙天皇の天平寶字元年まで六十一年間

- 四、林道春 職原鈔 六
- 五、宇都宮道庵 三五庵職原鈔標註 二
- 六、林恕 職原會通 一三
- 七、與志多分宜 職原鈔附書 八
- 八、植木悅 職原鈔引事大全 一二
- 九、後藤世鈞 職原鈔考證 一六
- 一〇、近藤芳樹 標註職原鈔校本 四
- 一一、藤原惺窩 職原鈔首書 五
- 一二、壺井義智 職原鈔通考 二三
- 一三、藤原良基 職原秘抄 一
- 一四、蓮水房常 職原覽要 一
- 一五、著者不明 職原鈔支流大全 一
- 一六、同 職原勸物 六
- 一七、同 職原鈔之抄 二
- 一八、同 職原鈔註 一
- 一九、同 職原鈔參考 五
- 二〇、同 職原私記 一

(群七二、四、六一七—六五八)

**じよけい 叙景**

自然物・自然現象、即ち山水・花鳥・草木・景致につい  
 て靜的に描寫した詩歌文章をいふ(人間でも自然物に



の史料があつたのを光仁天皇の末年石川名足・談海三船・當麻永嗣等が再訂し、更に上毛野大川、石川名定が三訂し、更に延暦十三年八月藤原繼繩・菅野眞道・秋篠安人が四訂した。それを更に訂正増補したのが、この續日本紀である。今國大二に入り、又單行本「六國史」の中にも入る。

岡本保孝 續日本紀攷文  
村尾元融 續日本紀考證

などがある。

**しよくにほんこうき 續日本後紀** 二十卷

續日本紀の後を受けて、淳和天皇天長十年(一四九三)二月より仁明天皇の嘉祥三年(一一一〇)三月まで十八年間のことを記した漢文の史書で、撰者として文徳天皇の時命を拜したのは藤原良房・同良相・伴善男・春澄善繩・大養貞守の五人であつたが、途中で天皇崩御、一時沙汰やみとなつたのを清和天皇が更に仰せ出されたが、この時良相は己に薨じ善男は冤罪に處せられ、貞守は邊陲に吏となつてゐたので良房・善繩の二人して擔當し、貞觀十一年(一一二九)八月十四日に撰進した今、國大三に入り六國史としても刊行されてゐる。

**しよくにんうたあはせ 職人歌合**

鎌倉室町時代俳諧歌めいたなかしみある歌を番はせた歌合で、全首凡て職人の心になつて詞を連れる。その歌詞は徳川期狂歌の前驅を爲すものである(續群九八二鳥丸光廣職人歌仙一卷・寫本職人盡歌合三冊)

例「左殿治

月にねぬ宿とや人の思ふらん

いつも絶えせぬ合槌の音

右番匠

曇がれの直きをたゞす身なれども傾く月にかふはりぞなき(東北陸職人歌合)(古類文學部二、九二―九五、國華一八一號卷頭五、傳土佐光信筆職人歌合圖三二九號一二七、職人歌合(東北院))

**しよさごと 所作事**

えんげき「演劇」を見よ。

**じよし 序詞**

國文特有の修飾法で文章・歌句に附屬し、主想には關係なく單に音調の裝飾上冠せらるゝ詞、つまり枕詞の音數不定のものと思へばよろしい。早く上代に發達したが近世以後は多く韻文にのみ用ひられる。

(思ふに枕詞序詞の多數は邦人の秀句趣味から發達したものであらう「水莖の岡の葛の葉」さいへばよくひ

るがへるものだからその「かへる」を云ひかけにして「かへすくも」の序詞におく(類)

例、左の歌文中附屬の語は各その下方の語句の序詞である。

たなびく雲のたちあなくしかのおきふしはつらゆき  
らがこの世におなじくむまれてこの事の時にあへるを  
なんよるこびぬる……あをやぎの糸たえず松のはの散  
うせずしてまさきのかづらながくつたはりとりのあ  
ひさしくとどまれらば云々(古今集序)

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の

ながくし夜をひさりかもれん

**じよじ 叙事**

事件現象を動的に叙述した詩歌文章にいふ。例へば應仁の亂の顛末とか、園基對局の徑路とか「銚子の海の曉」さか「相模灘の落日」さか始め垢の他人であつた男女が次第に接近して戀仲なるいきさつなどを記せば是即ち「叙事」である。

**じよじし 叙事詩**

事象を叙述した詩歌句をいふ。

例「白樂天の長恨歌

萬葉集中水江の浦島子

時雨れけり走り入りけり晴れにけり

**じよじやう 抒情(敘詩)**

主として吾人の感情を詩歌文章に表現することをいふ

**じよじやうし 抒情詩(敘情詩)**

感情を主想にした詩、歌、句をいふ。大抵の韻文は皆この中に入る。

例「秋思 菅原道眞

……君當春秋臣漸老思無涯岸報猶遲……

なげけとて月やはものを思はするかこち顔なる

わが涙かな

西 行

**しよぢよさく 處女作**

作家が始めて創作すること又はその作品をいふ。明治以後にいふ語。

**じよぶん 序文**

文の一體で、書物の始めに、その書述作の趣旨・由来・内容等を記載した文をいふ。これに自序と他人の序とがある。後者は著者に親近な人やその著關係方面に權威ある大家などが筆を執つて大抵はその書推稱の内容を盛つたものである。

**しよむ 昇曙夢** 明治二一、七一

鹿兒島縣の人、三十六年正教神學校を卒へ獨逸語專修學校に學び、傍ら露西亞文學の研究につとめ、果てはその方が専門になつて今日では我國に於ける露西亞文學の權威となつて居る。四十年自然主義勃興の前後翻譯物・六人集・どん底・毒の國・決闘・虐げられし人々・戰爭と平和等を出し爾後翻譯・述作夥しく、世人はその造詣の深いことと精力の絶倫なるに驚いて居る。

しよめいのつけかた 書名のつけ方

書物の名はその書物の個性の縮少語であればよいわけだが、事實は必ずしもさうなつて居ない。上代の記、紀、などは明瞭だが王朝期の伊勢物語・枕草子などは解題がまち／＼にな書る名である。源氏物語・資松中納言物語等は主人公を書名にしたもので、この命名法が古今を通じて一番多いが、今昔物語のやうに巻頭語を採つた書名も可なり多い。四鏡を始め「月の行く／＼」「池の藻屑」など譬喩的の書名もあるし、「御傘」のやうな秀句的のもの「鶉衣」と様に謙遜したもの「廿日餘り用ひつくして壬生狂言」と様な洒落交りの割書つきのむつかしいものなど將來書史家研究の好題目であらう。

しらいしばなし 白石噺

「恭太平記白石噺」を見よ。

じらいやがうけつものがたり 兒雷也豪傑物語 十卷

感和亭鬼武文化三年(二四六六)作の讀本で、豪傑兒雷也、勇婦綱手を妻とし兩人の妖術を以て佐渡の大蛇丸を退治することを綴つたもの。彼の作品中最も世に行はれたもので大阪では之を芝居にまで演じた(帝文八)

しらう 井上士朗 二三九七—二四七二、元文二—文化九、五、一六、七十六歳

尾張名古屋の人、通稱専庵、號琵琶園・朱樹叟、本業は醫、多趣味で國學を本居宣長に、繪を范古に、そして俳諧は勝臺門下の逸足として特に聞えた。寛政より文化にかけ月居と相並んで盛名あり、その門亦卓池、舊雨等の名俳を出した。著には枇杷園句集・枇杷園七部集・士朗隨筆・鶴芝集・橋日記・若合草などがある。

じらうひやくしゆ 次郎百首

「堀河院後度百首」を見よ。

しらかはてんわう 白河天皇 一七一三—七八九、天喜元—大治四、七十七歳

後三條天皇の皇子で第七十二代に當らせられ、父帝の御志をついで皇權の恢復に努められたこと、始めて院

政を執らせられたこと、厚く佛法を御信仰になつたこと、天下意の如くならざるもの賀茂川の水と双六の賽と山法師」と歎かせられたことなど國史の上で名高いことが澤山あるが、又學問詩歌を好ませられ後拾遺・金葉・續本朝秀句の如き皆この御代の勅撰である。御製は後拾遺(七)・金葉(五)・新古今集(四)等に入つて居る。

しらぬひものがたり 白縫物語 二十卷

柳下亭種員嘉永二年(二五〇九)作の讀本で、筑前領主菊池右衛門佐貞行の家従や豊後白杵の城主大友入道宗麟の女、傾城於筆等を組み立てた作話である(續帝二八、二九)

しらべ 調べ

香川景樹の歌學説として主張したもので「和歌はこゝろわるものに非ずして調べものなり」と云ひ、單に語句联接の音調美のみならず、用語・修飾・着想の嶄新、想の豊富等によりて生ずる効果までも調べの徳とした(歌學提要、桂園漫筆等)

しらを 加舎白雄 二三九九—二四五二、元文四—寛政三、九、一三、五十三歳

信州上田の藩士加舎六右門の第二子、江戸に出て白井

鳥辭の門に入り、正風中興の三傑に數へられ天明六俳人の一人に數へられてゐる。その著「俳諧寂寂」は一般俳人に愛讀せられてゐる。その句平隱高雅、用語も亦雅語を好んで用ひ疊句を含んだものも多い(彼れは一個の木球を有し、常に掌上に撫してゐたこと云ふ。之をなで／＼句案することなほ俊成の桐火桶の如き態でもあつたらう)

美しくや春は白魚かいわり菜

川狩や鱗の腮さす雨の篠

鶉の嘴に魚とり直す早瀬かな

花芥子に組んで落たる雀かな

漆かく頭の上や鴈の聲

氷る夜やもろ手かけたる戸の走り

しりつ 詩律

詩歌の律格をいふ。即ち詩歌の音調美を構成する爲めの約束規程をいふ。或は長短の句を錯綜せしめて長短律といひ、或は強弱高低各種の音を按排して抑揚律といひ、或は五七、七五の音數を制約して音數律といふ我邦には最後の音數律のみあつて他の詩律を缺く(長短律や抑揚格は英詩の律から來た名稱である)

しらくへんれい 四六駢儷

支那六朝時代に發達した美文で、必らず四字六字の句を以て始まり中になつては三七・五八・六八と字数は不定だが必らず對句(二句對を散聯隔句對を隔聯といふ)を用ひる。辭の爲めに意を害するの嫌はあるが、聲に讀んでは流麗和諧の美がある。我國では萬葉集時代にこの文體が流行して旅人や億良の詞書に面白いものがある。

じゑん 慈圓

じちん「慈鎮」を見よ。

しんいたごぶし 新潮來曲

江見水蔭明治廿九年五月作の小説。梗概は

潮來第一の名妓中川屋の「小里」——とは東京本所貸舟屋として可なり繁昌したもののが、父の死去と共に家運次第に傾き、遂に一家をたゞんで當地に引移つた。數ある奉公人の中唯一人潮來生れの「文次郎」(三十二三歳)だけが感心に實意のあるもので、始終蔭日向になつて庇つた。文次郎の親方に佐厚の丸龜屋の隠居と云ふのがあつて、此も文次郎の關係から小里母子を保護して、彼女は抱へから自前を稼ぐやうになつた。「小造りの瘡形ではあるが、顔などはふつくりとして居て寒氣が爲るので寢て居たのにも關らずやつれたや

うな色は少しも見えない。銀杏がへしの根が抜けて丸燈がへしと名を變へて居るが、前髪から鬢へ掛けて曲などは未だ出ない。……其べつちりとした二皮目につんと通つた鼻筋のあんばいが、繪にもあるまじくこれだけを更に引立て居る口元の愛らしさ、結んで好し齒を見せて好し物言を時に尙更好し笑ふ時には尙々好し(七二)

或時合同生命保險會社員高島經造と大和奈良雄一座の新派俳優龜澤保次郎——二人は乗合舟で心やすくなつたものゝが、松鶴屋に来て潮來第一の美妓名妓と云ふともぞれ程のことがあらうと聘らせて見てびつくり、こりや成程隅には受けぬと大歡迎。全く

潮來出島の眞菰の中に菖蒲咲くとはしほらしやの俗語さながらの悦びである。小里とても久し振で意氣の合つた客に遇つたと云ふので、病中にも拘らず大浮かれに浮かれた。女たらしの龜澤は早くも彼女に接近すべく色々新策をめぐらした。東京の話は二口三口、それからこんど芝居を開いたら見に来てくれよ……次に「藝妓殺し」をするので自分が藝妓に扮するのでから衣裳を借してくれよ——序に着付けを手傳つてくれが嵩じて夜遅くまで花を遊び、さなつて小里の名聲は

顛に落ちて老母のお美土(六十三四才)が日毎氣を揉んでゐる。否老母以上に煩悶したのは文次郎で、彼は龜屋の隠居の遺言により「水難の相のある女だからお前引きとつてよく面倒を見てやれ」との言を堅く守つて行末は是非我妻にも思つてゐる。小里とても其意を諒して此迄はやさしかつたのが此節では龜澤に夢中になつてちつともこつちの忠告を容れない。文次郎は嫉妬の上からも人道の上からもちつと捨て、はおけないと思つて始終彼女の動靜に注意をした。それが爲には樂屋からほろ化粧の水を頭から浴びせられたこともあつた。又大蛇を以て二人の會談の處へ斬込まうとしたこともあつた。けれどもあのお美土の身の上を思へばそんな無分別も出來ず、唯「困つたことだ」と思ひく不快な一冬を送つた。小里は龜澤の爲めや花の爲に段段借金が出來て、もう此節季はどうしても越せなくなつた……その時例の高島が來て借金は皆拂つてやるから臺灣へ出稼ぎしろと勧める。小里も其氣になつてゐると中島は警察へ引かれた。こいつは随分たちのよくな

いやつて方々で法網を潜つてゐたので、會社員とは眞赤の嘘と云ふことがわかつて小里は頼む木蔭の雨もり以上に力を落し、もうかうなつては世間に合はず顔が

ない……と急に死に覺悟を極めた。

危い所を抱きとめたのは文次郎で……彼はとうとう實意を以て小里を妻とすることが出來た。

「今の不面目は後に雪ぐ今の不義理は後に濟ませる。一時の見得外聞で捨てられぬ命三個を載せて暗に漕出す船一艘、潮來を後に夜逃げする首尾、北利根川を流れ……て借何處の岸に着くことやら(一七八)水蔭叢書五一—一七八)

しんえらわかしふ 新葉和歌集 二十卷

後龜山天皇の内勅により宗良親王が弘和元年(二〇四一)十二月三日に撰進せられた歌集で、元弘元年以後弘和元年に至るまで、南朝方四帝を始め公卿武臣の味凡て、二千四百十五首を集められたものである。蓋し近來南朝に撰集なく、たま／＼北朝に撰集の沙汰があつても南朝方のは多く入れられなかつたのを遺憾としてこの舉にでられたものだといふ。後龜山天皇はこれを勅撰に準ずる旨仰せられ、後に徳川光圀が扶桑拾葉集を編んで歷代勅撰集の序を集める際にも本集の序をもその中に加へた。風葉・藤葉と共に「南朝三葉集」といふその歌修辭の稍粗笨なる嫌はあるが、永年大義名分の爲めに風霜漸瀝の裡に流離關々の苦をなめた人々の味

とて、實感のそゞる讀者に迫るものあり、形よりも想に優つた歌が多い。

五百番歌合

前内大臣有光

おもひきや三代につかへてよしの山雲居の花になほなれむとは

吉野の行宮にて上のなの子ども題をさぐりてうたよみ侍りける次手にさみだれといふことを

後醍醐天皇

都だにさびしかりしを雲はれぬよしのおくのさみだれの頃

題しらす

尊良親王

すみなれぬ板屋の軒のびまもりて霜よの月の影ぞさむけき

元弘元年八月俄に比叡山に行幸成りぬとて後山にのぼりたりけるに湖上の有明ことにおもしろくはべりければ

又貞公

おもふことなくぞ見ましほのく〜とあり明の月の志賀の浦波

武藏國へ打越えて小手さし原におりゐて手分なごし侍りしとき、ものゝふどもに宗良親王君の爲よのためなにかあしからむすて、かひあ

る命なりせば

題しらす

後村上院御製

九重にいまもますみのかゞみこそなき世をてらす光りなりけれ

(國歌大觀八一七―八四八、單行本には承應二年秋月一樂軒永治の奥書ある四冊本が善本である)

しんかい 信海 二二九五―二三四八、寛永一

二―元祿元、五十四歳

山城八幡の雄徳山豊城坊の僧侶で狂歌を以て聞えた。んがくだらわ 心學道話

徳川時代、神・儒・佛・老・莊の諸教を拆衷して民衆化した平民道徳の説話、又はそれを記載した文章をいふ。石田梅巖(貞享二―延享一、二三四五―二四〇四)之を

創め中島道二・手島堵庵・柴田鳩翁等皆その名家であつた(赤堀又次郎氏心學叢書六冊・日本教育文庫第十心學篇)

しんがくはやぞめぐさ 心學早染草 三卷

青本界に一時代を劃した名作(之以前は滑稽洒落を本位とし、以後は教訓を主とする)で山東京傳が寛政二年(二四五〇)の筆「富豪理太郎の息子に善玉悪玉が交り〜」に入り込み種々なる善行悪行を爲さしめ遂に善

玉の勝列に終る」といふ筋(善玉悪玉はそれ以前からあつた語だが、斯うまで強調して後の流行の備を爲したのはこの書にあるといふ)

しんきよくらしま 新曲浦島

坪内逍遙が我邦舊來の振事劇と歌謡と繪畫と文藝とを新らしい作劇の手法で綜合し、以て新興國劇の典型を示さうとの意圖のもとに作つた第一樂劇で、在來の浦島傳説を採り、浦島を一個憧憬れに夢遊する若人とし、乙姫を靈の世界、澄江の里人を肉の世界、常盤津を舊趣味、一中長唄を新趣味、唱歌と舞踏とを明治の趣味としたもので、文詞も優艶、構想も短齷によく纏まつて居たが、樂曲についての作者の要求がむつかしくて實演せらるゝまでには至らなかつた(四六判一五二頁、明治三十七年十一月八日早稻田大學出版部。尙この作を理論づけるものに同著者の「新樂劇論」があり、この作の細評に齋藤信策氏の「藝術と人生」中の論文があり、此作の梗概と余の感想は皆て當地「弘前新聞」に發表した)

しんけい 心敬 ?―二一三五、?―文明七

地位は権大僧都、近世室町時代の歌人として、連歌師として有名な人。歌集に心敬僧都百首、續群三九七、権

る命なりせば

題しらす

後村上院御製

九重にいまもますみのかゞみこそなき世をてらす光りなりけれ

(國歌大觀八一七―八四八、單行本には承應二年秋月一樂軒永治の奥書ある四冊本が善本である)

しんかい 信海 二二九五―二三四八、寛永一

二―元祿元、五十四歳

山城八幡の雄徳山豊城坊の僧侶で狂歌を以て聞えた。んがくだらわ 心學道話

徳川時代、神・儒・佛・老・莊の諸教を拆衷して民衆化した平民道徳の説話、又はそれを記載した文章をいふ。石田梅巖(貞享二―延享一、二三四五―二四〇四)之を

創め中島道二・手島堵庵・柴田鳩翁等皆その名家であつた(赤堀又次郎氏心學叢書六冊・日本教育文庫第十心學篇)

しんがくはやぞめぐさ 心學早染草 三卷

青本界に一時代を劃した名作(之以前は滑稽洒落を本位とし、以後は教訓を主とする)で山東京傳が寛政二年(二四五〇)の筆「富豪理太郎の息子に善玉悪玉が交り〜」に入り込み種々なる善行悪行を爲さしめ遂に善

大僧都心敬集(續群四四六、一四、九一三―九一六連歌に關しては、さゝめごさ(群三〇四、一〇、一〇三四―一〇七四・老のくりごと(群三〇五、一〇、一〇七五―一〇八三)などがあり、連歌は吾妻問答その他當時の連歌書に散見して居る。

舟岡やすそ野の煙面影にその世へだてす立霞かな

しろやいかに山郭公をのれのみ此世にかへる聲したふらん

秋かけて都は萩のやけ原になりにし宿は風も音せじ

はかなさにさだめある夜を神無月おろかや袖に何しぐらん

しんけいかうく 新傾向句

正岡子規の日本派の俳句に一步を進め、自然主義の思潮をも取り容れ、實生活とも接近せしめ、眞に新時代の新興文藝としての俳句たらしめようといふ俳風で、明治四十一年河東碧梧桐が「日本及日本人」に唱へたのが始めて、大須賀乙字が「アカネ」で別の方面から同様の主張をし、次第に勃興して、樸天鵬の「蝸牛」井泉水の「層雲」乙字の「アカネ」等小異はあつても要するに「新

傾向句の圏内に入る句風である。

(余はこの方の作句については何等の自信がないから左に荻原井泉水氏の説明を借りておく)  
新傾向句の特徴は實質的方面に於ては

- 一、叙法の印象的なこと
- 二、季語を象徴的に使ふこと

形式的方面に於ては

三、「かな」さか「や」とかいふ一個の中心俳材を強調する助詞をあまりつかはなくなり。五七五さ上中下の三段に分けないで、中七字が八字(若くは九字)になり、その八字が五三と切れて各上さ下へ分れてついて上は五五、下は三五と二段になる。即ち以前の句を圓とすれば、新傾向句は楕圓で中心點が二個ありながら、それが渾融統一されてある。

一、叙法の印象的なこと  
……俳句は一種獨特な叙述法を採らねばならぬ即ち雑多なる趣味的感じの中、自分に最も強い刺戟を與へたものの印象のみを取出して叙し、其の他は凡て省略する。而して其の省略した部分は讀者の聯想に任すより外はない。即ち客觀其の物を忠實に描寫するのではなくして、其が作者の趣味的統一性(例へば調和の感じ)

に依つて解釋せられたる結果を叙述するのである。

野袴の法師が旅や春の風

燕村

の句を取つて見ると作者も亦春風の吹く野に遊んでさまぐの物に目を娛ましたのであらうが、殊に法師が野袴の旅装をして通つたのを、折からの春風に調和を覺えた、即ち野袴の法師と春風とが作者の趣味的統一性に依つて、解釋せられた結果此の一句をなしたのである。而して野袴が風に吹かれて居る様や、法師が法師らしくもなく、大股にさつさと歩いてるやうな様が讀者の連想に上る。右の如き例としては殆んど何れの俳句を取るもよいが、斯様に凡ての俳句の叙法は廣い意味に於て印象的である云ふことが出来る。

次に印象的と云ふ言葉を少し狭い意味に論じて見ると野袴の法師が旅や春の風

さ云ふ句で、作者が客觀的に見たのは法師と春風に吹かる、野袴とである。旅と云ふ語は其等の客觀から推定した作者の主觀を、客觀に附帶さして云ふたのである。更に作者の感じを臆測するに、作者は野袴の法師を見て「旅をして居るのだらう」と感じたのではなく「旅をして居るに違ひない」と感じたのである。其故其の感じを直接に其の儘叙述したのである。斯く主觀さ

客觀とを冷靜に考へて、嚴格に區別することなしにただ自分の感じたこと(又は解釋したこと)其の儘を客觀的事實の如く叙して他を顧慮しないさ云ふやり口は印象的の叙法である。

二、季語を象徴的に使ふこと  
……何故季語があれば複雑になるかといふに、それは季語が象徴的に用ひられて居る爲めだと私は説明したい……又蜻蛉の出盛るのは夏であるが、此の虫には朗らかな感じがあるから秋の物とする。之は一種の約束である。多くの俳人が長い歲月の間に協定した約束である。それで古來の俳人は皆此の約束を守つて句を作り、又句を解する。例へば

日は斜關屋の鎗に蜻蛉かな

燕村

さ云へば、此の日さしは日脚のつまつた秋の夕日で冷やかに槍を照らして居る様と關屋の邊りには芒でも戦いで居る様も想像される。普通の人にあつては單に蜻蛉さ云ふ具象的の言葉が、俳人に於いては秋さ云ふ抽象的の感じが結合して居り、其が一句々々に就いて其の場合に適當な具象的の景色を喚起して來る。斯様にして四季の題を顯はす言葉、即ち季語は廣い意味で象徴的に用ひられて居ると云ふべきである。

三、形式的特点

軒茂るに笠も編む、麴さます風

此を若し普通の五七五の調子で「軒茂るに笠も編む麴……」と讀んでは何のことが解らない。中の八字に切れる所があるのを承知して居らねばならぬのである。但し五五三五若くは之と類似な調子で切れる句には古くも芭蕉に

躑躅活けて其の蔭に干鰯割く女

あり、燕村に

心太逆しまに銀河三千尺

などあるが「其の蔭に」と云ひ「逆しまに」と云ひ何れも副詞で、下の句に付く形になつて居るから矢張り五七五體の一種である。所が前例の句になるさ「笠も編む麴、さます風」と云ふ様にブツリと切てしまふ所が大に違ふ。之を意味の方から見るさ夏の本立が茂つて居る軒の下で笠を編んで居ること、其の邊りにさましてある麴を風が吹くこと、二個の觀念群が趣味的に融合してあつて、一は景情の輪廓を描き一は其になほ興趣を點出する叙し方である。此の場合には就中何れの觀念が中心になつて居るさ云ふことはない。若くは中心點が二つあると云ふことが出来やうと思ふ。

(河東碧梧桐 日本俳句・同續春夏秋冬、萩原井泉水 俳句の新しき味ひ方)

しんげつ 新月

佐々木信綱が明治末期の所詠約三百首を集めたもの。歌風は新に馳せず舊に泥まず、あの頃さしては穩健清新なものであつた。

笑もあらず涙もあらず剝製の鳥のやうなる人と思ふ

海に向きて燕の如も並びたる髪うつくしき五六人かな

驟々ふるき衣着て秋風の中山道は老いにけるかな

石垣の商榮の若葉に朝日さし坂路のぼるが心地よき夏

後よりせまる怪しきがげ知りてせんべすをなみ猶歩みゆく

(四六判一五一頁、大正元年十二月七日、博文館)

じんけんしんせつ 人權新説

加藤弘之の著。當時フランス系統の「天賦人權説」がやかましく唱へられる時に當り、嘗て同説を信じて居つた著者が更に英獨學の説啓に發する所あり進化主義の

立場から各人の權利は先天的に賦與せらるゝものに非らず、後天的に優勝劣敗の過程に於て發生するものなることを説いたもの。

第一章 天賦人權ノ妄想ニ出ツル所以ヲ論ズ

第二章 權利ノ胎生及ビ進歩ヲ論ズ

第三章 權利ノ進歩ヲ謀ルニ就テ要スベキ注意ヲ論ズ

附録

(因に氏はこの著について)

二十六年 強者ノ權利ノ競争

二十七年 道德法律ノ進歩

三十四年 道德法律進化ノ理(三十六年増補)

三十九年 自然界ノ矛盾ト進化

の著があるが矢張り本書の進化主義の延長である)

(明治名著集九八一―一二五)

しんこきんわかしふ新古今和歌集 二十卷

後鳥羽上皇の勅により土御門天皇の元久二年(一八六五)に撰集したもの。撰者は藏原有家・同定家・同家隆・同雅經・源道具の五人(寂蓮も撰者であつたが中途にして病歿した)歌の数は千九百七十八首假名序は後京極攝政良經、眞名序は日野親經之を作る。上皇御自

雪の夕ぐれ 定家

ふり初むる今朝だに人の待たれつるみ山の里の雪の夕ぐれ 寂蓮

初瀬山夕越えくれて宿とへば三輪の檜原に秋風ぞ吹く 憚性 法師

三、表現の手法が婉曲になつた。露骨露淺でない。へるさの物とや人のながむらむまつ夜ながらかのありあけの月 定家

いかにせむ來ぬ夜あまたの時鳥待たじさ思へば村雨の空 家隆

四、美的感情の動くがまゝに直覺的に發表することを悦んだ(理知的表現を厭うた)

片岡の麓の稻葉末さわぎ月より落つる峯の秋かぜ 藤原 良經

逢坂や木末の花を吹くからに嵐ぞかすむ關の杉むら 宮内 卿

五、三句切(第三句目に終止形をとつて切れる句形)の多いこと

見わたせば山もさかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ 上皇

津の國のなにはの春は夢なれや蘆のかれ葉に風

身和歌の見識を具せられてゐること、撰集の苦心一方ならず、毎々御訂正に遭うたことは當時定家の日記(明月記)に委しく記してある。

當時は上下共に優れた歌人多く後鳥羽・土御門・順徳の三上皇を始め攝政良經・五撰家・藤原秀能・西行・寂蓮・慈圓・式子内親王・宮内卿・俊成女(俊成自身も老大家の格で新古今集歌人に入れてもよい人だ)など一代の名匠に三四十を數へる程の盛況で、隨つてこの集は二十一代集中古今について傑出したもので又多くの特美を含んでゐる。

一、聲調華やかにして而かも遒勁、着想は深くこまかく掘り下げた、喰ひ入つた趣でつまり織巧の極に達してゐる。

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく船のあと見ゆるまで 宮内 卿

うすくこき野への縁の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え 宮内 卿

山風に曇りもあへぬむら時雨名残は月の影よりぞふる 寂蓮

二、詩想幽玄にして餘情に富む

駒さめて袖うちらはらふ蔭もなし佐野のわたりの

わたるなり

西行

六、體言どめの多いこと

(秋の三夕暮の歌など皆「秋の夕暮」さいふ體言がさめになつてゐる)

七、轉裝法(倒置句)を巧につかつたこと

さめこかし梅さかりなる我が宿をうさきも人は

折りにこそよれ

西行

花ぞ見る道の芝草ふみわけて吉野の宮の春のあ

けぼの

秀能

八、省略法も自在につかつたこと

夕月夜汐みち來らし難波江の芦の若葉を越ゆる

白浪

秀能

淺みざり花も一つに霞みつゝ曇りもはてぬ春の

夜の月

菅原孝標女

九、詞材想材の選擇に苦心したこと

霜迷ふ空にしをれし雁がれの歸る翅に春雨ぞふ

る

定家

散りちらす人も尋ねぬ故郷の露けき花に春風ぞ

吹く

定慈

一〇、本歌ざりの多いこと(古歌を續案すること)

里は荒れて月やあらぬとうらみてもたれ淺芽生

に衣うつらむ

良經

(本歌、月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひま

つはもその身に)

谷川のうちいづる浪も聲たてつ鶯さそへ春の山

風

家隆

(本歌、谷風にとくるこほりの隙毎にうちいづる浪や

春の初花)

この集註釋中、一番手に入り易くて而かも詳細なのは

鹽井正男著大町芳衛補、新古今和歌集詳解である。近

刊の「隱岐本新古今和歌集」は各味撰者の名を入れその

他有益な考證がしてある。

しんこくせうせつ 深刻小説

觀念小説の現實描寫に一步を進めて社會の悲慘な暗黒

面を丹念に描いた小説をいひ、廣津柳浪が一人その名

を縦にした。二十八年の黒蜥蜴、二十九年の河内屋・

今戸心中・變目傳・信濃屋等は殊に名高い。

しんごしふるわかしふ 新後拾遺和歌集

二十卷  
後圓融天皇の永和元年六月藤原爲遠勅を受けて撰集に

とりかゝり、後七年永徳元年八月廿七日俄に薨去した

ので兼て爲遠が襲めて居つた爲重(爲世の孫爲冬の子)

撰集にても見らるゝに定めて作意のある面白き歌と

つき見らるゝ心なるべし

本集歌風の一端

弘安元年百首のうたたてまつりし時

二品法親王覺助

いつかわれなみたにぬるゝ影ならで袖より外の

月を見るべだ

一品のぞみまごほり侍りける頃人のもと

に遣はしける

前内大臣實

のぼりえぬ淀の筏のつな手廻この瀬ばかりをひ

く人もがな

法眼行濟よませ侍りける熊野十二首の中に

忍ぶべきならひと思ふこそわりにすぎて戀しき

昔なりけり

前大僧正禪助

津守國平身まかりて後よめる

津守國助

ある世にもかくやはそひし面影のたちもはなれ

ぬきのふ今日哉

後鳥羽院の御時八十鳥のまつりによみ侍り

ける

津守國經

天の下のどけかるべしなにはがた田みのの鳥に

に仰せて後繼せしめられ、永徳三年(二〇四三)十二月

撰成つて新後拾遺和歌集といふ。二條良基假名文の序

を作つた。歌數千五百五十四首(北朝の撰とて南朝方

の味は入らず)

しんごせんわかしふ 新後撰和歌集二十卷

後宇多院の勅により藤原爲世が撰んだもので撰進は後

二條天皇の嘉元二年(一九六四)十二月十九日、歌數

千九百七十首、異本井蛙抄・榻嶋隨筆等はこの集あま

りに津守の一族に偏してその味を多く採つたこと云ふの

で「津守集」とあざなしたが、撰者の爲世は更に續千

載をも撰んだ程の斯道練達の人であり、事實津守一族

みそぎしつれば (国歌大観三三三—三六四)

じんさい 伊藤仁齋 二二八七—二三六五 寛

永四、七、二〇—永寶二、三、一二、七十九歳

京堀河の人、父は七右工門長勝と云つて材木商であつた。彼、名は維植、字は源佐、號は仁齋(又、古義堂、業隠)幼にして才發、長じて宋儒性理の學を好み三十歳前後にして已に一廉の好著あり、後經學に一新創見を開き朱子學全盛の當時唯一人古學を稱道し「宋儒はその説佛敎を交へて頗る不純である。直ちに孔孟聖賢の後をつがうとするには古學に若くはない」この意を稱へた。加ふるに篤實至孝肥後紀伊等の藩主禮を以て聘すれども應ぜず、終生終後輩を説いて老いの將に至らんとするをも知らざるもの、如く、海内の弟子、飛驒・佐渡・壹岐を除いて悉くその門に集り、一時は三千にも達して居つた。その子東涯・南嶋、その弟子中江浪山並河天民以下の高足皆その學風を世に布きその著には語孟字義重子問以下幾多儒學に關する書及び古學先生詩文集・古學先生和歌集・甘藪六等がある。

しんさるがくき 新猿樂記 一卷

藤原明衡の著、漢文。始めに近頃猿樂流行の有様を云ひ當時有名猿樂師百丈・仁南・縣井戸先生・世尊寺之堂

女・宮内卿・藻壁門院少將・藤原爲家・參議兼經・昌三位家隆・正三位知家・大藏卿有家・右大辨光俊・左京大夫信實・侍從隆祐・左近工權少將具親・前但馬守源家長・鴨長明・藤原秀能。

(似た書名で新三十六人撰歌仙一卷がある。これは各三首宛百八首を撰んだもので、人も歌も彼此相違がある)

しんじ 新字

「天武天皇御即位第十一年の三月に境部連石積等に勅して新字一部四十四卷を纂めて作らしめられた」と日本紀にあつて、その時制定せられた倭字を「新字」といふのだがその字體は今傳はらない。けれども後世流布の倭字「神佛峠袴」などは遠くこの新字に胚胎して居ると想像せられる(古類文學部一、八)

しんじ 神字

「神代文字」を見よ。

しんしち 河竹新七 二四七五—二五五二、文

化 三、二、三—明治二六、一、二二、七十八歳

明治初期舊戯曲作家の殿將として目ざましき棹尾の活動をした。彼の藝術的地位は畫界の國貞、小説界の馬琴、にも似たる既成文藝の集大成さ、或度の進展とな

達・坂上菊正・還橋徳高・大原菊武・小野福丸、等を品評し(その口吻貫之が歌仙評に似たものがある)

就中 西京有<sub>ニ</sub>右工門尉云者<sub>一</sub> 一家相舉來集所<sub>レ</sub>謂妻三人娘十六人男八九人人貌云々各各善惡相頌<sub>一</sub>一所能不<sub>レ</sub>同云云

と冒頭して一々それ等の容貌態度の個性を記したものと(群一三六、六、九九—一〇〇二)この奥書に

弘安九年正月下旬書寫之畢求法沙門一河之上醍醐寺正應六年卯月十八日重以<sub>ニ</sub>多本<sub>一</sub> 點之畢快賢右新猿樂記以上野國軍郡華藏寺藏本校合畢

とある。右弘安九年は紀元一九四六正應六年は紀元一九五三に當る)

しんさんじふろくかせん 新三十六歌仙

一卷

次の三十六人の咏各十首宛計三百六十首を撰集したものである。

後鳥羽院・土御門院・順徳院・後醍醐天皇・六條宮雅成親王・鎌倉宮宗尊親王・入道二品親王道助・式子内親王・後京極攝政良經・光明峯寺道家・西恩寺公經・後久我避光・富小路實氏・右大臣實朝・九條基家・衣笠家長・慈鎮和尚・前大僧正行憲・堀川通具・藤原定家・八條院高倉・俊成

見られる。

先祖は日本橋小田原町の魚問屋でその後、式部小路へ移轉し、祖父は通人、父は堅氣、彼は幼名を芳三郎といひ、早熟で遊蕩で輕文學殊に「八笑人」の愛讀者で家職は一向手につかず、却て時々の酒宴の茶番などに妙趣向を案出して褒められた。廿歳の三月五世南北に弟子入して勝諺藏と名のり市村座に出勤出色の才は早くも兄弟子如阜五瓶治助をも凌駕するの氣勢を示した。廿三歳師と共に河原崎座へ出勤、廿六歳四月柴晋輔と改名二枚目格の作者となる。廿八歳十一月二世河竹新七と名のる。世二歳十一月からは眞の一本立の作者となり、小團次の爲めに有難御江戸景清一場のだんまりを書く、爾來一作成る毎に喝采を博し、明治に入つてからは更に時代に適應する生世話物を作り、終焉の年までも劇界は彼に負ふところがあつた。文覺勸進帳・鹽原多助・名人長次・鼠小紋・勸善懲惡視機關・辨天娘女・男白浪・花江戸小腕達引・花街模樸癖色縫・梅雨小袖昔八丈・人間萬事金世中など人口に膾炙した作品頗る多く數ふるの煩に堪へない程だ。けれども彼は到底明治の新時代の新劇の作者ではなかつた。唯舊劇のうま味をすつかり吸収して之利子にまでつけて萬人に提供し



た點を多とすべきであらう（黙阿彌全集廿五冊・河竹繁俊氏河竹默河彌）

しんししや 新詩社

明治三十年四月與謝野鐵幹の組織した歌人の集團（「明星」「明星派」「星塵派」を見よ）

しんじのう 神事能

能の中、神事に關するものを云ひ、之に二種あつて、一つは記紀の神話を單に神秘的に脚色したもの（大蛇、玉井、大社等）今一つは神體前場て人間の姿となつて現れ神徳をた、へ縁起を説き、中入以後神體と化して出現するもの（三輪・白髭・龍田・賀茂等）である。何れも能の番組では一番目物として最初に演ぜられる。

しんせんずるなら 新撰隨腦 一卷

藤原公任の歌學の書で、理想の歌態として「凡そ歌は心ふかく、姿清げにて、心におかしきところあるを優れたりといふべし」と云つて例をあげて之を説き、歌の病難すべき詞・難すべからざる詞をあげ、終に旋頭歌のことをも論じてゐる。續群四五六「一六ノ下六六三—六六五、歌學文庫卷三にある。續羣の奥書には以祖父入道大納言爲家卿自筆本令書寫畢尤可爲證本矣參議藤原朝臣爲秀

とある。五家隨腦の一つである。

しんせんさいわかしふ 新千載和歌集

二十卷

延文元年（二〇一二）北朝後光嚴天皇の勅により藤原爲定が撰んだもので、拜命より四年かゝつて延文四年（二〇一九）に奏進した。歌數二三五九首爲遠が清書したといふ。

南朝方の味を入れなかつたこと、歌よりも詞書が秀いでてゐること、撰者はその人を得てゐることなどの世評があつた（國五三四—五八三）

じんせいいくわん 人生觀

人生哲學の見地から觀照した人生の意だが、平易に謂へば各自のこの世に對する見解である。通常之を大別して樂天主義と厭世主義にし更に之を細別する。が文學に於ては詩歌小説その他の作品に表れたる作者の人生觀についての考察を研究の一對象とする。例「源氏物語を通じて觀たる式部の人生觀」

しんせんせいしるく 新撰姓氏錄 三十卷

弘仁六年（一四七五）七月廿日の上表がついて居る。内容は神武天皇より弘仁年間に至る日本諸家の氏姓を大別して、神別・皇別・藩別とし細別一千一百八十二氏と

されたもので日本系諸研究上無二の寶典とされて居る此より前寶字の末年諸家系譜の争ひ起りて、各々自家の家柄の高きを誇りて紛々決せないところから、朝廷では時の名儒を集めて「氏族志抄」なるものを撰ばしめられたが障ることがあつて完稿に至らなかつた。それを今度中務卿萬多親王が勅を拜して整理の任に當てられ、右大臣從二位藤原園人・參議從三位藤原諸嗣・正五位下阿部眞勝・從五位上三原弟平・從五位上上毛野顯人等之を輔け、舊記の煩雜を去り新系の塗説を除いて三十卷とせられた。

刊本には寛文八年（二二一八）四月白井宗因の跋のついたものがある。

狩谷望之の姓氏錄述見二卷は本書の檢索に便じたものである。

しんせんまんえうしふ 新撰萬葉集（菅家萬葉集）

平安朝始の入口の歌を萬葉假名で記し每首左傍にその意の漢字を添へ

水之上丹文織素 春之雨哉 山之綠緒 那倍手染濫  
春來天氣有何力 細雨濛々水面駁  
忽望遲々暖日中 山河物色染深綠

と様にし上卷に四季と戀を百十九首下卷に四季と戀と女郎花の歌百三十五首を収めてある。著者は菅原道眞（扶桑略記）といふが最も多く或はその父是善だらうとも云ひ、本居宣長は玉かつまに上卷は道眞だらうが下卷はあまりに拙劣な詩だから餘の人であらうといつて居る（群二八四、一〇、四五五—四九〇）

しんせんらうえいしふ 新撰朗詠集 二卷

藤原基俊の撰。公任の和漢朗詠集に習つて和漢の詩歌文章の朗誦すべき佳作を類集し、上卷には四季、下卷には雜をあつめたもの（群三五—一、二、三〇九—三三九）

しんせんわか 新撰和歌 四卷

古今集撰後、紀貫之更に醍醐天皇の勅により古今集中の秀歌を弘仁より延長に至る間の名家の佳什とを選んだがまだ完結しない中に土佐に轉任し、土佐の國府で公務の餘暇に稿をついで任果て上京した頃は天皇已に崩御の後まで終に奏覽を経なかつたが、而かく嚴選したものだから貫之の和歌についての具體的意見を見るにもよろしいし、當時歌壇の好尚を知るにも便である。尙この編輯振は作者の名をあげないこと、春秋・夏冬と組合て互にその詞藻を闢はしたことが特徴になつてゐ

る即ち

- 卷一 春秋 並百二十首
- 卷一 夏冬 並四十首
- 卷三 賀哀 並二十首内一首不足

(群一五九、七、四四〇—四四七)

しんぞういぬつくばしふ 新增犬筑波集

「淀河」を見よ。

しんぞくこきんわかしふ 新續古今和歌集 二十卷

後花園院の勅により飛鳥井雅世が撰んだもので、永享十年(二〇九八)八月二十三日四季の部を奏覧に入れた明記がある。(前後六年を費したともいふ)勅撰集中最終の撰で、假名真名の二序(共に一條兼良作)にその由来が詳記してある。延喜天曆の例に倣ひ宮中の便殿に於て選び凡て二千百四十四首を採つた。但、南朝方は御製と降伏者の咏さだけを容れた。又堯孝法印は和歌所開闢として始終補助をした。歌風的一端をあげておく

嘉元元年百首歌奉りける時 霞を

權中納言雅世

なには湯しほやく烟たちそひて霞もなびくうら

風ぞふく

應安四年九月十三夜仙洞に、池月添光といふことを 是心院入道前關白左大臣  
わが君の光そふべき萬代を月にまかせてすめる  
池水

永和元年大嘗會主基方屏風備中國松山

權大納言忠光

十かへりの花さきねらしまつ山の木末をたかみつもる白雪  
後宇多院に十首うためされけるに海眺望

權中納言公雄

かぎりなき波路の末はひとつにて雲にうきたるあまのつりふね  
山家水 榮仁親王

山家水

榮仁親王

このまゝにすまばすむべき山水ようき世のちりににこらすもがな  
屈原 二品法親王覺譽

屈原

二品法親王覺譽

露霜になべて色づく秋山のふもとの松ぞひとりさめたる  
さめたる

(國歌大觀六五二—六九五) しんたいし 新體詩

國新體詩の嚆矢の書である。内容は大部分譯詩で創作は五篇だけである。

譯詩 八家十篇

兵士歸郷 ブルームフキールド

英國海軍 キヤムベル

輕騎隊の進撃並に船將の歌 テニスン

人生並に兒童の歌 ロングフェロー

悲歌 キングスレイ

春の歌 シヤルドレアン

ヘンリー四世中の一段 シエークスピア

ハムレット中の二段 同

墳上感懷の詩 グレイ

高僧ウルゼ同

創作

拔刀隊・勸學の歌・鎌倉の大佛に詣で、感あり・社會學

の原理に題す・春夏秋冬の詩

譯も生硬、創作も非藝術的な分子が多かつたが、テニ

スンの「一里半なり一里半」と「拔刀隊」の平明歌とは痛

くもてはやされたし、グレイの墳上感懷を譯した矢田

部氏の「山々かすみ入相の」から始まる長篇は今から見

ても名譯と稱せられて居る。とにかく

しんたいしせう 新體詩鈔

外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎三人の共著で實に我

日本従來の和歌俳句は詩形短小にして複雑の想を盛るに不便なりとして、明治十五年八月外山、山、矢田部尙今・井上巽軒の三家が泰西ボーエムの體を取容れ、譯詩と創作詩とを一冊にまざる「新體詩抄」と題して公にせられてより始めて「新體詩」といふ名目が出来、ついで竹内節氏の「新體詩歌集」一、二、三集、竹内隆信氏の「纂評新體詩選以下續々」集が發行されたが、新聲社の譯詩「於母影」や「文學界」一派の作詩を経て、大學派の雨江・羽衣・桂月・冥想體の士井晚翠、優婉體の島崎藤村が出るやうになつて急にこの種の創作も鑑賞も發達し、與謝野鐵幹の雄勁、薄田泣菫の哀婉、而かもよく世と推し移れる、岩野泡鳴の熱烈を経て、蒲原有明の象徴、三木露風の全力的詩作となり、大正に入つて新詩に脈をついだ。その調七五・七六・八六・七七といふ

史等)

- 一、「新體詩」そのもの名づけ親として
- 二、西洋文學の紹介として
- 三、我邦韻文史の劃期的の述作として
- 四、且つ若干の創造的分子ある書として

本書の文學史的の價値は不朽であらう（菊和判製四二頁明治十五年八月、丸家）

**しんだいもじ 神代文字**

我邦上代の文字だとして神社や神道家の傳へて居るもので「日文」「天名地鎮」「秀眞」などの種類がある。この種の文字が有つたか無かつたかについては種々の議論があるが、大體「無かつた」といふ説が確かなやうだ。

「有つた」と主張する肯定説は排外思想と、神道の尊嚴を強調する必要上、朝鮮の諺文（神字日文傳）や支那の蝌蚪文字などから牽強したものらしい。光海の和字傳來考、鶴峯戊申の鎮木文字考、野々口隆正の神字學小考、落合直澄の日本古代文字考、平田篤胤の神字日文傳などがその代表である。

「無かつた」といふ否定説は新井白石の同文通考、伴信友の假字本末、及び現代の史學家（東京帝大藏版國史眼一八一—一九、史學會論叢第一輯三一〇—三二一久米

邦武博士の「本朝文字の源流」言語學者（保科孝一氏國語學精義一三一）等で、信友の如きは之が爲めに鶯胤と絶交したといふ。字體の一例をあげると

日文 出雲大社所傳 四十七字

天名地鎮 河内平岡泡輪神社所傳 四十七字

秀眞 阿波 阿波社所傳 四十七字

阿波 阿波社所傳 四十七字

尙、木村鷹太郎氏はその著「世界的に日本太古史上四四二」に日文はヘブリヤ文字、天名地鎮は古代希臘文字秀眞はフェニキヤ文字の音轉だと云つてスイントンの萬國史の文字表を引證したりなどせられた。所論頗る奇抜で興味あるものだが稍々獨斷に失してあるとの衆評であつた。

「補屋の入録徳兵衛は貞操の妻お辰の愛を感謝しながら

**じんぢゆうかさねるづつ 心中重井筒**

近松が元祿十七年（二三六四）四月竹本座に書卸した心中物で、同年正月十五日大阪萬年町紺屋の徳兵衛が六軒町重井筒の抱遊女お房と高津大佛の勸進所で相對死したことを脚色したもの。

た事實を脚色したものである。

「天満お前町の紙屋治兵衛妻おさんとの間に子まで成したる仲なるに、北の新地紀の國屋の小春にのぼせつめ、女も治兵衛を憎からぬものに思つてゐる中、おさんは夫の爲め小春の爲め何より我家の爲め恥を忍んで手紙を小春に出して「どうか切れるやうに、この次來てもすげなく扱つてくれよ」と云ふ。小春も女同士の義理からまれて不本意ながら振る氣で居る。河庄の段はこゝから始まる。治兵衛の兄孫右衛門が侍姿で小春を聘してしみるゝと心を引いて見る。伊丹の太兵衛が小春を身請けしようと思つた。治兵衛が格子から覗く。中では小春が「おさんへの義理でわたしは不本意だが伊丹へ請け出されて行くつもり」と語る。外に立ち聞いた治兵衛が之を聞いて赫と怒り「そんな人でなしさは知らず今まではした起請も無駄だサア一枚々々數へて返せ」と、散々憤つて歸つて自棄の朝寢、おさんがその次第をきいて「小春殿を伊丹が身請けするやうならばわたしの義理が濟まぬさて手紙をやつた一件を打ちあけると、治兵衛も今更のやうに小春がいとほしくなつてきた。夫婦で色々才覺しておさんは身の着まきから子供の晴着まで入質して小春の身

らも、新町の遊女井筒屋のお房さの馴染の深かまつて行く事をどうする事も出来なかつた。その揚句には頭も廻らぬ借金を拵らへ、お辰の印を盗み出し、井筒屋の女房をお辰の替玉にして治右衛門から金を借りなどしたが、せつばつまつてお房と相抱いて死ぬる」といふ筋で、新町通ひの中途の四つ辻で女房の生薑酒して待つといふ。お房が玉子酒して待つといふ。兩方の愛情をこの二種の酒にあらはして行かうか歸らうかと徳兵衛が情痴の極を示すと、近松の文筆も輕妙な秀句に出來て居る（けれども純文學的に見ては面白くないことは已に拙著綜合日本文學史に述べておいた）が、歌舞伎で演じて當りをとつてから益々有名になつた「脚色餘録」に寛政年中、中山文七が徳兵衛に扮し、丸に桐の紋所を染めた焦茶眞岡木綿の羽織で行きつ戻りつのはぐさの中に迂り落して入りその羽織を毎日觀客に籤引で取らせたので、廿日許の興行に浪華中の羽織が皆桐の紋煎茶の色と流行し出したとある「訥升の羽織落の型」は歌舞伎で演ぜられたこともある。

**しんぢゆうてんのあみじま 心中天網島**

近松が享保五年十二月六日（二三八〇）に竹本座に書き卸した世話物心中物の傑作で、同年十月十四日にあつ

の代金を調へにかゝる……とそこへ廓をぬけてトボ  
く〜と小春がやつて来る。實は一人で死ぬるつもり  
だつたのでいまはのきはに只一目男の顔の見なさに  
来たもののなが治兵衛もその愛に惹かれて、兩人とつ  
おいつする中、又もや戀仇太兵衛が黄白を見せつけて  
「これで身請けさへすりや小春は俺の自由だ」と誇る  
ので治兵衛もむしゃくしゃ腹で、つい太兵衛を殺害し  
た。人殺しの罪を犯したからは男も生きては居られぬ  
からだ、それではとて相携へて行くときは南無網島の  
大長寺、十夜回向を聽聞の席を外して裏の樋の上と下  
とで事きたらさいふ筋で、心中の事實あつた時近松  
は佳吉の茶屋で遊んで居たが、そこへ至急の使が来て  
「これ〜だから淨瑠璃に仕組んで下さい」と傳へたの  
で、その使に色々當時の様子を聞き取り、戻り駕籠の  
中で早速推敲にまじりかゝり、大阪につくさ筆を執つて  
「走り書き」と書き出し「謠の本は近衛流、野郎帽子  
は紫の」と一氣に作り上げたといふ（因に大長寺の心  
中跡は浪華名所の一つであつたが近來藤田男爵が多額  
の金を出して邸内の庭の一部に取り入れ、大長寺は京  
阪電車線路から奥へ入り込んだところへ移された）（佐  
々政一氏天の網島評釋）

しんぢゆうふたつはらおび 心中二つ腹帯  
紀海音が享保七年（二三八二）四月六日豊竹座に書き卸  
したもので、事件はその前後にあつた八百屋半兵衛が  
女房お千代と寺町大佛勸化所で夫婦心中をした（男伊  
右衛門が年にも似ぬ好色で、嫁のお千代を挑んだのが  
もと）それを早速脚色したもので、同時に竹本座で上演  
した「心中宵庚申」と同一材料で競争したものだが、文  
詞は別として實演の成績はこの方が大當りなとつてお  
禮に夫婦の石碑を建てると、却つて八百屋から故障が  
出て、石塔を劇場前へ運ぶなどの騒ぎがあつて一層大  
入をうけたといふ。

しんぢゆうもの 心中物

戯曲・脚本等の世話物の中、男女の心中を取材したもの  
を特に「心中物」といふ。元祿十六年（二三六三）近松が  
「曾根崎心中」を作つたのが始めだが、爾後彼のみの作  
品でもお梅久米助・おさが嘉平次・お島市郎兵衛・お  
かめ與兵衛・小春治兵衛など可なり多くの心中物が出  
た。お染久松・お七吉三郎・お半長右衛門の取材された  
ものも亦有名だ（拙著 綜合國文學概説三九七―四〇五）

しんぢゆうよひからしん 心中宵庚申

近松が享保七年（二三八二）四月廿二日に竹本座に書き

卸したもので、モデルは紀海音の「心中二つ腹帯」と同  
じである。

「大阪新靱油掛町の八百屋の養子半兵衛久し振に實家  
の遠州濱松に歸り（親は山脇三左衛門といつて武士）養  
家への歸途妻お千代がささの山城上田村の平右衛門方  
に立寄ると、お千代が去られて歸つて来て居るので仔細  
をきくと男はお人よし一偏で姑が邪慳、甥の太兵衛  
を入れたさにお千代に「出て行けがし」に當りちらし、  
とう〜離別されたさいふ。さもかく一緒に連れて  
歸つて詫びを入れてもいつかな聞き入れず、半兵衛は  
養家の悪名を立てさせては濟まじとて、宵庚申に生玉  
の勸進所で毛氈を敷いて生きて添はれば死んで添は  
うと潔く相對死を遂げた。

しんぢよくせんわかしふ 新勅撰和歌集

二十卷

新古今撰後、藤原定家單獨に後堀河天皇の勅によつて  
貞永元年（一八九二）十二月二日撰進したもの（「歴代和  
歌勅撰考」には「此集を貞永元年に奏すとあるは序と目  
録とだけで全部の奏覽は天福二年（一八九四）と見る  
が正しい」とある）歌數千三百七十一首、評は褒貶區  
區である。褒めるものはいふ、

花實兼備の好集である（今川了俊・鳥丸光廣）

新古今集奏覽以前定家父の喪にこもつて意の如く選  
ぶことが出来なかつたので、更に自己一分の意見に  
よつて思ふまゝに選ばうとてこの集を承はつたもの  
だ（細川幽齋百人一首抄序）

新古今昔のやさしき姿にたちかへりてをらば落ちぬ  
べき萩の露拾はゞ消なんとする玉篋の霞など申べき  
を餘りにたはぶれ過して歌のさま又あしざまになり  
ぬべしとて新勅撰は撰者思ふところ有りてまことあ  
る歌をえらばれけり（阿佛尼、夜の鶴）  
と、貶するものはいふ。

この集あまりに關東武士の歌を多く採つたので時  
の人「宇治川集」とあざなした「ものものふの八十八  
ち河の」意である。（異本井蛙抄、契沖）

三上皇の御製を一首も入れなかつたのは鎌倉方に阿  
つたものだ（一般の通説とも謂ふべきものだが、和  
歌勅撰考には明月記文安日記を引證して決してさる  
卑しむべき動機からでなく「たゞ時にさりてかゝれ  
しものなり」と謂つて居る。）

新勅集はいけなから後車の戒めとせよ（越部禪尼）  
この集の批評・註解・抄録に關しては

僧契沖 新勅撰集契沖案 二卷  
 同難勅撰(新勅撰集抄とも新勅撰難註ともいふ)三卷  
 僧堯眞 新勅撰抄 二十卷  
 野田忠肅 新勅撰類礎 五卷  
 僧祖能 新勅撰和歌集抄 八卷  
 などがある(國二一一―二三八)

**しんつくばしふ 新菟玖波集 二十卷**

後花園天皇の明應四年(二一五五)宗祇が内勅によつて撰んだ連歌の書で、延文二年(二〇一七)七月十一日の奥書がある。

卷一―六、四季・七、神祇・八、釋教・九、一〇戀・一一―一六、雜・一七、禱旅・一八、賀・一九、連句・連歌雜句・二〇、發句

さし、卷末に作者數十人の傳里等を附記してある。二條良基の菟玖波集・山崎宗鑑の犬菟玖波集・北村季吟の新犬菟玖波集等と共に斯道必讀の書とせられて居る(國刊一期續々群一五、新撰菟玖波集)

**しんてん 新點**

鎌倉時代、釋仙覺が萬葉に入れた點を、それ以前の古點・次點と區別する爲めに云ふ名稱(「萬葉集」及び「仙覺」をも見よ)

近松半二が安永九年(二四四〇)九月に大阪稻荷篤藏座の操りに上場したもので、これのモデルについては異説がある(寶永七年九月大阪東堀瓦屋橋のお染は二歳久松が守をして過つて河へはめて溺死させ、叱られて申譯がないとて自殺したとも云ひ、寶永五年に事實の二人は心中したとも云ふ。油屋の屋敷跡が余の知人の住宅に當るので聞いて見ると、矢張り相對死の跡として各所から訪れて來るとのことである)

「泉州石津の家中相良丈夫が一子久松は吉光の短刀の行方を探して父の改易を救されになるやうとて種々苦心をする。攝州野崎の久作の家に預けられてある中、娘お光に戀せられ、大阪瓦橋油屋に奉公人となつて入り込んである中、又々娘お光に見初められ互に思ひ思はれて人目を忍ぶ中となつてある中、お染は山城屋へ約束が成立ち、久松は座摩神社で主人より預りの大金を拘られた咎もあり、生木をさかれて野崎村に歸ると娘お光が待ち受けて早や祝言の仕度にいそ／＼立ちまうてゐる。とそこへお染が觀音詣りをかこつてに訪れて來て「二人そはれぬ程ならば死ぬ死なう」と黙契する。それをお光が見てとつて急に嫉妬のほむら

**しんにほんのせいねん 新日本之青年**  
 徳富猪一郎、十八年六月廿一日午後五時肥後熊本大江義塾在學中に書上げ、初め「第十九世紀日本之青年及其教育」と題して鉛版に附して同好に頒ち、更に上京後卷頭「新日本之青年」と題する一篇を添へそれを書名として二十年三月廿六日夜の序文をつけて發行したもので、同氏の「將來之日本」の姉妹篇として當時「羽ナクシテ飛ブ」と氏自身に云つた如くに喧傳せられた名著で、著者が一般青年に崇拜せられ、又、一般思想界に甚大の影響を及ぼしたのは主としてこれらの著による(明治名著集四二〇―四六九)

**しんぱたんかひやうしやく 新派短歌評**

釋 附作法

窪田空穂の著。與謝野晶子・山川登美子・増田雅子・金子薫園・與謝野夫婦・尾上柴舟・太田水穂・水野葉舟、九家の歌を選んで評釋し、次に「萬葉集拔抄・短歌作法・韻文と散文・短歌の立脚地・同好の趣味」について平明に而かも趣味深く説いたもので、斯道初心の徒の好資料である(四六判二一〇頁、明治四十一年四月十日、玄黄社)

**しんぱんらうたさいもん 新版歌祭文**

の犠牲となり快く手を切ることを誓ふ。そこへお染の母も尋ねて來て結局二人は一緒になることを許され、今暫らくは世間の手前とて、お染は船、久松は駕籠で大阪へ歸つたが好事魔多く、番頭善六の薄情から事件がくひちがうて、とど男は藏の中、女は藏の外で二人一時に死ぬる」といふ筋、半二が一代の傑作で五十餘日の大入を續け、文化五年大阪小川座歌舞伎に上演、ついで江戸にも上場され明治に入つてからも度々演ぜられた。

**しんびがく 審美學**

びがく「美學」を見よ。

**しんらばんしやう 森羅萬象**

ばんしやうてい「萬象亭」を見よ。

**しんりせうせつ 心理小説**

明治三十年前後、硯友社風より一步を進めて主人公や人物の性格心理を精緻に描寫した小説をいふ。鏡花・眉山の觀念小説、柳浪の深刻小説等がそれである(單に人物の心理状態を精密に寫すといふ點からいふなら後の漱石の作品や今日の心境小説の方がより多く心理小説的であるが、この語は寧ろ明治文學史上の一用語と看做すべきである)

**しんれいやぐちのわたし 神靈矢口渡**

福内鬼外(平賀源内)明和七年(二四三〇)春、江戸豊竹新太夫座の操に上場したものを、太平記を取材したもので出色の作である。

「新田義興父義貞の弔ひ合戦もその甲斐なく、矢口渡であへなき討死をとげる。御臺筑波の前は一子徳壽丸と侍女「みなと」を連れて由良兵庫に身を寄せる。兵庫は新田家の忠臣で、我が實子を殺して若君の身代りにする。」

一方義興の子、義峯も御寮うてなを連れて矢口渡にかかる。渡守頼兵衛子分の六藏と計って義峯を討つて身替りに斬られ、落人捕縛の太鼓を連りに打つて義峯を警戒する。その中追手の軍が肉薄する。あはやの間際水破兵破の白羽の二箭が飛来して頼兵衛と六藏の咽を貫く。義興の靈が現れて追手は散々に惱まされ義峯方の大勝利となつた。

といふ筋(巷説によれば一日新田神社の神官社殿の荒廢を歎き作者にその救助を乞うたので早速この作に筆をとり見事社殿を修築することが出来たといふ)之に當りなとつた作者は更に後編として「弓勢智勇港」「荒御魂新田神徳」「源氏大草紙」などを書いたがこの作は

どには行はれなかつた。

**しんろてい 振鷲亭?**—二四六七?—文化四實名猪刈貞居、通稱與兵衛、江戸本船町に住み、暮らし向きも豊かなり才氣もあつた。その得意とする所は讀本洒落本で稀に草双紙をも作つた。晩年おちぶれて川崎大師河原村の邊で手習の師匠をしてゐたが、或日酒に酔ひ水に溺れて死んだ。四月八日譚三卷・芝居好家内安全二卷・今西行東下り二卷等三十餘種の作品がある。

**しんわ 神話**

太古の神々についての傳説をいひ、之を科學的に研究するものを神話學といふ。その國原始の姿もわかりその國民性の反映もあり、随分興味ある研究だが我國の神話について此迄に系統だてられたものは至つて少い(高木敏雄氏比較神話學・杉谷代水譯補希臘神話學・野上彌生子譯傳説の時代等)が記紀風土記等に散見して居る神話は可なりに多い。

**じんわうしやうとつき 神皇正統記** 六卷

北畠親房延元四年(一九九九)の著、思ひよらの颯風で義良親王は再び吉野還御、ついで御即位、後村上天皇と後に申し上げるのがこの方のこゝまで、親房は常陸に

ついて小田の城に籠城、新帝輔弼の任を全うすることが出来ないのを遺憾とし、洞院實世・四條隆資に旨を傳へて事を行はしめ、尙帝王學の御一端にもとてこの書を著し遙々吉野に献上した。凡て六卷。

- 第一卷 天地開闢から地神五代まで
- 第二卷 神武—允恭
- 第三卷 安康—桓武
- 第四卷 平城—後冷泉
- 第五卷 後三條—後宇多
- 第六卷 伏見—後村上

とした一種の史論で一篇の主旨は皇位繼承次第の大切なこと、南朝の正統にましますこと、人臣の本分は云云たるべきことを明らかにするに在つて殊に中心思想を爲すものは南朝正統論に在るを見られる。陣中何等の資料もなく(唯簡単な皇代記の一部あつただけといふ)して斯くまで代々の史實を列擧した強記と終始一貫主張を強調した論旨の明徹と、雄勁な筆致と共に國文國史上特筆すべく、その上、この書が後代の士氣を鼓舞したことは一通りではない。

今群二九、二、一—二四に入る。これは常陸水戸六反田村六地藏寺本によつたものを今の經濟雜誌社本で更

に佐々木弘綱翁の自筆本と對校したものだといふ。右六地藏寺本の奥書は恐らく親房自身の言をそのまゝ書いたものと思はれるから左に附記する。

此記者去延元四年秋爲示或童蒙所馳老筆也旅宿之間不蓄一卷之文書纔尋得最略皇代記任彼篇目粗勒子細了其後不能再見已及五稔不門有展轉書寫輩云々驚而披見之處錯亂多端興國四年癸未秋七月聊加修治以此可爲本以前披覽之人莫嘲弄耳

註解の書に  
川喜多眞彦 標神皇正統記 六卷

があるこれは諸儒の評論を頭書したもので慶應二年の出版。その他明治大正に入つて左の各種が出た。

- 三木五百枝・佐伯有義二氏 校正神皇正統記
- 今泉定介 神皇正統記講義
- 今泉定介・畠山健二氏 訂正神皇正統記
- 校日大一八の中
- 校國一八の中
- 新釋日本文學叢書第十卷の中

**スの部**

すがはらでんじゆてならひかゞみ菅原傳

授手習鑑

延享三年(二四〇六)八月廿一日、大阪竹本座の爲めに竹田出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲の合作にかかるもの。

菅原道眞は藤原時平の讒により河内道明寺に蟄居を命ぜられ、ついで筑紫へ左遷せられることになった。時平の部下宿彌太郎、鶏のそら音を以て菅公の立立を促し、途中で之を殺害しようと謀つたが、不思議にも天神の木像が身替になつて公は無事筑紫に下つた。佐田村の老農白太夫には松王・梅王・櫻丸といふ三男があつたが、三人共に菅公の家來となつて居つたが、その中松王は少しく考ふる所があつて表面は時平の家來になつて居る。その本心を知らぬ二人の兄弟は松王を「人でなし」と罵り、吉田の社頭に時平を遊撃しようとしたが衆寡敵せず松王のせせら笑ひするに止まるといつた始末——然るに茲に菅公の一子菅秀才が芹生の里に隠れ住んで居ることがわかつて時平は腹心の松王に「菅秀才の首をとつて来よ」と嚴命する。菅秀才をかまくまつてゐるのは武部源藏といつてその妻戸浪とは不義の戀仲から夫婦になつたにも拘らず、菅公はその才を愛

し嘗て時平の一子平希世にも傳へなかつた筆道の極意を傳へたのを徳とし、粉骨碎身、若君の助かるやうに苦心をする……と幸ひ寺子の一人に近頃入門の年恰好菅秀才の身替りに恰好な兒があつた。春に腹は替へられずとてその兒を打つて身替りにたてた……とやがて松王が首實檢にやつて来る。身替り實は我が愛兒小太郎なので、一眼見るなり彼の心は喜悲交々至るの思ひ「如何にもこれでよろしい」と檢視の口上は一通りすませて年頃の苦衷を物語り、七情をこめて七色に笑ひ別ける。この松王と源藏の苦忠によつて菅秀才は御臺もろさも無事に河内へ落ちて行く。といふ筋で、寺子屋の段はこの劇の最高潮でもあり、又實際うまく出て居る。當時この作に手をつける始め「骨肉の哀別」を分擔し「道明寺」は松洛「佐太村」は千柳「寺子屋」は出雲と定め、三人競争で苦心したのでどの幕にも相當の見場があつて、事實「假名手本忠臣藏」についての名作が出来て居る。その上、當時の竹本座經營難に陥つてゐたので作者達は天満宮に祈誓をこめ必死の覺悟で筆をとつたが、その結果豫想外の好評を博して翌延享四年三月まで大入を續けたと云ふ。初段序の切に引幕を切つて落すと、舞臺の一段高い所

に菅公の木像が安置され、神主に扮装した太夫連が一同拍手を打つて禮拜すると観客までが釣り込まれて賽錢を投げて拜んださといふ(帝文二七、一一九〇)

すけくに 大江佐國?

大江朝綱の曾孫で、寛弘朝廷の頃、萬葉集次點者の一人、地位は掃部頭從五位上、漢文に巧みでその作は續本朝文粹に散見する。別に「賀茂社櫻會縁起」一卷がある。今群類四二七、一五、六四—六五に収めてある「大江佐國記」と云ふ自叙傳もある筈だがまだ見ない。(謡曲二人靜に「もろこし佐國といふ人花に身をすつ云々」とあつて、これもこの佐國のことを云ふ。但「もろこし」と謂つたのは歌によく「もろこしの吉野」とつづけて咏むので吉野のすけくにを誤つて本當の唐土とし名まへも「もろこく」と音讀したものだとも(史料大觀槐記)佐國は播磨諸越の産だから(東見記、俗説辨)とも云ひ、否彼は大和唐村の人だから(青栗園隨筆)とも云ふ。

とにかく彼は花が非常に好きだったので

六十餘回看不足 他生定作愛花人

など吟じたもので、それからして「佐國死んで胡蝶となり花間を飛び舞ふ。その子父の魂なりとて花毎に蜜

をぬつて之を饜す」と云ふ傳説を生んだものらしい) **すけため** 梨本祐爲?—二四六一、?—享和元徳川時代の歌人、京の下賀茂の神官で、冷泉爲村に學んで和歌をよくした。

**すけちか** 大中臣輔親 一六一四—一六九八 天曆八一長曆三、八十五歳

梨壺の五人の一人大中臣能宣の子で字を中槐といひ、その妹も歌に有名な伊勢大輔である。一條・三條・後一條の朝に仕へ神祇伯を経て從二位祭主となる。歌は後拾遺(一〇餘)を始め代々の勅撰に入り、家集に祭主輔親集(群二四四、九、四七〇—四八一・續國六六二—六七〇) 彼亦庭園に趣味を有して天橋立の景致を似せて泉水の巧を盡したことは、河原左大臣が千賀の鹽竈と好對の雅譚である。

**すけとき** 綾小路資時

しやうぶつ「性佛」を見よ。

**すけまさ** 菅原輔正(北野宰相) 一五八五

—一六六九、延長三—寛弘六、八十五歳 道眞の曾孫、在躬の子、村上の朝には文章博士、一條の朝には參議式部卿に任ぜられた。その詩文は本朝麗藻・朝野群載卷二に出で、その家集に菅原輔正集一卷が

ある。寺務法規三卷もその編だが今傳はらない。

**すけよし 烏丸資慶** 二二八二—二三二九、元和八—寛文九、四十八歳

歌人光廣の孫、堂上歌人中彼も亦秀でた一人であつた。後光明・後西院・靈元の三朝に仕へてしまひには権大納言に任ぜられた。家集を秀葉歌集といひ又「新歌部類現葉」にもその味が採られてある。

**すずのや 鈴迺舍**

のりなが「本居宣長」を見よ。

**すぢがき 筋書**

戯曲脚本の梗概（例は本書淨瑠璃の解説の處にある）

**すてぢよ 田捨女** 二二九四—二三五八、寛永一一—元禄一一、八、六十五歳

丹波柏原の人（その子孫には今の樞密顧問官の田男爵などがある）六歳の冬、

雪の朝二の字二の字の下駄の跡と句して衆を驚かし、二十歳の頃、

粟の穂やみは敷ならぬ女郎花

と云つて親類つゞきの田氏に嫁ぎ、間もなく夫に訣れて出家し、妙融と稱して盤桂禪師の法弟子となり、播州網千の庵で清くみやびやかな餘生を過した。

彼女は和歌をよくし北村季吟の教を受けてゐた。俳諧の方は宮川松堅（雞冠井令徳の門流）を師とした。

うき事になれて雪間の嫁菜かな  
日ぐらしや捨て、おいても暮る、日を  
思ふ事なき顔しても秋のくれ

**すどくてんわら 崇徳天皇** 一九二五—一九六九、文永二、五—長寛二、八、二六、四十六歳

鳥羽天皇第一の皇子、御母は藤原公實の女待賢門院璋子、第七十五代の天皇として御在位十八年、保元の亂によつて讃岐の配所に崩御、天皇は和歌をよくせられて、その御製は千載（二〇餘）・新古今（七）等に出てゐる。

**すはらのないし 周防内侍？**

平安朝末期の女流歌人、周防守平繼仲の女、出でて白河天皇に奉仕したが、生歿の年は不明。その味は以下の諸集に採られてある。

金葉（四）・新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・續後拾遺・

新千載・新拾遺・新續古今・堀河院艶書合・康和二年仲

實朝臣女子根合・元永元年内大臣家歌合元永二年内大

臣殿歌合・保安二年關白内大臣家歌合。

**すみだはら 炭俵** 二卷

正風元祿七年（二三五四）の俳諧集で芭蕉を始め野坡・嵐雪・許六等の連句を志田野坡が輯めたもの、七部集の一つである（俳諧叢書第一、二册）

**すみよしものがたり 住吉物語** 二卷

「昔中納言兼左衛門督の姫君、腹黒なる繼母の虐待に堪へず、住吉の里なる馴染の尼に身を寄せ時の關白の公達に見初められ、氏あるもの、玉の興富貴榮耀に幸はへたるに引きかへ、意地悪の繼母は次第にはふれいたづき、遂に不幸のうちにくつた」とを記し、末尾を勸善懲惡的な教訓語で結んである。

枕草子に「物語は住吉うづぼの類」とある。その古物語の「住吉」は疾くに散佚し現存のものは後人の偽作であるが、文體構想凡て他の王朝物語と比肩するに足る出来栄である（余嘗て大阪圖書館の寫本「古本住吉物語」といふを借覽した。奥に文政十三年庚寅冬の日附があつてその頃讀んでゐた日本文學全書本と大分違つて居たので一々之を對照したことがある。この古本のやうな、諸異本をさがして遡源すれば或は原本の面影を髣髴することが出来ようか、流布本の住吉物語は右の外群三一〇、一一、一二五—一六三）國文大觀四校國文學大系第五卷・校註國文叢書第十四卷・日本古典

全集第二輯等に入る。國華五三號七八—七九、二四〇號二九七藤原長隆筆住吉物語畫卷 二七二號一五九、三二〇號二〇七、二二五傳土佐長隆筆住吉物語繪卷殘闕）

**するがまろ 大伴宿禰駿河鷹？**—一四二三

？—天平寶字八、

萬葉歌人、聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁の五朝に歴任し天平一五、五從五位下、同一八、九越前守、寶龜元、五、從五位上、出雲守、同元一〇、正五位下、肥後守、正五位上同二、一一、從四位下、同三、九、陸奥按察使・同六、九、參議・同三、一一、正四位上勳三等となり、薨去後從三位を贈られた。歌は萬葉の三、四、八の各卷にある。

**する 粹**

徳川時代西鶴の浮世草子などでもてはやした一つの生活態度。物わかりがよくて、金放れがきれいで、氣がきいて、色も戀も、趣味の對象として本能的に耽溺しないといつた風の人を「粹な人」と入ふ。西鶴は「粹の聖」と云はれたのだから彼の浮世草子はとりも直さず「粹」の文學と謂つてよろしからう。後文運が東漸して江戸に移り、上方趣味の粹が江戸趣味と融合したものが即ち



「通」である。

**すゐん** 江見水蔭 明治二、八——  
岡山の人、名は忠助、上京して稱好塾に入り、桂月・小波等と共に小説に筆をとつた。又雑誌「小櫻絨」「我樂多文庫」など初期の文學運動にも参加した。絶壁・水の聲・炭焼・女房殺し等が喝采を博したがその後主に通俗小説に筆を執り、又石器の發掘に熱注して寧ろその方で考古學界知名の士となつて居る（名家小説文庫中水蔭叢書）

**すゐこてんもの** 水滸傳物

徳川時代の小説や讀本に支那の小説水滸傳を翻案することが一時の流行のやうになつた。そしてそれ等は大抵何々水滸傳と題した。その主なるものは、

- 安永二年 建部綾足 本朝水滸傳
- 安永五年 佐々木天元 日本水滸傳
- 天明三年 伊丹椿園 女水滸傳
- 文化元年 山東京傳 忠臣水滸傳
- 文政八年 瀧澤馬琴 傾城水滸傳

**すゐしよしせつ** 隨所師説（詠草奥書、桂園奥書） 三卷

香川景樹が諸國の門人の詠草の奥書に記した批判感想

目漱石・厨川白村・芥川龍之介諸氏の作が殊に優れて居る。

**すゐめい** 河井醉茗 明治七、五、七—

大阪府下堺市の人、名は又平、一時早大に學んだこともあつたが、夙に文庫派詩人として名を知られ文庫を通じて多くの後進を導いた。無弦弓・塔影・霧・彌生集などは皆喧傳せられた集で、最近「醉茗詩集」と題して合編されて居る。

**すゐ末**

神樂歌を奏するのに神座に向つて右方の坐席をいふ。尙「かぐらうた」を見よ。

**すゐたか** 賀茂季鷹 二四二—二五〇二、寶

曆二—天保一三、九十一歳  
京の上賀茂の祠官で、橋千蔭及び有柄川宮職仁親王について歌を學び又狂歌をもよくし、その和歌にもなかしみを交へた味がある。門人の桓本雪臣亦歌を以て名高い。

徒に招くと見えし武藏野の尾花が末に出づる月影

**すゐつぐ** 四辻季繼？

後水尾天皇の時、勅を受けて催馬樂譜を撰定した人。

七十餘篇を集めたもので、彼の歌學を知るには是非一讀を要するものである（續歌五、桂園遺稿、註和歌叢書七、一九七一—三二七桂園大人詠草奥書）

**すゐなら** 髓腦

（眞髓首腦の意味か？）唐の元兢の書名が元で、歌道の要訣秘訣と稱せられる事どもを記した書物の總稱として始めは普通名詞的に用ひられたものらしい。

常陸の御子の書置き給へりける上屋紙の草子をこそ見よとておこせ給へりしが。和歌の髓腦いと所せう病去るべき所多かりしかばもとより後れたる方のいとご中々動きすべきもあらざりしかばむづかしくて返してき、（源氏物語玉鬘）

後には公任の新撰髓腦、諸家の五家髓腦などいふ固有な名や數目も出來た（福井久藏氏大日本歌學史二六）

**すゐひつ** 隨筆

自分の見聞感想を秩序なく思ひ出し順といつた風に書き綴つたもので、早く清少納言の枕草子に發生し兼好の徒然草・松平樂翁公の花月雙紙など殊に有名である。

明治以後彼のエッセイに倣つて隨筆は次第に感想論文の傾向を帯び、大正十二年頃より俄に流行して叢書や單行雜誌の發刊を見るやうになつた。永井荷風・夏

**すゐひろがり** 末ひろがり

狂言 大名 立烏帽子 素襖 袴 小き刀

三人 冠者 半袴

盗人 括り袴 傘

或大名の家來主人の命で都へ出て末廣を買はうとして悪人にだまされ、傘をさして歸つて主人に叱られながら「傘をさすならばかすがやんま」と時の小唄を歌ひ囃すといふ筋。

**すゐひろじふにだん** 末廣十二段

紀海音が元祿十五年（二三六二）五月に豊竹座に書下した淨瑠璃で牛若の奥州下りを脚色したもの。「牛若已に大天狗僧正房について劍術の奥義を究め金賣吉次をお供に奥州下りの途につき道で熊坂長範が母常盤をかくまうて居るのに遇ひ、それより三河に行き淨瑠璃姫とわりなき戀仲となれる折柄、鬼一法眼の娘桂の前兼て牛若を慕へることゝて父が秘藏の六韜三略の巻を持ち出し後を追うてやつとここで追ひついて之を手渡し、牛若は中途下野の國みさ、ぎ兵衛の館で伊勢三郎義盛か味方とし首尾よく奥州秀衡の館へ着いた」といふ筋で、これは竹本座近松の「十二段」に對抗すべく作つたもの出來榮えもよく彼一代の傑作の一つに數へられて

居る。後に出た「鞍馬山」「熊坂長鏡」「鬼一法眼三略巻」「伊勢三郎」などは皆これの一部分を脚色したやうなものだ(續帝一二、一四六)

すんだいざつわ 駿臺雜話 五卷

室鳩巢享保十七年(二三九二)九月中旬の自序がついてある。道徳・政治・文學(凡て儒教を根柢として)等八十餘篇を五常の目によつて分類排列した隨筆、鳩巢幕府の儒官となり耶を駿河臺に賜はつたので時の人彼を駿臺先生と謂つた。書名もこれから來て居る。文體は和漢混淆で雄勁にして達意である。

(續國民一、駿臺雜話・城井壽章校補關儀一郎編、駿臺雜話註釋 明治三十五年七月十日誠之堂發行)

セの部

せあみ 世阿彌(元清) 二〇二三—?、貞治

二—?

觀阿彌の子で觀世流能の大成者。父よりも優れた姿色と樂才と文才とを備へて足利三代將軍義滿の愛顧を得花傳書・五音曲條々・九位次第・能作書・曲附書・世子六十以後申樂談義等の傳書を殘し、殊に多くの謠曲を創

作若くは改作したことは文學史上特筆すべき價值がある。彼が作として確かなものは次の廿二曲だといふ。八幡・相生(高砂)・養老・老松・鹽釜・蟻通・箱崎・鶴羽・盲打・松風村雨・百萬・檜垣女・薩摩守・實盛・頼政・清經・敦盛・空也・逢坂・戀の重荷・佐野の船橋・泰山府君 尙右の外約七十種は彼の作として流布してゐる。

せい 生 廿九回

田山花袋の小説。

明治十年の二月自らお上へ願ひ出て従軍し、御舟の戦にあへなき戦死を遂げた遺孤として吉田銑之助は早くから苦勞人の境遇であつたに拘らず、性來文學を好んで何かな傑作を出して世間をアツといはせてやらうと野心滿々の情態で居る。郷里は上州館林——、そこを引拂つて上京した頃母は五十一二歳であつた。父の血をついだ長兄(録)は自身犠牲となつてセツセと家業に勵み、三人の弟(姉も「お米」といふのがある)を絶えず激勵した。そのお蔭で銑之助も好む道を進むことが出来たし、弟の秀雄は成城中學を出て士官學校に入り、弘前師團の置かるゝと同時に三十一聯隊附の少尉として赴任する事になつたが其爲憐れにも長兄は生の戦ひの疲れの故か遂に一臥起たすなつた。仲兄は毎日役所

通ひをしてヤツとこの一家を支へた。母は寡婦によく見る勝氣で依怙地で神經が尖つてゐて、昔夫が在世頃振はされた絶對權を代つて取つたかのやうに若い息子の嫁をいびるので、とうとう産褥の日經ちが悪くて死んでしまつた。その後へ銑之助はお梅といふ妻を迎へた。これもまた母がガミ／＼いふし時々小姑の潔癖のお米がやつて來ては戸棚が徹くさいだの流しに御飯粒がくつついて居るだのと小言をきく。その中にさる人の媒介で後添を貰ふ。お雪といつた。來た翌年の三月に懐妊してその翌々年の三月に男の兒が生まれたがどうしたことが四月に亡くなつた。「一體母親の注意が足りないからだ」といつてその六月に去らせてしまつた。

兄は稍々荒んだ氣持になつてその頃歴史の編纂などして金廻りもよかつたので、よく家をあげて遊びつゞけた。その中隣の主人の媒介で第三の妻を迎へた。名はお桂といつて廿八歳、一度船乗りの亭主を持つたことある女だが若く見えた。銑之助は兄がまるで「隣から猫を貰ふ位にしか考へない無造作を不思議に思はれた。又自分の結婚當夜兄が「戀愛が神聖だとか何さか言つたつて、要するに懷都合で天麩羅を食ふ處を蕎麥で間に合はせたりするやうなものだ」といつたのに反對し

て戀愛神聖論を強調したことをも思ひ出した。その頃の銑之助は本町の某書肆の原稿を書いて居つたが、ごちらかといふと押賣で「まだ前の玉稿が出さないでありますから」といふのをたつて二十二枚の原稿を六圓六拾錢にかへて歸りに甘納豆を買つて歸るさいつた生活で妻を迎へて以後は離れの四疊半で別世帯を張つてゐたが、月々の勘定は不足勝であつた。それでも萬一の用にとて甘圓を紙に包んで抽斗にしまひこんでおい

たが、これは母の死んだ時の香奠に出した。母親は實に不幸な人であつた。三十八の時夫に死なれて片親をだちと落しめられまいとて、人一倍に氣を張つて四人の子供を鬼にでもなつたつもりで鞭撻もし激勵もした。

「長兄の英男の生れた時には家は貧苦、兄は非職、嫂は死亡、母親は泣きながら冬の日の寒空に赤兒の襦袢の洗濯をした」ものだ。それに録さはそりが合はないので録は「行く／＼は世帯は銑に譲つて、僕は別家する」といつて居つた。母が致死期病床についた頃銑之助は「當るあてのない小説」を書き始めた……と母危篤の報によつて姉のお米もかけつけたし弘前の秀雄もやつて來た。久し振りに肉親の會つた悦び、嫁や妹の

小ぜりあひ、近所の要らざるおせつかい。病母の痼癩、醫師の招聘とごつたかへして居る中に、銑之助の筆は二百枚まで進んだが、どうも物にならないので破つて捨て、しまひ、

「翻譯の安仕事、空想ででつち上げた紀行文、そんなものを賣つて僅かに生活をつけた」

母の死に遭つた銑之助は人生について、死について色々考へさせられたが最後には「母は凡てを盡してその子を育てたのに子がその母に對して盡して得たのは果して何であつたらうか」といふ悔恨の情であつた。弘前から来た秀雄は下宿(舊津輕藩士)の娘光子と戀に落ちて是非結婚したいといふ。銑之助は快く賛成した。せめて一人の弟には美しい妻を娶らせてそれを妹と呼ぶのは兄の慰藉でもあるから」とて……とやがてその結婚は成立し秀雄は戸山學校に術科研究の爲め派遣されて新妻光子をつれて上京した。兄弟三夫婦は華やかに賑かに往復した。その間にも銑之助は妻が妊娠する、自身は「ふるさと」の稿を起し、母の四十日には小文集の最後の校正も終へ、母の死によつて少なからず思想上の變化を來し、自から進んで某雜誌社の編輯員として僅かの月給で通勤をつけて居る」

梗概は以上のやうなものだが、作者は三十五年「重右衛門の死」を出した頃からゴンクール・フローベルの作品に示唆を受けて平面描寫を主張し、三十七年には「露骨なる描寫」と題してその主張を披瀝したが、この「生」はそれを具體化したものとして及び自然主義小説の代表作品として注目せらるゝものである。その着想の側から見るとまだ何處となく「ふるさと」を作つた時分の小主觀の小感傷を誇張したところがあつて而かも「これではならぬ」と自己に鞭打ちながらも「客觀的態度へ」と精進する。その止むなき努力が熱く重く息吹いて居る。藤村の「家」と題材は似て居るが、紙背に響く「自己革命の進軍喇叭」がこの作を特徴づけて居ると思ふ(花袋全集第一卷一一二一八)

**せいあせう** 井蛙抄 六卷

頓阿の歌學の書で明應三年(一一五四)正月十一日の奥書がある。風體の事・取本歌二事・制の詞の事・同名の名所の事、同類の事・雜談等を載せ二條家では秘藏の寶典としたものである。續群四六二、一六、下八六五―九二〇に入り單行本としては寶曆二年の六册本もある。

**せいあん** 安藤省庵 二二八―二二三六一、元和八―元祿一四、一〇、二〇、八十歳

戀もせじ人の恨みは負はじなど唯事さして思ひし昔

等約五百數十首を集めてある(四六判一八〇頁、明治四十五年一月廿三日有明館)

**せいかく** 性格

小説戯曲中の人物の特殊なる性格「Character」をいふ。之が自然に發展するやうに作られたものを作の優れたものとする。そしてこの性格描寫の如何といふことはいつも文藝批評の一主要點となつてゐる。

**せいかくげき** 性格劇

主人公の性格が根本となつて悲喜の各事象を展開した劇「境遇劇」若くは「運命劇」の對語。(純粹の性格劇は少いが槍權三重帷子の「おさい」や、桐一葉の「淀君」や「牧の方」の女主人公は一半その性格によつて場面が展開して居る)

**せいがん** 梁川星巖 二四四九―二五一八、寛政元―安政五、九、七十歳

近世の漢詩人で名は孟緯、字は公圖、美濃の人で、江戸へ出て山本北山に入門し、又古賀精里の門を叩き經書と詩書を學ぶ中、次第に詩作の方にその天分が伸びて行つた。已に之を以て一家を成して後、あまれく

名は守正、字は魯默又子吹とも云ふ。家世々柳河侯の藩儒であつた。彼も亦幼少より好學の念厚く笈を貢うて京師に行き、松永尺五の門に入り經義の蘊奥を究めて歸藩、侍講として祿二百石を食む、會々明の遺臣朱舜水がやつて來たので、彼は知行の半ばをさいて優遇し寄客交友として大に啓發する所があつたといふ。遠近その名を稱へ伊藤東涯の如きは關西第一の巨儒とほめた。著書には初學心法・初學類編・心裏集語・愚得策・答初學問・理學要抄・増補歴代帝王圖・日本史略・省庵文集・省庵手簡・三忠傳などがある。

**せいおんがく** 聲音學

又「發音學」ともいふ。英の「Phonetic」に當る。言語の唯一要素たる聲音について科學的に研究する學問で發音機關の構造・聲音の種類・結合・抑揚・變化等を明らかにする。國文學研究上詩論や文法論と關係があるから少くともその大要には通じておく必要がある(岡倉由三氏發音學講話・早稻田文學百科全書中その部)

**せいがい**は 青海波

與謝野晶子の第十歌集  
美しく黄金を塗れる塔に居て十とせさめざる夢  
の人われ

天下を歴遊し、大に詩囊を肥して再び江戸に住み、晩年京都に移り住み遂に彼の地に歿した。大沼枕山・遠山雲如・小野湖山・森春濤・岡本黄石・鱧松濤・江馬天江等は皆その門から出た。その著に星巖集三十二卷・星巖絶句刪一卷、星巖先生遺稿十五卷等がある。その詩温雅濃潤當時第一と稱せられた(妻紅蘭女史も亦多才の人で夫妻伉儷美しく相携へて江湖山水に悠遊すること二十年實に斯境の一佳話である)

夜下ニ刀禰河

水枕膏 鰐度ニ短宵 煙波 蕪月 白迢迢 一聲 鱸板 天方曉 已到 潮來 十二橋

せいがん 梁田蛻巖 二三三二―二四一七、寛文二―寶曆七、七、一七、八十六歳

江戸の人、父を勝秀と云ひ、彼、名は邦美、字は景鸞、通稱を新六と云ひ幼より學を好み、大橋某、人見鶴山等について學び、後山崎闇齋の學風を慕ひその著書について獨りで精しく研究した。業大に成り殊に詩に巧みであつた。二十餘歳にして已に門戸を張り、新井白石・室鳩巢・三宅觀淵の諸學者と往來し、後、儒を以て加納侯に仕へ更に赤石藩の文學となつて終へた。その著には蛻巖集八卷の外に蛻巖問答書・清詩選・學範などがあ

る。

秋夕泛琵琶湖

湖北湖南暮色濃 停篙回首問孤松 滄波兩岸秋風起 吹送叡山雲裏鐘 (尙、梁田家の當主は余の先輩に當る現本郷中學校教頭の梁田忠山氏で、一日家寶の遺書、著書や筆寫や、名家の往復書翰や、將軍家御下賜の額面などを見せて貰つたこともあるし、同氏の手で蛻巖全集を公刊さる、日も近きにあらうと思ふ)

せいぐわ 藤原惺窩 二二二―二二七九、永祿四―元和、五、九、一二、五十九歳

近世文藝復興の先驅者として有名な人、名は肅、字は敏夫、號は惺窩・北肉山人・柴立子・廣半高等。藤原定家十二世の孫參議爲純の子で先祖が世領たる播磨三木郡細川の庄に生れ、後僧となりて京都に住み、成長するに連れて次第に儒學に心を傾け、一旦渡支を企て、薩摩まで行つてその渡して童子が大學朱熹章句の序を朗誦してゐるのを聽いて藩主の老父島津日新齋あるを知り直に謁を乞ひ、朱子學に關する書籍數部を賜はつて、京に歸り従前の學をすて、専ら濂洛の宋學を説いた。是れこそは徳川時代を通じて朱子學が官學となつた起因

でその後彼は家康にも秀忠にも重んぜられ、家康は彼を洛北市ヶ原邑の閑居から拉して彼の爲めに學舎を立て、之を管せしめようとして大阪兩度の陣の爲めに中絶、ついで家康自身薨去の爲め沙汰やみとなつた。

秀忠は諸侯の勧めをきいて將に聘しようとしたがその時彼は病床にありつひに歿したので、運命は不思議にも彼と將軍家とを心ゆくまでに結びつけはしなかつたが、彼の高弟林羅山が後日昌平齋を起して代々學頭となつたし松永尺五・那波活所・堀杏庵(羅山と合せて四天王と云ふ)菅得庵・石川丈山等何れも一方に雄視するの大家で、近世儒學の勃興は主として彼の唱道に負ふと謂つてもよい。明治廿六年十二月正四位を贈られた。その著には千代もと章・假名性理・惺窩文集(本編續編)などがある。

せいぐわ 眞山青果 明治一、九、

仙臺の人、名は彬、二高の醫學部を半途退學して數ヶ年放浪生活をし、三十六年に小栗風葉の門に入り師の代筆などをし四十一年に自名を以て「南小泉村」を出してから斯境の天才を以て目せられ青果集・奔流・五人女等によつて愈々地歩を固め、四十四年以後一轉して脚本作家となり「平將門」は近來の名作として迎へられ

て居る。その筆は荒削り式で面かもその觀察には天才的の閃きがある。

せいけいぶんがく 整形文學

「固定文學」を見よ。

せいげき 正劇

川上晋二郎、妻貞奴と共に明治三十三年に洋行し、歸つてから淮洋式の劇場を設け、切符制度に改めその劇を標榜して「正劇」といふ。つまり後期川上劇とも謂ふべきもの。

せいげつ 村上霽月 明治二、八

伊豫の人、名は半太郎、同國の先輩子規・鳴雪に尾して日本派の新俳句を多く吟じ、色々の新聞や雜誌や句集に掲げられた。

俳行脚佐渡に渡るや神無月

京一日奈良半日の小春かな

名月や灯をともしたる膳所の城

せいけん 三宅青軒(雨柳子、綠廻風)元治

京都の人、名は彦彌。文藝俱樂部の主筆や金港堂の編輯となり、又二六新報の記者にもなつた。殊に小説に長じ、鐵扇・金鶏動章・寶の鍵等約六十篇もあるが、そ

の作風はどちらかといふと通俗的であつた。

**せいしやう 正章**

ていつ「安原貞室」を見よ。

**せいせうなごん 清少納言?**

歌人清原深養父や同元輔を祖父や父に持ち、王朝文學隆盛の絶頂とも謂ふべき一條天皇の御代に、文學の趣味豊かなる中宮定子に仕へた彼女は、遺傳と境遇に於て已に恵まれて居た上に才氣渾潤機智頓才に秀で、遂に一方彰子方の紫式部に對抗して華やかな才媛文學の一中心をなした。彼女の傳は詳かでない(或は云ふ名は「諸子」と)がその隨筆枕草子を通じて想ふに、その學殖は和漢古今に亘り、その趣味は如何にも鋭尖な審美眼の下に發達し、その性格は極めて勝氣で、その思想は貴族主義その散文は韻文の和歌よりは巧みであつたやうだ。隨筆枕草子は實に王朝文學の一大收穫たるのみならず、又我國文學上の一偉觀と謂はれてゐる。後世兼好の徒然草、松平定信の花月双紙等を始め幾多の模倣を見る。歌は後拾遺・詞花・千載・續後撰・續古今・玉葉・續千載・後六々撰等に入つた外枕草子にも澤山出てゐるし、清少納言家集一卷(群二七四、一〇、二一六―二一八續國六〇六―六〇八日歌三)もある。けれ

どもその味多くは「世に逢阪の關はゆるさじ」さ様の機智の閃きに一節を見せた贈答歌で詩趣の豊潤を以て優れたものは少い(國華二四六號一一一葛飾北齋筆清少納言圖)

**せいせうなごんき 清少納言記**

「枕草子」を見よ。

**せいせつ 佐々醒雪** 明治五―大正六、一一、二五、四十六歳

京都の人、名は政一、二十九年東大國文科卒業、四十五年文學博士の學位を授けられ、二高や山口高校に就職し、三十四年以來雜誌文藝界を創刊して之を主宰し、後又東大講師東京高師教授となつた。國文學史や近世文學や謡曲歌謡の研究深く、又作文教授にも多大の貢獻を併け父の嗜好を以て秀吟が少くなかつた。近世國文學史・天の網島評釋・俗曲評釋等はその名著である(醒雪遺稿)

**せいぢせうせつ 政治小説**

作者の政治上の意見・政治界の事象・政治家・政論家を主とした小説をいふ。我邦では明治初年に流行し英のリットンやマスレーリの作品(リットン・坪内逍遙譯 慨世志士傳・藤田鳴鶴・繁思談・マスレーリイ關直彦譯「春

鶯囀」が續譯紹介せられ左記の諸作品が賞讃せられた

十六年 矢野龍溪 經國美談

十七年 藤田鳴鶴 文明東漸史

十九年 末廣鐵腸 雪中梅

二十年 須藤南翠 新粧之佳人

柴東海散文 佳人之奇遇

**せいのことば 制の詞**

鎌倉初期定家の歌合・判詞などから胚胎して、次第にその子孫たる和歌師範家の人々によつて傳統的に唱へられた「……の詞は歌に咏むべからず」といふ制約をいふ。

例へば名家の秀味に咏まれた語は之を「主ある詞」として用ひることを止め(霞わたれる・うつるもくもる・花の宿かせの類)あまり怪奇に偏する語や、一種のはやりの様になつて誰も歌ひこまうとする語や、模擬のあとしるくてこちたき語は之を「一向不可用詞」として用ひることを止め(けしき・吹く嵐かな・玉のを・やなぎ・心地こそすれ・雪のあけぼの・うき人・見らん・よもすがら等)したやうなもので、當初の動機には純文學的の見解を含んで居たものを、後の斯道の人々が傳統の楯とし勿體の方便にするに至つて次第に無意味の

拘束に墮したので、徳川時代戸田茂睡が梨本集によつてその無意味を難じ、用語の解放を唱ふるやうになつた(制の詞を書いたものは八雲口傳・近來風體抄・玄旨 陶齋聞書全書・古語深秘抄などがあるが廣文庫第十一册四、第三册四一八―四二二にも一通り出てゐる)

**せいび 夏目成美** 二四〇九―二四七六、寛延二、正、一〇―文化一三、一一、一九、六十八歳

名は包嘉、字は成美、隨齋又は風雲社と號した。江戸淺草で世々札差を業とし父三次郎商才拔目なく家計豊かに暮らしてゐたが父も弟も俳諧を好み、彼は最も好んで之に沈潜した。性來病身な上に十八歳の時痛風に罹り右足が起たなくなつたので世帯を弟に譲つた(天明二年)がその弟も不幸にして天死したので、又復家産を治め年五十餘にして愈々足なえて起つこと能はず即ち藏前の川向ひに當る多田の森東江寺のほとりに贅亭(又いひほの庵とも云つた)といふを結び、心に旅を想像して、不自由ながらも、高雅な明るい句をよんだ。彼は勤勉よく産を治め、而かも賑給に吝かでないので親戚故舊のくらしむきに難儀なものは悉く之を救助した。小林一茶の如きも亦彼に助けられた一人で、お負けに彼に接してから俳眼に一段の進境を見た

と云ふ。彼の著は成美全集外數種皆斯界の人に愛讀せられてゐる。

陽炎や昔し戀せし道の草

東海道残らず梅になりけり

灰すて、しばらく芥子のくもり哉

親鳥のひよこ遊ばす葵かな

五月雨や西と東の本願寺

蛤の息つきあへず野分吹く

昇る日に霧の雫や門の菊

物かけぬ炬燵すさまじ煤拂

名月を追うてひけひけ庭むしる

物いふも嫌なりけふは花の蔭

すゞしきや夢を佛に見せまなす

**せいひやう** 末松青萍 安政二、八、二〇—大

正、九、一〇、五、六十六歳

福岡藩士末松臥雲の四男で名は謙澄、四年上京して近藤塾に入り進境著しく、十二年英國に留學し技藝士・文學士の稱號を得て歸り、爾來文學博士・男爵・貴族院議員・遞信大臣・樞密顧問官・子爵といふやうな華やかな閱歷である。和漢英の三學に通じ、その著に日本文章論・英譯源氏物語・支那古文學略史があり、翻譯に小

説「谷間の姫百合」がある。尙又その漢詩は韓退之・蘇東坡を消化した佳調であつた。

**せいふう** 池袋清風、二五一七—二五六〇、安

政四—明治三三、七、二〇、四十四歳

日向の人、京都同志社の聘に應じて諸生を教授し、明治の歌人として有名。その主張するところは「美を本として情を交へ、その調の雅正ならんには語の雅俗と漢洋とを問はず唱和するを以て明治の歌調とする」に在つて、單言すれば「桂園派の明治化」を根調としたものらしく、この意味から推せば落合萩の舎の歌論さば纔に皮膜一重の隔りがあつただけであらう……その門人には大西祝・湯淺吉郎・磯貝雲峰などいふ諸名士があり、その英逆の友には鎌田正夫があつた。彼は又嘗て國民の友誌上で井上巽軒・外山等の新體詩を批評して改作案まで示したことがある。要するに舊派歌人中出色なるものであつた（國學者傳記集成一六六〇—一六六一、明治卅三年七月廿七日大阪朝日新聞）

**せいふぢよ** 榎本星布女？—二四七四、？

—文化一一、一二、二八？

武州八王子驛の人、絲明窓と號す。夙に俳諧を好み、始め鳥醉に學び、後白雄に入門し白雄の勸めによつて松

原庵三世となつた。星布發句集があつて世に行はれた。**せいべゑ** 岡清兵衛？—二三四六？—貞享三

名は重俊、江戸の古淨瑠璃作者である。天性文才あるに博聞強記で東鑑や軍記物の類残らず之を暗誦し、又經書・佛典・和歌の概略に通じ、その紙に臨み句を案するや古事の引用自在を窮め、聊か苦澁の體を見なかつたと云ふ。

彼櫻井丹波少掾の爲めに淨瑠璃を起稿し、源賴光が臣坂田金時の子金平と渡邊綱の子武綱とを主人公として猛獸惡鬼をもやす／＼と退治し、人斬ること大根のごとき武張つた脚色を施したところ、意外にも元和・偃武以來日尙淺い江戸人の好みに受けて大當りを取つたので爾後續々同題のものを作り、題目も筋も武勇一逼の作品を發表した。世に之を金平本と謂ふ。

金平化粧問答・金平千人切・金平天狗問答・金平兜論・金平法問論・金平黒熊・金平大酒論・金平最後（これに人氣が落ちた）・金平蘇生、これで人氣を恢復したとも云ひ、さほどでもなかつたとも云ふ。采女金平庭訓・鎌倉管領結城合戦等の作がある。

**せいやうひざくりげ** 西洋膝栗毛 十五篇

假名垣魯文明治三年から五年にかけての作。十返舎一

九の東海道中膝栗毛を西洋にまで延長し、福澤諭吉の西洋事情や佛蘭西巴里の博覽會から歸つた富田砂筵の話や、岡丈紀の反譯などから得た乏しい知識を以て、よく筆を縦横に遣り、一面當時の世相を諷し挪揄滑稽讀過呵々大笑せしむる趣確に才筆である。魯文一代の傑作でもあり、明治初め舊派戯作の代表作でもありして名高い。拙著<sup>綜</sup>合國文學概説九三二—九三五

**せいら** 松岡青蘿 二三九〇—二四五一、享保

一五—寛政三、六十二歳

天明の一名俳で、生國は播磨（又尾張）その句風は小蓼太とも謂ふべく彼を學んで稍及ばない。

さし覗く人影さしぬ秋の暮  
雪ふる夜狩の火見ゆる山手かな

**せいり** 古賀精里 二四一〇—二四七七、寛延

三一—文化一四、六十八歳

名は樸、字は淳風、通稱彌助、精里と號し先祖代々佐賀藩に仕へてゐた。彼れ始め陽明學を奉じ、後朱子學に歸し、學成りて一藩の樞機に與り、藩の教授に任じた。後江戸に出て昌平塾の教官に任じ、詩文書共に一家をなして當時の學界に重んぜられた。その門下に齋藤拙堂あり、その著に精里先生集がある。

せいりう 青流

「法師風」の祖稻津祇空の別號。ぎくう「稻津祇空」を見よ。

せいりがく 性理學

朱學に同じ、その項を見よ。

せいれいしふ 性靈集 (遍照發揮性靈集)

十卷

王朝高雄神護寺の僧釋眞濟(一四六〇—一五二〇) 延暦一九—貞觀二)の編(眞濟は紀御國の子高雄僧正とも紀僧正とも謂ふ)

せいれいのう 精靈能

ゆうれいのう「幽靈能」を見よ。

せうらう 櫻井蕉雨 (小麓庵 槿堂 尼椿老人) ?—二四八九、?—文政一二、五、七? 歳

信州飯田の人、俳諧をよくし江戸に出、士郎に學び八集の號を譲られた。

せうえう 坪内逍遙 (春廼舍) 安政六、五、二

二、一

岐阜縣の人、名は雄藏、十三年東大文科を卒業し爾來渾身の努勉を我が新國文學に捧げ孜々として今日に至る。新小説、新脚本の提唱者且つ提供者として、沙翁物譚譯の第一人者として英文學の大家として、劇壇の最高權威として、早大文科を一人で春負つて來た文學教育家として、卓拔なる文藝批評家として、尙且つ雅量と親切と周匝な常識とを以て後進を誘掖輔導する先輩として現代文學最大の恩人と謂ふに誰しも異論はあ

る。新小説、新脚本の提唱者且つ提供者として、沙翁物譚譯の第一人者として英文學の大家として、劇壇の最高權威として、早大文科を一人で春負つて來た文學教育家として、卓拔なる文藝批評家として、尙且つ雅量と親切と周匝な常識とを以て後進を誘掖輔導する先輩として現代文學最大の恩人と謂ふに誰しも異論はあ

せうえうけん 逍遙軒

ていとく「松永貞徳」を見よ。

せうけんから 蕉堅稿 二卷

室町時代京の五山、天龍寺の僧中津絶海の詩文集で版行せられた書名は彼の別號「蕉堅道人」から取つたもので彼は季譯について詩文を學び最も四六駢體の體に長

じて居つた(上村觀光氏五山文學全集詩文部第二輯一八九九—一九五六)

せうしこく 小詩國

金子薫園の歌集巻頭歌。

あめつちはたゞわがためにちひさなれ小さき榮はえは神のたまもの

の意で書名をつけたものであらう。花瓶・歡樂以下十四日に分れ、近什約二百七十首を集め、巻末に妹武山英子の歌三十餘首を「小紅集」と題して添へられてある。秀味の一部、

紅き白きうすものつけし見らが笑みと涼しうそ  
よぐ朝風仙花  
わが歌に姫の千人が舞ひいで、春の衛殿みとのを現すれば足る

春あさき京の御堂の梅の朝くる髪さむし經うつす人  
詩の國の野のあけぼのにおひいでし春のわか草  
夢あた、かき(春風會諸子の詩集の初めに)  
虫の音にきえしおもひのふとわきて夕月野みち  
歌によるしき  
夏の皇子がみぎりの御衣みけしそよがせて吹く笛の音

か野の朝の聲

青あしのそよぎに朝の思ひゆれて歌を生みゆく  
行々子のこゑ

やすらかにねぶる御相のあなたふとわが師といはじ歌の御神よ(萩の家先生の御遺骸の前に通夜して)

小紅集より

こぼれたる椿の花のとゞろきに殿のひ、なの冠  
こけたり  
時めきしうたひめ老いてわび居する垣根にさけり露草の花

(三六判九〇頁附録一二頁、明治卅七年十一月十日、新潮社)

せうせつ 小説

純文學の中の主要なる一種目を爲せるもので、作者が主觀裡の理想的世界を説話の手法によつて文字的に表現した文藝作品をいふ。その根原は深く人間性に基いて想像や創造や發表欲が相待つて創作欲を刺戟することによつて出來たものと思はれる。

虚偽が始めて手法、假作物語の手法となり、其時に急に自覺心を喚起し人類の虚榮心が生じて來た「俺は

何と云ふ強い男だらう」と考へた古の野蠻な原始人は直ちに屹度自分の力を隣人に見せたいと考へたらう。言語が發達して言葉が云へるやうになつた時、彼は自分の行爲を自慢した。これが話の始まりであつた。その説話者が全然事實ばかり云つたならそれは歴史であつた。事實以外に話をしたならそれは假作物語であつた。それは自覺した藝術であつた(チャールズ・ホーン原著 尾崎忠男譯小説の技巧 Charles F. Horne's "The Technique of the Novel" 111)

その「假作物語」は即ち小説の原始的なものである。我國文學中記紀中の神話や風土記中の傳説や萬葉集中の叙事歌や、作話的歌詞は皆已に早期の小説とも謂ひ得べき素質を含んでゐるが、通常、文學史では王朝初期の竹取物語を以てその始めとする。竹取物語と相前後して伊勢物語が出たがこれは短歌を中心にして之に肉をつけた歌物語である。王朝の小説即ち物語はこの二つから開展して竹取物語の後にはうつば・落窪・住吉を経て源氏物語に至つて最高潮に達し狭衣・濱松中納言・夜半の寢覺・とりかへばやの諸物語となり、伊勢物語の後には大和物語が出た。又同じく歌を中心にはしてゐるが作話に代るに自叙傳的内容を盛つたものは日記物語

で、蜻蛉日記・和泉式部日記などは名は日記にして實は戀愛小説である。別に堤中納言物語といふのが出て之は短篇小説の鼻祖といはれてゐる。平安朝も末期になつては人々の心は回顧的となり、望月の缺けたることなき往時の華やかさを思慕して大鏡・榮華物語のやうなものが出た。これは國文の歴史ではあるが又多分に小説的着想をも含んで居る。源平時代から鎌倉室町の時代は戦亂相つぎで寧日なき有様なところから小説の取材も多くは戦争を中心にした「物のあはれ」を寫して所謂戦記文學(又は軍記物語)を産み、保元・平治・平家の三物語・源平盛衰記・太平記はその代表作品と謂はれて居る。室町時代には又別に童幼の教訓を含んだ短篇小説、即ちお伽草紙と僧侶階級が顯著となるにつれてそれ等の間の戀愛生活又は道心と人心の相克の情みを描いた衆道物(兒物語)も出た。徳川時代に入つては小説は始めは慶長元和を経て寛文延寶の頃までは前期に近い假名草紙として現れ、淺井了意・鈴木正三・山岡元隣などがその名家であつたが、ついで元祿時代となり井原西鶴その特異の俳文學を應用した新文體を以て世相の様々を寫實的に描寫し、之を浮世草子と云ひ大に世に行はれ、此作風京に入つて八文字屋本となり

此亦大方の歡迎するところとなつた。後期文運の東漸して江戸文學の勃興につれて小説は始め貞享・享保の草雙紙として現れた繪本位のパンフレット型の稚拙低級なものであつたが、その名稱が赤本・青本・黒本と變り黄表紙となるに及んで輕快洒脱にして而かも一味痛烈な諷刺味を帯ぶるに至り、一個の滑稽小説・諷刺小説として見るべき作が出た。この戯作の題材が遊里の巷から拾はるゝやうになつて洒落本となり、洒落本が風俗紊亂の咎を以て禁止せらるゝやうになつて一方では眞面目な讀本となり、一方では遊里の洒落を旅の空や坊間に持ち出して滑稽本となり、黄表紙の短小低劣を改めて合巻物となり、洒落本と合巻物との結合して人情描寫を主にして(事實は大した人情描寫にもなつてゐない)は人情本となり、以て明治に至る。洒落本の京傳、讀本の馬琴、滑稽本の一九に三馬、合巻物の種彦、人情本の春水は各その方面を代表する名家である(尙各、人と書と文學事項の題について見よ)

せうせつげき 小説劇

明治三十年だいな新派の上場物窮餘の一策として、不如歸・己が罪・乳兄弟等の小説を脚本に改作して上演した劇をいひ、一時盛んに流行した(殊に大阪の劇

は一頃新派の出し物といへば小説の燒直しに限つてゐたかのやうに思はれた)

せうせつしんずる 小説神髓 二卷

坪内逍遙十七年の執筆で、十八年に公刊したもので我明治小説否な明治文學の黎明を告ぐる曉鐘としてこれほど博く喧傳された書は他にない。

一篇の要旨は「小説は人情自然の眞を寫すべきで、事實有り得べからざる不自然な架空妄想を叙したものは眞の小説ではない。この前提から見ると世間で褒めはやしてゐる馬琴の八犬傳の如きは小説としての價值は乏しい寧ろ却て春水一派の人情本の方が貴い」といふ。そして前述の如き眞の小説を「模寫小説」と唱へた(つまり寫實小説のことである)

苟にもおのれが意匠を以て強て人情に悖戻せる否心理學の理に反れる人物などを假作りいださば其人物は己に既に人間世界の者にあらず、作者が想像の人物なるから其脚色は巧なりとも其譚は奇なりといふとも之を小説とはいふべからず……

されば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて我假作りたる人物なりとも一度篇中においてゐる以上は之を活世界の人と見做して其感情を寫しいだすに



敢ておのれの意匠をもて善悪邪正の情感をば作設くることをばなまず、只傍観してありのまゝに模寫する心得にてあるべきなり

次に「小説の裨益」と題し

- 一、人の氣格を高尙になす事
  - 二、獎善誡惡
  - 三、正史の補遺となる事
  - 四、文學の師表となる事
- 次に小説の文體について雅文・俗文・雅俗折衷文の利害得失を論じ、將來の作家は徳川時代草双紙の雅俗折衷體を改良し主として世話物を描くがよいと注意し次に脚色上の注意として快樂小説・悲哀小説の二大別を説き我國從來小説の脚色上の弊をあげ、將來作家の避くべき「脚色の病」として、
- 一、荒唐無稽
  - 二、趣向一轍
  - 三、重複
  - 四、鄙野猥褻
  - 五、好憎偏頗
  - 六、特別保護（主人公や人物をいたはり過ぎること）
  - 七、矛盾撞着

- 八、學識織示（術學的の意）
  - 九、永涎長滯
  - 一〇、詩趣缺乏
- 最後に「時代小説の脚色」「主人公の設置」「叙事法」の三項を説いて終りとしてある。結末稍や意を盡さぬ嫌があることは作者自ら斷られた通りである。

この書の功績は、

- 一、小説の本質觀に確乎たる目標を立てたこと……
- 二、小説の文體に後來西鶴研究が盛となり硯友社風露伴風一葉風の多少特異なスタイルをそなへながらも何れも雅俗折衷體であつた——あれ等の文體を産んだこと
- 三、小説の手法の側から有益な創作指導書となつたこと
- 四、單に小説のみならず一般藝術論修辭論として傾聽すべき論議を示したこと
- 五、小説家の品格を高めたこと

などであらう（明治名著集二九一—三五九）

**せうそくぶん 消息文**

書簡文をいふ。奈良朝より王朝にかけては漢文の消息

文即ち尺牘體があり王朝期には別に雅文の消息文、例へば物語や隨筆や雜史に載つてあるやうなものが發生し、武家時代さなつて往來體となり、徳川時代に入つて候文體が略々整つて來た。明治以後はだん／＼に口語文が用ひられたが、習慣上尙改まつた消息やあまり親しくない所への手紙は候文が用ひられて居る。

この文體ばかりで小説を作ることは西洋では早くからあつたといふが吾國でも近頃段々見るやうになつた。

（例有鳥武郎宣言）（古類文學部一、三六〇—四八八）

**せうちく 篠崎小竹** 二四四—二五一、天

明元—嘉永四、七十一歳

豊後に生れ、大阪の三島護國の養子となつた。舊姓加藤、名は彌、字は承彌、小竹又は長堂と號した。經義を専ら古賀精里に學んだが、天才秀拔にして妙筆筆端に馳せ最も詩文を以て世に鳴り、又書も流麗雅健俊に一家を成した。その詩集に「小竹詩鈔」あり、その文は「近世名家文抄」に出て居る。

**せうは 春泥舎召波?** 安永天明年間

天明俳境の一明星で蕪村門下、几董と相並んで桃櫻とも評せらるべき名俳であつたが、不幸にして師に先だつこと十三年で早世した。その終焉師弟相愛の情美は

そゞろに孔門顔回の病床を聯想せらるゝものがある。病革まつて後起つ能はざるを想ひ蕪村の手を把つて、「恨らくは叟と共に流行を同じくせざること」と悲しんで間なく息絶えた。すると蕪村も三たび歎息して「我俳諧西せり、我俳諧西せり」と歎いたと云ふ。その集を「春泥舎句集」と云ふ。彼が句は蕪村と太祇の中間を行くものだと謂はれ、天性の才氣は几董より一步秀で、巧みに漢語を及び着想清新にして格調緊縮してある點など、蕪村の眞髓を體得した趣があつた（支考を俳魔と謂つて擯斥した處から見ると俳論の上にも已に一家の見識を具へてゐたことがわかる）

元日や草の戸越の麥嶺  
底た、く音や除寒の炭俵  
花踏て戻る公卿の草履哉  
淋しさは天井高し寺の蛸  
むせるなと麥の粉くれぬ男の童  
青梅や黄なるも交る雨の中  
少年の犬走らすよ夏の月  
二色の繪の具に足るや秋の雲  
一函の皿あやまつや煤掃  
郊外に酒屋の藏や冬木立

せうは 里村紹巴 二一八二—二二六〇、大永二—慶長五、七十九歳  
大和國奈良の人、幼時興福寺に入つて僧となつたが連歌に巧みて關白秀吉に召されて京に出てその殊遇を蒙つた。

せうはく 牡丹花宵柏 二一〇三—二一八七  
嘉吉三—大永七年、八十五歳  
具平親王の後裔太政大臣藤原具通の子孫で、本姓は久我氏後源姓を名のる。泉州堺の人、早くから連歌の才あり、八歳机によつて手習をしてゐると或人が後から、

ものをいはいはでもの習ふ君  
と云つたら即座に  
口なしの花の色はやうつすらむ  
と附けた。後宗祇について和歌を學び古今傳授を受けた。又連歌をも學びその方でも有名になつた。平素和漢楚の典籍をあさつたが儒をも老をも佛教をも嫌つて全く隠士を以て自ら居り宵柏と號し、外出するには必ず牛に騎る。その牛も角に金箔を貼つてあるので、京の人々これを指し笑つたが彼は平氣であつた。

後浮世の類を避けて攝津猪名野の片ほとり今の池田に庵を結び、名づけて夢庵と云ひ軒に四時の花を植ゑて

不斷觀花の嗜好を充たし、別に弄花軒と號し殊に牡丹を愛して牡丹花宵柏と云ふ（一説牡丹の句「春咲かぬ花の心やふかみ草」から出た稱へだとも云ふ）一日後柏原天皇夢に先帝（後土御門）御催しの連歌に宵柏が待つてゐると見られ、前内大臣藤原實隆を庵に遣はし應召して調を賜ひ彼に發句を咏ませて連歌せられ御親ら盃を賜つた。彼後に泉州堺に移り所謂三愛之樂（酒と香と花と）に悠々して天壽を以て逝いた。  
その著伊勢物語註は宗祇の講義を聽いての手記で後土御門院に献上した。又勅を奉じて「新式今按」を撰び以て心敬宗祇歿後諸説區々たりし連歌に一定の規矩を與へた。その連歌集を春夢草（續群四八八、一七の下、八四六—九九四）と云ひ、別に宵柏獨吟・觀音名號百韻、續群四八三、一七の上、六一九—六二二）あり紀行には短篇で「夢庵記」、群類四八〇、一七、三九七）がある。尙群類にはその續き（三九七—三九九）に「三愛の記」と云ふのも載せてある。

せうふう 蕉風

芭蕉の開いた俳諧の一派（「芭蕉」を見よ）

せうもん 蕉門

芭蕉の門人をいふ（「芭蕉」を見よ）

せかいづくし

世界國盡 五卷

福澤諭吉二年八月の作、その動機については著者自身左の如くに云つて居る。

兎に角に全國民をして世界を觀ること日本國內を觀ると同様ならしめんと欲し、之に就ては江戸の各處に在る寺子屋の手に江戸方角又は都路として府下東西南北の方角地名等を記し、東海道五十三驛の順序を五字七字の句調もて面白く書き綴り、兒童をして其手本の文字を手習すると共に其文句を暗誦して自然に地理を覚えしむるの慣行にして、江戸方角都路と云へば江戸中の貴賤貧富に拘らず毎戸每人これを知らざるものなき程の次第なれば、余は之を見て獨り首肯き、よし／＼日本國中の老若男女をして世界の地理風俗を知ること江戸の方角地名、東海道の五十三驛を暗誦するが如くならしめんとの一案を起し、俄に書林に就て江戸方角都路の版本を求め幾度も之を熱讀暗誦して乃ち其口調に倣うて綴りたるものは世界國盡なり（福澤全集緒言第一卷四四—四五）  
全篇を五卷に分ち、  
一之卷發端 亞細亞洲 同頭書圖入  
二之卷 阿非利加洲 同

三之卷 歐羅巴洲 同  
四之卷 北亞米利加洲 同  
五之卷 南亞米利加洲 同  
大洋洲 同

卷末附録として、

地理學の總論・天文の地學・自然の地學・人間の地學等、つまり通俗地理學概論とも謂ふべき四項を加へ、本文は處々の字あまりを除けば全部七五調で、朗誦暗誦に便利なやうに作られてあり、頭註には  
亞細亞人種支那の下人、支那風俗・香港の景・孔子門人へ教る圖・雁寺洲河の景など挿畫を澤山入れ（その畫も拙くはない、これは英の地理書のものをもそのまゝ採つたものと思はれる）文章としては  
世界人民の事

世界の廣さは英吉利の一里四方を一坪に立凡二億の坪數ありこれを四に分け三分は海にして一分は陸なり、故に人の住ぶ陸の廣さは五千萬坪なり、但し英吉利の一里は日本の十四町四十三間に當る  
と様に世界地理を知るに必要な語釋や敷衍がしてあるもさ／＼地理啓蒙の趣旨で作られたものだから平明流暢を主として詩趣の有無は措いて問はなかつたであら

うが、後にして之を讀みかへしてみると氏の漢文國文の素養が圓熟して可なりに詩味もあり、ずつと後れて出た新體詩抄の詩形の先驅のやうになつて居るので特に注意されて居る。

アメリカ合衆國の獨立戰爭を歌つた一節、

天の道理に基て

國に報ゆる丹心の

不羈獨立の勢は

北亞米利加の十三洲

威光を以て命じたる

告げんとするに便なく

自由の趣意も日々に

盛ることぞ遺恨なる

遺憾に遺憾かさなりて

頃ば安永五年の秋

四十八士の連判狀

「英吉利」王の罪を責め

武器兵糧も乏しき民

新手引替へせめ來る

おそれ携まぬ鐵石の

失ふ生命得る自由

國に報ゆる死を取らん

長の月日の守攻せめまもり

智勇義の名を千載に 流す血の河骨の山

七十二戰の艱難も 消て忘るゝ大勝利

(福澤全集第三卷 六七九—七九二)

せかいしゆき 世界主義

明治卅年だいに日本主義の反動として雑誌「世界之日本」や徳富蘇峯の言論や、基督教信者などによつて唱へられ、再び歐米崇拜の思想を穩健な程度に於て復活し、排他的反歐米的主張や行動を非難し、後來の人類愛の前驅を爲した。日本主義のやうに定つた綱領も集團もなかつたが文學界には好影響を及ぼして海外の新思想や新文學を研究する動機となつた。

せきがはらのたかひ 關ヶ原の戰

資料、關原軍記・關原記・東西記・關原始末記・關原合戰誌記・關原軍記大成・史籍重篇應仁記一〇ノ二五・史籍細川忠興軍功記二二・史籍老人雜話上一〇・藩翰譜七の上一九・改定史戸川記下六七五・益軒朝野雜載三ノ八三・鳩巢小説中一四・史籍改正三河風土記三九ノ六・武家俗説辨二の一七・武邊咄聞書一の二八・日本西教史下の一八四・日本戰史關原役一  
廣文庫第十一册七二—七五  
黨志堂 關ヶ原軍記

上田屋 訂正關ヶ原軍記  
大川屋 増補關ヶ原軍記

せきご 松永尺五 二二五—二三一七、文祿元—明曆三、六十六歳

國文學者にして俳人なる松永貞徳の子で、名は遐年、字は昌三、號は尺五(又、講習堂)夙に藤原惺窩に朱子學を學んで高足となり、博覽強記な上に能く後進を啓發した。その門下に木下順庵・宇都宮運庵等立派な儒者が輩出した。

せきてん 釋奠

しやくてん「釋奠」を見よ。

せきとりせんりやうのほり 關取千兩幟

明和四年(二四二七)竹本座の爲めに書き下されたもの。作者は近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出雲・八民平七・竹本三郎兵衛の名が出て居る。

關取稻川は大切な蟲鼠客鶴屋の若旦那禮三の爲めに才覺しようとして二百兩の金に詰まり、禮三の戀敵(遊女錦木を身請けしようとする)市原九平太が得意の鐵ヶ嶽と明日の土俵の晴れの勝負をわざと負けてやつて一方錦木を禮三に譲らさうと悲しい決心をした。鬚撫でつけに後に廻つた女房おとわはいつにない夫の浮か

ぬ顔を見て直覺的にそれと感づき、我身も容易ならぬ決心をした。さて翌日の大相撲、番組は次第に進んで愈々二人の取組となつた。負けようと思ひながらも押せば食ひさめ突けば刃れ、ともすれば鐵ヶ嶽がたちたちとなるのでモウこゝらで……なさけないが振つてやれい……と引き脚の折柄蟲鼠の客の聲が、リッ一進上金子二百兩、稻川殿へ蟲鼠より「聞くさひとしく稻川にはかに態度を攻勢に變へ物の見事に取つて投げヤンヤの聲にはやされてやがてひいきの客はと見れば思ひきや、おとわが身を浮川竹に沈め操を棄て、操を立てようとするのであつた。このおとわを中心としての夫婦愛と相撲道の意地とがうまく渾融してある點がこの作の特美であらう(帝文四七、三七三—四三二)

せきのあきかせ 關の秋風 一卷

松平定信、天明五年(二四四五)廿八歳。白河へ歸城の時名殘を惜しんだ姉君の爲めに白河の奇事珍聞を和漢混淆文體の隨筆に綴つて贈つたもの。今百家説林の八に入る。

せきふ 川村碩布(樞寮、蓬首、六氣庵)?

通稱七郎兵衛、元武州入間郡毛呂本郷村の素封家であつたが、後産を破つて俳諧師となり、白雄に學んで門

下八大家の一人に數へられ葛三から春秋庵稱號を讓られて四世となる。碩布發句集世に行はれて居る。

**せきを** 藤原關雄(東山進士) 一四六四—一五一三、延暦二—仁壽三、四十九歳

平安朝初期の學者、仁明文徳の兩朝に仕へ兵部少輔兼齋院長官に任ぜられた。和歌は古今集に、漢詩は經國集や鑒真東征殿に出てゐる。

**せし** 勢語  
伊勢物語の略稱。

**せつさい** 森田節齋 二四七一—二五二八、文  
化八—明治元、五十八歳

大和五條の人、名を益、字を謙藏といひ、壯年頼山陽に學んで文名が高かつた。節齋遺稿といふのがある。

**せつかい** 中津絶海 一九九六—二〇六六、延  
元元、一一、一三—應永一二、四、五、七十歳

土佐國津野の人、十三歳にして上京間もなく剃髮、深く夢窓國師に愛せられた。三十三歳にして支那に行き杭州の中竺に寓して全室和尚の教へを受けた。太祖皇帝詔を賜ひ、てあついで待遇と賜物とを下された。歸來四方の尊崇頓に上り細川頼之・足利義滿殊に彼を尊び應永八年七月にはその住、相國寺の寺格を上げて五山

第一とした。遺偈にいふ「虚空落<sub>レ</sub>地 火星亂飛 倒打<sub>二</sub>筋斗<sub>一</sub> 抹過<sub>二</sub>鐵圍<sub>一</sub>」と、彼は能辯にして且つ能文、その内集には四回の語録があり、外集には「蕉堅稿」がある(上村觀光氏五山文學小史、八五—八八)

**せつきよくしふ** 雪玉集(聽雪集) 十八卷  
三條西實隆の家集で、當時三玉集の一としてめでられた。

**せつさい** 西山拙齋 二三九五—二四五八、享  
保二〇—寛政一〇、六十四歳

備中の人、名は思義又は正、大阪に出て儒學醫學を修め、更に京に上り那波活所について程朱の學を授けられ、從來の古文辭學説を棄て、之に従つた。學成つて故郷に歸り大にその風を廣めたが、一體に君子肌の人で學よりも徳によつて人に敬せられてゐた。その著に拙齋詩文集がある。

**せつだら** 齋藤拙堂 二四五七—二五二五、寛  
政九—慶應元、七、六十九歳

伊勢津藩の人、江戸の藩邸に生れ、名は正謙、字は有終、拙堂又は鐵研と號し通稱徳藏、致仕の後は拙翁と稱した。古賀精里に學び程朱の學を奉じ古文の泰斗として聞え、津藩の儒官を勤めた。その學實用を旨とし自ら

派に屬する人々をいふ。

**せつれい** 三宅雪嶺 萬延元—

加賀の人、思想家として、哲人として、高士として、世の先覺として加賀の白山(雪嶺)の如く崇高偉大なものがある。

十六年東大哲學科を出、二十一年雜誌「日本人」を發行して盛に國粹主義を唱へ、後新聞「日本」に社説を草し雄渾の文高邁の見朝野に推重せられ、後大正十二年政教社と分離するまで雜誌「日本及日本人」の中軸となつて權威ある評論をつとめた。その著には宇宙・小泡十種・大塊一塵・世の中・修養語録・想痕等がある。

**せどうか** 旋頭歌

五七七、さいつて又五七七と排列する音律の歌態で頭をめぐらす歌即ち旋頭歌と謂ふ。記紀日本武尊が日燒翁との問答歌をはじめ二三あるが、萬葉には六十首餘りあり古今集雜體の部には數首あるが、元來この音律は邦人の旋律に對する趣味性と合はない故かその後あまり發達しないで終つた。明治に入つて神谷保朗氏が一時之を復活しようとしたが之も大した反響なしにすんだ(古類、文學部一、五四〇—五四四)

**せわもの** 世話物

奮て本邦地理學の權輿を爲し、又種痘館を設けて痘患を救ひ、その他極めて人倫に篤かつた。その著拙堂文集・月瀬記勝・拙堂文話・續拙堂文話等何れも世に稱せられ、現に教科書文として採られるものも少くない。

**せつちうあん** 雪中庵

蕉門十哲の一人、服部嵐雪の家號で、代々その門流によつてその號をつがれた。

**せつちうあんれうた** 雪中庵蓼太  
れうた「大島蓼太」を見よ。

**せつちうがく** 折衷學

徳川時代細井平洲・片山兼山・井上金蛾・太田錦城等によつて唱へられた一種の儒學說で、新舊各派の採長補短を標榜するもの(古類文學部二、八〇六—八〇八、日本倫理彙編九、折衷學派の部)

**せつく** 絶句

漢詩の一體で、起承轉結の四句よりなるもの、之に五言絶句と七言絶句とがある。各々の項を見よ。

**せつご** 雪後

くわさう「中村花瘦」を見よ。

**せつもん** 雪門

蕉門十哲の一人、服部嵐雪の立てた俳團若くはその一

戯曲脚本の中、作品當時の世相を脚色したものの。元祿十四年(二三六一)近松が(長町女腹切)作に始まるといふ。以後「梅川忠兵衛、冥途の飛脚」「女殺油地獄」など續々名作を出したし、他の諸家にも多くの世話物の作が出た。幕末明治へかけては河竹黙阿彌が多く筆を染めた。明治に入つてからも舊江戸作者風の現代物を世話物と云ひ、新世話物とも謂ふべき西洋現代の戯曲に示唆を得たものを社會劇と云つてゐるが社會劇もその本質はつまり世話物である(水谷不倒氏世話淨瑠璃大全、黙阿彌全集等)

**せんあ** 香川宣阿 ?—二三九五、?—享保二〇、七十八歳(一説九十歳)

周防岩國の藩士、通稱飛眞、號、梅月堂、早く致仕して上京し、清水谷實業について歌を學び、終に一家をなし、晩年一條に住み薙髮して仙阿彌と稱し、歌道三昧に耽る。人呼んで「一條の今西行」といふ。香川景樹の先祖に當る人。著には草庵集蒙求諺解・三玉事抄・捨る言の葉・須磨明石抄・梅月堂隨筆などがある。

**せんあ** 善阿 ?

花園天皇の應長正和の頃を世盛りとする連歌師で一世の宗匠として度々連歌の席にも出、その門下たる救濟・

周阿・良阿・順覺・信照等の徒によつて室町時代連歌の勃興を見るに至つた。

**せんかあはせ** 選歌合

歌合の一種、番組が非常に多い時、その中の秀味を選んでその分について優劣を争ふことないふ。

**せんかう** 芝全交 ?—二四五三、?寛政五、六、一八、

本姓山本、通稱藤十郎、赤羽觀世音座の能樂師で、人となり滑稽洒落にして文筆を好くし、戯作に熱注して當時黄表紙作者中、京傳の壘を摩するもの唯一人彼あるのみと謂はれた。一代の黄表紙三十種、その内左の九種は續帝國文庫第三十四編黄表紙百種に入つてゐて何れも名高い。

當世大通佛開帳・通一聲女暫・御手料理 御知而已大悲千録本 哥舞妓茶目傘・拜壽仁王參・京鹿子娘泥鰯汁(どぜうじ)・年寄冷水會我・浮世操九面十面・全交法師常々草。

**せんかく** 仙覺 一八六一—一九三四 建仁元—文永一一、七十二歳

鎌倉時代、比企谷新釋迦堂の權律師で若くより歌道に心を潜め、殊に萬葉研究に熱注し、大將軍本即ち鎌倉本の最も優れたものと上方系統の松殿本二條家本六條

家本等二十種内外の諸異本を前後五回に亘つて對校し訓點を定めた。後世之を新點といふ。晩年更に筆を呵して之が註釋を試み萬葉集抄二十卷(又仙覺抄ともいふ)を著した。その訓點も註も今日から見れば猶不充分な點もあらうが、當時にあつては斬新な研究で異常の努力の結晶と謂ふべきである。彼又和歌をもよくし續古今始凡て四首(續拾遺、新拾遺、新續古今等)勅選集に採られたが何といつても彼は萬葉學上劃期的の恩人といふが一番ふさはしい、

花の歌とてよめる、  
面影のうつらぬ時もなかりけり心や花のかゞみ  
なるらむ(續古今、卷十七、雜歌上)

**せんがくし** 善學士

ためまさ「善滋爲政」を見よ。

**せんきぶん** 戰記文

鎌倉時代から出始めた一種の戰爭小説とも謂ふべく、源平合戦以後の諸合戦を取材して之を文學化したものである。保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記之を五大戰記物語といふ。

**せんく** 千句

連歌又は俳諧に於て句數の百なるものを百韻といひ、

百韻の十集まつたものを千句といふ。つまり千韻の意である(「百韻」を見よ)

**せんくわ** 笠亭仙果 二四六六—二五二八 文化三—慶應四、二、九、六十三歳

尾張熱田大神宮神領の里正高橋孫右衛門の男、實名は大宅廣道、字は子田、通稱龜三郎(後彌太郎)輒齋・狗々山人・松録翁等の號がある。幼時熱田の祠官磯野右近政春について習字句讀の教を受け、又尾張の儒臣鈴木常介(名は朗字は叔甫)について漢學を、高松中納言について歌道を教はつたが、又傍ら柳亭種彦を慕ひ書を寄て門人となつてゐた。その後家産倒潰の厄にあひ江戸に行き淺草新旅籠町に卜居し、種彦の紹介により草双紙を書いて身過ぎとした。彼は又狂歌をもよくし三世淺草庵の門に入つて四世淺草庵と稱した。その作十餘種就中有名なのは八犬傳犬廻草紙二十八編である。

**せんこひやくばんらうたあはせ** 千五百番

歌合 第二十迄

土御門天皇の建仁元年(一一八一)に後鳥羽上皇の御主催で催された歌合で、題は春・夏・秋・冬・祝・戀・雜・歌人は良經・定家・家隆・慈圓・寂蓮・有家・顯昭・讀岐・宮内

卿・俊成女・丹後越前等三十人、判者は権大納言忠良以下十人、古來例なき大仕掛な歌合として有名なもの(増鏡おどろが下、續國一〇五四―一一三三、國刊一期續々群一四)

**せんざいわかしふ 千載和歌集 二十卷**

藤原俊成が後白河院の院宣によつて文治四年(一八四七)四月廿二日に撰進したもので、歌數千二百八十四首、稿本の立派であつたことを定家は、

日來自筆御清書白色紙、紫檀丸貝鶴羅表紙、組紐、外

題中務少輔伊經書之納宮、薛繪、自御筆手有新歌、末斜令出給於御前、殊有觀感……(明月記)と云つて居る。

撰者の抱負は金葉詞花の糟粕を管めず直ちに三代集に繼ぐ底の立派な撰集とするに在るより、歌體もひたぶるに高尚幽玄を旨として選んだ。撰者自身の歌が少いと仰せで三十六首までも御採用になつたのも無上の名譽を謂ふべきである。歌風の一例、

法性寺入道、前太政大臣、内大臣に侍りける時、十二首の歌よませけるに 源俊賴

烟かと室のやしまをみしほどにやがても空にかすみぬる哉

花の歌とてよみ侍りける 左近中將良經  
さくらさく比良の山風ふくまゝに花になりゆく  
志賀の浦なみ

題しらす 顯昭法師

さらぬだに光すゞしき夏のよの月を清水にやどしつる哉

堀川院の御時百首の歌奉りける時

鷹かりをよめる 藤原仲實朝臣

矢形尾のましろの鷹をひきすゑて宇陀の鳥だちをかりくらしつる

贈左大臣長實藤八條の家にて

戀のこゝろをよめる 左京大夫顯輔

今はさは逢見むまではかたくともいのちまならむ言のはもがも

藤原仲實朝臣、備中守にまかれりける時ぐして下りたりけるを思ひうすくなりて後月

をみてよみ侍りける 遊女戸々

數ならぬ身にも心のありがほにひとりも月ながめつる哉

尙、撰者俊成の歌にして本集に採られたもの數首をあける、

おもかげに花のすがたをさきだて、いくへこえきぬみれのしら雲

ゆうさればのべの秋風身にしみてうづらなくも

ふかくさのさと

すぎぬるか夜半のねざめのほととぎす聲はまくらにあるこゝちして

まばらなるまきのいたやにおとはしてもらぬ時

雨や木のはなるらむ

すみわびて身をかくすべき山里にあまりくまなき夜半の月哉

よの中よ道こそなけれ思ひ入る山のおくにもしかぞなくなる

この集については薩摩守忠度が「さよなみや志賀」の歌、西行が鴨立澤の歌、鴨長明一首を採られてひどく悦んだこと、道因法師が幽霊のこゝなど逸話も少くない。美作前司入道が難千載集を書いたが他は誰も非難する者はなかつた。唯雑の部に長歌をば短歌として掲げたのはその子定家をしてすら「先人一期の遺憾此事也」といはせた。要するに八代集中出色の歌集である。

**せんざうあんいちひと 淺草庵市人?**

一二四八〇、?文政三、七十餘歳  
江戸の人、通稱伊勢屋久右衛門、家は質屋であつたが彼は狂歌を好み、その方で世に聞えて居つた。

**せんざうげき 戦争劇**

明治廿七八年の日清戦役の際、之を取材した新派劇のことで「原田重吉の門破り」など殊に喝采を得た。藝術的には價値の乏しいものであつたが他日の社會劇の先驅として意義がある。

**せんし 長谷川千四?**

享保の頃、浪華の戯曲作者、元は大和長谷寺の僧であつたが、後浪華に出て竹本座附淨瑠璃作者となる。その作八種、大抵竹田出雲及び文耕堂と合作であるが、彼れ單獨の作で名高いのは京土産名所井筒と、壇浦兜軍記とである(兜軍記第三、阿古屋の琴責は殊に喝采を得て今も度々上演されてゐる)

**せんしうあんさんたら 千秋庵三陀羅**

さんたら「三陀羅」を見よ。

**せんしふせう 撰集抄 九卷**

新古人の傳記・行狀・異蹟等苟くも出家得道のたづきなるものは萬遍なく之を採つて四六駢體の擬古文に綴つたもので、文體の華麗なものと西行法師の作ださい

ふいで割合に世の注目を引き室町期の謡曲や徳川期の雅文小説に影響してゐる。けれども今日の考證では西行の作ではなく鎌倉初期の或隱遁者流の筆で、書かれたのは凡そ承久四年以後間なしのことであらうとなつてゐる。本書の序には、

生死の長き眠いまだ醒やらで夢にのみほだされつゝ、水の面の月を質とおもひ鏡の内のかげをだにとふかく思入てあけくれば只妄念の心のみうちつゞきて生死の船をよそへずして屠所の羊の歩は我身の外にもてはなれ、鳥部舟岡のけふりをよそにみて過にし方四十餘年の霜をいたゞき行末しらすけふしもやあるらむ、しかれば同夢のうちの遊にも新舊の賢跡を撰求ける事のことの葉を書集め撰集抄と名付て座の右に置いて一筋に知識に頼まんとなり、巻は九品の淨土に思宛十に一をらし事は八十隨好に思よそへて百に廿を殘せり抑凡夫の習、明眼しひて眞月を見ず、心老て斷妄の利劍おこらざる物なりされば偏に冥助をあふぎ奉らんが爲に巻毎に神明の御事をしるし載奉り侍り

と、つまり無常迅速を實證して道心を勧めようといふ趣旨で九卷八十項に別けたことまで佛典に基づいた、

かれあきらのみこ「兼明親王」を見よ。

**せんとうか 旋頭歌**

せだうか「旋頭歌」を見よ。

**せんな 千那** 二三一—二三八三、慶安四—享保八、四、一七、七十三歳

法名、明式上人、江州堅田本福寺十二世の法主で早く芭蕉に入門し、俳諧・俳句の名手として世に知られた。千那はその俳號で葡萄坊ともいつた。

**せんぼう 栗山潜鋒** 二三四—二三六六、天和元—寶永三、廿六歳

山城淀の人、本姓長澤名は愿（又、成信とも）字伯之、通稱源助、桑名松雲に入門してから栗山と改姓、十八歳の時八條親王の伴讀となり厚く禮遇せられ「建保大記」（保元—建久の君臣の賢愚政事の得失を論じたもの）を書き、親王薨去の後、水戸義公に聘せられて修史の事に與り次で彰考館總裁に任ぜられ、義公の喪記や「義公行實」の撰にも與つた敬帝集・倭史後篇・神皇后論等の著がある。文章は彫澤華麗の致に乏しきより時人或は文に拙なりと評するものあり、自身も之を採つて拙齋と號したといふ。

**せんみやう 宣命**

とを明らかにしたものだ。

近頃この書を論じて精細なのは野村八良氏の鎌倉文學新論二八〇—三二五、同氏の見られた諸本は、一、嵯峨本・二、慶安三年本・三、再刻西行選集抄・四、續群書類從雜部百三（東京帝大附屬圖書館本）五、内閣文庫本・六、橋本進吉氏所藏本

などである（大佛叢中同書（佛敎全書刊行會發行））

**せんしやうくわう 善相公**

きよやす「三善清行」を見よ。

**せんしゆ 千首**

せんしゆのうた「千首歌」を見よ。

**せんしゆのうた 千首歌**

歌の数を千首と定めて味むもの何々千首といふのがそれで普通の題、數は

春 二〇〇 夏 一〇〇

秋 二〇〇 冬 一〇〇

戀 二〇〇 雜 二〇〇

である。

**せんだいはぎ 先代萩**

めいばくせんだいはぎ「伽羅先代萩」を見よ。

**ぜんちゆうしよわう 前中書王**

奈良朝以前國文を以て記されたる天皇上皇の詔勅文をいふ。宣命とはみこと（命）をのる（宣る）の熟語の奥音よみだと想はれる。現存せる宣命は凡て六十二篇（内容から見ると四十九種外に高橋氏文にある磐鹿六獨命を引はれたものが一篇と都合五十種六十三篇になる）その内容は即位・立后・立坊・改元・五節・出金・追賜・恩撫・弔賻・遣唐・外交等に亘り今日ならば詔勅・勅令・勅諭・宮内大臣の訓令、賞勳局の勅記などに相當する。宣命は祝詞や風土記中の國文と共に上代散文の代表的なもので、その行文は平明と莊重と兩立し難き二要素を調和し宣命書と稱する特殊の形式（語尾や助詞を細書して、

倭根子天皇命授賜 比負賜 布貴 支高 支廣 支厚 支大命 平受賜 利恐坐 且此乃食國天下 平調賜 比平賜 比天下乃公民 平惠賜 比撫賜 平止奉母隨神所思行 佐久止 詔天皇命 平諸聞食止 詔

と様に書く）を用ひ、古代日本の原始朝廷の素朴な姿さながらの表現で君臣の親しみは全く親子の如く、訓諭の宣命の加きはまるきり天皇の御言葉の速記かと思はれるやうながある。

宣命をのる時の儀式次第は貞觀式には數段に分けてあ

るが尙細かく云へば大體左の通りである(時に異同があつたらしい)

- 一、中務省内記御旨を奉じて起草
  - 二、天皇その草稿を閲して日附を入られる、之を「御割日」といふ
  - 三、中務卿に賜はる
  - 四、中務卿より大輔にわたす
  - 五、大輔より少輔にわたす
  - 六、少輔は之を保存し別に一通を認めて太政官に廻す
  - 七、太政大臣左右大臣大納言等審議の上、もう一度大納言から天皇に覆奏する
  - 八、天皇は之を見そなはして「可」と御書入れになる、之を「御割可」といふ
- そこで左の書式が出来上る、
- 本文
- 年 月 日
- 中務卿……………宣
- 中務大輔……………奉
- 中務少輔……………行
- 太政大臣……………

左大臣……………

右大臣……………

大納言……………言

詔書如右請奉

詔付 外 施行

謹言

年 月 日

九、之を宣命大夫に傳へる(參議以上の人で宣命の譜に堪能な人が命ぜられる。宣命に一定の譜があつたことは宣命譜といふ名が日本見在書目録にあることによつても、仲野親王が藤原緒嗣について學ばれたのを六條の御自邸で藤原基經と大江音人とに御授けになつたといふ三代實錄の記事によつても察せられる)

一〇、宣命大夫、宣命をのる。列席の諸臣は一段終る毎に「……たまふすめらが天命をもろくきこしめせと詔る」と様に「とのる」が段の切れ目になつてゐる「唯々」と畏こまる。

大體以上のやうな次第だが時には例外もある。第廿九詔天平寶字八年十月壬申の「淳仁天皇を淡路へ御配流」

藤原永手の巻去に對する弔帖

五一、光仁 寶龜二、二己酉 宣命書

せんみやうがき 宣命書

せんみやう「宣命」を見よ。

せんりう 川柳(狂句)

前句附の前句のみの獨立した詞形五七五の音律を以て穿ちや洒落やをかしみを主として人事を諷誦した狂體の句で四世川柳が「俳風狂句」と稱して作りかけてから徳川末期民間唯一の娛樂文藝のやうになつて明治に入つてもその名残が賑はうた。

例「居候寝言にいふがほんのこと

手を拍つてひとりあやまるものわすれ

嫁の酌ちつとといへばちつとつき

(尙人の「川柳」の項を見よ)

せんりう 柄井川柳 二三七八―二四五〇、享

保三―寛政二、七十三歳

近世、江戸の前句附の判者で、本名を八右衛門と云ひ一に初世川柳とも云ふ(作品としての川柳は四世川柳から始まる)

ソの部

の孝謙上皇の宣命の如きは天皇が圖書寮へ御出でになつてゐるところへ少納言が行き向つて立ちはだかつたまゝで宣制したといふことが水鏡卷下第四十八代の所にある。又宣命は純國文だといふが時には漢文も交つて居る第三詔慶雲四年七月壬子元明天皇御即位の宣命の「大赦天下自慶雲四年七月十七日時爽以前大辟罪以下云々」から「今年田租を復し給はく」までの如きがそれだ、又宣命とは云ひ條單に御消息に過ぎないやうな内容もある、第九、十、十一の三詔五節についての元正聖武兩陛下の宣命の如きがそれだ。

宣命の用紙は京の紙谷川で漉いたのを用ひられ通常の紙は黄紙伊勢大神宮へは縹紙賀茂神社へは紅紙を用ひられた。

宣命の佳篇として諸書に引かれるものは次の數篇である。

順序數	天皇	年月	内容
一、	文武	元、八、庚辰	御即位
三、	元明	慶雲四、七、壬子	御即位
六、	聖武	天平元八、癸亥	改元
七、	同	天平元、八、戊辰	立后
二五、	淳仁	天平寶字三、六、庚戌	尊號御追賜稱號 御下賜



そらいん 西山宗因 二二六五—二三四二、慶

長一〇—天和二、三、二八、七十八歳

近世初期の俳匠、松永貞徳が古風の後に出て談林(檀林)の一派をたてた。名は豊一、俗稱次郎作、號梅翁(又西翁、元肥後八代の城主加藤右典麿正方の侍臣で寛永九年主家の潰滅と共に上方に来て伏見、北野、津山と放浪した。津山では寂證寺の豪信法師について和歌と連歌を學び後更に懷惠庵里野昌琢に就て連歌を學んだ。時に京師の地は古風の宗匠松江重頼・山本西武などがあつて俳諧が流行してゐたので、彼も寛永十三年三十二歳の時、重頼の門を叩き、清談一回と次第に俳諧の世界に心を引き入れられ、遂に生涯を斯道に捧げんの決心つき始めは古風に沈潜したが、その中次第に自家独自の俳眼を開き、談林の一派を立て、海内を行脚し、入門到る處に多く遂に古風を壓倒した。その特徴は首として發句に力を注いだこと、用語を自由にしたこと、調に字あまりを好み用ひたこと、想に古風よりも輕快味を多く取入れたことなどにある。

書初や行年七十攝州の住

頭山寒うして北に峨々たる青山なし  
古歌に曰く千とせぞ見ゆるかゞみ餅

はつ花や急ぎ候程に是ははや

花に吹曉風殘念此時なり

等は最もよく彼の句風を代表してゐる。彼の句中

新春の御慶は古き言葉かな

浪花津にさくやの雨や梅の花

などはまだ古風の臭味——わざとらしき對照法や秀句——を脱しない。彼の著は

西翁十百韵と云ふ千句集が延寶元年に

梅翁宗因句集(門流谷素外の編で追加・拾遺・後拾遺・後々拾遺等をも加へて)が文化二年に出てゐる(前二種は俳文三に、後のは同一八にある)その門人には岡西惟中・井原西鶴・前川由平・内藤露沾等多くの俳星が出た。

そらがく 宋學

支那宋代の儒學(即ち理學)をいひ程朱はその主なるものである(故西村天因博士宋學概論)

そりかん 山崎宗鑑 二二二五—二二一三、寛正

六—天文二二、一〇、二、八十九歳

本稱支那彌三郎範重(一に範光)後に山城山崎の草庵に住んで油筒を賣つて口を糊し自から山崎宗鑑と名のつた。祖先は近江源氏、佐々木義清、彼も始めは武士として足利將軍義尚に仕へ、延徳年間近江甲賀の六角高

頼攻めの時には屢々軍功を立てたが、その陣中にして將軍俄かの薨去より世の無常を觀じ、廿五歳のあたら

身を法衣の人と世を捨て、始めは攝州尼崎に住み(その頃一休和尚に參禪したと云ふ説もあるが、一休は二

〇五四—二一四一、應永元—文明一三、一一、二一、八

十八歳で彼の十七歳の時已に入寂の筈であるから謬説と斷言してよろしからう)ついで山崎の竹林中に小地

を占めて庵居し、風流韻事を以て自ら樂しむ。後西國

行脚の途に上り、歸途廻り路して讃岐に行き、豊田郡

坂本村興昌寺の傍琴禪山が氣に入つて、そこに淹留し

一夜庵と名づけて俳興に浸つてゐる中、癪を病んで歿

した。

彼は良基以來宗祇に至るまでに大成された連歌の規矩

法式を無意味の拘束とし、新たに「俳諧」を唱へて想も

用語も形式も自由無拘束で、機智滑稽を以て自在に言

はんと欲する處を句にした。つまり俳諧は此宗鑑に始

まつたものでその著犬筑波集(俳諧文庫二)はとりも直

さず我邦俳書の嚆矢である(思ふに鎌倉時代の始め連

歌が和歌から分派した時の精神もこの宗鑑の趣旨と同

じであつたから、その點から見ると彼が主張は連歌の

復古とも謂ふべきである……がその作について觀れば

更に數歩の長が認められる)

恭盤の上に春は來にけり

うぐひすの巢ごもりといふ作り物

あなうれしやな。餅いはふ頃。

……………

彼は更に發句にも力をそゝいだ。但しその句はまだ連

歌の寄生とも謂ふべき古臭味を脱せないものが多く、

秀句を抜きにしては何の一節も見出されない。

わかなどいふ下女しかられければ

つまれてはまたた、かる、若菜哉

衣川ちかき所にて

辨慶もたつや霞の衣川

の如き、又

苦々しいつまで嵐吹のとう

花よりも團子と誰かいはつゝじ

笠松はさつきのためのごようかな

と様のもが多數で、稍内容にふれた想としては、

寒くとも火になあたりそ雪佛

出雲への留守もれ宿の福の神

などで、詩趣あり畫趣ありとも謂ふべきは

手をついて歌申しあぐる蛙かな

元日の見るものにせん不二の山  
彼は、又機智の天才とも謂ふべく、即興即吟直に人の  
頤を解く。有名な次の連句の如き吾々が日常人と對談  
する位の早さで出来たものと想はれる。

- 一、手にもてる姿を見れば俄鬼つばた 藏原實隆
- のまんとすれば夏の澤水 宗 長
- 蛇に追はれて何地かへるらん 宗 鑑
- 二、尻毛を傳ふ雫とくく 某
- 水鳥の尾羽の米けき解けて 宗 鑑
- 三、切たくもあり切たくもなし 某
- 盗人をとらへて見れば我子なり 宗 鑑

(思ふに江戸時代に入つて榮えた貞徳が古風から蕪村  
が安永天明調に至るまで、偕は狂歌・川柳・冠附の雑文  
學に至るまでもその心して觀れば皆彼の宗鑑の一身に  
原始の面影を認めることが出来よう)

**そらぎ** 宗祇 二〇八一—二一六二應永二八一

文龜一二、七、二八、八十二歳

三好姓、飯尾氏、紀州の伎樂師の子であると云ふ。自  
然齋と云ひ見外齋とも云ひ、比叡山下の庵居時代には  
種玉庵とも云ひ。後柏原天皇より「花の本」の稱號も許  
された(花の本と云ふ語、早く十訓抄・沙石集・太平記な

どに見えてゐるので、柿本・栗本などに對して斯く稱せ  
られたとも云ひ、宗祇は西行の崇拜者であつたから、願  
はくは花の下にて春死なん」の歌から彼の嗜好に合ふ  
やうにつけられたものだと云ふ) 歌道を東常縁に學  
び文明三年古今傳授を得た。是は古今傳授なるもの、  
始めである。又連歌を猪苗代兼載に學んでその熱心な  
修業に師匠を驚かし遂に歌よりもこの連歌の方で名を  
なした(彼は又卜部氏について神道をも習つたと云ふ)  
明應四年勅を受けて新筑波集を撰ぶ。連歌の法式これ  
によつて規矩を得、爲めに連歌全盛の偉觀を呈するに  
至つた。

彼は西行を慕つて、常に旅行をつゞけ、遂に相州湯本の  
宿に客死した(墓は駿河國桃園定輪寺)

彼の著、右の外連歌の書に吾妻問答群三〇三、一〇、一  
〇八一—一〇三があり、紀行に筑紫紀行、歌に自讃歌註  
を始め且爾波大概抄三抄、愚句老幼初學抄、老濃壽佐  
美、群三〇五、一〇、一〇八三—一一〇五、山口記、  
白髮集などがある。

**ぞろぎほふし** 増基法師?

關白基忠の子で叡山の僧、村上の朝の歌人だが傳記は  
未詳、歌は後撰(一)・後拾遺(一二)・新古今(二)・詞花・

玉葉・續後拾遺・風雅・新千載等に入り紀行に「庵主」と  
いふのがある。

**ぞろくほふし** 承均法師?

古今集歌人(春に二首と雜に一首)元慶の頃の人か?  
古抄に貫之の甥とあり。又大和掾某の子ともあり。

雲林院にて櫻の散りけるを見てよめる

櫻ちる花のところは春ながら雪ぞふりつ、消え  
がてにする

うりんいんにて櫻の花をよめる

いざ櫻われも散りなむ一さかりありなば人にう  
きめ見えなむ

**そらげいしゆちゐん** 綜藝種智院

淳和天皇の天長五年(一四八八)弘法大師が支那每坊の  
閭塾每縣の郷學に倣つて一般士庶に佛教本位に儒教を  
加味した教育を施す爲めに設けた私學で、我國民教育  
の先蹤として教育史上特筆されて居る(古類文學部二、  
一三一—二一三—一四)

**そらしやう** 宗匠

和歌・連歌・俳諧・俳句等の大家で門戸を張り、又は衆人  
から師と仰がる、人々をいふ。

**そらすけ** 並木宗輔 二三五三—二四〇九、元

祿六一寛延二、九、七、五十七歳

通稱松屋宗輔、號は千柳(別に、舍柳・市中菴) 浪華の  
人、竹本座附の淨瑠璃作者(一時、寛保二年頃江戸肥前  
掾座に聘せられて下つたが、間もなく復び浪華に歸つ  
た) 一代の作二十七種犬抵丈助・蛙文・翁助等と合作で  
ある。

忠臣藏金短冊・那須與一西海硯・萱刈桑門筑紫袴・和田  
合戦女舞鶴・釜淵雙級巴・二谷嫩軍記等が名作と謂はれ  
て居る(續帝一九並木宗輔淨瑠璃集)

**そらちやう** 宗長 二一〇八一—二一九二、文安五

—天文元、八十五歳

近古室町時代の連歌作家。駿河の國で生れ宗祇の風雅  
を慕うて十八歳にして弟子となり、師の行脚に隨行し  
て到る所雅懷を恣にした。

その著に大永八年宗長獨吟名號百韻(續群四八二、  
一七ノ上、六一四—六一七) 宗長手記(群三二六、一  
一、七九二—八六一) 東路の津登(同三三九、一一、  
一二八六—一二九八) 宗長宇都山記(群類四八〇、一  
七、三九九—四〇九) 等がある。

壁草

われからに世のうきやのがる、

誰たえて唯雲にのる身なるらん

いたこのたびはすみぞめの袖

花ならでわけんもかなし吉野山

宗長或時師の宗祇と共にある浦べに遊んだ時、師翁が海草をさして「これは何と云ふか」と聞いたので、「めとも申しもとも申します」と答へたら「これはよい前句だ」

めともいふもともいふ也

さあこれに前句つけよ」と云はれたので宗長言下に

引つれて野がひの牛の歸るさに

さつめた。宗祇「こりやうまい」と云つて自身も、

讀むいろは教ゆる指の下を見よ

と一句つけ師弟相唱和して樂しき家路についたと云ふ

**そうびん 僧旻** ?—一三一三、?—白雉四

?歳

欽明天皇の時支那から歸化した學僧で、推古の朝には南淵請安等と共に留學生として支那に赴き、孝徳の朝には博士となつた。

**そうぼく 宗牧**?

室町末期の俳人で徳川時代の俳諧中興者松永貞徳の師その著に「加茂社法樂宗牧獨吟百韻(續群類四八三、一

七ノ上、六一七—六一九)東國紀行(群類、三四〇、一一、一三一—一三五四)がある。この紀行で、その生活や知友などのことはわかるが他は傳記一切不明である。

**そうぎほふしぢけうくん 宗祇法師兒教訓**?

宗祇か兒女啓蒙の爲めに作つたもの。今續史籍集覽「兒物語部類」に收む。文體は七五の調を多分に含んだ冗漫な雅文(續史一二)

**そうまがき 總籙**

つうげんそうまがき、通言總籙を見よ。

**そから 山鹿素行** 二二八二—二三四五、元和

八、八、二六—貞享二、九、二六、六十四歳

幼名佐太郎、名は高祐、(義以・高興・子敬とも)號は印山・堂を曳尾、軒を素行と稱する。先祖は筑前遠賀郡山鹿の人、因て山鹿姓を名のる。父高道は始め伊勢龜山の城主に仕へ、故ありて會津侯蒲生忠郷に轉仕し、忠郷國除せられて後は浪人して江戸住みとなる。彼は八歳にして林羅山の門に入り、學業優秀を以て師友に褒められ、十五歳にして又別に小幡景憲・北條氏長について兵學を學び、二十一歳にして印可を附せられた又壯年に及び廣田坦齋について忌部神道の口訣を傳授

せられ、その他源氏物語・萬葉集などの和歌・和文・老莊百家の選述・佛教の書に至るまで悉く涉獵した。斯て名聲都下に響き諸侯何れも聘を厚うして招いたが、大抵は辭してつかなかつた。中に一人因縁深いのは播磨赤穂城主淺野内匠頭長矩で、始めは祿千石を食んで八年間全藩を教へ、後には聖教要録の筆禍で亦この藩に預けられて十年間優遇を受けた。彼は儒教に於ては古學を創唱し、兵法に於ては山鹿流を始めた。彼が世道人心に及ぼした感化の偉大なことは本邦教育史上特筆せられてあるが、殊に赤穂義士の如きは甚大の感化を受けた。聖教要録三卷・山鹿語類四十三卷・武教小學一卷を始め一代の述作六十餘種に及ぶ(古類文學部二、七八七—七八八有朋堂文庫の内山鹿素行文集・日本倫理彙編四・古學派の上には聖教要録二卷・山鹿語類四十三卷の中十二卷・武教小學一卷、配所殘筆一卷が入つて居るし、國書刊行會本山鹿語類は全部を四冊にしてある)

**そがきやうだい 曾我兄弟**

資料、曾我物語・曾我勳功記・本朝孝子傳中の二三・大日本史二二ノ七・東鑑一〇ノ建久元年九月七日ノ條・建久四年五月廿八日ノ條・保曆問記下ノ一三・史籍神皇正統記下ノ一八・史籍集覽歷代鎮西要略二ノ一九・續史籍集覽

上杉憲實記七・本朝通鑑四三ノ一七・二三・和漢三才圖會六七ノ二・三三・倭訓栞「そが」ノ項・傍廂一ノ三・本朝通紀後編五ノ六・新群書類從(きりかね曾我・つるぎさんだん・十番切・小袖曾我)・曾我兩社緣起(續群六九、三、三九二—四〇二)

諸曲の曾我物 (切兼曾我・調伏曾我・元服曾我・小袖曾我・夜討曾我・禪師曾我・伏木曾我) 八文字屋本兄弟輪水性有卦入萬倍曾或  
戲曲の曾我物 近松門左衛門作、曾我五人兄弟・曾我虎が磨・大磯虎稚物語・百日曾我・曾我扇百景・曾我會稽山・紀海音作、曾我姿富士  
津打治兵衛・樋口半右衛門共作 勇子郎が掛踊 威五郎が雷電 傾城一張弓  
歌淨瑠璃の曾我物 參會曾我・百日曾我・吉日袖留曾我・異見曾我。

歌謠の曾我物 元服曾我(松の葉四ノ一二)・五人曾我(同、四ノ一三)・くさすり引(同四ノ二〇)・とらが石(若緑五ノ一〇)・曾我五郎(増補松の落葉三ノ一六)  
(明治に入つても河竹默阿彌の曾我物や、山崎紫紅の史劇や金松堂の繪入曾我物語・金櫻堂の繪本曾我物語・近藤出版部の曾我物語三冊本や歌謠などに採られて居るが、それ等は皆て拙者 綜國文學概説四五二—四八九に

書いたことがある。尙他の諸書は、

宮田秋堂氏薩摩琵琶歌曾我兄弟 朝野書店

小林鷺里小説曾我兄弟 文藝社

日本及日本人(大正四年春季號)の曾我兄弟觀

碧瑠璃園(仇討叢書第一編)曾我兄弟 文藝社

紫軒小史社會小説曾我物語 文藝社

**そがものがたり 曾我物語** 十卷

室町時代に出た小説で曾我兄弟復讐の擧を取材したも

の。文體は軍記物語體、後世多くの曾我物はこれから

出たものが多い。正保三年(二三〇六)版行、今日では

少年少女用として數種の單行本が出てゐる。

(生田目經德氏標註異本曾我物語・誠之堂存叢九一一會

我物語・校國四會我物語其他、國民文庫本・有朋堂文庫

本等)

**そきやう 小野素卿** 二四〇九―二四八〇、寛

延二―文政三、四、二九、七十二歳

南部盛岡の人、通稱は永二、望春亭・松濤舎と號す。俳

諧を好み早く蓼太の教を受け、明和八年上京後は蝶夢

に教はり、天明二年歸郷志家村に卜居して弟子を教へ

た。當時長翠・乙二・五明等と共に奥羽の四傑と稱せら

れた。家集を「柴の戸」といふ。

**ぞくあけがらす 續明鴉**

谷口蕪村安永五年(二四三六)編の俳諧集、明鴉の續篇。

**ぞくかりんりやうさいしふ 續歌林良材**

集 二卷

下河邊長流、貞享元年(二三四四)の著、歌學上の用材

を考説したもの。上卷に四十八條、下卷に六十八條凡

て和漢の書を引證してゐる。書名は一條兼良の「歌林

良材」につぐの意からつけたもの。今歌學文庫卷四、

契沖長流全集等に入る。

**そきやう 即興**

推敲精煉を加へず興を感ずれば、即座に詩歌とし俳句

とすること。古代の歌謡は大抵即興になり、王朝でも躬

恒や忠岑は即興歌人だと謂はれた。

**そくけん 安井息軒** 二四五九―二五三六、寛政

一一―明治九、七十八歳

日向の儒者、名を衡といひ、江戸昌平學に學び、日向

飲肥藩の備官となつたが、權臣と意見合はず去りて江

戸に出てて子弟を教へ、後復飲肥藩に聘せられたが、明

治維新後は閑散の身となつて靜かに餘生を送つた。息

軒遺稿・息軒文抄などの著がある。

**ぞくこ 俗語**

雅語に對して現代俗間の用語をいふ(道理からいふな

ら雅俗語の別は相對的のもので、いつでもその時の口

語は俗語でそれ以前の口語は雅語であるべきだが、通

常雅語とは平安朝時代の語で、俗語は下りての世の口

語をいふ)

**ぞくこきんわかしふ 續古今和歌集** 二十卷

後嵯峨院の院宣により文永二年(一九二五)乙丑十二月

二十六日撰進。撰者は始め冷泉爲家一人に仰せつけら

れたが後増して前内大臣基通・内大臣家良・民部卿爲家

侍従行家・右大辨光俊の五人を加へられた。その内家

良は撰進に先だつて薨去(隨て序文の中には名が省い

てある)歌の數は千九百七十二首、この集は直ちに古

今・新古今の後に繼ぐといふ抱負の下に撰ばれたもの

で撰者を數人にせられたこと、假名眞名兩序を添へら

れたこと、續古今と名づけられたこと(これは古今の

延喜五年、新古今の元久二年、今回文永二年は偶然に

も干支が同じ乙丑であるといふ事情にもよることが序

文に記されてある)否なそれよりも採られた歌そのも

のが古今の風格を出ないことによつても察せられる。

(國二六六―三〇三)

**ぞくこしふあわかしふ 續後拾遺和歌集**

二十卷

民部卿藤原爲藤が後醍醐天皇の元享三年七月二日勅を

受けて撰にかゝり、中途正中元年七月に薨去したので

その子爲定ついで撰集の命を拜し、正中二年(一九八

五)十二月八日奏覽したもので歌數は一千三百四十三

首ある。撰成つて天皇御覽の上「昔にはぢぬよし」を

大納言師賢をして撰者爲定に仰せ下されたので爲定は

恐悅の餘り、

今ぞしるあつめし玉のかすくくにみわてらすべ

き光ありさは

き御禮申すと、天皇は更に、

かすくくもあつむる玉のくもらぬは、これもわが

よの光りさぞなる

と仰せられた(國大四六四―四九〇)

**ぞくこせんわかしふ 續後選和歌集** 二十卷

冷泉爲家が後深草天皇の寶治二年(一九〇八)七月後嵯

峨上皇の教を奏じ、建長三年(一九一一)十月撰進した

もの、歌數一千三百六十八首。今川了俊・烏丸光雄等の

讃辭があるけれども、あまり特色のない集である(國

大二三九―二六五)

**ぞくさるみの 續猿蓑** 二卷

芭蕉がその門下と共に興行した俳諧の集で前に「猿蓑」といふのに對して續の字をつけたもの。七部集の一つ

(俳諧註釋集上下二冊)

**ぞくしくわわかしふ 續詞花和歌集** 二十卷

藤原清輔が二條院の勅によつて撰んだものだが中途で院が崩御あらせられたので勅撰集には數へられない。書名は清輔の父顯輔の「詞花集」から出たもので、たとひ勅撰に入らずとも、勅撰同様の心用意の加はつた集として注意すべき撰である(群一四八、七、六〇—一一三)

**ぞくしふあわかしふ 續拾遺和歌集** 二十卷

藤原爲氏が龜山院の院宣によつて文永十一年(一九三四年)から弘安二年(一九三九)十二月二十七日までかゝつて撰進したもの(一説には建治二年奏覽ともいふ)歌數一千六百首(國大三〇四—三三三)

**ぞくせんさいわかしふ 續千載和歌集** 二十卷  
藤原爲世が後宇多上皇の院宣によつて花園天皇の文保三年(一九七九)四月十九日に撰進したもので歌數二千二百二十首ある(國大四二—四六三)

**ぞくほんてうぶんすゐ 續本朝文粹** 元八

十四卷 現存十三卷

藤原季綱が本朝文粹以後の名文を集めたもの。季綱は平安朝末後冷泉天皇の御代の人。

**ぞくよつぎ 續世繼**

「今鏡」を見よ。

**ぞくわくわいけいさん 曾我會稽山**

近松が享保三年(二二七八)七月竹本座に書下した時代物で「蒲入道範頼が曾我兄弟に狩場の刺符を與へその申譯にとて切腹すること」「兄弟は一旦歸郷老母に對面の上仇討に出かけること」など新趣向をも加味したもの。近松の曾我物は、

一、加増曾我 年代未詳

二、世繼曾我 貞享二年二月

三、百日曾我 元祿十年十月

四、曾我五人兄弟 元祿十四年十一月

五、大磯虎稚物語 元祿十五年五月

六、本領曾我 寛永三年三月

七、曾我 八景 寶永三年七月

八、曾我虎が磨 寶永七年正月

があつてこれはその九番目の作で彼の曾我物の圓熟の頂點を示したものである(拙著國文學概説四五—四六五)

**そせい 素性法師?**

僧正遍照在俗の時の子で(名は弘延とも玄利とも玄理ともあり)清和の朝に仕へて左近將監をつとめたが遍照が「法師の子は法師なるぞよき」とて出家させた。歌に巧みで六歌仙に優るとも劣るまじき秀味を遺して居る。彼は書をもよくし延喜の御時たび々召されて御扇風繪に歌を書いた(又旅行がすきで遠く近畿地方をめぐつて咏歌した)その歌は古今(三〇餘)後撰(數首)の外、拾遺・新古今・續後撰・玉葉・續千載・新千載・新拾遺・續後拾遺・新後拾遺・新續古今・三十六人選等に入り、家集に素性法師集全一卷(群書一覽四—五九、群二六七、一〇、二五—二八・歌仙歌集二、續國四—二—四一五)がある。

今こむさいひしばかりに長月の有明の月を待出  
づるかな

思ふぞち春の山べにうちむれてそこともいはぬ  
旅れしてしが

底ひなき淵やはさわぐ山河の淺き瀬にこそあだ  
波はたて

見てのみや人に語らむ山櫻手ごとに折りて家づ  
まにせめ

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかね色香は  
折りてなりけり

惜しと思ふ心は糸によられなむ花散る毎に貫き  
て止めむ

花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行き  
恨みむ

**そせいほふししふ 素性法師集**

「素性法師」を見よ。

**そせき 疎石**

むさうこくし「夢想國師」を見よ。

**そせん 素暹**

たれゆき「東胤行」を見よ。

**そぜん 素然**

みちかつ「中院通勝」を見よ。

**そだう 山口素堂** 二三〇—二三七五、寛永

一九、五、五—享保元、八、一五—七十五歳

徳川時代の俳壇に於て元祿の蕉風に先驅して天和の新調を唱へた山口素堂は本名を山口信章といひ、字は子達(又、子普・公商)通稱官兵衛(又、太兵衛)(幼名重五郎長じて市右衛門といつたともいふ)今日庵・其日庵・素仙堂來雪等の號があつた。甲斐巨摩郡教來石村の人、



弱冠江戸に出て林春齋に儒を學びついで上京して和歌を清水谷に、書を持明院に、連歌を季吟に、茶事を今日庵宗丹に學び充分なる教養を身につけて東歸し、初め東叡山の麓に卜居し後、深川(葛飾郡阿武)に移つた。丁度近所に芭蕉の庵居があつて二人は清い交りをつけた(季吟門下の雙璧と稱へられたこの二人の間は後世よく見られる利己一偏の黨派争ひなどは絶えてなく素堂が一歳の長なので芭蕉は彼を「先生」と尊び、

川上と此川下や月を友

と述懐して居る。素堂は儒を以て職を奉じ、芭蕉が擡頭しかけてからは我侂風よりも寧ろ正風の流布に後援した。芭蕉庵が焼失の厄に遭つた時も彼自ら發起して再建寄附帳を衆弟子に廻した。二人の交情は眞にゆかしいものであつた。その一派を葛飾風と稱し、別に宣傳につとめた譯ではないが門葉も可なりに榮え山口黒露長谷川馬光等の名俳を出した。松の奥・櫻の奥・とく／＼の句合等の著があるが、今は「素堂鬼貫全集」と題して俳文一四に入る。その句の人口に膾炙するものは

春もはや山吹白く苜蓿し

目には青葉山郭公はつ鱧

水瓜獨り野分を知らぬ朝かな

名も知らぬ小草花さく野菊かな  
網さらす松原ばかりしぐれ哉  
(尙「葛飾派」を見よ)

そたん 曾丹

よしただ「曾根好忠」を見よ。

そたんしふ 曾丹集(曾根好忠集)

平安朝後期の新派歌人とも謂ふべき曾根好忠の家集。

(群二六二、九、一〇二二—一〇三三、續國六一九—六三

二)尙「好忠」を見よ。

そとばこまち 卒塔婆小町 (古名、小町

物狂)

諸曲 シテ小町 ヲキ僧

ツレ僧 處 攝津

高野山の僧、都にのぼる途すがら、卒塔婆に腰うちかけた女乞食にあひ、身の上を問へばこれぞ一世に名だたる美人小町がなれの果てと分り、尙も對話をつゞけるうちに彼女の爲めに焦れ死にした深草少將の怨靈あらはれて小町狂亂の體となる。靈物の一種である。

そとほりひめ 衣通姫?

稚淳毛二派皇子の御女で允恭天皇の御妃とられた。此より前その御姉忍坂大中媛正妃として已に御入内あ

る上に、この姫は天皇がまだ皇子にましくける時寒天に盥を捧げて熱心御即位をお勧めになつた位なので天皇も之を敬し憚らせられてゐた處、弟姫の容姿美にして御肌の澤、衣を通すと云ふので時の人衣通郎女と申してゐたので、何とかして之を召さうと思召し近江の阪田から大和の藤原まで來させて、その翌年二月皇后御出産(大泊瀬皇子)の紛れに御訪れになつた。その時妃の御歌は、

わがせこが來べき宵なりさ、がにの蜘蛛のふる

まひかれてしるしも

といふので天皇は大いにこれをめでさせられ、

さゝらがた錦の紐をときさけてあまたは寝すに

たゞ一夜のみ

と御味みになつた。

そねさきしんぢゆう 曾根崎心中

元祿十六年(二三六三)四月七日北の新天地天満屋の抱へ「お初」と平野屋徳兵衛とが梅田堤で情死、翌五月七日近松が之を取材して竹本座に書き下したものの「戀風の身に蜺川蜺橋、浮名を流すお初と徳兵衛とは二世まで契る戀仲であるのに、徳兵衛が主人の内儀の姪に二貫目つけて徳兵衛と女夫にせうとの話が起り、徳兵衛の

母親は二貫目に目がくれて本人の意向もきかず直に承知して金は横取り、それときいて徳兵衛がつくりして繼母に迫り、やつと金を取返したその矢先に親友の九平次が金につまつて弱りきつてゐるのを見兼ね。ほんのしばらくとて融通したが期日が來ても「イヤそんな金借りた覚えはない」と白をきつて埒あかず、主人の方からは早く姪を迎へよと迫られる。今は絶體絶命と女を連れて天神の森まで行つてそこで相對死を遂げた。その道行に名文句がある「此世の名残り夜も名残り死に、行く身を譬ふれば仇しが原の道の霜一足づゝに消えて行く夢の夢こそ哀なれ云々」

これは近松が心中物の始まりでもあり又戯曲界心中物の始まりでもあり、そして意外の大當りなとつたのでこれが心中物流行の備をなした。この名作以來人々は曾根崎天神を呼んでお初天神と云ひ代々の歌舞伎に種本としてお初 曾根崎模様・女夫星浮名天神・とく様參お初天神・露時雨曾根崎心中などと題して上場した。

そねよしただしふ 曾根好忠集

そたんしふ「曾丹集」を見よ。

そのおもかげ 其面影

三十九年十月東京朝日新聞に連載した長谷川二葉亭の

長編小説。

「養子とその内娘の妻と気が合はず却つてその義妹と愛し合つて二人で、ホームを作らうとする。社會の聲と、妹の反省とでそれが中止される。男は失望の極支那に渡つて荒んだ生を送る」これがこの一編の梗概で「ありし日の、その面影もなき迄に荒みはてた」と云ふのがとめの處になつてゐる。

「静岡縣出身の小野哲也(三十五六歳)は、さほど豊かでもない家計の中から無理に父兄を説きつけて高等學校へ入つたが、途中で學資が續かなくなつた折柄、梁瀬(目下長崎在住)と云ふ人の仲介で大學へ入られて貰ふと云ふ條件附きて小野家へ養子に來た。養父の禮造は妻瀧子との間に一女時子があつて此が哲也の妻である。別に禮造が小間使に姪ませたのに小夜子(廿三歳)と云ふのがある。萬事華美な生活振であつた爲めその死後には忽ち會計困難に陥つた(三七一―三七二)それを支へようと云ふので哲也は神田の某私立大學に出て經濟原論と貨幣論とを講義する外、また二ヶ校も掛持してゐた。小夜子は小學卒業後赤坂邊のミツシヨンスクールへ二年程通つてゐる頃、家の經濟が逼迫の爲め中途退學し年頃になつて一旦嫁いたが、夫が

天死したので出戻りとなつて哲也の許に厄介になつてゐる。家には女中の「福」も居るけれども、小夜子が哲也の身のまはりのことは一切親身になつて見てやるので哲也は心から感謝してゐる。「時子は別に不容貌で夫の愛がさめると云ふ譯ではないが、父の時代に比べて地味なこの節の活計に夫を俯甲斐なしと思つてゐる。それに内娘の我儘勝とて、朝は主人が出て行く時分に寢室へ煙草盆を持つて來さしたり、晩に主人が歸る時分にまだ母さ寄席から歸らなかつたりと云ふ風、それに小夜子と主人とが仲が善すぎるやうに僻んで取つてゐるので、ついで一度夫婦らしい陸じさで接したことは無い(三二二―三二八)小さい家庭でありながら、瀧子と時子と福とが一味して哲也と小夜子に當りちらす爲めに始終暗闘が演ぜられる。哲也は大學時代には、成績も優等であつたのに自分以下のものに、追ひ越されて今におき貧弱な境遇である上に、一家のことさへも我が自由にならぬもどかしさを殘念にも思ふが、養父に對する義理を思ひ、若し離縁をするんなら、此迄の學資金を何千圓と耳を揃へなければならぬが、それは今の自分では到底不可能だと思ひして耐へてゐる。「或日學校の歸りに葉村幸三郎と云つて幼い頃小野家

に厄介になつてゐた。今は某會社員として社長のお氣に入りて洋行のお供までさして貰つたと云ふ男と同行した。それは秋の日のたそがれ頃のこと、二人は九段坂を登り、話した。内容は「近頃裸一貫から百萬長者にまで仕上げて有名な紀尾井町の澁谷に令嬢を教へる家庭教師が入るとのことだから小夜子さんを薦めちやあどうか、すれば君にもよい手藝になつて、榮達の道が開けよう」と云ふのであつた。これを聞いた哲也は餘り悦ばなかつた。澁谷の大きいことは知つてゐるが成上り者の情けなさには、兎角品行が修まらず家の女中を片つ端から手をつけると云ふことは已に新聞にも出て周知の事實であるのに、あの優しい小夜子を見ず見すそんな處と知つて奉公させるのが不慈でもあり、又此際小夜子に出られると第一自分が困るしと思つた。快活で、滑稽で、目先だけのことに敏捷な葉村は「君は學者だからむつかしく考へるだらうが金儲の秘密としては先づ人情を捨てるに限るんだよ(三〇一)などとも云つた。兎も角よく考へておかうでそこは別れた(三〇六―三〇八)

が圓満になさまりにくいからどんな處でも可いから行きます」と云つた。それから二人でしみぐめいぐの心持を話し合つてゐる中母子が歸つてきた。立聞した福が早速委細注進した。「翌日哲也の講義はいつになく、そはくしてゐた。彼は幾度も葉村に電話をかけたが、話し中やら不在やらで通じない(三三三―三三四)家へ歸ると、丁度その葉村が來てゐる處で、もう話はきまつて小夜子は葉村の妻の冬子が同道で行くことにまで進行してゐた。「戸主たる僕にも相談しないで」と立腹すると、時子は「相談どころかあなた方お二人で留守の間にさう極めたんぢやありませんか」と逆れちに出る(三三五―三四七)哲也は小夜子と別れることの切なさをしみぐめした調子で別室で語つた。(三四七―三五二)小夜子が行くと時子はしばらく神妙に家事にいそしんでゐたがやがて手が廻り兼ねるから一人女中を増さなくてはならぬ。それには費用が入るから月々の定額をもう五十圓と言ひたいけれどマアせめて廿圓程増してくれと夫に請求した。けれども今の哲也には實際出來ないことだから可けないと拒絶した、それが云ひが、りて又もや夫婦喧嘩が持上る(三六〇―三七六)哲也の不平等も尤であり

(三七二―三七四) 時子や瀧子の不平も尤であつた。  
 (三七五―三七六及び五〇五頁) でも哲也には出る腹  
 がなく母子にも出す腹がないので喧嘩はいつもの通、  
 不徹底に終つた(三七七)そこへ小夜子が血相變へて歸  
 つて来た「どうした」と云つても何も言はない。翌日瀧  
 子から哲也に語るところによると「澁谷の家庭では細  
 君は肺を病んで轉地療養中、准奥様のお濱さんが親切  
 でよい人、旦那も大事にしてくれるがちとお戯談で小  
 夜子にからかひなすつたのを、あれが本氣にとつて跳  
 足で飛び出したのだ」と云ふ「實はそんなこと所でな  
 く最後の時などは西洋間へ誘きよせて戸に鍵をかけて  
 強姦しようとしたので、窓から飛んで逃げたのであつ  
 た(三八六―三九二)にも拘らず、翌日葉山が又やつ  
 て来て「あすこは、夫人とお濱とが合はないので夫人  
 の存命中にその候補者をお濱以外の女から推薦するか  
 ら、それこそもつて来いの所だ、確かに有望だから小  
 夜子さんは是非おかへりなさい」と勧める(三九六―  
 三九八)幾ら有望でも節操問題に拘る様な處は眞平だ  
 と哲也が承知しない。  
 或夜哲也と小夜子とは喋し合はして錢湯の歸りを散歩  
 しいく小夜子の身の振方を相談した。千葉には勝負見

俊子と云つて、彼女が眞の姉のやうに親しんでゐる人  
 が嫁いでゐて、その家が宣教師なのを幸ひ「わたし、い  
 つそ千葉へでも行つてバイブルウーマンにならうかと  
 思ひます」と云つたが、哲也はどうしても弓町の自宅  
 から去らせたくはないと云つた(四〇四―四一六)  
 歸つて見れば斥候があつたのだから、母子とも  
 に今の二人の話しはちやんと知つてゐて散々嫌味を云  
 ふ(四一六―四二四)小夜子はいつそあからさまに言  
 うて姉と和解をすれば圓滿に行かうかと思つて、時子が  
 裁縫してゐるところへ行つて「何もかも申しませう」と  
 云つて成るだけ妥協的に出てゐるのに、時子は愈々角  
 を生やして果ては何でもないことを書いた小夜子が姉  
 を憚つて手紙で哲也に意中を洩らした紙片を、艶書だ  
 と云つて二通取出して「姉の夫をとるなんてお前さん  
 は餘程ひどい人だ」と云ふ(四二五―四四〇)母が仲  
 裁で其場は治まつたが「どうしてもうまく行かんから  
 いつそ氣の毒でもお前千葉へ行つてくれ」と事情を説  
 いての母の説諭に、小夜子はもとより異論もなく「な  
 るべく哲也の留守がよい」と言はれて倉皇と驟へかけ  
 つけた。時間が大分早かつたので、せめて電話でも  
 と思つて「驛前の自働電話に入つて哲也にその由を告

げた(四四六)……とやがて一臺の腕車が風を切つてや  
 つて来て車を下りるなり「マアよかつた」とホツと息  
 丁行つたとある商人宿の奥まつた一室に二人は夜ふく  
 るまで相談をした。段々情熱が高潮してつひに、尋常  
 の戀の場面に墮ちた。  
 「いや、もう好い」と益々焦躁し乍ら「僕は最う此  
 儘家へも歸るまい、出て了はう。もう如何なつても構  
 はん。是から先は暗黒の世の中だ。は、は、は」と妙な  
 笑ひ方をして「ぢや別れやう。其代り僕は何だ……僕  
 は別れたつて貴女の事は何だ……」と思掛けず潜々と  
 落涙して、  
 「一生忘れん……」  
 「兄様！」と小夜子は思はず纏付いて「其様に私の事  
 を思つて下さつて？」  
 「思はずにや居られんもの」さ未だ涙が止まらぬ。  
 「本當ですか？」と信と目が据わる。  
 「迷惑か？」さ手の甲で、涙を拭きながら。  
 「ぢや、もう、私……私の身體なんぞ……」と息が詰  
 まつて「如何なつても好いわ、兄さん」と息が詰  
 と纏つた手に、凝然と力が入ると、戦々と顛へ出す。

「えッ」と哲也は猛然と振反り、卒然小夜子の肩へ手  
 を掛けて、  
 「如何なつても好い？」と意氣込んだが小夜子はもう  
 口が利けなかつた。黙つて頷く其蒼褪めた顔へ、哲也  
 の面が衝と寄るかと思ふと熱き唇と冷かなる唇さが、  
 あ、遂に相接した……(四六七―四六八)  
 哲也は淡路町のとある荒物屋の二階を自分の下宿と極  
 めて(四七三)翌日から家出した。始めて自由になつた  
 二人は全く夫婦氣取りで散歩して、西洋料理店で他愛  
 もない話をして歸ることがどんなに嬉しかつたらう。  
 (四八四)けれども一面時子のことに想到すると小夜子  
 は良心の苛責に得堪へぬものがあつた。せめては二人  
 してあはれな世の人を助けて善を以てこの罪を償ひた  
 いさ決心した(四九三―四九四)哲也の處へは出入のお  
 人好しの久兵衛が學校へ呼びに来た「出られると母子  
 のものが忽ち路頭に迷はなけりやならぬから歸つてく  
 れよ」と云ふのであつた。久兵衛さ云へば母から十五  
 圓借りてそれが返せない爲めに散々悪口されてゐる人  
 間だのに、その人間にしか頼む所のない母子、而かも  
 自分の年來恩を受けた母子だと、思ふと哲也も流石に  
 氣の毒になつた。が歸らうさは云はなかつた。



或日哲也の留守に勝見の細君俊子が小夜子を訪うて電報を渡した。それは千葉へ宛て、小夜子に「ハ、ピヤウキ、スガカヘレ」云ふのであつた。勝見だけにはあらましの事情を告げて、千葉に小夜子が居るもの、やうに装うて貰つてゐたのである。姉とも慕つてゐる俊子のこと、小夜子は自分の心持と現在とを包まらず打あけた。親切な俊子は最後に「あなたは靈が肉に負けたのだ」と云つて、哲也と一緒にすることは三方四方圓滿を缺くから、妾に身を任せて布教のことに努めてくれよ」と云ふ。小夜子も、段々と自分の理知に眼醒めて清く承諾をした(五三四—五四八)此より先哲也は校長(某法學博士で彼の舊師五二九頁)から「こんど支那直隸省の或専門學校で、教授を一人採用するんだが行つてはどうか、待遇は大分よろしいが」と云はれて、これ屈竟と早速にも承引するところを、歸つて斯と小夜子に告げたところが、案外小夜子は不同意であつた。「何だか逃げて行くやうね(五四八)とも謂ひ「私共のやり口は一體に行き懸りのやうな氣がしてなりません(五三八)とも云ひしてゐた。

と驚き、とつかは驛にかけつけると汽車は今發車したばかりで見送りに立つた俊子と遇つたきり……(五六〇)その後小夜子のことはどう探索してもわからなかつた。

支那行のことが極まつて縣人會やいろんな送別會に招かれた頃には哲也の心は大分荒みかけてゐた。それでも葉村の調停で養家へ内入りだけはしてゐた。汽車が神戸についた時、群衆の中からよそながら、熱心に見送つてゐる一婦人があつた。云ふまでもなくそれは小夜子である(五七八—五七九)赴任後三ヶ月程した或日哲也の手紙が小野の留守宅へ来た。「學校の方は辭職して今は天津に居ること、金を二百圓替換で送ること、この手紙切り離縁して欲しい事」などが書き込まれて爲替券や養子になる時に取りかはした契約書のやうなものが同封してあつた。母と時子とは途方に暮れた。「が大分たつてから葉村が社用を帯びて天津へ出張するのを幸ひ内々で哲也の近況を探つて貰ふことにした(五八一)葉村の宿所へ我と名を通じて面會を求めたのはその哲也であつた。荒み切つた生活に並の酒では刺戟を感じない程になつてゐた。一目見るなり葉村も眞面目に忠告する勇氣がない程零落してゐるので二

十弗の金をやつてもう少し服装をさゝのへて明日出直す様にと注意をした(五九四)

「新規時直しとして、改めて小夜さんと結婚し給へ。

時子さんも今なら承知するよ」と云つても「僕はもう眞面目に人を愛するこゝろなんぞ出来なくなつて了つた」と云つてオイ／＼と泣いた(五九二)

「翌朝哲也は葉村の方へは斷り状を出しておいて、そのまゝ行方不明になつた。日露戦争の時第二軍附酒保の賣子に彼によく似たものが居たとは眞偽不明。小夜子が病院船滿洲丸で白の看護服を着て居たと云ふのは或は本當かも知れぬ。時子母子は寂しく本籍の水戸に引込んだり此も消息不明葉村獨りが時めいて、二三會社の重役の肩書さへ持つやうになつた(五九五)

これは同氏作の「浮雲」のやうに劃期的な代表作ではないが、浮雲以來の進境を示したものである。實際の年數以上の發達であつて「浮雲・其面影・平凡」と並べて見ると、浮雲は幼稚な寫實、平凡は自然主義的な寫實、この作は一番ロマンチズムの分子やドラマチカルな分子の多いものである。そして作品中の主なる人物は妙に多情多恨の葉村と驚見に一致した性格である多情多恨を近代化し深刻化し更にロシア文學式の人道主義

的着想を加へたら丁度斯うした作品にならうと思ふ。(二葉亭全集改訂第一卷—二九五—五九五・名家傑作集二春陽堂)

そのちよ 園女 二三一—二三八六、承應二—

享保一一、四、二〇、七十四歳

伊勢松坂の人にして元祿五俳女(捨女、智月尼、秋色、千代女)の一人、(或は云ふ山田の祠官度會氏の女と)浪華に出て岡西惟中の妻となり、同趣味の共棲み面白く、始め杉本美津女に俳諧を學び、元祿二年の冬からは芭蕉に入門し(後來師翁から

白菊の眼に立て、見る塵もなし

とめでられたのは有名の話)芭蕉歿後は其角に學んだ、夫の歿後江戸に下り、深川に住んで眼醫者となり、享保八年出家して智鏡尼と改名した。彼女が雲虎和尚に答へた手紙の文面から察するに何だか男まさりの見識家のやうだが俳家奇人談傳ふる處の彼女の奇行(自ら惟中に結婚の直接交渉をしたことや、紅絹の鼻緒や、手文庫の流しや、十筋程の残し髪など)と照し合せるに何も嫌味らしい點はない。その家集に園女句集(俳諧文庫一〇)がある。流石に女性らしい佳吟に富んでゐる手々のべて折りゆく春の草木かな

山松のあはひく／＼や花の雲  
鼻紙の間にしほむ莖かな

當麻のまんだらを拜みて  
衣がへ自ら織らぬ罪ふかし

**そはう 徳富蘇峯**(七十二峯生) 文久三、正一  
白山に因んだ雪嶺と相對する評論の大家は阿蘇山に因んだ蘇峯である(二人は時を同じうして東都の詞壇の大家として立つた)氏は肥後の人、名は猪一郎、父洪水は横井小楠の高弟、氏は熊本英學校・京都同志社に學び(この時新島襄氏の多大の感化を受けた)その草稿「將來の日本」を懐にして東上し、雑誌「國民之友」を發刊し、大に民主的思想を鼓吹し、思想評論の代表機關視せられ、春秋二季の文學附録によつて純文學の發展にも貢獻し、ついで國民新聞を起し自から社長として熱心な操縦振をつゞけ、忙中の閑を以て吉田松陰・國民叢書・杜甫と彌耳敦(ミルトン)大正の青年と帝國の前途などを書き、尙且つ近世日本國民史の大家を出して學士院賞を受け、貴族院議員にも勅選せられて今日に及んで居る。

**そまんど 楚滿人**

なんせんせうそまんど「南仙笑楚滿人」を見よ。

**そら 河合曾良** 二三〇八―二三六九、慶安元

―寶永六、六十二歳

近世元祿の俳人、通稱惣五郎、それをつゞめて宗悟といひ又「そらう」と云つたものが更に「う」を省いて「そら」が俳號の通り名のやうになつたものらしい。元信州上諏訪の人江戸に出て小日向築土下武家に奉公したが早くより「芭蕉の下葉に軒を並べて」薪水の勞をも助け、忠實な弟子として野晒紀行にも奥羽行脚にも隨行した。芭蕉が

君火を焚けよきもの見せん雪まろげ

と句したのででも師弟の情誼の程もしのばれてゆかしい。瘦せきすな芭蕉と肥滿長大な彼とが相並んで頭陀行脚をつゞける圖は眞に好個の俳趣であつたらう。彼の句は旅行く先の隨所に出てゐるが、人物程には立派でなかつた。彼のこの時の紀行はその歿後、遺子によりて編まれ「雪まろげ」といふ。

剃捨て、黒髮山にころもがへ

かされとは八重なでしこの名なるべし

汗の香に衣ふるはん行者堂

卯の花をかざしに關のはれ着かな

松鳥や鶴に身をかれほとゝぎす

**そらい 萩生徂徠** 二三二六―二三八八 寛文

六、二―享保一三、正、一九、六十三歳

先祖は駿河の萩生から出、遠祖は物部氏であるのでとつて氏姓とした。名は雙松、字は茂卿、通稱總右衛門。綱吉將軍の侍醫方庵の第二子で、十二歳の時、林家についで程朱の學を受け、父、故ありて上總に移るに隨ひて彼の地に行き歐僻の地、尙讀書を怠らず廿五歳再び江戸に歸り芝増上寺の門前に講筵を開く。弟子の來集するもの頗る多かつたが、彼の飽くなき知識欲は更に道學・兵學・文學・雅樂・支那語・算道・書道・經濟・政治・法律等あらゆる方面を究め、五十餘歳に至つて程朱の學を疑ひ、明の李王に私淑して古文辭を修め、以て古學に達し、直に聖賢の教理に徹すべしと唱へた。之を古文辭學又は復古學と云ふ。その説大に世に行はれ、京都の伊藤仁齋と相論難辯駁する態正に學界の一作觀を呈して居つた。その著各方面にわたつてゐるが、辨道・辨名は彼が經學の造詣を傾注した熱のある作で、譯文箋語は今も漢文學徒の指針となり、徂徠集・讀園遺編には彼の詩文の佳作が滿載されてゐる。又その門からは太宰春臺・服部南廓等の大家が出た(徂徠集三十卷二十册)

**そんぎ 馬場存義** 二三六二―二四四二、元祿

一五―天明二、一〇、三〇、八十一歳

江戸の人、李井庵・有無庵・古來庵等の號がある。始め儒學を服部南廓に學んだが中途志を轉じて春來泰室に入門し俳諧を以て世に立ち江戸風を以て世に鳴つた。

**そんけん 井上巽軒** 安政二、一二、二七―

福岡縣の人、名は哲次郎、十三年東大哲學政治學科を卒業し最高學府の權威として、東洋哲學の大家として大正十二年停職年齢迄勤績、文學關係のことをいふと漢詩に巧みで孝女白菊の詩などは有名なり。大正詩文や斯文には始終佳什を寄せて居る。又外山、山その他の名家と共に新體詩を創唱し、新體詩抄を出し三十年頃迄「比沼山の歌」といふ長詩を帝國文學に連載した。

**そんちようほふしんわう 尊澄法親王**

むれながしんわう「宗良親王」を見よ。

夕の部

**だいえい 題詠**

日に定まつた「題」に基づいて歌を咏むこと。萬葉集

時代には實感さながらを即興的に咏んだものが平安朝に入つてからは次第に題味が盛となり、推敲に重きをおくやうになつた（題味には全然文學的價値がないといふ人もあるが、限られたる範圍に自己の幻想美を盛ること猶兒女のハメ畫の如き趣味は小主觀に生きる小詩人の生長には可なりの寄與をして居ると思ふ）（齋藤清衛氏、國文學の本質二四二—一五六）

**だいがく 大學**

大寶令により京師に設けられた綜合大學で、明經・明法・記傳・算・書の五科目について博士や助教が之を授け諸王と五位以上の子弟と史部の子と七位・八位の子で請願して許可せられたものと定員四百名を收容した。始めはこれが官吏の養成機關ともなり新文明の淵藪ともなりしたが、地方政治の紊亂につれて勸學田（始め二百町）の學資補助も額を減じ、却て諸家の私學に壓倒せられるやうになつた（教育大辭書その項）

**だいがくのかみ 大學頭**

- 一、奈良朝・平安朝の式部省内大學寮の長官即ち大學最高の官吏。
- 二、徳川幕府の儒官の長（代々林家が任ぜられた）

**だいがくは 大學派**

つくばくわい「筑波會」を見よ。

**だいがくはかせ 大學博士**

奈良朝・平安朝の時代大學で明經道の教授の主任。

**たいかふき 太閤記**

小瀬甫庵の著で秀吉の一代記を綴つたもの、即ちその出生から秀次の最後まで、及び諸士の傳記、山中鹿之助の傳、豊臣家遺物、奉行の姓名などまで平明素朴な和漢混淆文體で書いたもので、記事は虚實混淆して居るが廣く一般に愛讀せられ、後世太閤を文學化するものは必ず參考にする位普及して居る。殊に法橋玉山が挿繪を加へてからは一層盛行した。元和三年（二二七七）の自跋寛永三年（二二八六）朝山意林庵素心の跋があつて萬治四年（二三二一）に出版された（大川屋版重修眞書太閤記金字入、史籍集覽六 小瀬道喜太閤記二十卷）博文館、帝文一—四續國民二、三、一一、一七、一八）

**たいぎ 炭太祇（一説に坂上太祇） 二二六**

九—二四三一、寶永六—明和八、八、九、六十三歳

天明俳家中蕪村について有名な人、江戸に生れ初め雲津水國の門に入つて水語と呼び又徳語と改む。後慶紀

逸 稻津祇空の門人）の門に入り、ついで京に上り島原上ノ町に住まひ終生こゝを去らず常に俳優を好み之と親しく交はつたといふ。鬼貫句選二冊はその撰に係る。彼の句は現存するもの約九百何れも秀吟妙句で一句のそつもないと稱せられて居る。太祇句選・新選・新五子稿は皆彼れの歿後に知人や門人の編纂したものである。

彼の句風の特徴は

- 一、非常に推敲を重んじ（一句について十日も家を閉ちて沈潜することもまゝあつたといふ）
- 二、俳句を以て遊戯文字とせず眞劍の態度で句作したること
- 三、自然の句は少ないこと
- 四、人事句に於て成功し、寝雜なる想を巧みに十七字句によみこなし得たこと

などである。その名句は

鯛買ふてみやげの嘘や汐干狩  
雉追ふて叱られて出る鳥かな  
呵る程舳先へ出たる月見かな  
關越えて又柿かぶる袂かな  
取り逃す隣の字や行く螢

犬を打つ石の倍無し冬の月

吹倒す起こす吹かるゝ案山子哉

（池田常太郎氏、日本俳諧史三八九—三九八）

**たいぐ 大愚**

じふん「慈園」を見よ。

**たいげんども 體言ども**

和歌・俳句に於いて結語を體言にすること。結語を「なりけり・かな・ものを」などの「助動詞止め」「助詞止め」にするのに比べると實體ある詞で止めた方が重みがあつて一首一句の姿を引きしめる氣味がある。和歌の方ではこのとめ方が目だつて多くなつたのは新古今集からである。

例 駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの

雪の夕暮（定家）

人すまぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後は唯

秋の風（良經）

**たいけんもんのたたかひ 待賢門の戦**

資料、平治物語・讀史餘論二ノ二二・國史紀事本末二八ノ一・隨筆 遠碧軒記下ノ一ノ一〇〇・百家説 六ノ上七六八（廣文庫第十九册一〇九四—一〇九五、同第十七册九二〇—九二六）

だいてんわう

醍醐天皇 一五四五—一五

九〇、仁和元、正、一八—延長八、九、二二、四十六歳  
御諱は敦仁、御法諱は金剛寶、世に小野のみかど又は  
延喜の帝と申す。宇多天皇第一の皇子で御母は藤原胤  
子(高藤女)天資聰明にして鋭意民福を念とせられ、寒  
夜に御衣を脱いで、人民の疾苦を察せられた美譚もあ  
る。後世この御代を「延喜の治」と云ふ。

又文藝に興味を有せられ、延喜五年紀貫之等に勅して  
古今和歌集を撰ばしめられた。是れ勅撰歌集の始めて、  
この集は後世長く歌人や國文學者が必讀の良歌書とし  
てある。

尙修史のことにも御心を注がせられ延喜元年に時平等  
をして三代實録を撰ばせられた。

更に儀式典故を整へようとて又復時平等に命じて延喜  
七年には延喜格十二巻を、延長五年には延喜式五十巻  
を撰ばせられた。これ等の舉は一代の風を起してこの  
時代には歌人・文人・詩人・畫工・學者・故實家等が續々  
輩出した。御自身の御製は後撰(四)・拾遺(二)・新古今  
(九)等に入つてゐる(大日本史料第一篇の二、三、四)

ださいゐん

大齋院 一六二四—一六九五  
康保元—長元八、七十二歳

御名は選子内親王、村上天皇第十皇女、世に女十宮とも  
申す。圓融帝の天延三年賀茂の齋院となり、圓融・花  
山・一條・三條・後一條の五朝五十七ヶ年間を歴仕して  
後一條帝の長元四年やめて御出家。和歌に秀で、當時  
在廷の才媛等と文學の交らひも多かつた。一條后定子  
の如きも特別にこの親王の御消息には敬意を拂はれた  
「河海抄」によると紫式部が源氏物語を書いた動機もこ  
の親王にある(大齋院が上東門院の許へ何か物語双紙  
を拜借したいと云つて來られたので、上東門院は何に  
しようかと式部に御相談になつたら、これまでのもの  
は皆御存じだらうから私が新に作つて差上げませうと  
て書いたと云ふ)して見ればこの點のみに就いていふ  
も國文學史上の一恩人である。家集に大齋院集(群四  
二五、一五、七一八—七二二)があり別に發心和歌集の  
著があり、その他左記諸集に御歌が散見する。  
拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今・新勅撰・續後撰・  
續古今・續拾遺・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・  
新後拾遺。

たいしやうほふ 對照法

黒いボールドに白いチョロクの文字が目立つやうに、  
ソマトーゼの廣告が肥瘠二人の繪であるやうに、相異

なる二つを對照して主旨を強調する修辭法。

例「白露の色は、つをいかにして秋の木の葉を千々

に染むらむ

すい息子辛い親爺に甘い母

ながくと川一筋や雪の原

だいでうるゐじゆほう

大同類聚方 五卷

我邦の醫學書として一番早いもので、大同三年に安部眞  
直が出雲廣貞と共に勅を奉じて撰述し、その當時は百  
卷あつたものがその後散逸して現存書には卷六から卷  
三十六まで缺本がある。

だいにのさんゐ 大貳三位?

藤原宣孝の長女で、母は紫式部、本名を藤原賢子と謂つ  
たが従三位太宰大貳高階成章に嫁ぎ、後一條天皇の御  
乳母に召されたので世に彼女を大貳三位と云ふ(群書  
一覽三ノ五五に彼女自身が三位に叙せられたとあるは  
疑はしい)母に背て和文和歌に秀で、その歌は後拾遺  
(九首)・千載(四首)・新古今(六首)等にあり、家集大貳  
三位集もある。

又「狭衣物語」も彼女の著とする説もあるが、これはま  
だ考究の餘地がある。

だいにほんし

大日本史 三百九十七卷

水戸侯徳川光圀、尊王の動機より修史の事業を思ひ立  
ち、彰考館を設けて天下の學者を集め多大の努力と費  
用と年代を費して出來た史書で、着手したのは明暦  
三年(二二一七)全部完成したのは明治三十九年(二五  
六六)で代々の學官が營々として纂輯した結果、この一  
大寶典を成功せしめた。  
本書は神武天皇から後小松天皇までの紀傳體漢文の國  
史で、

本紀 七十三卷 三十六册

列傳 百七十卷 六十四册

志類

神祇 二十三卷 二十册

氏族 十三卷 十二册

職官 五卷 五册

國郡 卅三卷 二十五册

食貨 十六卷 十四册

禮樂 十六卷 十册

兵 六卷 二册

刑 二卷 一册

陰陽 六卷 三册

佛事 六卷 六册

表類

臣連二造 二卷 二册  
 公卿 七卷 七册  
 國郡司 十二卷 十二册  
 藏人檢非違使 四卷 四册  
 將軍僚屬 三卷 三册

計 三百九十七卷 二百二十六册 別に目錄五册

この書の史眼としての三大特徴と云はれてゐることは

- 一、神功皇后を皇妃に列したること
  - 二、大友天皇(弘文天皇)を御歴代に列したること
  - 三、神器の所在により正朔を南朝に繋げたこと
- で、その根柢には尊王の熱意が一貫して居る。加ふるに考證正確にして史家の参考にするに足る(吉川弘文館本は本紀と列傳とを活字本二十五册にして居る)(古類文學部二、八七五―八八五水藩修史)

だいのう 大農

佐野天聲四十年作、都新聞の懸賞當選本郷座上演の脚本で「主人公は強い性格をもち徹底的個人主義者で、大陸式の大農主義を實行し、キリスト教に歸依して非戦主義的思想を抱くやうになり、慣習と凡俗とに背いて雄々しく新しく生きた」といふ筋で、表現に不充分な

點はあつたがイブセン劇を日本化したものの中の秀作で、且つこの作品が導火となつて演劇刷新の聲が高くなつた。

だいくしんちやうじゃけう 大福新長者教

「日本永代藏」を見よ。

たいへいき 太平記 四十卷

室町時代に出た有名な軍記物語で、後醍醐天皇の御即位から後光嚴天皇の御代——足利二代將軍義隆の頃まで五十餘年間の事變を華麗にして生氣ある和漢混浴文で綴つたもので、太平記理盡抄によると書名も安危由來記・國家治亂記・國家太平記・天下太平記などと轉々し、しまひに「太平記」で通用するやうになつたらしく、著者は叡山の玄惠法師が後醍醐天皇の勅を受けて起稿し、後に來賢・智教・教圓・義清(高德入道)・行意・壽榮(玄惠の弟子)が之を増補し横川の能隣が之を大成したものだといふ。

然るに明治に入つてから故重野安釋博士の研究發表があつて、洞院公定日次記に「應安七年五月三日戌辰傳聞去廿九日之間小島法師圓寂云々是近日翫天下太平記作者也 凡雖卑賤之器有名匠聞可謂無念」とあるによ

つて作者は小島法師だと云はれ、爾來この説に一致してゐるけれども、その小島法師の傳記がはつきりしないので或は玄惠法師の別名であらうなごともいはれてゐるがそれは確かでない。

この書には異本が少くない。水戸藩の参考太平記(今井弘濟・内藤貞顯の校訂に係るもので國書刊行會第四期)が對校したものは九種もあつて、殊に島津家・北條家・西源院・南都の四本が古いが、その古いものに限つて第二十二卷が闕本になつてゐる。それについて尾上博士がいはれるには、

全體二十一の卷の終に脇屋義助の勢力が北國で盛になつたので、尊氏が諸將に命じてこれを討たしめるといふ事があつて、その戦争の記事があるべくしてなく、二十二の卷の初に義助が敗れて吉野に逃げて來た事が書いてある。この間の記事は特に作者が省略したものと思はれない。必ず例の雄健の筆で大いに書いたものであらう。それが二十二の卷であつたのであらう。然るにいつしか失せてしまつたので何人かが遺憾に思つて二十三の卷の中から數段を抜き出して二十二の卷としたものと見える。それが丁度前に述べた武藏入道が越前合戦・義助の敗北・並に

尊氏・直義の一代の惡逆を記したのを無念の事に思つて一天下の内を求め求めて二十二の卷を焼き失つたと、理盡抄に書いてあるのに合してゐる。この故にこの卷のない上述の四本は古本であると思はれると云ふ参考太平記の説は眞に當を得た言と思はれる。と、然るに尙明治に入つてから今一つ有數な古本が表れた。それは神田男爵家の所藏に係るもので神田本太平記とか太平記神田本とかいふもので國書刊行會第一期本として公刊された。元、豐太閤から木下長嘯子に贈られたもので大分缺本があるが重野博士は「これが原本に一番近いものだ」と云はれてゐた。文體も簡古で流布本の文よりも優つて居る。

- 一、文辭の華麗
  - 二、佛語の引用精緻
  - 三、誇大法の驅使
  - 四、對句法の驅使
  - 五、道行文の流麗婉轉
  - 六、語彙の豊富等
- にあると思ふ。  
 註釋書としては、萩野由之氏の太平記註釋七册(二册本

もあり、三木五百枝氏の太平記詳解五冊・國註二(此中には太平記抄・太平記賢愚抄・太平記年表・太平記系圖等がある)などがある。其他大川屋書店訂繪本太平記・幸田露伴氏新訂太平記 金星堂・大町桂月氏校訂至誠堂發行の太平記五冊(學生文庫八、三三、三八、四〇、四一)・校國三、四・日文一六、一七、一八・有明堂文庫の内・早稲田大學編輯部發行太平記などの各種がある。

**たいへいききくすみのまき 太平記菊水卷**  
寶曆九年(二四一九)竹本座上演、正保・慶安の世を南北朝にうつして由井正雪を宇治常悦、丸橋忠彌を鞠ヶ瀬秋夜として脚色してある。二歩堂・豊竹一鳥・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衛・三好松洛の合作。

**たいへいきちゆうしんかうしやく 太平**

記忠臣講釋

明和三年(二四二六)十月十六日竹本座上場、同年十二月大阪嵐座歌舞伎に上演。義士物で舞臺を鎌倉とし大星伴つて顔世に戀慕の體を装ふこと、丸太夫の妻お禮白川の里で兵法指南のこと、矢間喜内貧苦の中に我子を勵ますこと、矢間重太郎の苦節、同妻おりゑ操を賣つて父、夫につくすことなど多くの創意があつて、假名手本忠臣藏にも劣らないほどの好評を博した。作者は近

松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出雲・筑田半七・竹本三郎兵衛等(帝文四七、二七五―三七一)

**だいほう 塚田大峰** 二四〇五―二四九二、延享二―天保三、八十八歳

美濃の人、名は虎、字は叔魏、通稱多門、父について儒を學び教學に異を唱へることの無益有害なる所以を説き、自ら諸家の説をあさつて中正穩健の解を施し紀尾兩侯からも聘せられ、寛政年間幕府令して朱子學を昌平疊以外の處で講ずることを嚴禁した時三たび上書してその不可を説き禁爲めに解くるに至つた。晩年明倫堂の督學にあげられた。

**たういん 藤本藤陰?**

佐倉の人、名は眞、廿一年十二月頃から廿六年頃まで約二十篇の小説を都の花や文藝俱樂部に發表した(藤の一本・落葉・鋸びき・篠の一節など)

**たういん 鹽谷岩陰** 二四六九―二五二七、文化六―慶應三、九、五十九歳

江戸の儒者、名は世弘、字は毅侯、岩陰又は九里香園と號した。昌平疊に學んで嶮然頭角を表し、廿一歳關西を遊覽し詩囊頓に肥え、歸來老母に仕へて至孝を盡し、後幕府に仕へて儒官となり朱子學を奉じた。殊に

永享四―文明一八、五十五歳

名は持資、小字は鶴千代、字は源六郎、薙髮して道灌又は備中入道と云ふ。資清の子で近古、室町時代の武士にして歌人、鎌倉上杉扇谷家の臣で干戈の餘暇思ひを連歌と和歌とにひそめそれについての逸話も少くない。

(少女山吹の花一枝、「遠くなり近くなるみの濱千鳥」の古歌によつて上總の隴南を攻めたこと。など)文化史上に於ては康正二年始めて江戸に築城して今の大東京の創始者としても特筆さるべき人である。不幸にして時勢險惡、敵方の中傷彼を毒して主、定正の爲めに殺害せられた(扇谷家はこれより兵勢頓に衰へた)家集を墓景集(群二六〇、九、九七七―九八〇、續國、九二〇―九二三)と云ひ、紀行を平安紀行(群三三六、一、一一七二―一一七六)と云ひ、別に心敬僧都を都から聘して判者として催したものに武州江戸歌合(群二〇九、八、八四七―八五〇)がある。この歌合は十六人廿四番で、道灌の勝一、負一、判關一となつてゐる。

二番右勝(左、孝範)

海原や水まくたづの雲のなみはやくもかへす夕立の雨  
十三番右負(左、平盛)

實學を尊び又海防策を論じなどもしたが、最も長ずる所は文章にあつて「當代の歐陽永叔」と稱せられた。岩陰文集・大統歌・隔靴論などの著がある。

**だういんほふし 道因法師?**

平安朝末の歌人、俗名を左馬助藤原敦頼といひ、治部丞清高の子で崇徳の朝に仕へて馬寮使をつとめた。非常に歌に熱心な人で時の俊成もその熱心にあつて干載集の中に二十首を採つたといふ。その他新古今以下歴代の勅撰集・安元元年右大臣家歌合・治承三年加茂社歌合等にその味が採られてあるが、その傳記は未詳(鴨長明の無名抄に彼の逸話が出て居る)

**だうがく 道學**

らうさう「老莊」を見よ。

**だうくわらほつしんわら 道晃法親王** 二二

七二―二三三九、慶長一七―延寶七、六十八歳

後陽成天皇の御子で嘗て園城寺の長吏となられたが、和歌に御堪能でその御歌は新題林和歌集に出て居る。

**たうくわすのえら 桃花藥葉**

一條兼良の著で一條家に於ける裝束文書等の故實を記した(群四七一、一七、一―三五)

**だうくわん 太田道灌** 二〇九二―二一四六

なをざりのすゝのあみめをならせども嵐の枕秋  
とだになし

廿三番左(判闕、右、心敬)  
かきくごきかぞへし夜はの心さへいかによわり  
てことの葉もなき

平安紀行は文明十二年六月初旬江戸の館を立つて上京し、三條の銅陀坊のかりやにつくまでの紀行で大部分歌で、云はゞ「歌の旅日記」とも謂ふべきもの。散文として濕ひのある筆致は始めの處少しばかり、海の名ごり山のたゞすまひも、ふし柴のしばしばかりの旅の行ふ、立かへるべきもこの秋過ぎぬことながら、心ときめきて喜びは人毎にものすれば、悲しきにも心ひかれぬべしと云ふ一段のみである。

慕景集は凡て三十六首、内他人の返しが三首で、その内今秀味と思しきものを左にあげる。

庭鶯

吳竹のみどりにはぶく鶯の聲も色ある庭のはるかぜ

谷鶯

君もきみ臣も臣てふ世にしあらばいかにきなか

ん鶯の聲  
朝花

嵐吹く高根は雲の色かへて花よりあくる朝熊の宮

夜歸雁

啼つれて聲よりこゑもますらをの心にかへる夜半のかりがね

梓弓かへる袂にもろ葉草かけていのらむかもの神垣

月前述懐

なをからぬ心をかくす我がげにいとほで照す月ぞはづかし

勝元朝臣短慮不成功といふ昌黎の作し詞など消息のはしに書付てこのころ

ばへを問ひ給ひしかば

いそがすばぬれざらましを旅人の跡よりはる、野路の村雨

かゝる時きこそ命のをしからめかれてなき身と思ひしらすば

述懐の哥詠じけるとき

君におき民にふしつゝ朝夕につかへんと思ふ身

たうせい 桃青

ばせう「芭蕉」を見よ。

たうせいしよせい かたぎ 當世書生氣質

二十回

春のやおぼる(坪内逍遙)十八年五月十八日から十九年三月廿八日にかけて作つた小説で「小説神髓」の理論を實地に示した作品として、明治の新小説の魁祖として有名なもの、篇中の人物の多くは作者が周囲の學友で、その日々の云爲行動を寫實的に取扱ふことに主力をそゝいだものだが又筋を纏める爲めに作劇に近いやうな用意も見える。卷末の半峰居士の評は鑑賞批評など謂はないこの早期他に匹儔を見られない委曲をつくした名評で本文と併せ見るべきである(菊判四四八頁明治十九年三月廿八日合本、本郷區眞砂町十八番地大川鏡吉)

だうちゅうひざくりげ 道中膝栗毛

「東海道中膝栗毛」を見よ。

だうとくせうせつ 道徳小説(教訓小説)

「家庭小説」に同じその項を見よ。

だうみやうあざり 道命阿闍梨?

平安朝後期の歌僧。大納言藤原道綱の子で、天台山に

ぞおほけなき

寛正五年入京の際後土御門帝詔を賜ひ「武藏野はいかに」と問はせられたら、

露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野の原

「然らば汝の邸宅はいかに」

我庵は松原つゞき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る

「隅田川の都鳥は?.....」

年ふれどわがまだしらぬ都鳥隅田河原に宿はあれども

と三首の歌を以て勅答し奉つたので観感斜ならず

武藏野は刈萱のみと思ひしにかゝることばの花も咲きけり

と御褒めの一書を賜はつたと云ふ。

だうじやうふう 堂上風

徳川時代天皇公卿等専ら宮廷に關係ある人々の咏んだ歌風で、古今傳授を重んじ、草庵集や三玉集を模範とし典雅優麗の趣はあつたが潑刺たる生新の趣はなかつた。併し元祿頃民間歌人の出るまでは歌壇の主流となつて居つた。

上り佛道を究め、天王寺別當に補せられたが生没の年は未詳。歌は後拾遺(十數首)・詞花(九)千載(九)・その他勅撰集並に後六々撰に出て居る。

**たうりん** 天野桃隣 二三〇九—二三七九 慶安二—享保四、七十一歳

元・伊賀上野藤堂家の臣、江戸に出て芭蕉の門に入り遂に俳句を以て一家を立て、五無庵又は太白堂と號し子孫は相繼いで太白堂を名のつてゐる。

水鳥の巢もや引けん菖蒲草  
石川や築うつ時の薄濁り

御火焼や鍛冶が傳へし古烏帽子

**たかあき** 源高明(西宮左大臣) 一五六四

一六四二、延喜四—天元五、七十九歳

醍醐天皇の御子、姓を賜はつて臣下に列せられ正二位左大臣に任ぜられた。かつて讒に遇うて太宰権帥に貶せられたが、後復赦されて都に還つた。歌文をよくし故實に精しかつた。歌は後撰(十首)・新古今(三首)・その他の諸勅撰に入り、別に西宮左大臣御集が二卷(群書一覽四—六三・群二三二、九、一〇〇—一〇二、續國五九八—五九九)にある。有職故實の著には西宮記二十五卷 群書一覽二—五)西宮抄六卷(群書一覽二—二六)

がある。

**たかくに** 源隆國 一六六四—一七三七、寛弘元—承暦元、七十四歳

権大納言源俊賢の第二子、後一條・後朱雀・後冷泉・白河の諸朝に仕へ正二位権大納言まで進む。嘗て關白頼通の女後冷泉皇后册立の時皇后宮大夫を勤めた關係からかして頼通が宇治の平等院の別業へ始終出入をした。彼亦この宇治の地を愛して別荘を建て、三夏暑さを避けてこゝに幽栖し、行人に茶を饗して四方八方の話を聞きこれを手記して樂しみとした。その著今昔物語三十卷は王朝雜文の雄で、後世色々の書に引かれてゐる。又別に安養抄十卷の著もある。歌は後拾遺・千載・新古今・續古今・玉葉・永承五年祐子内親王家歌合・天喜四年皇后宮春秋歌合等に散見してゐる。

**たかさご** 高砂(古名相生)

謡曲 前シテ翁 ツレ 姫

後シテ 住吉明神 ワキ 神主友成  
處 播磨

肥後國阿蘇の神官友成都に上る中途播磨高砂の浦に立寄り、高砂の松と住吉の松との精靈の翁姫に逢て古今集序のいはれから、高砂は奈良住吉は延喜の御代をか

たざれる。譯をききついで住吉を訪げると明神顯れてさまよひの舞樂あり祝言能として古來有名なもの。

**たかやすわら** 高安王(大原真人) ?—

一四〇二、?—天平一四

天武天皇の御曾孫、元正の朝に伊勢守、聖武の朝に衛門督に任ぜられた。又歌をよくせられ萬葉の三、四、六に出て居る。

**たかすゑぢよ** 菅原孝標女 一六六八—?

寛弘五—? (五十二歳までは更級日記によつて推定される)

父は道眞五世の嫡孫、母は藤原倫寧の女で右大將道綱の母(蜻蛉日記の作者と姉妹)繼母は高階成行の女で此亦文學の家とも謂ふべく(成行の弟成草の室は紫式部の女大貳三位)遺傳に於て彼女は文學に恵まれて居たが之が内氣な實父繼母や、受領階級に止まつた夫の橋俊通といつた風の周囲と吟合して彼女の特殊な生の繪巻が染められた。

十歳父の任地上總に下り四年在住して十三の年歸京、その道途の紀行をおもひ出の記の體にしたものが更級日記の大部分である。上總在住の時から讀書に趣味を持ち物語にあこがれて等身の佛に祈りまで捧げてゐた

が、都に歸つてからは親戚から源氏その他の草紙を贈られて貪るやうに讀み耽つた。この時彼女の空想は宇治の「浮舟」を庶幾して夢見るやうな日毎々々を送つたが、眼の前の現實は餘りに距離遠く二十五歳の時父は六十の老齡を提げて任に常陸に行き、良い縁談にもありつかないで痛くもさだ過ぎた三十七歳といふにやつと嫁いだ先は薫には似べくもない橋俊通で、間もなく一子仲俊を産んだ。それでも運命に従順な彼女はよく境と推し移つて家庭的には満足であつた。五十歳の時夫は信濃守として赴任翌年即ち康平元年十月五日に病死(五十七歳)した。そこで往年の夢と現實を回想し辭かに筆を執つて更級日記を書き、濱松中納言を書き、朝倉物語を書き、又は詠歌に懷を遣つた。その味は新古今以下の各勅撰集に數種とられてゐる(玉井幸助氏更級日記簡考三〇—五九、尙「更級日記」を見よ)

**たかすゑのむすめ** 孝標女

「菅原孝標女」を見よ。

**たかとほ** 藤原高遠 一六〇九—一六七三、天

曆三—長和二、六十五歳

小野宮清慎公實頼の孫齋敏の子、一條三條の御代に仕へ、正二位・兵部卿・左兵衛督・太宰大貳等に叙任。その



咏は後拾遺(八)・新古今(三)以下の諸勅撰並に後六々撰に採られ、別に藤原高遠集一卷(新三十六人集)がある。

**たかながしんわう 尊良親王** ?—一九九七

?—延元二、

後醍醐天皇第一の皇子、母は藤原爲子。元弘の役から南北朝の兵亂にかけて王事に奔走し、席の温まる暇もなかつた。その咏は新葉集に入り慷慨惻怛人の腸を断つ趣がある。

すみ馴れぬ板屋の軒のひまもりて霜よの月の影ぞ寒けき

**たかのぶ 藤原隆信** 一八〇二—一八六五、康

治元—元久二、六十四歳

長門守藤原爲隆の子、その母隆信を産んで後藤原俊成に再嫁し、定家を産んだから定家と隆信とは同母兄弟である。和歌及び繪を能くした。歌は千載(七)・新勅撰(七)・風雅(八)等に入り、家集に藤原隆信朝臣集(群類二五八、九、九二九—九三六)がある。

**たかはしうぢぶみ 高橋氏文**

延暦十一年(一四五二)高橋安曇の二氏神事に關して座上の行立の席順を争つた時、各我祖先の事歴を記して

上奏したものの中高橋氏のものな云ふ。

「祖先磐鹿六雁命景行天皇東國行幸の御供奉に功のあつたこと、之によつて膳部かしはての姓を賜はつたこと、爾後代々その職を以て仕へ當朝(桓武天皇)に至るまで三十九代六百六十九年なること」

などを記す。文體は漢語の語法及び漢字の音訓を借りて國語を寫し頗る古事記に近いものがある。本文は本朝月令・政事要略・年中行事秘抄に載録せられ、それ等諸異本を對校したものに伴信友の「高橋氏文考註一卷」及び「高橋氏文殘簡訂註一卷」がある(養徳會發行やまと叢誌第十三冊伴信友高橋氏文考註、校日大一)

**たかひさ 藤井高尙** 二四二四—二五〇〇、明

和元—天保一一、八、一五、七十七歳

家號を松の屋と云ひ備中吉備津宮の社家頭で、伊勢の松阪で本居宣長に師事すること七年、それより京都に出て鐸の屋で和學の教授に従事した。彼が特長は國文殊に中古文にあるが、和歌とても拙くはない。その著に大祓詞後々釋(宣長の大祓詞後釋の補遺)・枕草紙新釋・日本紀御局考・松の屋文集・同後集・松の落葉(隨筆)・三のしるべ(歌文の作法を記す)・詞の道しるべ・月草・淺瀬のしるべ・類聚雅俗言・おくれしかり・佐喜草・

消息文例・出雲路日記・ひきもの、定め・松の屋文合・神の御隆の日記などがある。

歌の秀味には

夜落葉といふ題にて

風ふかずしづかなる夜は苔の上におつる木の葉も音ぞきこゆる

わけのぼる道たどくし雨ふれば雲もよこなる

さやの中山

旅にてはわがまだ知らぬ寢覺してながめなれた

る有明の月

桃の花下てる道はくらからじ日はくれぬともあ

そびて行かむ

八雲霞はなも柳もたちこめてうすき色繪と見ゆ

る山川

**たかぶみ 木下幸文** 二四三九—二四八一、安

永八—文政四、四十三歳

桂園門下中熊谷直好と相並ぶ第一流の歌人で且つ歌學者で、國文家であつた。初めの名は義實、元備中の人で、洛東岡崎に棲んでは朝三亭と號し、浪華にあつては庭前に竹を植ゑて亮々舎さやぐさと號した。始め歌を澄月・慈延について學び、その間に景樹を知り、次第に心傾きて

途に門をかへた。そのため澄月・慈延一門の人々からはそしられたが、桂園の同門下は皆彼を尊重した。その家集に亮々遺稿・續歌學全書七、單行本として吉川弘文館よりも發行があり、隨筆に亮々草紙がある。彼の詩人的素質は前書に、彼の學殖は後書によつて窺ふことが出来る。

その歌風叙情歌に秀味多く、純なる情操をさながらに歌ふところよくこの派の特色を發揮してゐると謂はれるが稍々平弱に墮する嫌ある點もこの派の趣である。つまり長短共によく桂園派を代表した歌人と謂つてよろしからう。

文化四年の歳の暮から翌けて三十歳の春を迎へてその正月の三日の夜までによみつゞけた連作貧窮百首(註校和歌叢書六、三二三—三三〇)は殊に眞摯人の胸にせまるものがある。

まどしきも嬉しかりけりかくまでに人の心の隈を知らめや

かにかくに疎くぞ人はなりにける貧しきばかり

悲しきはなし

つひにはと思ふ心のなかりせば今日の悔しさ生きてあらめや

思ふ事いつかもなりて今日の日の悲しき事を語りいでまし

など、その他彼の秀味には、

橋はあれどかちわたりせんいさ、川いさごも清し水もさやけし

わけのぼる道だに見えぬ朝霧の中にとどろく木曾の山川

遠く行く人を送りにて休らへば堤の柳うちかすみつ、

春の色すみれにのみぞ残りける片山畑の麥の中道

墨染の夕べの山の山松の見えずなるまで眺めつるかな

数々のなき人忍ぶはては我身のあるぞ怪しかりける

歌のこと論らひけるついでに

天地の心ぞやがてひだたくみ何の言葉のよきを求めむ

**たかまさ** 大國隆正(野々口隆正) 二四五

二二五三一、寛政四一明治四、八十歳

津和野の藩士今井秀馨の男、本姓は藤原、氏は今井(山

口又は野々口)といふのだが維新の際自ら大口と名のつた。號は葵園・眞瓊園・大柱山人・佐紀之屋・如意園など云ふ。幕末より維新にかけ過渡の文化に處して彼ほど國家的意識の下に國學運動に熱心奔走した人は少なからう。その修業としては村田春門に音韻、平田大人に古學、湯島聖堂に漢籍、長崎に書法及西洋の理學を修め尙別に佛敎をも修め、後一家の見を以て本敎神理學を起した。その内容は皇學復興を唱へ、尙武の國體を講明し、以て尊王愛國の志操を養成せんと云ふにあり、

名聲のあがると共に、大阪・小野(播磨)・京都・姫路・福山・江戸と各處の熱心な聘に應じて啓蒙示唆一意國家奉仕的活動をつゞけた。その著九十餘種何れも有益の文字である(好古類纂第三編九、大國隆正翁二十八番歌合)

**たかみつ** 藤原高光(多武峯ノ少將如覺)

?—一六五四、?—正曆五

九條師輔の子、村上天皇の御代に仕へ從四位下左近衛少將に至り、應和元年(一六二一)出家して名を如覺と改めた。歌は拾遺(四)・新古今(六)・新勅撰(三)その他の諸勅撰並に三十六人撰に出てる外に藤原高光集一卷(群二五一、九、六七〇—七七二、續國五三四—五三

六)がある(多武峯少將物語一卷(群四八二、一七、四三四—四四九)はこの高光の出家して叡山に登つた顛末を近侍の人が書いたもの)

**たかむら** 小野篁(參議篁) 一四六二—一五

一二、延暦二—仁壽二、五十一歳

參議小野岑守の子、王朝初期、嵯峨・淳和・仁明・文徳の四朝に歴任し、左大辨・參議等の官に任じた。世に野相公と云ふ。彼れは弱冠の時、父の任に従ひて陸奥にあつて弓馬を事としてゐたが京に歸つて後は専ら學問に熱心し、遂に文章生から出て數多の官歴を経て太宰小貳となつたが、淳和帝承和四年遣唐副使に任命せられ、大使藤原常嗣の料船が破れたので篁のを宛てたいと朝に請うて許されたので、篁はそれが不服で辭職をし漢詩「西道謠」を賦して暗に諷刺したので天皇の逆鱗に觸れ隱岐の島に流された。

わだの原やそしまかけてこぎ出でぬと人には告げよあまの釣船

の歌を始め「謫行吟」七十韻を作つて當時人々の諷誦する處となつた。その配所の味、

思ひきや鄙の別れに衰へてあまの繩たぎいさりせんとは

といふのも名高い。承和七年二月嵯峨上皇特に彼の才學を惜んで赦免の御沙汰があつた。

水の面にしづく花のいろさやかにも君がみ影のおもほゆる哉

と云ふ有名な一首は歸來諒闇に遭うて九重の御垣の内を立ちならしての味懐である。彼に一人の異腹の妹があつた。彼と彼女と互に相思の戀におち(當時の掟、從兄妹の結婚は許されてあつた)行末はと契つてゐたのに不幸にして彼女は咲く花のめでの盛りに身失せた。泣く涙雨とふらなむわたり河水まさりなば歸りくるがに

はその哀痛の叫びであつた。彼は實に天才詩人であつて漢詩にも和歌にも漢文にも當期に在つて一頭地を抜いてゐる。歌は古今・新古今・續古今・玉葉・新千載等の諸集に、詩は經國・扶桑の二集に漢文は本朝文粹卷七に出て居る。別に小野篁集・野相公集(五卷)もあつたといふが、今佚して傳はつてない(國華九二號一四四—一四五爲恭筆小野篁圖)

**たかよ** 物集高世 二四七七—二五四三、文化

一四—明治一六、一、二、六十七歳

豊後杵築の人、通稱卯兵衛、又、丈右衛門といひ、葎

屋と號した。國語學や歌學に精通し就いて學ぶものも多かつた(その令息は即ち文學博士物集高見氏である)著書は左の十數種、辭格考抄・辭格考・神道本論・神道餘論・說教本稿・說教話柄・本言考・神學指要・本教詳辭・祈禱文章・神學百歌・妖怪論・文珠詣の記・十七問題辨說・耶蘇教拔萃・耶蘇教叢書・葎屋文集・葎屋歌集。

たくち 鶴田卓池 二四二八—二五〇六 明和

五—弘化三、八、一、七十九歲

三河岡崎の紺屋で、通稱與左衛門、青々處と號した。初め俳を曉臺に學び、曉臺歿後士朗に従ひ、江戸に出で文化八年岡崎に歸り大に「岡崎正風」を唱へた(彼は又繪畫をもよくした)

たきぐちにふだう 瀧口入道 三十三回

高山樗牛作の歴史小説で讀賣の懸賞募集に當選したものの。その顛末左記、廿七年四月廿一日郷里實父宛の手紙でよくわかる。

再伸……又私事此度讀賣新聞懸賞小説にて優等賞金時計一箇を得之を金子にて受取り五十圓を得申候、右は「瀧口入道」と申す命題のものにて卅三回にて完尾するものに候右は昨年の暮より今年の初にかけ病氣中ドーセ六ヶ敷書物は讀み難けれど右二月十五

風に靡けるさゝがにの絲軽く、太きは瀧津瀬の鳴り渡る千萬の聲、落葉の蔭に村雨の響重し綾羅の袖ゆたかに飄るは花に休める女蝶の翼か蓮歩の節急なるは蜻蛉の水に點するに似たり。折らば落ちん萩の露拾はゞ消えん玉篠のあはれにも婉やかなる其の姿

といひ、その美に心を焦した瀧口時頼を寫しては、時頼是時年二十三、性潤達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく早く母に訣れ、無骨一邊の父の膝下に養はれしかば朝夕耳にせしものは名ある武士が先陣拔駆けの響ある功名談にあらざれば弓箭甲冑の故實響垂れし幼時より劍の光弦の響の裡に人と爲りて、浮きたる世の雜事ざれごとは刀の柄の塵程も知らず、美田の源次が堀川の功名に現を抜して赤檜の木太刀を振舞はせし十二三の昔より空眩撫でて長劍の輕きを啣つ二十三年の春の今日まで世に畏るしき者を見ず出入の息を除きては六尺の體何處からだを膽と分くべくも見えず、實に保平の昔を其儘の六波羅武士の模倣なりけり

といひ、その時頼が横笛故に戀故にだん／＼に憔悴し父にその事を打明けると女の家柄が餘り低いとて剣れつけるので思ひ餘つて嵯峨野の奥に入つたので宮中専らその沙汰をし遂に横笛の耳に入つた。彼女に切なる

日限の讀賣新聞懸賞小説の事思付き二十日餘にて出かしたるものに御座候、其五十圓は大牛學資の方に差向け其一部は靴書籍等要用なるもの買求め其一部は良太歸省迄の學資の一部に致度志望に付何卒左様なし被下度同人へは以來御送金被下間敷當時所持金の外に入用の分は右金を差向け申度候是非／＼左様御承知被下度候此度の得金はホンの僥倖にて後來如此ことあるべきものにあらずとんだまぐれあたりもあるものに御座候右金時計の目録は新士町に送り申候間御覽被下度右小説は去十六日より讀賣紙上に掲載中に御座候

この手紙で始めて彼の作だとわかつたもので、夫迄氏自身は此篇の作者を以て恥とし他に公表しなかつた。平家物語中瀧口・横笛のことを取材し之に平家の末路、壽永の時勢粧を以て背景づけ好個一篇の叙情的叙事詩とも謂ふべく、文は作者が好みの平家張で婉轉流麗、横笛を寫しては年齒は十六七、精好の緋の袴ふみしだき柳裏の五衣打ち重ね丈にも餘る縁の黒髪後にゆりかけたる様は舞子白拍子の媚態あるには似て閑雅しんやに蕩長けて見えにける。一曲舞ひ納む春鶯囀細きは珊瑚を砕く一雨の曲

思を寄せた若人はまだ／＼澤山あつて殊に足助の次郎は時頼と競争の地位にあつたが、戀せし人の戀しくて女は或日宮中をまぎれ出て嵯峨野の庵を尋れた。之を見た男も一時はハツさしたがやがて眼目端座少しも女には口をきかなかつた。女は悲歎の餘り京の南深草まで来てとある小庵にこれも出家の尼姿、朝々暮々の看經いとまめやかにいそしんだが思ひ積つて遂にはかなくなつた。里人あはれんでその邊に葬り戀塚と名づけて回向した。斯と聞いた瀧口入道は態々その塚を訪れて行きつく／＼と物のあはれを感じ、それより飄然眞に入無爲の境涯に入つた。時は壽永の冬も過ぎ元暦元年春より夏へかけ平家の一族は壇浦に亡び、重盛の息維盛は漸く身を遁れて高野に登るべく紀伊路を辿り、そこでゆくりなくも瀧口入道と邂逅した……翌日、和歌の浦わの片ほとり松の根方を枕に美事割腹したる若年の僧

嗚呼是れ戀に望を失ひて世を捨てし身の世に捨てられず、主家の運命を影に負うて二十六年を盛衰の波に漂はせし齋藤瀧口時頼がまこと浮世の最後なりけりで終つて居る。樗牛初期の作品であるだけ後來彼の筆致を前示するものとして、殊にその名作「平家雜感」と

相呼應するものとして、及び後來歴史小説勃興の氣運を誘致した作品として注意すべきである（樗牛全集第五卷一一〇六）

たけくらべ

樋口一葉、二十七年十二月から二十八年十一月にかけての作で、曾住の下谷區龍泉寺町界隈の情調を後に本郷丸山に移つてから書いたものである。

「吉原で今全盛の華魁大巻の妹、美登利」十四歳、陽氣で勝氣でお俠で派手で、これに親しいのは田中屋といふ金貨の家の一人息子、きかぬ氣で利發で顔立も整つて居つた。これに楯つく長吉といふのがあつてこれは町内の頭の子、自分に學問のないところから龍泉寺の小僧信如を顧問のやうにして正太郎を大向ふに事ある毎に喧嘩をふつかける。美登利も始めは正太郎最良であつたが、性の眼ざめと共に恥かしがりの内氣となり、正太郎より次第に離れて信如の方に傾いて行く」といふ無邪氣ではあるが少年少女の三角關係のいきさつを柔かい筆でありくと描いて居る。

一葉の作風はこゝにその最高潮に達し、彼女一世の傑作のみならず明治文學の一珍として當時も今も稱へられて居る。森鷗外・幸田露伴・高山樗牛等一流の評論家

も口を極めてほめた、へ、馬場孤蝶・星野天知等彼女の平素を知るものも激賞した。蓋しこの時代に於てかうまで地方色を發揮し、寫實の手法を運用し、日常些細の事象を詩化し渾然たる一繪巻を作りあげることは彼女をおいて他にその人がなかつたであらう（樋口一葉自筆本たけくらべ大正七年十一月廿一日博文館・一葉全集後編四四四―五〇〇・代表名作選集第七卷）

たけぢよ

鈴木武女

二二三三―二四四二、元

一、梗概 現存する物語中一番古い物で、その梗概は昔竹取の翁、或日筆の中で本光る竹を見つけてその中に一人の姫を得、率へて歸つて之を愛育すると暫くの中に成長して妙齡に達し、容顏輝くばかりに美しい竹の中から得た姫として「なよ竹のかぐや姫」と名づけ

たけとりものがたり 竹取物語

軒めぐりを護つて姫を奪はれまいといきまいたが、秋風一過、一朵の雲の舞ひ下りると等しく、姫は輕々とそれに乗つて飄々と昇天した。さすがに帝の御なさけに名残をしまれて「不死の薬」を取り出し「これを獻じてよ」として、

今はとて天の羽衣着る時ぞ君をあはれとおもひいでぬる

と述懐した。けれども帝は「かぐや姫あらすては不死の薬も何かせむ」と命じて高山の頂で焼かしめられた、不死の薬を焼いたのでそれよりこの山を「不死の山」（富士の山）と名づけたといふ。

二、想材 從來この物語着想の材と稱せられるものの中、信をおくに足るものは左の數種である。

イ、竹の中に人を得ること不空三藏の譯に係り弘法大師が我國へ將來したといふ寶樓閣經に、

「昔三仙人があつて法の眞髓を得て歡喜往生を遂げるとそこに生酥（じゆ）を生じ生酥から三本の竹が生えた。枝葉は悉く黄金で根は七寶で梢には眞珠を宿して居る、又十日たつと三竹中に三童子が生れ竹下に結跏して正覺に入つた……さ思ふと三竹は變じて寶樓閣經となつたといふ。

た。姫の美を聞いて言ひ寄る公達が澤山ある中でも殊に熱心な貴公子が五人あつた。石上中納言・大納言殿・右大臣阿部御大人・車持の皇子・石作の皇子といふのである。翁姫もこの中誰か然るべき公達に縁組して身上をきめるやうにと勸める。處が姫はもと月宮殿の天女で假りに地上に生を稟けたこととて人界の交りは思ひもよらぬので、態とそれ等の貴公子に難題を持ち出して「この望みななへた方に嫁ませう」といふ。その難題とは天竺の佛の御石の鉢、蓬萊山の玉の枝、もろこし火鼠の皮ごも、龍の首なる五色の玉、燕の子安貝などを持つて來ることである。五人はこの要求に對してその品を調べようと苦心慘澹して或人は手先の家來や商人にたぶらかされてにせものを掴み、或人は自ら詐偽を構へて虚の皮を剥がれ、誰一人望みを果すものがなかつた。時のみかどがこの事を聞しめし中臣房子を御使として姫の入内を促された、帝といふので翁姫も少からず心動いたが、姫は依然として應ずるけしきもなく自分の身の上を打明けて「わたしは今八年八月の十五夜が來たらもとの大空へ歸らねばなりませんから」と辭した。やがてその名月の夜が訪れて來た。宮中からは二千人の六衛の士が來て門の内外屋上